真ネギま☆マギカＺ

沈没船長

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
真ネギま☆マギカＺ

【Ｎコード】
Ｎ４７４５Ｘ

【作者名】
沈没船長

【あらすじ】
主人公が目が覚めると目の前には金色のオッサンが…
そこから始まるネギまの物語！
貰った力はマミさんの魔法とマジンガーシリーズの力、ブロッケン伯爵のボディ、そして機械獣軍団！追加でキュゥべえが！
現在、麻帆良学園編！
主人公の力は紅き翼くらいです。

初投稿の駄作ですがよろしくお願いします

プロローグ

「やぁ、起きたか」

目が覚めてみるとそこは何もない場所で目の前には全身金色の鎧を着た変なオッサンがいた。

「えっ・・・と？ココはいったい、そしてあなたは？？」

「ふむ、混乱しているようだね。まぁ、無理もないな。端的に言おうココは神の座そして君には今からある世界に私が用意した体に転生してもらう。そのために君をココに呼び出したのだ」

えっ！これっていわゆる転生物ってことか？！てことはこのオッサンに殺されてそのおわびってことか。

「何か勘違いしているようだが、君を私は殺してはいないぞ。そもそも管轄が違うからな」

「え？じゃあなぜ、ワタシはここにいるんですか？？」

「君が選ばれたのは、たまたま私の目に留まって見込みがありそうだと思ったからだ」

選ばれた？何か生前に神に選ばれるようなことってしてたっけ？ごくごく普通の日本人としてしか生きてなかったはずだけどなぁ……

「選んだといってもそこまで厳選したものでもない、目に留まった

ほとんどがそっちだな理由は」

大雑把な……それともそんなものなのかな神にとっては。でもなんで転生なんてさせるんだ？

「さて、なぜ転生させるかについてなのだが言ってしまえば私がやり残した事を達成してもらうためだ」

「え！それってあんたの尻拭いをしろってことか！！」

やば…思わず口に出してしまった。でも、神が遣り残したことを達成って人間にできることなのか…って思ったからしょうがないじゃないか！

「できることなら私が決着をつけたいのだが、もはやその世界に神が降臨して力を振るうことはできないからな…。無論ただ転生させるのではなく私の分体と言ってもいいような体を用意したし、いくらかサポートはするつもりだ」

むぅ、それなら良いかなぁ。転生者無双ってのもできそうだしねwもうそんな年でもなかったけど男子たるもの何時までも少年の心はあるからね！

「もっとも、君がその力を振るうに価するかは見極める必要があるから最初から強力な体をあげるわけにはいかないがね」

ぐ……、そんなに甘くはないか。あれ？でも、その言い方だと体がいくつかあるような？？

「じゃあ、転生先はどこですか？あと、遣り残したことって…」

「転生先は君の世界で言う”ネギま”の世界だ。もっとも厳密には違うがね。それと遣り残したこととは、言ってみれば魔王退治かね。そっちは君が真にできると確信したときにでも言おう。」

“ネギま”かぁ…、漫画は途中までは読んでいたけどどうだったかなぁ。それより魔王退治って……、それっぽいのがいたはずだからそれをたおせば良いのか?

「さて、これ以上は転生した世界に言って自分で確認してくれ。あまり長く話していてもしょうがないからな」

む、いよいよ転生かぁ、どんな体なんだろうなぁ。

それにしてもこのオッサン誰だ?見たことが有る気がするんだけどこのオッサンも漫画とかでいたのか…。金色の鎧っていやアイツを思い出すけど、オッサンじゃないし神でもないしそもそも嫌ってたはずだし。

聞いてみるか本人がいることだし。……怒って天罰って事はないよな?

ちょうどいい、聞こう!ちょっと怖いけど…。

「では、あなたの名前は?失礼なのは承知していますが思い出せなくて」

「では、あの世界へ君をとばそう。最後に何か質問はあるかな?」

質問を終えたとたん体が光に包まれだした、おそらく転生するん

だろう。そして、にやりと笑っていっこう答えてくれない神様。正直かなり怖いんですけど。

そして、顔まで光に包まれたときやっと答えが聞こえた。

「ゼウスだ」

全身金色の鎧に“ゼウス”……もしかして、マジンガーに出てきたゼウスか！！なぜ」ネギまでマジンガーのキャラが！

疑問は解決したが新たな疑問と不安が出てきたところで私の意識は途切れた。

プロローグ（後書き）

初投稿です。色々と問題が多いですが完結できるようにがんばります＞＜

次回予告

「転生した主人公、そして神が与えたその体は！！」

次回　真ネギま☆マギカＺ

”ファンの人ごめんなさい”

乞うご期待！

この次回予告は今後続けるかは未定デスｗ

ファンの人ごめんなさい（前書き）

タイトルの理由は内容を読んでみるとわかりますｗ
あと、“彼女”のファンには不快に思う表現が入ってしまいますがご了承を＞＜
それとまどマギのネタバレをちょっと含みますのでご注意を＾＾；

ファンの人ごめんなさい

目が覚めてみるとそこは、どこかの遺跡の様な部屋だった。壁石造りで手入れがされているような形跡はなかった、唯一火でも電気でもない不思議な光を発する光球が浮いていて周囲を明るく照らしていた。

「どうやら、無事に転生できたようね。でも、まさかあのゼウスだったなんて、これからどうなるのかしら?」

ほっとしてつぶやいて自分の口調がおかしなことに気がついた。私は生前はごく普通の日本男子だった、間違ってもオネイではない。どういう事だと、手を口に持っていこうとして何かにぶつかった。何かと思い下を見てみると……そこには立派な胸があった（ちなみに服は着ていました。）

大混乱におちいっていろいろ確認（なにを?いろいろだよ!）していると側の机のようになっている場所に一枚の淡い光を放っている紙に気がついた。

手にとって見ると文字は見たことのないものであったが内容は理解できるといった不思議なものであった。

＜これを見ているという事は、無事に転生できたようだな。今頃さぞ驚いているだろう＞

ええ、これ以上ないってほど驚いてます。

＜その体だがある世界でみつけて、回収したものだ。ちょうど分体に使える素体が欲しかったので利用したのだ。口調などは体が補正してくれるから問題ないぞ＞

でもなんで、男の私に女の体を…補正するなら性別を変えてほしかった。あのゼウスだから兜甲児か、剣鉄也と思ったんだけどなぁ。

＜なぜ、その体を選んだかについてなんだがな。その世界とその平行世界をのぞいてたときに彼女をふびんに思ってしまってな＞

神様でもそう思うことってあるんだなぁ。あ、でもあのゼウスなら当然なのかな、まさにスーパー系の主人公って性格だったし。神話のほうは怪しいけどね……

＜事故に遭った時にろくでもない者に引っかかってな、多くの世界で戦って死ぬなどしていたのだが＞

ふむ、確かにそれはふびんだ…。

＜そこは問題ない、本人も納得していたからな＞

あ、いいんだ…。じゃあ、なにが？

＜問題は人々のためにと戦っていた彼女の思いを踏みにじることを戦いに引き込んだ者にされていたことなのだ！＞

なるほど、彼が怒りそうなことだなぁ、でもなんでそれとこの体がつながるんだ？

＜それ自体はその世界で新たに生まれた神が解決してくれたことなのだが、私自身がどうにも納得がいかなくてな。せめて体だけでもとおもい、その世界のうち一つからその者の体を回収して改造を施したわけだ＞

それって自己満足な気も……、それとも何か思うところでもあってせめてものってこのなのか。で、この体って元の持ち主は誰なんだ？とりあえず戦闘はできるようだけど。鏡がないからわからないからなぁ。

＜さて、その身体の元の持ち主の名前だが名を「巴マミ」という。これからはその名を名のるといい、彼女の無念を少しでも晴らしてやってくれ＞

マミさんか！あぁ～、確かに悪いやつに引っかかって真実知って打ちのめされちゃってたなぁ……、でもなんでマミさん？まぁ、いいかそこはのぞいていたのがあの世界なら誰になったって女になってるんだし。

＜さて、君が使える能力だが彼女が使っていたものはすべて使えるぞ。同じ体なのだからな＞

ふむふむ、って事はマスケット一斉斉射とかもできるのか。

＜細かい能力は後で表示しよう＞

今更だがこの紙、表示される文字が変わっていってるそれでいて前の内容も問題なく見れたりする。魔法版電子ブック？

＜もっとも、これだけだと本当に倒してもらいたい者には力不足だろう＞

このゼウスの相手ってもしかして……〟アイツ〟？違ってくれているといいなぁ……。

＜そこで、改造と私の力を付与したのだ。光子力といえばわかるかな？＞

光子力はいいとして改造？

＜君にわかりやすくいうとマジンガー化したってことだ、鍛えれば成長していくようにしてあるぞ。今の力はＺくらいを思ってくれるといい＞

おおぉ！うれしいような、なんというか。これも詳しくは後でかな。でも、これってほぼチートじゃね？超合金Ｚ系なら魔法なんてほとんど効かないだろうし。

＜さらに私がそっちにいけないからサポート役も今造っている、またアーティファクトだったかな？そっちの世界で使えるモノも準備している。これらは君をこれから見極めたうえで順次与えよう＞

つまりサボらずしっかり修行しろってことか？

＜最後に大事なことを伝えよう、体についてだ＞

ん？今までもそうだったんじゃ。マジンガー化してるならアレも

撃てるんだろうし。

＜その体は損傷がひどくてな、君のためにもっと状態がいいものや傷を完全に治しても良かったのだが。あの世界はすでに書き換わってしまったからな、前の世界での彼女の無念を晴らすにはその体しかなく、また傷を完全にいやすことは戦士として本人に断りなくしたくはなかったのでな＞

ん～、やっぱり自分が戦士って事でいろいろ思うところがあったってことなのか。その割りに改造してたりするけど……。でも、傷ってどんなのだ？ＳＪが無事なら大概の傷どうにかなったはずだし。

＜その傷だが頭を両手で持ってくれ。ああ、紙は空間に貼り付けることができるぞ＞

あ、ホントだ便利だなぁ～。これの作り方教えてくれないかな、それか欲しい。っと、それは置いておいて。頭を両手で持って、でもなんでこんなこと？

＜そのまま、力を入れて上に持ち上げてくれ＞

そのまま上に。

スポン！

「え……」

スポン？あれ、何か視線が高くなった気が…。

＜それがその傷だ、安心してくれ問題ないように調整した＞

「えぇぇぇ

「さて、まずはココを出て魔法世界を見て回りましょう。いろいろ不安はあるけど楽しまなきゃ、もったいないのもね。まずは町を探さないと」

と決意表明もこめてつぶやき私は外に向かって歩き出した。

ファンの人ごめんなさい（後書き）

マミさんファンの皆様ごめんなさい！私は彼女は嫌いじゃありません。むしろ好きなほうです。じゃあ何故こんなことになったかというと……、自分でもわかりませんｗ
あるときふと思いついて構想を練ってしまっていてｗこの作品は基本ギャグとダイナミックっぽい政治のあれやこれやを置いておく感じで進めたいと思います。なので後々原作とはまったく違うことになると思います。
ちなみに時系列は大戦前です。

喋りと心の声の口調が一致してませんが、彼女（私がｗ）なれてないで追々なれていくと思います。
さぁて、ノリで始めたけどどうなるか。

次回予告
「魔法世界に一歩踏み出した主人公改め巴マミ、彼女は早速力試しをしてみることにしたその結果は…」
次回　真ネギま☆マギカＺ
”現実は甘くない”
がんばります

設定・能力（前書き）

主人公の能力です
あくまでも現在のって事なので今後修行で変わっていきます

設定・能力

巴マミ（主人公）
今作の主人公、前世の名前は考えてないので山田太郎とでもｗ
ゼウスが3話のマミさんの身体を回収改造を施した、ちなみにＳＪも再現、皮膚強度も超合金Ｚ系の同じくらいの防御力です。でも、触ると普通に暖かくぷにぷにの不思議肌ｗ

保有能力

◎まどマギでマミさんが使っていた魔法
・マスケット召喚
どこからともかくマスケットを召喚する。単発マスケットであればどんなものどのようなサイズ、材質、形状でも可能だが指定しないと無意識下で思っているサイズ、材質、形状で召喚される。（現在は銃身が鉄　弾が球状の鉛　サイズは普通）
・伸縮自在のリボン
伸縮自在で相手の動きを封じてよし、クッション・足場にしてよしと使い勝手は抜群。
（現在はあまり使いこなせてない）

◎Ｚの能力
ミサイル系以外は使えます。
真仕様
人間とは違った武器だらけなのでかなり戸惑っている

◎ブロッケン伯爵の能力ｗ
頭部と胴体の分離飛行
胴体のみの分身（増産？）

衣装

マミさんの魔法少女時の衣装とブロッケンの独軍コスを魔法で呼び出して着ることが可能w

イメージとしてパクティオーのコスプレ機能とだいたい同じ。

説明が無いときはマミさんの衣装と思ってくれれば良いです。転生したときもそれを着てます。

汚れ、破損を自動で修復する洗濯・修理要らずの便利服w

設定・能力（後書き）

以上が現在の能力です

あの場所を出て、それなりの月日がたち今私はある都市にいます。

え？飛ばしすぎ？今からなにがあったのか話しますって。

その間私は、自分の身体の性能を試してみたりしてました。それで分かったことはこの身体はなかなか高性能って事です。マジンガーとしてのパワーや装甲、マミさんの使い勝手のいい魔法のおかげもあって、そこらの野党や魔獣より十分強かったんですから。

（野党が放ってきた魔法の矢や犬くらいの魔獣の噛み付きをくらってもびくともしなかったものね。マジンガーに備わっている武装も強力だったし、マミさんの魔法も使い勝手が良かったなぁ）

酸を含む突風を起こして相手を溶かす『ルストハリケーン』

（口から出すから気分的にちょっと使いにくいのよねぇ。でも、酸無しの風も起こせるのはいい発見だったわね）

相手を凍らせる低温ビーム　冷凍光線

（まさか髪の先端から出るなんて……）

マジンガーといえばこれ、やっぱり付いていた『ロケットパンチ』

（使いやすいし、いろいろできそうではあるんだけど。やっぱり気

分的に、ね。自分の腕が飛んでいくっていうのは、慣れておかないと）

超高温の熱線を放つ『ブレストファイヤー』

（リボンが自動的にあの形になって発射されたのは驚いたわね）

高密度のエネルギーを放ち敵を消し去る。『光子力ビーム』

（ものすごい威力だったけれど、何で真仕様？）

といった具合にマジンガーの武装はどれも高威力だって事がわかったの。

あと、リボンは想像通りの物だったけれどマスケット召喚のほうは銃や銃弾の材質、大きさとかを指定して呼び出すとそのとおりのものが出てくるのには驚いたなぁ。超合金Ｚの弾ってすごかったわね。

（でも、このときのもう少し冷静に能力の確認と慎重な行動を心がけてればあんな事にはならなかったのに…）

そう、魔法の射手をものともしない防御力と高い攻撃力を確認したことで私は調子に乗ってしまったのである。

そして、強い竜が近くにいると聞き炎くらいなら大丈夫だろうと根拠の無い自身を元に単身、その竜の巣に赴いてしまった。

そうまさに、「もう何も怖くない」状態で。

そこで現実を知ったのだけど、それにまさか彼に会えるなんてね

ーーー

後で気づいた事なのですがこのとき私は超合金Z製の弾丸を放っていたつもりなんですが混乱していて材質を指定してなく、無意識下で銃の弾といえば鉛って思っていたので鉛の玉を発射していたようです。効く訳がありません。

現実は甘くないって事ですね。

などと現実逃避をしているうちに竜がものすごい力をためています。

（死んだかなぁ……、まさかもう終わりだなんて）

と諦めかけたとき

「ラカン！インパクトォーーーーーーー！！」

大音声の掛け声とすさまじい力がこもった衝撃が竜を襲い吹き飛ばしてしまいました。

目の前で起こったことに唖然としていると。

「おい！嬢ちゃん大丈夫か！って、そんな状態じゃ大丈夫じゃねぇか」

「あの…、えっと……」

「言いてぇ事や聞きてぇことはわんさかあるが、今は逃げるぞ。嬢ちゃんを庇いながらだとちょっと骨がおれるからな」

と言って混乱している私を担ぎ上げて一目散に離脱していった。

しばらく走って竜の巣のあった山から十分離れたところで男は私をおろしました。

「さてと、何故あんな事をしていたか聞きてぇが、まずは傷をふさがないとな。どれ見せてみろ」

と言って、おなかを覗き込んできたのですが。

「ん？傷が無い？？どういうことだ、確かにどてっぱらに大穴が開いていたはずなんだが。それに嬢ちゃんもあんな傷を負ってた割りに痛がってねぇな」

「え？あ、本当ですね。痛みについてもほとんど感じなかったですね」

あの時は混乱していたからと思ったけど、確かに痛みでどうにかなるって感覚じゃなかったなぁ。それになんで傷がもう癒えてるんだ？？

「ふむ、嬢ちゃんみたいなベッピンに傷がのこらねぇのは良い事だがその様子だと自分でも分かってないみたいだな。なんで、あんなところにいたのかも気になるし話してみろ。俺様が近くを通らなかったら死んでたぞ」

少し迷ったが助けてもらった恩もあるのだし転生のところをぼかして、力を貰ったのだが調子に乗って突撃してしまったことなどを話した。

「なるほどなるほど、つまり嬢ちゃんはバカって事か！はぁはははははは！！そんな単純なやつがいるんだなぁw」

「な！」

確かにそうだけどもう少し言い方ってものがあるきが……。

「はははははは…、ひぃ腹いてぇ。ほれ、ちょっと俺様にパンチしてみろ」

「え”、そんな趣味の人なんですか…」

「ちげぇよ！嬢ちゃんがどれくらいできるのかはかってやるんだよ。」

「え…、でも」

「嬢ちゃんの細腕でどうこう出来るほど俺様は弱くねぇって、それに視るより感じるほうが良く判るってもんよ」

「そ、それじゃぁ。はぁ！」

とできるだけ力強く打ち込んでみた。アレだけの攻撃を放てるんだしたぶん大丈夫だよね。それに確か原作キャラの気がするし。

ドゴン！！

とても少女が放ち人体に当たったとは思えない音が周囲に響いた。

「ふむ、なるほど。あの竜に挑もうって気が起きるくらい舞い上がるだけの力はあるって事か。……げふぅ！」

と、受けて評価したとたん血を吐きながら倒れた

「きゃぁぁぁぁ！ちょっとだ、大丈夫なんですかぁ！」

「ふ。思いのほかパワーがあったが問題ねぇ！俺様からすればこんな傷へでもねぇ！」

のわりには深刻そうな気も。

「さて、嬢ちゃんの力なんだがパワーだけをいえば確かにあの竜に挑んでも問題ねぇ。あの竜も結構な年月を生きている強力なやつなんだが、嬢ちゃんのパンチは十分なものがあったからな。ま、俺様が本気を出せばアレぐらいいちころだけどな！」

やっぱりマジンガーの力はすごいんだなぁ、そして最後のセリフは必要あるのか？

「だが、肝心のパンチの仕方もっといや細かい動きから、嬢ちゃんがまともな戦闘経験が無いってのも判ったがな」

ただのパンチ一発でそこまでわかるんだ。事実そのとおりだし。

「嬢ちゃんがまずする事は身体の動かし方と戦闘時の感覚を磨くことからだな。そのままだったらいつか今日と同じことになるな」

うう、やっぱり地道に修行しないとだめかぁ。でも、そんな当ても無いしなぁ。ん、確かこの人って原作キャラだったよなまだ名前も聞いてないし……。

「あの、今更なのですがお名前は？私はマミ・トモエって言います」

「お、そういや俺様としたことが名乗ってなかったな。よしマミ、しっかりと聞けよ！俺様の名はジャック・ラカン！最強の男とは俺のことだ！！」

おぉ、やっぱりラカンだった！ならば、だめもとで聞いてみるか。

「はっははは！驚いたか、だがサインはやれねぇぞ。欲しければそのむｎ「あ、あの」ん？」

「私を鍛えてはもらえないで「だめ」しょうか！……え」

はや！言い終える前にって。

「俺様も暇じゃねぇし。ただで教えてやるほど安くないしな、そもそも救出料も…」

ぐ、そういえば金に細かいんだったっけ。

「どうしてもって言うんなら、胸を揉む権利をよこせ。それなら嬢ちゃんの修行にもってこいな場所の紹介とそこに行くまでの間なら基礎だけ教えてやっても良いぞ」

ちょ！それはいくらなんでも……

ーーー

あ、もう私の出番のようね。それじゃあ、これ以上の話はまた後で。

現実は甘くない（後書き）

ラカン登場！彼の口調とキャラってこれで大丈夫かなぁ＾＾；
いくら強力な力を貰ってと言ってもいきなり一般人が使いこなせるわけがないって事でｗ
後1，2話くらい闘技場での話が続くかな？原作キャラは当分出てきません。
原作開始まで遠いなぁｗ

次回予告
「闘技場で日々戦い修行するマミ。その実力やいかに！」
次回真ネギま☆マギカZ
”魔法世界の日々”
気長に待っててねｗ

「さぁ、始まりました。片や期待の新人アフロダイン嬢。片やこのクラスの1番人気のスティンガー氏勝負の行方やいかに。司会は私ドラコが解説はこちらのジョニー氏が行います」

「どうもジョニーです。」

「ジョニーさん、この戦いどうなるでしょうか?また、アフロダイン嬢はこの試合に勝利したあかつきには最上級クラスに行くという噂もあるようですが」

「そうですね。アフロダインも当初はその身体能力のみを頼りにした戦い方をしていましたが、この数ヶ月で見違えるようになってきましたからね。彼も前までのようには行かないことを承知しているでしょう。噂に関してなのですが彼女自身がどう思ってるのかはわかりませんが事実だと思いますよ。元々身体能力に関してはトップクラスのものを持っていたのですから、そこにこの数ヶ月で吸収した経験が合わさり今のランクでは不適切だ。っと運営側が判断してもしょうがないくらいですからね」

「なるほど、確かに最近の彼女の試合は「一方的だ」との声も聞こえてきていますからね」

「ええ。このままですと双方にとって良くないですからね。ですが彼女なら最上級クラスに行ってもまた私たちを楽しませてくれると思いますよ」

「さぁ、準備が整ったようですね。試合開始の鐘が

カーーーーーン！

鳴りました！おっと！アフロダインが仕掛けた。アレは煙幕でしょうか？」

「そのようですね。一気に接近して倒す腹積もりなのでしょう」

「対するスティンガーは上空へと舞い上がってますね。ココから魔法による遠距離攻撃をかけて征するつもりなのでしょうか？」

「おそらくそうでしょう。この二人実に対照的な戦闘スタイルをとっていますからね」

「確かにそうですね。スティンガーは多彩な魔法を使用しての正統派魔法使いと言ってもいい戦いかに対してアフロダインはかなり変則的ではありますが格闘を得意としていますからね」

「ええ、なので如何に自分の得意な距離で戦うか又はそこに相手を引きずりこむかで勝負は決まります。前までアフロダインはそれができずポイントを取られて負けていましたからね。それにしても彼女、種族は何なのでしょう？些細なこととは判っていますが彼女の場合」

「腕が飛んだりしますからね。資料では人間ではあるらしいのですが」

「にわかには信じられないですね。っとどうやらアフロダインがしかけたようです」

「あれは腕ですね。何時見ても奇妙ですね。しかもそれが４つ、それに何か糸のような物をひっぱっていますね。それにしても腕が４つ？」

「彼女はリボン状の伸縮自在な魔法道具を装備してましたね。おそらくそれを持っているのでしょう。数については確か彼女は自分の分身を作れたはずです。それの分も一緒に撃っているのでしょう」

「パンチはどうやら外れたようですね。リボンを絡ませるつもりなのでしょうか？」

「どうなのでしょう、スティンガーがそんな手に引っかかるとは思えませんね。そのスティンガーもリボンの出ているところを中心に魔法を撃ち込んでいますね。彼女が何かする前に終わらせるつもりなのでしょう」

「魔法の射手を滞空させたり軌道を工夫して時間差で絶え間なく撃ち込むように撃ってますね。おっと、詠唱に入ったようですね」

「スティンガーは勝負に出たようですね。アフロダインの方は……、何かが飛び出しました！」

「あれは？首なし腕なしの身体？？アレでいったいなにを、それ以前に首なし？？」

「思い出しました！彼女の分身はすべて首なしになってしまうようです。パンチを撃ったため腕もないのでしょう」

「なるほど、しかしあれでいったいなにを？スティンガーがいる高

さの半分もとどいてないですね。また飛び出しました！」

「今度は本人のようです。腕もきちんとありますね」

「そのようですね。おっと！先に飛んでいたほうの身体を踏み台にしてさらに跳躍した！！なるほどこのために先に行かせたのか。しかし、さすがにかわされたようですね」

「いえ、まだ終わってません！飛んでいるパンチとリボンを利用して擬似的な空中戦をしています！」

「なんと！さすがのスティンガーも詠唱をとめ迎撃に専念しようとしてますが軌道をつかめず！」

「空を飛ぶパンチは彼女のほうでコントロールできるようですし、足場以外にもリボンを伸ばし絡ませることによって軌道を変更しているため捉えきれていないのでしょう。彼も飛行術は使えますが空中戦と言える機動はできないようですからね」

「ああ！アフロダインに魔法の射手が直撃！！これは決まったか！？」

「いえリボンがスティンガーを捕らえた！当たったことが返って視界を悪くしてしまったようです！」

「スティンガーほどけない！アフロダインがそのまま突っ込んで両者もつれつつ地上に激突！！審判が確認のため走っていきます」

「砂埃が晴れてきましたね」

「結果は……。スティンガー気絶してしまったようで！！よってこの試合アフロダインが勝利！！……いやぁ、なかなか面白い試合でしたね。しかしこれでアフロダインは上のクラスに、ですか」

「ええ、楽しませてもらいました。そうなりますね。このクラスで彼女と満足に戦える者はほんの一握りになってしまいますからね。しかし彼女ならたとえ上のクラスに行っても我々を楽しませてくれるでしょう！」

「なるほど。それでは次の試合ですね。それにしてもジョニーさんアフロダインに期待しているようなのですが、そのセリフも試合前にも言いましたし。もしかして……」

「次の試合も楽しみですね。ええ、もちろんファンクラブ会員ですよ！」

「やっぱり…、いいんですか特定の人に肩入れして」

「なにを言う。私は公私はきっちり分けますよ！それに……」

「ふぅ、無事に勝てたわね」

私は試合が終わって今は選手控え室にいる。ここは引き換え室ではあるが選手同士の交流の場でもあり、またちょっとした飲食ができるようにとカウンターもあるので談話室と言ってもいいかもしれない。そこで私は今日の試合が終わったこともあり食事をしながらさっきの試合を思い返していた。

「このクラスでは問題なく勝てるようになってきたわね。となると次のクラスで出るための申請もした方が良いわね」

と、独りごちていると

「てか、嬢ちゃんはもっと早く上がれていたのに何で今まであのクラスにいたんだ？」

この人はココで食事を出してくれている、元剣闘士のコックで名前はライバックって人です。現役時代は無敵とも言える強さだったみたいだし、その前もどこかの国の凄腕兵士だったとかって噂も聞きます。

そんな人が何でこんな闘技場のコックをしてるのかはよくわかりません。本人も昔のことはあまり話すほうじゃないので選手の間でいろいろ噂になってます。

「前にも言いましたけど、私が剣闘士になったのは修行のためとある人に進められたからです。だから、できるだけしっかりと自分の戦い方を試したから最上クラスに行きたかったので」

「それは聞いたが、ちょっと慎重に行き過ぎじゃないのか？最上クラスで十分やっていける力があるのに、下のクラスにいたんじゃ人気の方もそうだが最悪運営側からペナルティーが出ていたぞ」

そうなんですよね。私はここに修行のつもりで入ったわけなんですが、闘技場を運営してる側からすればそれだけで済まされては困るんでしょうしね。

少し剣闘士と闘技場のルールを説明しますね。この剣闘士戦、魔法世界では非常に人気があるもので現代人の感覚からすると野蛮なものなのですが、決してルール無用でもないです。まして惨殺劇や殺戮劇を見せるものでもありません。

魔法と言う戦闘技術があることとそれによる傷の手当が私たちの世界より遥かに簡単と言うこともあって過激になっているのであって基本的には格闘技の試合とそう大差なかったりします。ポイント制でもあるので戦い方しだいで力の差があっても勝てるようになってますからね。

ちなみに私はこれのおかげでよく黒星を付けられています……。防御力はかなりあるのでここにいる人の中級魔法くらいは耐えられるのですが最初は攻撃が当たらずにポイントを取られていて……っと私のことはいいですね。

ただ一歩間違えれば死と言う現実もあるので通常剣闘士はその力量によってランク分けされます。それによって力に差がありすぎて防御できずに死亡や強者が弱者を一方的にいたぶるなんて事がないようにしています。

なので試合をしていてある程度の力量があると判断されると運営から次のランクに進むように通知が来るのですが、それでも居座り

続けると警告ののち強制的上のランクにいくことになり最悪の場合、追放となってしまうのでう。

観客は”闘い”を見に来てるのであって弱いものいじめなんて誰も見ようとは思っていません。運営側はお客に来てもらわないといけないのでそのような試合をしている選手はよほど人気がない限り邪魔でしかなく、試合の正常化をするためにそのような処置をするのです。

それで私なんですが、実は結構前に通知が来ているんですよね…。

戦いの感覚を積むためにあまり早くに最上級クラスに行きたくはなかったのですが、先日ついに警告も来てます。変則的な戦い方をしてるせいもあってそれなりに人気があるため大目に見てくれていたのですが、いい加減上に行かないとまずいです。

ちなみにここの最上級クラスはほぼ無制限の戦いが許可されていて力量の差は考慮されていません。使用禁止の技は闘技場を激しく損壊させるか観客席を守る結界を破るものってくらいです。それを怖がって前のクラスにいようとする人も結構いるとか。

ちなみに私が使う技でマジンガー系はルストハリケーン（酸抜き）以外が全部だめです。どれも威力がすさまじいですし、まだまだ威力調整はうまくいってません。

「だから後で最上級クラスになる申請を出そうと思っていたんです

よ」

「それがいい、俺も嬢ちゃんが追放なんて理由でこの闘技場を去るのはいやだからな。ところでその後は何か予定があるのか？話を聞いていると最上級クラスでトップを取るって事が終わりじゃなさそうだからな」

「はい。最上級クラスで7割くらいで勝てるようになって年に2回開催されている大きな大会を優勝したら少し世界を回ってみようかと」

「あのここいらの闘技場合同でやる大会か？確かにその目標なら嬢ちゃんのここに入ってきた目的とあうな。しかし何でココの最上級で7割なんて条件なんだ」

「優勝だけだと物の弾みでって事もあるかもしれないので、しっかりとした目標が欲しかったので」

「ははは、なるほどやっぱり慎重すぎる気もするがな。まぁ、嬢ちゃんの今の実力なら今年か来年の大会で達成できるだろう。しかし世界を回るか……」

「盗賊とかは大丈夫ですよ」

「それは心配してない」

ですよねぇ～、剣闘士相手だとむしろ盗賊のほうが心配だし。

「そうじゃなくて、どうもこの頃いやな噂を耳にするんでな」

「いやな噂？」

「ああ、帝国が戦争準備をしているやら連合で人間至上主義のやつが出てきたやらな。それにこの頃おかしな連中があちこちで見られるようになったみたいだからな」

「そんな事がそれにおかしな連中って……」

「むちゃくちゃな事をしまくっているらしい。確かに盗賊とかはいるが、そいつらは比較にならないくらい非道みたいだぞ。そんな予兆がなかったのにいきなりそんなやつの集まりが結成されたり、普通だったやつがそうなったとか、おかしな連中としか表現できんみたいだ」

ん～、今って向こうだと何年なんだろ確か原作での大戦は２０年前とかって書いてあった気もするけど。でも、この感じだと近づいてきているみたいだなぁ。

「わかりました、そのときは気をつけますね」

その後ライバックさんや周りの人たちと少し話した後、今住んでいるアパートのようなところに帰ってきた。

この後どうするかと思案しているとドアをノックする音がしてあけてみると

「やっほぉ～、マミ。これから暇？暇だよね！これから一緒に買い物いこ！」

入ってきて早々人の話を聞かず連れ出そうとしているのは猫の獣

人のマリーって子です。この町で働いているようで越してきた初日からこの調子であっちこっちに引っ張っていかれています。町に慣れることが出来たから感謝しているけど、時々こっちの都合なんかお構いなしにいろいろしでかすからなぁ。

1回どうやってそうなったのか知らないけど私と自分の貯金全額を私の試合に賭けるってことがあったし。勝って帰ってきてみると満面の笑みで飛びついてきたときは何事かと思ったけど、さすがにそれを聞いたら少し説教してしまいました。

「もう少し、相手のことも考えた方がいいわよ。まぁ、私も買い物に行こうと思ってたから良いわよ」

「やったぁ！マミのご飯が食べられる！じゃぁ、早くいこ、おいしいお菓子のお店見つけたんだ」

「はいはい、ちょっと待っててね。用意してくるから」

「は～い」

さて、それじゃあ着替えて用意をしようかな。

その後、マリーと一緒に町を見て回り彼女が見つけたというおいしい喫茶店に寄って夜ご飯の材料を買い2人で仲良く食べた後また明日と分かれました。実際はまたいろいろと振り回されたのだけど割愛ということで。

転生して調子に乗って死に掛けたけど今は十分楽しんでいます。さぁ、明日は昇級の申請に行こうかな。と明日のことを思い私は眠

りについた。

魔法世界の日々（後書き）

戦闘描写ができません……。なので実況風味でｗ
最上級クラスでのことや大きな大会のことも書こうかと思ったけど本編とあんまり関係ないからカットしてさっさと大戦にはいろっかな…。

次回予告
「無事修行を完了したマミ。彼女はその後世界を周り偶然ある出会いをした。そこでの平穏な日々しかし刻一刻と迫る暗い影」
次回　真ネギま☆マギカＺ
「平穏な日々と不穏な気配」

カットすることにしましたｗ
でもちょびっとは書くかな。こっちはいろいろ重要なのでｗ

平穏な日々と不穏な気配（前書き）

ＰＶ２０００・ユニーク５００突破！
これを励みに続けていきます！

平穏な日々と不穏な気配

年2回開催される付近の闘技場合同での一大大会それの優勝が私の当面の目的だった。

そう“だった”。今私はその大会に優勝し今後のことを記者たちに話した後、マリーとその友達、剣闘士仲間やライバックさんと大会に優勝したお祝いのパーティをしていて、さっき家に帰ってきていた。

記者の人やマリーの友達で私のファンの子や剣闘士仲間は私が剣闘士を辞める事を残念がったが世界を回ることと、2度とやらないわけじゃない事を話すと再戦の誓いやずっとファンでいると言ってくれたりした。

そんなことを思い返しつつ1週間前に開催されていた大会のことや今後のことを考えつつベットで横になっていた。

「ライバックさんが行ったとおり最上級にあがった年に目標を達成しちゃうなんて。勝率も概ね7割くらいだし。ゼウスが何をさせたいかはよく判らないけど少なくてもマジンガーの力が要るってことよね。剣闘士のルール上で強くなるのはもう限界かな?そうなるとそろそろ世界を回ってみようかな。まぁ、今日は疲れたから詳しくはまた明日考えましょう」

そう、思い私は眠りについた。

「ここは……」

眠ったはずだが今私はいつか見たことがあるような何もない空間にいた。

「む、気がついたか」

と、黄金の甲冑を着た男性‐ゼウス‐が声をかけてきた。

「あなたはって事はここは……」

「ああ、勘違いするでないぞ。今回はお前の意識だけをここに呼び出したのだ」

よかった、また死んだのかと思った。

「そうなると何故呼ばれたんでしょう?」

「うむ、前にお前を見極めそれが済み次第アーティファクトなどを渡そうといっただろ」

「そういえば言ってましたね」

「うむ。転生した直後はどうなるかと思ったが、その後まじめに取り組んだようだからな。なので新たな力を渡そうと思ってな」

おぉ、ネギま世界に行ったらぜひ欲しいアーティファクトそれも神様印の！

「それとお前の身体もパワーアップさせる」

「え？やっとこの身体に慣れてきたところなのに？」

マジンガーの武装ほとんど使ってないよ……。

「私も早いとは思うのだがそうも言ってられなくてな。もう少し時間があると思っていたが奴の力がここ暫くで増してきていてな。強引ではあるが本来の体になるためにも急ぐ必要がでてきたのだ」

ん？本来の体？？これってマミさんの体を改造したものなんじゃ。

「む、話してなかったか。君の本来の身体は奴に対抗するために作ったのだが余りにも強大な力を持ってしまってな。渡す段階になって心配になってな。正しく使えるのか、力におぼれて暴走しないかと」

すいません、思いっきり暴走しました。

「そこでまず、見極めようの身体を用意しそれを与えて様子を見ようとしたのだ。もっとも次の身体も本来の身体になったときに問題なく扱えるように力になれるための物なのだがな。だがこれも使い方次第で非常に危険なものだからな」

なるほどなぁ。いきなり暴走した身としてはその心配がよく判ります。

「なるほど、では奴とは？」

「それも今から話す。奴の名は“ハーデス”かつて私と戦い敗れた神の一柱だ」

やっぱり、外れていて欲しかったなぁ……。

「奴と私は今後の世界のことで対立してな。何とか私が勝利し奴を封印することが出来たがもう世界にとどまり続けることは出来なくなってな。最初は奴の身体を破壊し根城にしていた場所ごと封印し葬り去ったので大丈夫だと思ったのだが、何故だか最近あの世界で奴の気配がだんだん濃くなってきたのだ。最初は勘違いかと思ったがあきらかに奴の気配と力を感じたのだ、私がじきじきにいければいいのだが…。それが出来ないことは前にも話したな」

真版と大体同じ感じなのね。

「そうなると私はハーデスを探しつつ、今まで通り修行をすればいいのですか？」

「うむ、奴の捜索も大事だが今のままではまずいからな。ただ、奴はおそらく実体を無くていていよう。そこまで甘い封印をした覚えはないからな。だから探すものは奴の意識だ、それと何故今になって奴の気配が濃くなったのかも頼む。それを何とかしないとまた復活してしまうからな」

むむむ、結構大変だなぁ。でも、結局誰かがしないといけないこ

とだからな。ハーデスってアニメだと人類を殲滅だかしようとしていたからなぁ。逆にそんなことに選ばれた事を誇りに思ったほうが良いな。後気になるのは

「アーティファクトはどのような形で？」

「向こうの世界でのパクティオーカードの形を取らせてもらう方式も同じだ。身体は起きたら変わっている。すまぬないろいろ押し付けてしまって。それではまたなおぬしも覚醒へと向かっているようだ」

「いえ大丈夫です。新たな生をもらったのですから、それに現状十分楽しめています」

と視界が次第に薄くなってきた、目覚めてきてるんだろう。体のことや判明した敵のことは気になるがカードのことに期待して目覚めと思っていると…。

「うむ、道は険しいと思うが決して諦めるな。私はいつでも君の側にいるぞ！

行け！マミンガー！！

」

「何ですかその名前は！！」

最後の最後でとんでもない名前で呼ばれてそれに突っ込んで目が覚めた。

「マミ＋マジンガーだからってマミンガーって……。忘れましょう、忘れれば私以外誰も知らないんだから聞くことはもう無いのだから」

と自分に言い聞かせ。早速カードを探すために周囲を見てみると。

「あ、カードはこれね。でもこの剣は？」

カードは机の上に置いてあったがその横に見慣れない剣が２本置いてあった。

「ん～、こんなもの買った覚えがないからおそらくゼウスが送ったものなんだろうけど、あの紙を見れば書いてあるかしら？」

早速転生したときにもらった紙を出して見て見るとしっかりゼウスからのものが写っていた。

＜うむ、無事に届いたようだな。その剣はグレートマジンガーが装備していたものだ。ついでに送っておいたぞ＞

あ、グレートの物なのね。確かに身体には格納できないからなぁ。とりあえず腰に下げておけばいいかな。

＜カードのほうなのだが出来ることはアーティファクトの召喚のみだ。念話や魔力供給はこちらからは出来ないのでな＞

当たり前と言えば当たり前ね。出来ても困るし、衣装チェンジは元々あるからね。

＜カードの詳しい仕様も載せて置こう有効に使ってくれ＞

ありがとうございます。さて早速拝見っと……

「……なにこの絵柄……能力もまた……」

カードには人物が描かれている。もちろん私なのだが問題は……。

独軍っぽいコスを着用し（まぁ、問題はないわね）

片手に何か杖のようなものを持って（これがおそらくアーティファクトなんだろうけど）

自信に満ちた表情をしている。（ここまではそんなに変じゃないわね）

そしてもう片方の腕で自信に満ちた表情をしてている頭を小脇に抱えている。（何故ブロッケンポーズを！最近忘れてきたのに……）

「絵柄の時点でもう…、それのこのアーティファクトって……」

本物のカードはどうなのかは分からないがこのカード基本は私が中央に配置されているんだけど、その後方を注視するとまるで最初からそうであったかのように私が多数の影を従えている絵柄に変わっている。

で、名前なのだが＜鋼の獣の王（メタルビースト・キング）＞となっているのだが写っている影がどう見ても機械獣にしか見えない……。

どういう事だと紙を見てみると

＜上位神の意向だ……＞

またか！何故身体はマジンガーでアーティファクトはブロッケン伯爵……。

＜だが、それならば奴が多数の手下を従えていても対抗することが可能だ。それに機械獣以外のメカもいくつか入れておいた。大いに役立ててくれ＞

機械獣以外かぁ、要塞系もかな？

いろいろ文句はあるけど使えそうだしよしとするか。

世界を回るときにカードの能力と自分の力を試さないとね。剣も

ある程度は使えるようにならないとな。

「マミ～起きてるぅ？」

マリーが早速来たようね。これからのことを思いつつまずは騒がしい友人を迎えるのだった。

あれからまた数ヶ月私は魔法世界を回ってみて今は帝国領にあるとある村で厄介になっている。世界を回るときは飛行魚や徒歩でと思っていたが、召喚できるものの中にグールなどがあったこともありそれで移動を行えたのでお金と時間を節約できた。

（怪しいやつって追っかけられたこともあったけど……。もちろん振り切った）

あのカード、Ｄｒヘルが使っていた物だと大体呼べるみたいなのよね。ためしにガミアＱを呼び出してみたら１～３まで出てきた嬉しかったなぁ。やっぱり旅のお供は欲しいからね。呼び出せる機械獣の数の上限もないようだった。

（機械獣軍団を呼び出したときは大騒ぎになってあわてて戻したものね）

ただ一度召喚して戻すと次に呼ぶためには２４時間掛かるなど制

約もあった要塞系はその制約がないみたいだけどガミアたちも1～3でワンセットで呼び出す必要があるみたい。ゼウスによると修理のためとバランスを取るためであるらしい。どんなに損壊しても戻してしまえば24時間で完全に元に戻るが、強力な戦力をこの世界に送り込むためにはこのような制約が必要だったらしい。

要塞内でも修理は出来るがメンテナンスが精々だし火力も余りなかった。こっちは移動用として用意してくれたのだろう。だから24時間の制約はないのかもしれない。それはともかく私はグールに乗ってガミアを従えて世界を回り体の性能を試しつつまた修行ついでに魔獣を狩っていた。

そんな時、ある町に寄ったときにマリーに出会った。何でも長期の休みをもらい故郷に帰る途中なんだとか。そのときまたちょっとした騒動があったがその後もぜひ故郷に来て欲しいと言われ、これといった予定が無かったこともありマリーの故郷にお邪魔することにした。

移動はグールだったのだがそこでまた……。

その後無事、彼女の故郷にたどり着き今はそこでやっかいになっている。村と言ったようにあまり大きくはないが穏やかでいい場所だ。友人もそれなりに出来た、ここで暫く過ごした後また旅に出ようと考えていたのだがそうも行かなくなってしまった。

大戦が勃発してしまったのだ。

原因は連合が突如進行したとも、帝国の特殊部隊が連合の要人を暗殺したともあってはっきりしていない。しかし、刻一刻と戦いは規模を増し今では連合と帝国の全面戦争の状態になってしまっている。とても自由に渡航できる状況ではなく私はこの村にとどまることにした。またマリーも仕事先から暇をもらってこっちに避難してきた。闘技場のほうも剣闘士が戦場に行ったりして現在休業中らしい。

ただこの村は主要な都市からは離れているので住民の危機感は余り無い。とはいえ敗残兵や盗賊だ出る可能性もあるため腕に自身がある人たちで見回りをしている。

今は私の番で村の周辺を回っている。

「それにしてもこの戦争何時まで続くんだろうな?」

と話しかけてきたこの人はアルヴィンさん村の若者のまとめ役のような人でリーゼントがトレードマークの虎の獣人だ。

「そうねぇ、ニュースを聞いてもどっちもこれといった目的を持っているって感じじゃないものね。一応目的っぽいことは言ってるけど…」

「ありゃ目的じゃなくて妄言だ。何が＜神々よりこの世界の管理を任された我々はすべての国、臣民を管理統制しなければならない。＞だ！連合の言ってることは妄言でしなかないし、帝国も似たようなもんじゃねぇか。あいつら世界征服でもしたいってのか？」

「言ってることを素直に受け止めるとそうなるわね。でも、戦線は膠着してるんですって？」

「ああ、復隊した隊長やオヤジさんの話だと上が何をしたいのか分からんそうだ」

隊長って言うのはバートレットと言う人で村の自警団のまとめ役で皆から隊長と呼ばれて慕われていたの、オヤジさんも同じく自警団の人で隊長の補佐をしていて訓練なんかを担当していたは名前はビーグルだったかしら？皆オヤジさんってしか呼ばないからなぁ。

元々は軍にいたらしいのだけど引退して村に越してきたらしいの、でも戦争が始まって復隊することにして軍に行ったの。

「そう、そうなるといつ終わるか分からないわね」

今起こっている戦争がおそらく原作の２０年前に起こったっていうものなんだろうけど…。

このあたりから読まなくなっちゃったからあんまり覚えてないの

よねぇ。何かおおボスがいて主人公の親がたおして終わったってくらいしか記憶に無いし。そうなると参加したほうがいいのか。でも……、私に人を殺せる覚悟があるのかしら。剣闘士をしていたのだから戦う覚悟はあるけど、そっちのほうは分からないわね。

とりあえず今はこの村の安全を守らないとね。こんなことはいくら考えても分からないしね。

と考え事をしているとチョッパーが（彼のあだ名で斧って意味があるみたいで戦い方にちなんだのだとか）腕を出してさえぎってきた。

「どうしたの？」

「何か音がする。獣が立てる音じゃねぇ。それに血の匂い」

こんなときは獣人の感覚は便利ね、と思いつつ戦闘体制に入った。

「距離と方角は？あと数」

「距離はまだあるな方角は北東ってところか。数は……詳しくはわからねぇが、かなりの数だな。盗賊や敗残兵って規模じゃねぇ」

帝国の正規軍がこんなところに来るはずもないし、そうなると連合の兵かしら。

「応援を呼んでくる時間はあるかしら？」

「難しいな音がだんだんこっちに近づいてきている。戻って説明しているうちに間近まで迫られそうだ」

「そうなると私たちで何とかしないとね。連絡にはガミアちゃんを1体向かわせるわ。向こうは大丈夫かしら。こっちが全部って分けじゃないだろうし」

「そうだな頼む。ブービーとナガセのほうか？大丈夫だろうあいつらが負けるところなんて想像つかねぇしな。それにこっちにいるのと同規模以上がいたら今すぐケツまくって村ごと逃げる必要があるな」

「それもそうね。でもそんなにいるの？」

と質問をしながらガミアちゃんたちを出してうち1体を村に連絡に走らせた。もう一体をもう一つの班のところに援護に向かわせ準備を整えていく。

「ああ、近づいてきてはっきりしてきたが１００人はいるぞ」

「1人あたり５０人計算ね」

「まさか、お前が７０で俺が２０でアイツが取りこぼしの１０だろ。凄腕剣闘士さん」

「ふふ、期待には答えないとね。でも、まずは目的を聞かないとね」

「聞くまでも無いと思うがね。さっきからろくでもない会話がちらほらと聞こえてくる」

「一応は聞いておかないと、私が前に出て話すわ。チョッパーは援護と村に向かう人をお願い。ガミアちゃんは村へ向かう人をお願い」

「了解！」

「了解した」

ふぅ、いきなり殺す覚悟をすることになるなんてね。出来ればそうなって欲しくは無いんだけど……。

そこからしばらく進んで、少し開けたところで私は向かってくる人たちを待っていた。さてどうなるかしらね。

＜マミ、どんどん近づいてくるぞ＞

＜分かったは、もう少しで見えるかしら＞

＜ああ、もう森を抜け…まずい奴ら撃ちやがった！逃げろ！！＞

「え！」

チョッパーの警告からよけるまもなく魔法の射手が多数私に降り注ぎ止めとばかりに中級魔法が撃ち込まれた。

「はっははははは、なにやらこそこそとしていたようだが貴様ら獣人は生きる価値なの無いのだよ。この世界はあのお方によって選ばれた我々の物なのだからな！」

「隊長、こいつは人間のようですが」

「む、確かにそうだな。しかし獣人と馴れ合う同胞など私は知らんな」

「それもそうですね。大方変身魔法でも使っているのでしょう」

この言葉を聞いて私はこの人たちと話し合うことは無理と悟った。それにいきなり魔法を放つこいつらを村に行かせるなんて事は出来ない。

あれだけ悩んだ殺す覚悟は相手が相手だからかもしれないがすんなりついた。

転生したての時のように自分だけ、死ぬならいいが仲良くなった大切な人が死ぬのを黙ってみているなんて出来ない。

だから私はこの人たちを殺そう、戦争に参加して少しでも早く終戦を、親しい人たちに少しでも早い平穏を取り戻してもらうために。この力を使おう、マジンガーの「神にも悪魔にもなれる力」を、けれど決してそのどちらにも成らない様に人の心を持ち続けて。

そうと決まれば早く起きないとね。チョッパーも呼びかけ続けていることだし。

＜私は大丈夫よ。あなたの言うとおりこの人たちに話は通じそうも無いわね＞

＜ふぅ、心配させるなよ。ああ、無理だな。だがちょうどいい具合にお前の周りに集まってきてるぜ＞

＜ええ、じゃああとは作戦どうりに＞

＜ああ、なめたまねした落とし前はつけねぇとな。こんな奴ら村にいかせれねぇ＞

さぁ、反撃と行きますか。となると掛け声はやっぱりあれかしらね。

起き上がりつつガッツポーズとりつつ私は叫んだ。

「マジーーン！ゴーーー！」

マジンガーといえばやっぱりこれよね。と思いつつ、ブレストファイヤーを放ち。敵の殲滅を開始した。

あれから無事に村に一人も通すことなく敵の殲滅は完了した。ブレイズ達の方も３０人くらいが侵入して奇襲してきたらしいが苦も無く撃退できたようだ。

そして現在、村の長老たちが集まって今後のことを話し合っていた。

「どうなるかしらね」

「たぶん引越しだろうな。今までも敗残兵とかが来ていたが今度は明確にこっちをつぶす気の奴らが来たからな。もう俺たちだけでどうこうできないだろう」

「そうね。となると、バートレットさんたちがいる町に行くのしら」

「そうなるだろうな。ほかに当てもなし。なぁ、今回のあいつらどう思う？」

「あなたも気になってたの？確かにあれはちょっとおかしいわね」

「ああ、あんな連中がいるってのは分かるがそれがかたまっていて。ましてこんなところまで出張ってくるなんて普通じゃねぇしな」

「本当にどうなっているのかしらね、この戦争」

「……なぁ、軍に入るんだって？」

「ええ、ここを移ったら警備がしっかりするところになるんだろうし。それなら軍に志願して少しでも早く終戦が迎えられるように、そうじゃなくても大切な人にまで戦火が及ばないようにしたいからね」

「そうか、俺やブービーたちも志願するから、もしかしたら一緒の隊になるかもな」

「ええ、そうね。そのときはよろしくね」

「ああ！またここの皆で祭りをしたいからな。死ぬんじゃねぇぞ」

「あなたもね。チョッパー」

その後、村を放棄して大きな街に皆で移り住むことになった。

そして自警団の人たちは軍に志願し戦火へと飛び込んでいった。

そう、2年に及ぶ大戦。大分裂戦争へと物語の表舞台へと私は飛び込んだのだ。

某所

もっとだもっと……これでは足りぬ……より多くの■を……もっと■■を広げよ……

我は■■■■、■■■■■■の支配者　この世界の真の支配者……

……

……

……

平穏な日々と不穏な気配（後書き）

え～と、強引なパワーアップなのは承知しています。ただここ以外にタイミングが無くて＞＜
グレートにパワーアップしたのですがＺも今後しっかり出番と見せ場はあります。ただグレートは大戦のほうが栄えるってことでかなり早いですけどチェンジしました。
主人公の大戦への参加の部分も悩みました＾＾；
ともかく暫くはグレートマミンガーで大戦編をお送りします。
いろいろ至らないとことがあると思いますがよろしくお願いします。
それと作中で出てきた連合部隊ですけど。決してあれが一般的な連合兵ではありません。似たようなものは帝国にもありますので。

次回予告
「ついに物語の本筋にかかわりだしたマミ。そして蠢く敵の影、姿を現す原作キャラ。」
次回　真ネギま☆マギカＺ
「大分裂戦争＜序＞」

大分裂戦争＜序＞（前書き）

リアルが忙しくて1週間ぶりに……
剣闘士関係もそうですがいろいろ独自解釈、設定が入ります。
あと、なぜかいるエスコンの人達ですがw本編には関わりは無いです！
モブの名前考え付かなくて…

大分裂戦争＜序＞

「いでよ！ガラダＫ７　ダブラスＭ２！進撃せよ！トロスＤ７　アブドラＵ６！目標はあの街だ、進め機械獣達よ！！」

私は次々に機械獣を呼び出し攻略目標の街に向けて、進撃を開始した。

「いつ見ても、凄まじい光景だな。しかし、ここまでする必要あるのか？」

と地響きを起こしながら進む機械獣に驚き辺境の都市に攻め込むには過剰すぎることに疑問の声が上がった。

「ええ、過剰な戦力であるのは分かっているわ。でも、それは相手もそう思うでしょ？なら……」

「なるほど、この戦力で相手を威圧し降伏を促すと。しかし、そううまくいくか？かえって徹底抗戦を決意させるんじゃ？」

「可能性としては低いと思うわ。あそこは元々帝国領のだったし、駐留部隊の士気も高くは無いから徹底抗戦をするまでにはならないと思うわ」

「ふむ、確かにアチラさんもこんな何も無いところの街を死ぬ気で守る意味も義理も無いな」

「ええ、だから街を開放することを条件に撤退を認めれば戦闘を回避できるはずよ」

「その条件ならまず間違いないな。しかし、大丈夫なのか？敵兵を無傷で逃がしてしまって」

「受けた命令はあくまでも都市の奪還。敵兵のことに関しては何も言われてないから黙っていれば問題ないわ♪それにあなただって戦闘はしないほうがいいでしょ？」

「くく、そりゃ詭弁じゃねぇのか？マミ隊長。まぁたしかに、こんなところで死にたくはないな」

「と、そろそろ街に着くわね。皆に準備の指示をして」

「了解。精一杯脅してよろう！」

「ふふ、やり過ぎないようにね」

機械獣を都市の城壁を取り囲むように配置し私達は城門前に陣取るように位置についたいた。相手も城壁上に陣取り迎撃体制に入ってきた。

「これから都市の受け渡しの交渉を始めるわ。もしかしたら攻撃が有るかもしれないから彼方達はわしの前に出ないようにね。それと攻撃が有っても反撃はしないように、防御に専念して」

「了解。その代り、しっかりと頼むぞ！」

「ええ、それじゃあ始めるわね。

こちらは帝国軍アリアト方面軍第17大隊指揮官マミ・トモエ
都市に駐留する部隊の指揮官に告げる。現在、そちらはこちらの包囲下にある無用な戦闘およびそれによる都市への被害はこちらが望むところにあらず。武装を解除後すみやかに都市より退去するならば、我が方は追撃をおこなわない。期限は明日正午とする、そちらの賢明な判断を期待する。

さてと、このままうまくいってくれるといいわね」

「ああ、そうだな。あとは、アチラさんに変な考えを持った奴がいないことを祈るか」

しばらく待機していると城門が開き白旗を掲げた一団が中から出てきた。一団はわれわれの数メートル前で止まりその中の指揮官と思しき人物が

「協議の結果、我々は武装解除し都市より退去することを決定した。されど本当に追撃をおこなわないか確認をしたい。先ほどの言葉が真実なれば現在都市を包囲している、あの兵器を撤退させてもらいたい。あれがあっては兵達に武装解除を促すことは難しく、また待ちの住人も不安がっているゆえ。兵器の撤退を持って我が方も武装解除、退去を開始する。我々は退去完了までそちらに身柄を預ける」

「了解しました、賢明な判断ありがとうございます。では、機械獣たちを戻します」

立ち振る舞いからこの人たちが本物の指揮官らと判断し、機械獣たちを戻していった。消えていく機械獣に相手は驚いていたが、だからといって反抗する様子もなく無事に終わるかと思われたとき……。

城壁上より突如魔法が放たれた！それも魔法の射手のような初級魔法ではなく、中級以上のあきらかにこちらを数人は殺れるモノが迫ってきた。

とっさに射線上に飛び出し無事防御でき周囲に被害がなかったが、別の問題が発生していた。

「おい！どういうことだ！なんでこちらに攻撃を仕掛けてくる！！」

「まて！何かの手違いだ！私達はあのようなことは命令していない！！」

機械獣を下がらせたところで撃ってきたせいで「こちらをはめたのか！」と副長がくってかかり、アチラは完全に想定外なのだろう酷くあせっていた。

副長には攻撃が有るかも知れない事を話したが、降伏の前か後でも精々魔法の射手クラスのものと思っていたのだろう。それが詠唱が必要なものが撃たれたことで、計画的なものかと思っているのだろう。

「だが！「ストップ」マミ無事だったか！」

「ええ、私は何も問題はないわ。それに魔法を放った人もどうやら仲間たちから取り押さえられているみたいだから。あの人が突発的にしてしまったのでしょう。でも、一応警戒は続けて」

「了解しました、お前も気をつけろよ」

「な……、あの魔法をくらって無傷とは。アチラが好戦的でなくて良かったよ」

「ええ、先ほどの兵器もそうですが、あの指揮官の実力も我々でどうにかなる相手ではなかったようですね」

「そうだな。今は無事に帰れることを喜ぶとしよう」

今私はヘラス帝国の東の外れの街にいる。

大戦に参加することを決めた私は傭兵として参加している。正規軍になるつもりもなく拳闘士としての実績と世界を回っていたときに傭兵のようなことをしていたので、傭兵となったのだ。幸い拳闘大会での優勝実績もありスンナリと登録も終わり、数回の実戦を経験したあと今の地位にいる。

もっとも隊長と言っても傭兵達のまとめ役といった感じで正規軍としての地位はなくこの大戦限定のものだ。それに、私には戦術で華麗に勝利何てできるわけないので機械獣を出しつつ誰かが突出しないようにするくらいしかできない。

「あれから暫くたちましたが、上からは何も？」

この人はラリーさん、同じ傭兵仲間なのだけどこの仕事を長くやっているそうなので副官をやってもらっている。正直私より隊長に適任の気がするが本人によると「一番強いやつが隊長をして先頭で皆を引っ張った方がいい」らしい。

「ええ、正規軍からは現在の戦線を維持せよってしかきてないわ」

「ここに再び攻めて来るかね？ただでさえ主要な戦線とは関係無いってのにお前までいるってのに」

「確かにあまりメリットはないわね、でも油断はきんもつよ。それに、連合が来なくても盗賊とかがいるわ。それからも街を守らないとね」

「わかってるよ。盗賊もだが今回の戦争は何処かおかしいからな。あり得ないことも起こるかもしれねぇ」

「ええ、そうね」

「た、たいへんだ!!」

「さっそく何かあったみたいだな」

「そうね。どうしたの!」

「あ!隊長に副長、それが連合がこちらに攻めいってきたんです。」

「本当に来るとはね。でもどうしてそんなに慌ててるの?」

「侵攻してきている戦力が問題なんです。見張りの報告によると鬼神兵4に1個旅団規模の戦力がこちらに向かってきているらしいです。兵も砲兵らしきものを確認したとか……」

はぁ!?何だその戦力は、見間違いじゃねぇのか?どう考えてもこんな戦線、場所に投入される戦力じゃねぇぞ!」

「何回も確認しました!しかし確実にそれだけの規模はいるんですよ!!それに奴らやる気満々のようです。この戦線から帝国に侵攻するつもりでしょうか?」

でも、主戦線のオスティア周辺でも押されているのに何でこっちに…。まぁ、それは後で考えましょう。あなたは皆に出撃の用意を知らせに言って」

「了解しました!」

「はぁ、本当にありえないことがおこっちまったな。だが、アチラさんがやる気ならこっちも全力でいくまでだな」

準備を完了し街から程近い丘に陣取り相手を迎え撃つ準備を進めている。

「鬼神兵は隊長のアレに任せるとし、どう布陣する？普通にぶつかればどうやっても勝てやしねぇぞ。」

「鬼神兵は、アレね……。あの装備なら2対1でも機械獣なら問題なくいけるわね……」

「もう見えてきやがったか」

「短時間なら敵の攻撃を受け止められる？」

「短時間ならな……、敵の錬度にもよるがこっちも傭兵なんて事をしてるからな、無茶なことには慣れてるぜ」

「ガミアちゃん達も参加させるわ。鬼神兵を潰したら機械獣たちにも襲わせるわ。戦う敵もこっちに向かってくるか突破して街に向かう人だけ狙うことにして」

「そこまで簡単に潰せるものか？まぁ、お前がいるだけでも何とかなりそうではあるけどな」

「ええ、機械獣の名は伊達じゃないのよ。じゃあ、早速はじめましょう」

「来なさい！ガラダＫ７　ダブラスＭ２！」

髑髏の頭部の左右に大きな鎌をつけたガラダＫ７

蛇状の頭部が２つあるダブラスＭ２

両機とも現代の軍をはるかに凌駕する力を持っている。鬼神兵とはいえ現在向かってきている、せいぜい軽歩兵程度の装備のモノに負けるほど弱くはない。

呼び出してすぐに２機を突っ込ませ私達は迎撃体制を整える。敵も鬼神兵と分離しこちらに突撃する腹積もりのようだ。鬼神兵は砲撃体制に入り本隊は機械獣を迂回するようにこちらに進軍して来た。

鬼神兵と機械獣たちの距離が半分になったところでチャージが完了したらしく、まず２体がそれぞれに砲撃を開始。残り２体は回避した先に撃ち込むつもりなのだろう、普通ならここで終わるか大ダメージを負い遠からず敗れるだろう。

だが、機械獣はそんなに弱くも甘い相手ではない。基本的にやられメカの印象があるがあのマジンガーと対等に時には追い詰めることもある能力を持っているだ。この程度の攻撃何も問題ない。

1発目を避けた2体に向けて残りの鬼神兵2体が砲撃を放った、相手は必中を確信したのだろう、こちらに攻撃をかける相手の顔には笑みが浮かんでいる。

しかし、その期待は無残にも打ち破られる。2体の機械獣は＜機械の獣＞の名に恥じない流れるような動きで2発目の砲撃も回避しなおも接近を続けた。鬼神兵たちは2体を前衛に、もう2体を後衛にし再度砲撃を試みようとしたがその動きは余りにも遅かった。

ガラダが目からミサイルを放ちダブラスも2つの頭部から光線を放ち鬼神兵達を牽制。鬼神兵はその攻撃を防御している間に至近距離までの接近を許してしまった、後衛の2体は辛うじて距離を離しつつあるが、まだまだ近距離といっていい。

ガラダが後退する1体に向け頭部横の鎌を1つ投擲した。それは辛うじて前衛のガラダと相対していた1体が弾く事ができたがそれによってできた隙は余りにも大きい……、もう片方の鎌を手に持ったガラダの一撃を受け止めることができず致命傷を負い崩れていく。

ガラダはその鬼神兵を後退する1体に投げつけた。そこまでスピードがあるわけでもなく難なく避けることはできた、後は再び砲撃するだけ……だった。投げつけられた1体に隠れるように飛来した鎌に気がついたときには回避も防御も不可能で、もし鬼神兵に感情があっても自分の身に何が起こったかわからなかっただろう。

時間を戻しダブラスのほうは…

至近距離に接近したダブラスは首を鬼神兵に絡め絞め殺さんばかりに締め付けつつ両腕でも抱きついてきた。また首は後退する鬼神兵を狙い容赦ない光線による攻撃を浴びせていた。抱きつかれた鬼神兵は何とか振りほどこうともがいたとき……、突如として光り輝いた。

鬼神兵が何かをしたのではない、その証拠に鬼神兵は煙を上げつつ崩れ落ちている。そうダブラスだ。胸にある6つ電極で相手に高圧電流を浴びせたのだ。もう1体の鬼神兵も何とか光線を防いでいたが1対1になったことでより激しさを増した攻撃に耐え切れず後を追った。

機械獣によって4体の鬼神兵が瞬く間に敗れる。4対1で負ける可能性などまずなく、例え負けても自分たちが私たちを破るまでは十分持つだろう、そう思っていた相手は予想外過ぎる結果に動揺を抑えきれないようだ。

なんとしても突破しようと攻撃を強めたとき、機械獣が連合兵達を後ろから襲った。鬼神兵を無傷で破り現在進行形で自分達を蹂躙する機械獣の存在についに彼らの士気は崩壊した。

後は後方に通さないように攻撃を加えればこの戦闘は終わりだ。だからこそ何故今回の戦闘が起こったか。何故こんな辺境にあんな戦力が現れたのか……、どうしても考えてしまう。ラリーさんも同じようでなにやら考え込んでいる。ともかく何とか大きな被害もなく勝利したことを今は喜ぼう。

「転属ですか？」

「そうだ貴様には今回の戦功によりオスティア方面軍に派遣されることが決定した。速急に準備を整え出発されよ」

「代わりの人員はいるのですか？」

「貴様が心配することではない。すでに数名こちらに向けて出発している」

「分かりました、準備が出来次第向かいます」

「では私はこれで」

どうやら、今までの功績と今回の戦闘の結果。私は主戦線にして戦争目的の1つでもあるオスティア方面に派遣されることになったようだ。それをラリーに話すと。

「そりゃ、さびしくなるな。しかし、お前があっちにか……」

「ええ、今までありがとうございます」

「じゃあ、お礼ついでに少し頼みごとを聞いてくれるか？」

「できることなら」

「何ここより大戦の中心といってもいい所に行くんだ、だからな……この戦争について調べてくれないか？」

「この戦争について……」

「ああ、この戦争はどこかおかしい。帝国の戦争目的のオスティア奪還にしても何故今更あんなところを？それ以外の目的も余り納得できるものじゃねぇ。始まりもよくわからねぇからな。だから、この戦争の中心近くに行くならそれを調べてくれ。何できる範囲でいい」

「分かったわ。私も気になってはいたからね」

「ありがとよ。じゃあ、皆に知らせて送別会の準備でもするか！」

「ふふ、楽しみね」

その後、送別会をしてもらった翌日、私はオスティア方面へと出発した。

暗く光もほとんど無い場所で複数の話し声がする

「アチラはどうなった？」

「失敗だな、邪魔者がいた。暫くは無理だな。」

「だが、すでに飛ばしてある。」

「そうか、向こうも頑張りすぎた者がいたらしくてな。ちょうど交代になるだろう。」

「それは良い。嗅ぎ回っている者もいるが問題なかろう。」

「ああ、アノ方もお喜びになろう。」

「うむ」

「奴らは？」

「大丈夫だ。気がついてない。」

「そうか、ついに我々の悲願が」

「「全ては■■■■様のために。」」

「「「「全てはあるべき姿に。」」」」

「「「「「全ては本来の持ち主のモノに。」」」」」

暗闇に声が反響しそして消えていった。まだ、誰もその存在を知らない……

大分裂戦争＜序＞（後書き）

機械獣の力強さは表現できたかな?何の間のでマジンガーと戦えてたのでかなりの力はあると思うので…
もう1，2話は機械獣を活躍させたいです。てか、大戦しか活躍の機会があまり無いので……。学園編で出したらもうねｗ

あ……前回の次回予告でいった原作キャラだし忘れたｗ

次回予告
「オスティア方面。今大戦での激戦区……、この戦争はどこに向かうのか。」
次回　真ネギま☆マギカZ
大分裂戦争＜激戦区＞

大分裂戦争＜激戦区＞（前書き）

タイトルに偽りありだなぁ…。

大分裂戦争＜激戦区＞

今私はオスティア攻略軍本部の作戦会議にいる。

「では、私達は第１１軍団と共に行動すればよろしいのですか？」

「そうだ。我々は聖地オスティア奪還作戦を再度おこなう。我々、第１１軍団は陽動もかねてニャンマド攻略をおこなう。貴様ら傭兵もその作戦に参加しろ」

「了解しました」

「お、隊長がお戻りのようで」

「ええ、今帰ったわ」

「それでどうだったんだ？またオスティアを攻めるとかって噂は流れているがよ」

「私達はそのオスティア攻略のための陽動としてニャンマド攻略を目指す１１軍団と行動することになったわ」

「おいおい。オスティアだけでも驚きだってのにニャンマドもだぁ？上の奴らは一体何を考えてるんだか……」

「しかも、私達は11軍団の陽動として働くことになるでしょうね」

「陽動の陽動かよ。あいつら一体傭兵を何だと思っていがるんだ」

「仕方ないわよ。本来の傭兵っていったらお金で戦争をするって物なんだから」

「だがなぁ、今回の大戦じゃそうじゃない奴も結構……。止めだ止めだこんな事言ってもしょうがないか。しっかし、こんなに戦線を広げて大丈夫なのかねぇ。前回のオスティアで失った戦力だってまだ回復してねぇってのに」

「上層部は前回の敗因を連合の凄腕集団によるものと思ってるそうよ。で、現在その人達は辺境の戦線にいるらしいから大丈夫だろうって」

「そんな簡単にいくものかね。で、ニャンマドの方はどうするんだ？あいつらのやる気なら問題ないが、正面から行かされたら流石に洒落にならねぇぞ」

「そのときは機械獣を総動員するはわ。詳しい作戦はまた後であるでしょうけど。彼方の知り合いの人に頼んで、正規軍も少しつけてもらえない？」

「それなら心強いな。当たってはみるがあまり当てにはするなよ？」

「そんなに多い必要はないわ。それに向こうの情報を知れるほうがもっと重要だから」

「なるほど、確かに快進撃を続けて気がついたら敵中ど真ん中味方

は撤退済み。ってのは勘弁してもらいたいな」

「ええ、だから向こうと連絡が取れる人を頼むわね」

「りょ～かい、そこは任せてくれ」

そう言って、彼は知り合いに連絡を取りに言った。

ちなみに彼は新しい副官でフラガさんて言うの。もっとも、前回と同じで実質彼が隊を回せているんだけどね。元正規兵らしいけど、軍の無茶苦茶な作戦におこって上官を殴って除隊その後、傭兵として改めて参加している見た。

この戦争、始まったまだ1年くらいとそんなに時間はたっていないのだけれど、戦争目的があやふやで上層部の将校の人達はともかく末端の兵士になってくると何故戦争をしてるか分からず士気が高まるどころか厭戦気分がそれなりに高い。

それに将校の人でも皆が戦争継続を叫んでいるのではなく、こちらもそれなりの数の人が疑問に思っているらしい。フラガさんがお世話になったハルバートンって人も何故こんな戦争を起こしたのか、何故続けているのか不思議に思っているみたい。

元々、私がいた地方の戦線でも連合・帝国双方でそのような思いを持っている人が多かったが、どうやら主な戦線や街でもそれは同じ思いらしい。しかし、王族や大臣、将軍でオスティア奪還を叫ぶ

人もそれなりに居てその人達が国の方針を決めているから現在の状況何だって噂も聞こえてくる。

連合と帝国の仲は確かに良くはないがこんな戦争を起こすほどのものではなく、オスティアにしても確かに文明発祥の地であり聖地として名高く日頃からそこを帝国に奪還しようという人もいるが多くの人達にとって戦争の理由になる土地でもない。

聖地といっても宗教的聖地、例えばエルサレムのような場所ではなく、発祥の地にしてもあまりにも古く魔法世界全体での発祥の地なため。地球で言うところの人類発祥の地つまりアフリカといった具合でこちらも戦争をしてまで求める場所ではない。

他にも資源などの理由があるが、オスティアは空中に浮かぶ土地だから逆に負担になりかねない危険がある。そもそもこの魔法世界はまだまだ未開の土地が連合・帝国双方にあるので戦争よりそっちを開発したほうがよほどいい。

そのような理由があって、疑問の声は多く何度か和平交渉をしようとしたらしいが毎回妨害があり成功していない。それも双方で起こった事なので和平派も今では向こうが戦争を継続する気なのかとあまり活発ではない。

ラリーさんに頼まれて調べてはみたけど、分かったことは「何故戦争を継続しているか分からない」なんてことだった。それを知らせたら、向こうもあきれていたわね。他にも無茶な作戦がそれなりにあるってこのもその理由だろうけど。

戦争の被害で大切な人が傷つかないためと思って参戦したけど、この戦争の終わりはいまだに見えないわね……。

「まさか本当に正面を任されるとは……。で、本隊は迂回してニャンマドを目指すね、作戦って言えるのかねこれ」

「まったくね。戦力も1個旅団が良いところかしらこっちは？」

「だな、軍からもあまり兵力は借りれなかったし。ホントに連絡くらいだな、それより少年兵が多いのが気になるぜ」

「ええ、彼らは後方に下げたほうがいいわね」

「ああ、そうしてくれ。あんな若いのにまだ死ぬ必要なんてない」

「他の隊長さんたちにも言ってくるわ」

「頼む」

ちょうど作戦会議の時間だったのでそのことを一緒に伝えたら、他の人たちも了承してくれた。

作戦については何かやろうにもここからニャンマドの守備隊がいるだろう場所まで何もない平原なので、機械獣を先頭にし各傭兵隊が後ろに付きホローくらいしかないだろう。

傭兵隊長の一人が自分達の装備がもう少し良ければ機動戦をしても良かったかもしれないといってたけど残念ながらそこまでの装備はなかった。

その後細かい打合せをした後、皆明日に備えて休息に入った。

「じゃあ、呼び出すわね。大丈夫だろうけど一応注意してね」

「了解。お前らぼけっとするなよ！」

「ああ、頼むよ。派手に行こうじゃないか」

この人は一緒に行動する傭兵隊の隊長のバルトフェルトさん。何でも親睦を深める宴会でフラガさんと気が合ってそれならと一緒に行動することにしたらしい。

「いでよ機械獣軍団！」

私の呼びかけに応じて次々に機械獣たちが姿を現す。今回の作戦は長時間になるため機械獣を半数に分け交替で出すことにした。他にも緊急事態用に機械獣の中でもとくに強力なものは予備戦力として待機してある。

それでも次々に出現する機械獣の群れには圧倒される。ここまでの数を出したことが無い事もあるけど、その姿は見る者を威圧する。

「いつ見ても凄まじいなぁ」

「だねぇ。鬼神兵もすごいがこの機械獣はそれとはまた違ったすごさがあるね。まぁ、問題は……」

「だな、相手が気の毒だが頼もしいものだ。ああ、問題は……」

「「見るからに『悪』って感じの風貌ばかりだな。」」

人が気にしてることを……。そう機械獣は非常に頼もしいのだがどれもこれも強烈な印象のばかりでしかもその風貌が悪っぽくて……。

一度機械獣で人助けをしたことがあるのだけど。そのときは取って喰われるんじゃないかとおびえられたし。

その後、順調にニャンマド手前まで進撃して現在本隊の到着待ちと街攻略前の休息に入っている。

「思ったよりも被害がなかったわね」

「ああ、敵もほとんど出てこなかったからな」

「こうなると、陽動としては失敗してるんじゃ？」

「かもなぁ、今頃向こうが喰い付かれてるんじゃいのか？」

「いや、こっちは元々双方が重要視していなかった場所だからね。根本的に戦力がないんじゃないかな。で、そこを突いて慌てた連合がオスティアの戦力を回す。ってのが上の考えだろう」

「じゃあ、現状でも問題はないかもしれないわけね」

「ああ。だが問題がないわけじゃぁないんだよ」

「何かあるのか？」

「なに、紅き翼の事がちょっとね。」

「それって連合の凄腕傭兵集団だろ。確か辺境の戦場にいるんじゃなかったか」

「その辺境の戦場ってのがここの北なのだよ」

「それは、また……」

「近いわけじゃないが遠いわけでもない。下手に長引くと駆けつけて来るかもしれない」

「そうね。街の攻略を早めた方がいいかしら？」

「それより、撤退したほうがいいかもね。この作戦はあくまでもオ

スティア奪還作戦の陽動なんだし」

「やめとけやめとけ、戦場で不吉な事言ってるとたいがいろくでもないことが「伝令！」おこったな……、俺には予知とかそんな能力はないがこれはろくでもないことだと思うぞ」

「そうと決まったわけではないだろうに。それに君にはそんな能力ありそうなのだけどね」

フラガさんにはそれっぽい能力はありそうよね。予知じゃないかって思うほど勘がよかったりするし。

「で、なんて書いてあるんだ？」

「やっぱ君には予知能力があるよ。本隊が紅き翼に噛み付かれたらしい。増援を送れだと」

「不吉なことが当たる力なんているか。しかし増援ね。うちにいるので紅き翼にかなう奴なんているのか？」

「マミが対抗できるだろうけど。流石に一人じゃね。マミどうだろう？」

「そうね。機械獣の中でもとくに強力なものを出してみるわ。それに時間稼ぎなら何とかなるかも」

「じゃあ、俺もついて行こう。説得のときに役に立つかもな」

「なら君たちの隊は僕に任せてくれ。彼らが来たとあっちゃ、さっさと逃げ出さないとね」

「ごめんなさいね」

「なになに、問題ないさ。ダコスタ君ならきっちりやってくれるだろう」

副官の人の心の中で謝りつつ私達は出発した。

大分裂戦争＜激戦区＞（後書き）

終着点は決まってるけどその理由付けが難しい……
次回は紅き翼との戦闘です。といっても撤退支援なので期待はしないでねｗ
大戦の終結と黒幕、最終章は何とか形になってるけど学園編が……。

次回　真ネギま☆マギカＺ
「本隊の撤退支援のため単身紅き翼に戦いを挑むマミ！撤退は成功するのか」
次回　大分裂戦争＜撤退戦＞

大分裂戦争＜撤退戦＞（前書き）

セリフばっかりだ……、どうなんだろうこれ？
後またサブタイがｗ紅き翼のほうが良かった気がするなぁ。

前々回書き忘れてましたが、本作の鬼神兵は１８ｍ～かな？
大半が１８ｍくらいで機械獣と同じ大きさです。原作だとどれくらいなんだろう？

あしゅらの独特の言い方を表現するためにちょっと読みにくいかもしれません。

大分裂戦争＜撤退戦＞

バルトフェルトさんに別れを告げ私達は本隊のいるだろう場所に向けて飛行している。

フラガさんは鷹の獣人で魔法によってさらにスピードを上げていて、私はスクランブルダッシュを展開している。

「それでどうするんだ？本隊のほうは俺が説得するにしても、撤退が始まるまであいつ等を抑えてないといけないぜ。お前一人で大丈夫か？」

「さすがに1人じゃ無理だから機械獣も中でもとくに強力なもの2体を出すわ」

「ふむ、あいつらは4人だったか5人だったかのはずだし、それなら時間稼ぎなら何とかなるか？」

「ええ、フラガさんはその間に撤退の説得をお願い。もしかしたらこっちでも停戦できるかもしれないし」

「ああ、任せてくれ」

「そろそろ見えてくる頃のはずだけど。……あれね」

「だな。とんでもないな紅き翼って奴らは、ここからでも魔法が見えるぜ」

「フラガさんは先行して撤退要請を、私は機械獣を呼び出してから

彼らに攻撃をかけるわ」

「分かった気をつけろよ！」

「あなたもね！」

フラガさんが発見されるのを避けるため低空に下りていくのを見送りつつ呼び出す機械獣を考えた。

（あの2体は呼び出したことはないけど十分強力だろうから時間稼ぎなら何とかなるはずね。でも、妖機械獣やラインＸ１が使えないのはこんなときには痛いわね）

妖機械獣はミケーネのオリジナル品、ラインＸ１はシュトロハイム博士の作品だからヘルの機械獣が呼び出せるこのアーティファクトだと呼び出せ仕様らしい。

ミネルバＸは呼び出せてもよさそうだがどうも無理なようだ。

（できないことを考えてもきりがないわね）

「参陣せよ！ガラダブラＭｋ０１！アシュラ！」

光と共に出現してきた機械獣を確認してしばらくして。私は驚きに包まれた……。

（ｓｉｄｅナギ）

よぉ！俺ナギ・スプリングフィールドってんだ！！誰に言ってんのかわからねぇが、言っといたほうがよさそうなんでな。

今俺たちはアルギュレーの辺境から連合の中央に戻るところだ。辺境に追いやったくせに戦況がやばいってんで呼び戻しらしいってアルの奴が言ってたな。

で、その途中で帝国の大軍を見つけたんで、そいつ等に攻撃をかけてるところだ！

「しっかし、こいつ等なんでこんな所に軍を派遣してるんだ？」

「おそらくこの付近の中心都市であるニャンマド攻略をするためでしょう」

「オスティアも2度目の侵攻があったみたいだからその陽動も兼ねてるんだろう」

「んなこたぁ、終わってから考えればいいだろ。今はこいつらを蹴散らそうぜ」

「だな！詠春もアルも気合入れろよ！」

「お主等はもう少し考えたほうがいいぞ」

じゃあ、もう一発デカイのいきますか！

「百重千重と重なりて…」

俺が千の雷を放とうと詠唱に入ったときに……あいつが現れた。

―サンダーブレーク！―

規模で言えば千の雷のほうが上だがパワーだけならためを張れそうな強烈な電撃が俺たちの間に撃ち込まれた。

「だれだ！」

その電撃（サンダーブレークだったか？）が放たれたほうを見れば。巨大な2体の巨人を従えたあいつがそこにいた。

「軍のほうには手出しさせないわよ！」

（ｓｉｄｅマミ）

ふぅ、何か大きな魔法を放とうとしてたけど何とかこっちに注意を向けられたわね。

紅き翼の人達を見ながらどうやって軍に手を出させないか考えて

いると。

「お！お前マミじゃねぇか。久しぶりだな！」

「え？ラカンさん！？あれ、あなたって帝国にいたんじゃ？」

この時期からもうメンバーに入ってたんだ。

「何だよラカン知り合いか？」

「おお、何年か前にな。いやぁ、こいつらの始末依頼されたんだが気に入ってな！今は一緒にいるんだよ」

「気に入ったって……、でもそれなら都合はいいかな？今軍のほうでは撤退の説得中でそれが成功したら手を引いてくれませんか？こっちに向かっていた傭兵隊のほうもすでに撤退の準備に入っていると思うので」

「ん～、どうするナギ？俺は別にいいと思うが」

「そうですね、彼らに攻撃したのも街を攻撃しようとしていたからですし」

「それが撤退するというなら攻撃する理由はないか……」

「じゃな、どうするナギ？紅き翼のリーダーはお主なのじゃし」

彼らも街の防衛のために仕掛けたみたいだからいけそうか？

「そうだな……、なぁラカン」

「なんだ？」

「アイツって強ぇか？」

「そうだなぁ、始めて見た時はてんで駄目だったが今は結構いけるんじゃねぇか？」

……なんだか流れが怪しい方向に。

「そうか！それにアイツが弱くても後ろのアレは強そうだな」

「おそらくアレが今、帝国で話題の機械獣じゃないでしょうか？」

「あの鬼神兵の数倍は強いと噂の兵器か。解放しに来た街で逆に侵略者と勘違いされたりと有名じゃったな」

そんな事もあったわね。何でそれが連合に知られているのよ……。

「アレはその中でもとくに強力そうだな。…って、ナギまさか！」

「おう！おい！マミって言ったか？その条件いいぜ」

「そう良かった。じゃあ、「けどな！」え？なに？？」

嫌な予感がするわね。

「俺達と勝負しろ！」

「おう！お前がどれだけ強くなったか見てみたいからな」

「おいラカン、俺が先だぞ！お前は後ろの髑髏の方をやれよ」

「いいじゃねぇかよ、ケチくせぇな。まぁ、アレはあれで楽しめそうだな」

「やれやれ、こうなったら止まりませんね。マミさんでしたか？そちらの条件を呑む代わりにしばらく付き合ってもらえませんか？」

「すまん、この脳筋たちが…」

「詠春、諦めも肝心じゃぞ？」

……やっぱり。でも、彼らがあっちを攻撃しないならいいかな。最初から戦う予定だったのだし、被害がなくなっただけでも御の字かな。それに紅き翼って原作でもバグやチート級戦力の集団だったからそれと手合わせできると考えれば良いかもしれないわね。

それにいずれ、戦うハーデスはもっと強いんだろうし。終戦後に彼らと一緒に修行できればマジンガーの力も完全に発揮できるかも。

「分かったわ。戦うのはラカンさんと、え～とナギ君でいいの？そうなると機械獣は片方戻したほうが……」

「いや、そっちの顔が半分になってる方は詠春が戦う」

「おい！ナギ」

「いいじゃねぇかよ。それにお前も武者修行ってんでこっちに来たんだろ？それならアレと戦っても損はねぇぜ」

「確かにあんなものとは早々戦うことはないが…」

「いいのではないですか、向こうも了承してくれたようですし。といっても壊してしまっても大丈夫なのでしょうか？」

「大丈夫よ」

「のようじゃな」

「はぁ、でも確かにあれほどのものと戦える機会は早々無いか。マミさんよろしくお願いします」

「分かりました、こちらもよろしくお願いします。ガラダブラはラカンさんのほうをアシュラは詠春さんの方をお願い」

両機械獣は了承し私から離れていった。

（ｓｉｄｅナギ）

目の前にいるマミは剣を片手に持ち臨戦態勢に入っている。

「じゃあ、名乗りからいくか！俺はナギ・スプリングフィールド！最強の魔法使いだ！！」

「じゃあ、私も。偉大な勇者！マミ・トモエ！いくわよ」

「さぁ、来い！」

ラカンの話じゃ戦い方はてんで駄目だったらしいが、そのときでも力やパワーは凄まじいらしい。くく、楽しそうな相手だぜ。

（ｓｉｄｅラカン）

「ちぇ、ナギの奴楽しそうだなぁ。俺も戦いたいってのに」

前見たときよりも格段に動きが良くなっているマミを見て期待してたってのに。

「……待てよ。あいつも誘っちまえばいいのか。そうすれば機械獣やアイツとの勝負をいつでもできるんだし」

くくく、我ながら名案だぜ。後で実行しないとな！

「まぁ、今はお前との勝負だな。ガラダブラだったか？魔獣はいろいろ見てきたがお前はその中でも飛び切り凶悪で強烈だぜ」

「ガァァァァァァァァァァァァ！」

ラカンの言葉に反応するようにガラダブラは咆哮をあげ髑髏状の頭部は天を向き、２つある蛇状の頭部は激しく動き相手を威嚇した。

「じゃあ、いくか！」

俺は多数の剣を投擲しつつガラダブラに向かって突進した。

（ｓｉｄｅ詠春）

「なんというか、楽しそうだなあの二人は。さて私も始めるか」

それにしても変わった感じのものだな、こいつは。身体はロボットぽいとはいえ十分人間みたいだし、頭部形状なんて人間そのものなんだが。

それより一番気になるのは何で顔が左右で違うんだ?それもやたらリアルで男女で分かれているし。

「「ああ、待ちくたびれたぞ」」

「……え?喋った?」

え?喋ったいよな、今。機械獣って喋るのか?それともこいつだけがなのか??

「「我名は機械獣アシュラＰ１」」「我主マミ様の命により」「詠春とやら、手合わせ願おうか」

男性のほうが喋ったり女性だったりいっせいに喋ったりとまた妙な……。だが名乗られたからには名乗り返さないとな。

「神鳴流剣士　近衛詠春！いざ尋常に勝負！！」

「「ふふふ、ゆくぞ！」」

見た目は変だが油断はできない。こちらも全力でいかないとな。

「やれやれ、ナギのでたらめさは慣れたのですが、それと渡り合える人がこうもいるとは」

「ラカンもすごいが、あのマミも凄まじいものじゃな。技術ではまだナギが上じゃが」

「ええ、魔法をくらってもモノともしてませんね。繰り出す攻撃もラカンくらいはあるんじゃないでしょうか？」

「じゃな、おそらく身体能力ではあいつ等より遥かに上なんじゃろ」

「その身体能力が脅威ではあるんですけどね。あの技量であの破壊力は彼女もバグかチートの仲間なのでしょうか？」

「かも知れんな。ラカンのほうは…派手じゃなぁ」

「彼とあの大きさじゃしょうがないのでは？こちらはラカンが優勢

でしょうか」

「そのようじゃが、向こうもあまり効いている様子はないの。これはガラダブラじゃったか？がすごいのかラカンの奴がめちゃくちゃなのか」

「サイズ差が１５倍はあるでしょうからね。おそらくラカンでしょう。普通は戦うことすらできないサイズと能力差でしょうし」

「実際に詠春はかなり苦戦しておるの」

「ははははは、どうした！そんなものか！！」「それでは我主と対じする事すらできぬぞ。」「「死ねぇい！！」」

「く！やりにくい。さすがにキツイな、だがこれくらいで負けるものか！」

「向こうは１０倍がいいところじゃろうが、やはりサイズと装甲は厄介なようだな」

「あれらより格下でも普通の魔法使いの中級呪文を無力化してしまうようですからね。ましてあのアシュラは人のように考え行動するのですからさらに厄介でしょう」

「関節を狙っているが見抜かれているようじゃからな。確かにアレはやりにくいの」

「ですが、すぐに勝負が決まるほどのものではないですね」

「ああ、これはいつぞやのように長引くぞ」

その後、彼らは十数時間戦い（長いな！ｂｙ撤退の連絡に来たフラガ）、周辺一体を更地にしたところで（おいおいおいｂｙ見ていたｒｙ）

「そろそろ止めにしない？」

「何だよ。まだまだいけるぜ！」

「そうだぜ。やっとガラダブラから腕一本もぎ取ったってのによ」

「よくもぎ取れたな……」

「「ぬう、ガラダブラＭｋ０１が…、仇は討つぞ」」

「討たなくていいから！私は冗談抜きで死んでしまうぞ」

「確かにもう少ししていたい気もするけど、そろそろあなたたちも目的地に向かったほうがいいんじゃない？」

「そうですね。元々そちらが本来の目的でしたし、帝国軍も撤退したとあってはいい加減向かったほうがいいでしょう」

「んだよぉ～。どうせ行ったところでつまんねぇんだし」

「（ここはさっきの事切り出すのがよさそうだな！）じゃあ、マミお前も俺達の仲間になれ！」

「お！ジャックいい案だなそれ！そうだマミお前も俺の紅き翼に入れよ」

「え……、それはちょっと」

「そうだぞ。皆ラカンのように無茶苦茶じゃないんだから…」

「じゃあ、何か連絡取れるものよこせ。それならいつでも手合わせができる！」

「それならかまわないわ。私もちょうどそうしたかったし」

皆と連絡先を交換した後また会う約束をして分かれた。

「さてあなたたちを戻しましょうか」

「「それなのですがマミ様。」」

「そうしたの？」

「「私を副官として側につけて貰えないでしょうか？」」

「え！でもあなたたちは戻さないと修復とかができないし。何よりそのサイズじゃ」

「それは問題ありません」「私はサイズを人間大にすることもできます」「「また、戦闘をしなければ向こうに戻るほどの磨耗をすることもないので大丈夫かと」」

「そう、少し考えさせて。どちらにせよ今日の戦闘の傷の修復のために1回は戻らないといけないのだから」

「「了解しました。では、必要になりましたら。このアシュラをどうぞお呼びください」」

「ええ、その時はよろしくね」

そういって、2体を戻した。でも、彼（彼女？）を呼んだだときも驚いたけどまさか副官にって。

でも、参加してから各地を転々としているし。固定の副官を持って良いかもしれないわね。

「ま、明日になってから考えましょう。今は皆のところに戻らないとね」

その後、撤退した彼らに合流拠点へと帰還した。

オスティア奪還作戦はやっぱりというか失敗したらしい。いくつかの部隊は防衛のため残ることになったが私たちや正規軍の多くが帝都へと一時帰還していった。

どことも知れぬ闇の中蠢く影がなにやら話し合っていた。

「どうやら無事失敗したらしいな」

「ええ、しかし連合も同じくらい疲弊してしまったのは少々誤算でしたね」

「奴らがもう少し早くつくと思ったのだがな？」

「途中で足止めをくらったようだ」

「しかし、そちらの帝国の損害も少なかったようだが」

「アレが思いのほか使えたようだ」

「ふむ。しかし、帝国の力をそぐつもりでいたが現状では代わり映えなしか」

「そうなると、アレをやりますか」

「できるのか？失敗すれば戦争は終わってしまうぞ」

「問題ありません、奴らも帰還しました。後は帝国の奴を離しておけば、帝国の力は大幅に落ちるでしょう」

「うまくいけば逆侵攻も可能か。最悪奴が感ずいて向かったとしても」

「そう多くの兵は救えないでしょう。救えても当分戦線復帰は難しいかと」

「講和派の連中は納得するのか？」

「そのための理由と資料はすでに。会談の準備も進んでいるといえば、問題はないでしょう」

「連合はどうだ。あまりにも不甲斐ないと成功してしまいますぞ」

「現在戦力を集結中です。帝国兵はあそこから一歩も出られないでしょう」

「さらにアヤツ等もいる…か。ふむ、問題なさそうだな」

「他に何かあるか？」

「以前から嗅ぎ回っていた者なのですが」

「何かあったのか？」

「どうやら奴らには行き着いたようです」

「ほう、なかなか優秀なようだな」

「ええ、そうですね。しかし奴らに食いついたならある意味都合が良いのでは？」

「そうじゃな。奴らの情報をそれなりに流してやれば、それに気づ

いた奴らが勝手に始末してくれるじゃろう」

「そうですね。その案でいきましょう」

議題にも一息ついたのだろう。雑談に入った。

「しかし厄介なものだな。これだけあおってもあまり進展しないというのは」

「向こうの人たちがうらやましいですね」

「ああ、向こうは多少あおって戦争に突入すればそれで事足りる」

「こちら側からの妨害も多少あるようですが？」

「前はそれに煮え湯を飲まされたようだが、今はそんなもので止まるような状況じゃないそうだ」

「転がりだした石は止まらない、ですか」

「まさにそのとおりだな」

「最も行き過ぎて今では起こすこと自体難しくなってしまったらしいがな」

「なんともまぁ」

「今はターゲットを変えているそうじゃな？」

「でしょうね。不満を持っているものはまだまだ多くいるでしょうし」

「かつて程ではないが、より多くの混乱か」

「こちらは不満は多いでしょうが、ある意味で安定していますからね」

「ああ、小競り合いが多いが向こうと比べるとな」

「昔は向こうのほうが大変だったようですね」

「こちらの小競り合いの規模を小さくしたものだからな」

「まさにスポーツですか」

雑談も一段落したとき一人が

「あの方の様子はどうです？」

「お目覚めになる回数は増えてはきたがまだだな」

「何が足りないのでしょう」

「器が問題なのでしょうか？」

「馬鹿なアレが今の器なのだぞ」

「そうなると一体」

「おそらく力そのものでは？」

「“力”？」

「ああ、この世界の成り立ちは知っていよう」

「なるほど、そうなるとそちらのほうも」

「ああ、準備しないとな」

「それにそうすれば世界は」

「混沌と憎悪に…、アチラも多数集まりますし。いい事だらけですね」

「ふむ、我々は急ぎすぎていたのかもしれないな」

「仕方ないでしょう。あの御方が目覚め始めたと聞けば誰だって気がつかぬ内にそうなります」

「ええ、今からしっかりと先を見据えて動けばいいのじゃからな」

「では、私達は」

「ああ、そちらは任せた。あれらにもそれらしいことを吹き込んで

おけ」

「ええ、わかっていますよ。全ては」

「「「「「我らが主！この世の真の所有者！■■■■様のために！！」」」」」

影は順次消えていき再び闇が多いつくした。

大分裂戦争＜撤退戦＞（後書き）

えぇ～と、あいも変わらず戦闘描写ないです……。でも、最終決戦はきっちり書きます！マミの相手と結末は決めてあるのでそこはしっかりしたいですし。

アシュラどうでしょう？思いついて書いてみたけど……。あまりにも不評だったら今までどうりかな。Ｄｒ．ヘル一味は結構好きなんですよね。

最強機械獣はこの２体かな。他にもいるだろうけどとりあえずでｗもう１体いるけど、あれは使いどころが難しすぎる。ＤＶＤで見たけどかなりの制限つけないとちょっと……。

次回予告

「今大戦で最大規模の戦闘。帝国の乾坤一擲の大作戦。迎え撃つ連合、そのとき彼女は」

次回　真ネギま☆マギカＺ

「大分裂戦争＜グレートブリッジ＞」

サブタイに偽りなし！……のはずｗ

大分裂戦争＜グレート・ブリッジ1＞（前書き）

気がついたらＰＶ６０００ユニーク１０００突破！
ありがとうございます＞＜
やっとグレート・ブリッジまで来ました！
１話で終わるかと思ったら長くなりそうなので分けます。

大分裂戦争＜グレート・ブリッジ1＞

紅き翼との戦闘後撤退した先で待機すること数週間後、帝都からの使者が。

「先日の作戦において、本隊の撤退を援護その損害を軽微に抑えたことまた連合の精鋭集団＜紅き翼＞押し止めていた功績と実力を認め、我々は貴君を王族付きの護衛官とする。よってすみやかに帝都に帰還せよ。よくやった、栄転だな」

「了解しました。皆に挨拶をした後に向かいます」

「遅れないようにな」

その後フラガさんや隊の皆に挨拶をして回っていると

「まぁ、アレだけの事ができるんだからな。けど寂しくなっちまうな」

「マミさんは数少ない女性ですからね」

「まったくだ、折角再会したってのにもうお別れとはね」

「ああ、まったくだ」

そうそう、ラリーさんやチョッパーとも再会したの。

「ええ、残念ね。でも、傭兵部隊がこんなに集まるなんて珍しいわね」

傭兵がここまで集まることはあまりない、基本的に予備兵力や正規軍の通常編成＋αの戦力が欲しいときに使われるのが傭兵なのだから。

「前回の戦いで正規軍がこっぴどくやられたからその代りじゃないか？」

「だろうな、戦線もいくらか下げたようだし。本国から増援までの繋ぎだろう」

「そんなところかしらね。じゃあ、遅れるとまずそうだからもういくわ。何かあったら言ってね。すぐに戻ってくるから」

「おいおい、それじゃあ護衛官どころか、帝国軍からも追い出されかねんぞ」

「いいわよ。元々戦功の為に参加したんじゃないんだから。それより、親しい人達が傷つかないようにすることがもっと大事よ」

「俺たちゃ、傭兵だぜ？」

「それでもよ」

「じゃあ、やばくなったら作戦中でも遠慮なく呼び出そうかね」

「ふふ、すぐに駆けつけてあげるわね」

そう笑いあって、まずそんな事態にならないだろう約束をして私たちは別れ、私は船で帝都へと向かった。

「「マミ様あまり嬉しくないようですね」」

「ええ、戦いたいって分けじゃないけど。護衛官になったとしても戦争の終結には役に立てそうもないからね」

宮廷作法なんてものもまったく知らないのだから。

「なるほど、マミ様は親しい人が傷つかないようにと」「戦争が一刻も早く終わることを願って参加されたのでしたね」

「ええ、でも護衛官じゃ周りの皆を守ることさえできないからね」

「なるほど、しかしそれならば」「王族の近くに居ることになるわけですから」「「マミ様自らが皆に停戦を訴えてみてはどうでしょう？」」

「なるほどね。そんな考え方もあるわね」

確かに王族付きの護衛官になるのだから人脈作りにはちょうどいいかもしれない。それに護衛官なら和平交渉にも付いていけるのだから妨害も防げるかもしれない。

「「このあしゅらも微力ながらお手伝いいたします」」

「ええ、いろいろ相談に乗ってね」

一人旅ってのも寂しいからあしゅらを呼び出して話し相手になってもらっている。ちなみに彼（って事にしておく）の服装はおなじみのアレである。

でもさっきから、よく兵員輸送船とすれ違うわね。前線への補充にしてもこの数は。

「アレは……」

「「あの紋章は帝国の精鋭部隊のものでしたかな？」」「確かに妙ですね」「あのような部隊は早々動かすものではないはずなのですが」

しばらくして部隊とすれ違うことはなくなり、数こそ多いがただの補充かまた大規模作戦に向けてなのかと思いそのことは頭の片隅に置いた。

数日後、無事帝都に到着し王城に向かおうとしたとき何故あれだけの兵員輸送船が精鋭部隊が傭兵たちが集められているのか、その理由がわかった。

＜昨日！我々帝国は連合の喉元にあるグレート・ブリッジへ帝国が誇る大規模長距離転送魔法によって精鋭軍団を送り奇襲・占領した！！これによりもはや連合は風前の灯である！我々の勝利の日、そして聖地オスティアの奪還は近い！！＞

「何ですって！」

そんな、勝利どころか終戦がより遠退きかねない。それどころか帝国が敗北する可能性だって。

「「アヤツ等は地図も読めぬのか？」」「グレート・ブリッジを占領したとて補給が続くまい」「連合の喉元、メガロの至近ではあるが」

「ええ、連合もそこまでヤワではないでしょうし、首都に近いって事はそれだけ増援が送り易い」

「されど、帝国からグレート・ブリッジは遥かかなた」「しかも途中にはオスティアに居る連合の防衛軍もいる」「「海を使おうにも制海権はアチラのほうが優勢。超長距離転送など頻繁におこなえるものでもない、このままでは」」

補給が途絶えた軍の末路は古今東西皆同じだ。

「グレート・ブリッジ攻略軍は最悪消滅、そうじゃなくても大半の戦力を失うことになるわ！」

「「侵攻に使ったものも転送魔法というのもまずいですね」」「彼らに帰りの足はない」「半分どころか2，3割が戻ってくれば恩の字か……」

本当にこの作戦を考えた人は何をもって成功すると考えたんだ！正規軍がこの規模なら傭兵も！

「ラリーさん達ももしかして！」

ここまで大規模ならあそこに集結していた用兵の数も合点がいく。

私は慌ててゼウスからもらったあの紙を取り出し繋げてみた。これ、声さえも届けられる上に距離は関係ないとかなり便利だったので重宝していたが。

しばらくして、応答があった。

＜マミか？＞

「ええ！今帝都に居るのそれで」

＜って事はもう知ってるな。今俺達はグレート・ブリッジだ＞

「やっぱり」

やっぱり、あそこの傭兵たちも送られていたのね。

＜今はまだ連合は攻めてきていないが時間の問題だな。さっきから偵察らしきものがちらほら見えている＞

「持ちこたえられそう？」

＜無理だな。もって１週間てとこだ。それだってだいぶ甘い見積もりだからな。何せ長距離転送で奇襲占領って作戦なせいで鬼神兵や艦艇はほとんどないからな。せいぜい１８ｍクラスが十数体じゃね

ぇか？＞

いくら連合が帝国より魔法技術で遅れているといってもあまりにも少なすぎる。それに１８ｍ級じゃ艦艇からの砲撃をくらったらひとたまりもない。

「要塞のシステムは？」

＜解析しているがどうだろうな。そう簡単には使えねぇだろ、連合だって馬鹿じゃねぇ。＞

やっぱりそう簡単にはいかないか。

＜それに悪いニュースも入ってる＞

「まだあるの？」

＜ああ、とびきり悪いものがね。紅き翼が前線に復帰したみたいだ＞

「え！でも数日前は何も」

＜それはわからねぇ。だが確実に居るらしい。他の場所から転送されてきた連中が話していたからな＞

「そんな彼らが居たんじゃ」

でもなんで、彼らが居るって事が知られていなかったのだろう？

＜下手すればもって１日だな。あとは必死に逃げるか玉砕するしかねぇよ＞

「そんな……。今から私も！」

＜やめとけ、お前一人が来たところでどうこうなるもんじゃねぇ。それよか、お偉いさんがもう二度とこんな事しねぇように見張っててくれ＞

「でも！」

＜無理だよ。どう頑張ったところでこれだけの人員を運ぶための船を数日中にこっちに寄越すなんざ。しかもそれが無事に着くかどうかも怪しいしな＞

「……」

低速とはいえ帝都とあの拠点まで数日も掛かるのだ。軍の高速船でもグレート・ブリッジまでになるともっと掛かるだろうそれに問題は他にもある。

＜だから頼む。もっと出世して、上を目指してこんな戦争をおこさねぇように……＞

「……それがラリーさんの夢？」

＜ああ、この戦争に参加したのだってお前と似たようなものだからな。じゃあ、そろそろ時間なんでな。相棒も待っててくれている。なぁに、今の相棒もお前に劣らずすげぇ奴だし俺もすげぇからな。死にはしないさ。じゃ、あばよ＞

それっきり通信は切れた、他の人にも連絡はしてみたが皆同じよ

うなことを言われてしまった。

「そんな、また会うって約束したのに……」

「「マミ様……」」「今は何ができるか考えましょう」「落ち込んでいても何も解決しません」

「ええ、そうね。でもどうしましょう……。諦めるなんて論外だし」

「軍高官を説得しようにもあてもないですからね」「また、彼が言ったとおり救出しようにも現在帝国が保有している輸送船では危険が大きい」「「距離と時間だけならば来るまでにすれ違ったあれらが向かえば何とかなるでしょうが」」

現在の帝国の勢力圏とグレート・ブリッジも間には連合の部隊も居るだろうし何よりグレート・ブリッジ周辺は完全に連合の勢力範囲だ。護衛艦があればいいけど……。

「護衛艦もとなると集結する頃には戦いは終わっている可能性が高いわね」

手詰まりね……。まって、何で帝国軍だけを使おうと考えてるの。

「ねぇ、あしゅら」

何も帝国軍の機材だけでする必要はなかった。ちょうど私には護

衛機も輸送機もある！

「「現地の指揮官に話をつけてぎりぎりまで接近するにしても…、何でしょうマミ様？」」

「グールいえ、ブードやサルードも動員すれば何名まで救える？足りないなら飛行機械獣を護衛につけて輸送船を派遣するとか」

各要塞シリーズも積めば1個師団は入るでしょうしサルードなら2個か3個、それにグールの速度ならピストン輸送もしてもいい。飛行機械獣もそれなりの数は居る。

「「そうですな、グールやブードを使えば2，3割はいけましょうか？」」「輸送船は現地で交渉してみないことにはなんとも言えませんが」「敵地に向かうわけですからあまり多くの船は使えないでしょう」

「それでも頑張ればかなりの数の人達を救えるわね」

「「その可能性はありますが、まさか！」」

「ええ、戻るわよ」

「「しかしそれでは。マミ様が。」」

「ここであの人達が死ぬかもしれないのを黙ってみている事の方が私には問題よ！例え帝国軍から追い出されてもやれる事だってあるわ」

今動かなかったら私は一生後悔する事になる。それにあのゼウス

ならこんなとき友のために動かない人なんて好ましく思わないでしょうしね。

「「わかりました。このあしゅらマミ様のためならどこまでも着いていきます」」

「ありがとう。じゃあ、ぐずぐずしてられないわね。来なさいグール！」

すぐさまグールに乗り最大速で来た道を戻っていった。

「お願いします。輸送船を1隻でもいいのです。救出に向かわせてください！」

グールで戻ったため数時間で元の場所へ戻った私は司令部に直行し司令官の人に輸送船の要請をしている。

「しかし、君もわかっているのだろう。それがどれだけ危険なの事なのか。私もこの作戦に思うところがないわけではないが。だからといって部下をむやみに死地へ行かせるわけにはいかん」

「護衛部隊はやはり」

「単なる領域内での輸送任務だったからな。精鋭師団も輸送船だけできている」

「護衛ならあてがあります。救出船もありますが1隻でも多く欲しいのです」

「しかし……」

やっぱり、あまりにも無謀すぎるため。相手の返事は良くない、でも諦めるわけにはいかない。再度口を開こうとしたとき1人の男性が入ってきた。

「失礼します」

「あなたは？」

「私はここまで帝都の精鋭達を運んできたものだ。司令官殿、話だけでも聞いてみては？できるできないはそれから判断しても」

「しかし、輸送船を出すとなると」

「私達は喜んで行こう。他の者は志願制にして腕のほうも私たちが確かめます。航路も迂回すれば危険は減らせるでしょう。連合の反抗も明日か明後日には始まります。ならば今すぐにでも決めなければ手遅れになってしまいます」

「……わかった話を聞こう。しかし、無理と判断したときは出させないぞ。無論君もな」

「ありがとうございます！」

集まってもらった人達に考えた作戦を説明した。

内容はいたってシンプルでグレート・ブリッジの連合側の地点は私が単身赴きグール以下要塞を展開、機械獣と私で足止めをしているうちに収容撤退。

オスティア側は飛行機械獣の護衛のもと、輸送船団が海上を迂回しながら接近同じく収容後、離脱となる。

この内容に輸送船の艦長は海からアプローチすれば連合の艦隊に捕らえられる可能性があるから最終段階では陸を進むと提案し、参謀の人は肝心の機械獣の力を見たいといったのでジェノサイダーF9などを見せて納得してもらった。

他にも残っている部隊で陽動をかけるなど打合せをし、志願者の募集・選別をおこない24時間後に作戦を発動することが決定した。

「我侭を聞いていただきありがとうございます」

「何かまわんよ。私も助けることができるなら助けたいからね。まだまだ、博打的要素はあるが最初のような絶望的なものではなくなったからね。輸送船の船長たちも思ったより多く集まったのだし」

あの艦長以外にもこの作戦が危険だと気が付いた人達は救出作戦の参加を希望してくれたおかげでより多くの人員を輸送できそうだ。

「それでも、危険なことに付き合わせてしまいますね」

「我々はそれが本分だ。それに彼らは志願したのだ、あまり自分のせいなどと言うと彼らに失礼だ」

「すいません」

確かにそうね。彼らも自分で決めているんですから。これ以上の心配は彼らの決意を馬鹿にすることになるわね。

「それに危険度で言えば君のほうが遥かに危険だ。最強の2体を輸送船団に付けさらに多くの機械獣をだすのだ。君のほうは君自身が囮となり防波堤となるのだろう？」

「ええ、それが一番成功率が高いのですから」

移動速度と陸戦機械獣の召喚という仕事もあって私は一足先に戦場につくことになる。付き次第グールなどの搭乗をしてもらうことになるが輸送船団がより安全になるように私は前面に出て敵を引き付ける必要がある。

「しかし、いくら傭兵だからといって」

「大丈夫です。私はあの紅き翼と戦えるのですよ。それにもう決めたんですから。覚悟はありますよ」

「ふふ、そうだな。確かにこれでは君に失礼か。私はつてを頼って

噂の真実を確かめよう。もし本当ならこの作戦にも意味が出てくる」

「はい、お願いします」

もし本当に交渉がおこなわれているなら一時的にでも攻勢を抑えれば終戦が見えてくる。

「なら、健闘を祈る」

「はい」

―２４時間後―

作戦会議から２４時間たち。すべての準備が整い、輸送艦の周りには飛行機械獣がたたずんでいる。グールもすでに準備を終えていつでも出撃できる。

しかし、すでに連合が奪還に向けて大規模攻撃をかけており一刻を争う事態になっている。

「じゃあ、あしゅら。飛行機械獣の指揮は任せたわ」

「「お任せください、このあしゅらの命に代えても船団護衛を果たしてみせます」」

「ええ、頼りにしているわ。それじゃあ、艦長さんまた会いましょう。仲間たちと一緒に！」

「ああ、また皆で宴を開けるよう連れ帰ってこよう！」

私達はそれぞれの機に乗り込み見送りのならグレート・ブリッジに向けて飛び立っていった。

「進路グレート・ブリッジ！飛行要塞グール高度1万m、最大巡航速度へ！」

皆、なんとしても助け出すわ！

（side　船団）

「やはり心配ですか？主のことが」

「「ふん、あのお方は私が心配するほど柔ではない。むしろその後が心配だ」」

「王族付きの護衛官を蹴ってきたのですからね」

「「まぁ、我主はそのことは気にしていないようだがな。それで、進路はどうするのだ？」」

「いったん海上に出た後、グレート・ブリッジに近づいたらそこか

らは陸沿いで行く。それなら発見の可能性は少なくなるだろうが」

「「グレート・ブリッジ周辺で連合の部隊と鉢合わせになる可能性が高いか」」

「ああ、そこは君たちに任せるよ。時間は速度と距離のせいで2日ほど掛かるが機械獣たちは大丈夫なのか？」

「「進むだけなら問題はない。だが最悪は帰りの護衛が居なくなる事になるかもしれないがな」」

「帰りは何も考えずに飛ばせばいいだけだから心配要らない。それにその頃にはうるさいハエは全部片付けてくれるんだろ？」

「「無論だ」」

これから2日連合に見つからないように彼らは低空を迂回しつつ進んでいった。

（ｓｉｄｅ　グレート・ブリッジ帝国軍）

時は少し戻りグレート・ブリッジの帝国陣地。

「もうそろそろかな」

「だろうなここはメガロに近いからな敵も必死だろう」

「だが敵を撃退すれば戦争終了。で、俺達は英雄だ」

「そうだな。そのためにはなんとしても生き残るぞ！」

「「「おう！」」」

陣地の各所では同じように互いを励ましあった。これから必死で奪還のために攻めてくるであろうそのときに受ける圧倒的恐怖に打ち勝つために。

ここで踏ん張れば戦争が終わると信じて。傭兵達はこの作戦の無謀さに呆れているが、正規軍の将兵たちはここで自分たちが頑張ることが帝国の勝利につながると信じていた。

噂ではここを短期間でも占領すれば現在進められているという交渉にめどが付くとあったからそう信じているのだ。

「あっちは張り切っているな」

「だな、どうする逃げるか？」

「どこにだよ？帝国には戻れねぇし、連合に逃げてもどうなることか」

「だな、結局こっちで戦うしかないんだよ。お前だって自分の手で故郷を焼きたくはないだろ？」

「当たり前だ」

傭兵達は正規軍ほど希望を持っては居ないがこの大戦が従来の戦争と違って逃げたところで助かるものではないと知っているので自分たちの故郷がある帝国で戦うしかないと決めていた。

「それに噂が本当だってんなら、踏ん張るしかないだろ？」

「他にいい案もないからな」

「ああ」

「じゃあ、勝って帰ってまた宴を開くか！」

「「「ああ！」」」

正規兵たちとは違った。しかし、大本は同じ決意を胸に彼らも連合の攻撃を待ち構えた。

それから数時間後。

「来たか」

双眼鏡を覗いていた、指揮官の目に水平線を埋め尽くさんばかり

の連合軍艦艇が映った。

「オスティア方面およびメガロ方面からも部隊が侵攻中のようです」

「要塞の防衛システムは？」

「現在６０％です。今も進めていますがおそらくこれが限界かと」

占領からいままで必死に要塞の迎撃システムを掌握・復旧するために作業をしていたが、まだ大半の設備が使用できない状態だった。

「技術仕官以外は戦列に復帰させよ。なんとしても耐え抜くぞ！」

これ以上システムの復旧に人員を割いても良い結果は得られないだろうと、技術仕官以外は前線へと戻す決断を下した。

「は！」

「マイクをくれ」

「どうぞ」

「うむ

＜諸君！ついに連合がここを奪還するために戦力を差し向けてきた！これからはつらい日々が続くだろう。だが！この攻勢を耐え切ったときこそが我々の勝利だ！そしてその勝利は終戦という形で大いなる勝利をもたらすだろう！諸君、なんとしても生き延びて皆で勝利を味わおう！＞

ふぅ、どうだったかな？」

「すばらしいです。皆もより奮起しています。後は連合の攻勢を抑えれば、我々に有利な条件で戦争を終わらせられます」

「そうか、終戦か…。いや、ならばなんとしても奴らを跳ね除け生き残らなければな」

彼もまた決意を胸に連合の艦隊をみすえた。

「ええ」

「将軍！精霊砲の発射準備完了しました！」

「よし、まずは奴らのど真ん中に打ち込んでやれ！」

「了解！第一目標　連合軍艦隊弩級戦艦！精霊砲圧力上昇、臨界まで残り１０秒！」

「発射スイッチです。この戦闘の狼煙を！」

「うむ」

４…３…２…１

「精霊砲発射！」

…０

グレート・ブリッジより放たれた一筋の光。今大戦最大の激戦地、

連合名「グレート・ブリッジ奪還作戦」の幕が切って落とされた。

大分裂戦争＜グレート・ブリッジ1＞（後書き）

グレート・ブリッジ戦まだ導入だけど長くなってしまったので、分けることに。下手したらもう2話いきかねないなぁw

わりと否定的な人が多いように書いてしまいましたがそれなりに楽観視している人もいます。

ただ、原作を見直していると載っている帝国の勢力範囲からグレート・ブリッジってかなり遠いんですよね。それより増えているなら早々逆侵攻なんてことにはならないでしょうし…。って事で何か否定的な人が多いようなことになってしまいました。

時系列とかも色々弄くる事になりそう。（タカミチ少年とガトウも合流させちまおうかな・・・）

次回からは機械獣を大暴れさせる予定です。

本文中の師団とかは目安程度です。大体これくらいかなって感じで。ちなみに師団は1万人くらいです。

大分裂戦争＜グレート・ブリッジ２＞（前書き）

グレートブリッジ編２です
前回の倍近くとなってしまいました……。

大分裂戦争＜グレート・ブリッジ２＞

（ｓｉｄｅ　マミ）

「グレート・ブリッジまであとどれくらい？」

「残り３時間ほどかと」

飛び立ってもう数時間くらいかしら。連合との接触を避けるコースを飛んだから時間が掛かってしまったわね。これだと、ピストン輸送をしても１日２回が限界か。戦況にもよるけど、現地部隊もいつまで持つか…、そうなると１０回もする事はできないでしょうね。

「マミ様、通信です」

「わかったわ。繋げて」

ちなみに要塞シリーズの兵員はなぜか鉄仮面軍団だった。やっぱり鉄十字軍団だと問題があるのかしら？

＜マミ君か？今どのあたりだ＞

「もう３時間ほどで到着します」

＜戦況はまだ安定しているとはいえいつ崩れるかわからん。撃破された鬼神兵もいるようだ＞

空挺部隊だけを最前線に送ったようなものだから当然か。

＜また、例の噂なのだが＞

「どうでした？」

＜どうやらまったくのでたらめらしい。友人に聞いてみたところ、彼も会談を成功させるためにこの作戦を了承したらしいのだがな。そのような話はまったくもってなかったそうだ＞

「そんな、そんな嘘をついてまでおこなうなんて」

＜まったくだ、その者たちは処分したらしいが、それでどうなるものではない＞

そこまでしてだなんで。前から思っていたけど、この戦争は違和感ばかりだ。本格的に調査したほうがいいのかも。

＜ともかく救出作戦は続行だ。会談が無い以上、このままあそこに留まってもしょうがない。１人でも多くの者を救ってくれ！＞

違和感の事はとりあえず置いてきましょう。今は目の前の作戦に集中しないと！

「わかってます。一人でも多く連れて返ります！」

＜頼む！＞

お願い間に合って！

（ｓｉｄｅ　帝国軍）

今やグレート・ブリッジは向こうの世界の戦争と間違えるほどの濃密な砲火と血で覆われたいた。

最初帝国軍は連合は波状攻撃をかけてくるだろうと予想していたが、本拠地至近に陣取られた連合は必死に各地から戦力を集め絶え間ない攻撃をかけてきた。

インターバルも何もないその攻撃に元々物資や兵力に不安がある帝国は徐々に押されだし、鬼神兵も一機また一機と失い当初の予定を上回る勢いで消耗していった。

「っち！まさか本当に1、2日しかもちそうに無いとわな！！」

「いっててもしょうがないだろ。こちらの損害は？」

「お前は冷静だな。かなりヤバイな向こうの正規軍もかなり削られているようだし。陸からの侵攻軍が雪崩れ込むのは時間の問題だ」

「こんなときだからだ。……そうか、負傷したものをオスティア側に向かわせて再編成しよう」

「少しでも逃げられるようにか？」

ホント冷静だなこいつは。だがもう負けはほぼ決定しているか。なら生き残る算段をつけないとな！

「それにお前が話してた彼女が来るかもしれないだろ？なら、少しでも長く踏ん張らないとあ」

「アイツか……、確かに来そうではあるがアイツ1人じゃ」

アイツがいろいろ呼び出せることは知ってはいるがこんな数を運ぶなんて無理だ。

「何も彼女だけともかぎらんだろ。それにどうやらきたらしいな」

「なに？」

サイファーが何を捕らえたかすぐ知ることになった。俺達の向こう、グレート・ブリッジの連合側の端で爆炎が上がった。その上空には銀色の光るものがあれは……。

「あれは確か、飛行要塞グール！」

「だろう？さぁ、倒れるわけにはいかなくなったぞ！」

だな、あいつが来たんだ少しは希望が見えたかもな。しっかし、馬鹿やっちまってよ。どうなってもしらねぇぞ！

グールが目撃される少し前、彼女は帝国軍の指揮官と撤退について話し合っていた。

＜作戦内容は以上です。私が連合を少しでも抑えるのでその隙に撤退を＞

「しかし、それほどの戦力と輸送力があるのならば。このまま占領維持できるのではないのか？貴様も速やかに戦列に加わり帝国の勝利に貢献せよ！」

こいつは本当に参謀なのか！先ほどの説明を聞いてもまだこんなたわごとを抜かすとは！

＜ですから、全機械獣をもってしても戦線の一時的な維持ならともかく恒久的に占領することは不可能です！一度戻したものは２４時間復帰はできなくローテーション組むなんてことをしたら戦力が足りません。グール１機では補給線の維持など不可能ですし。何より連合が封鎖作戦をおこなえばより困難になります＞

彼女の保有する輸送機ではグールがもっとも速く現在の状況に適しているが１機ではとても足りん、他の２機は輸送量こそ多いが今の状況では手遅れになりかねんか。それに…

「それ以前に紅き翼もいる……か」

彼らが暴れられたら陣形の意味さえ失いかねん。

＜はい、彼らに暴れられては帝国は持ちません＞

「そのようなもの貴様が！」

「そいつを摘み出せ！ここにいても邪魔だ！！」

まともな意見を言わず先ほどから邪魔ばかりを！無能は味方ほど怖いものは無いとはよく言ったものだ！！

「な！何を将軍ちまｙ「さぁ、こっちです。」貴様！放せ！！私を誰だと思って！……！」

邪魔者を憲兵が追い出してやっと静かになったことで息を吐き彼女と向き合った。

「すまないな。作戦のほうは了解した、負傷者を優先的に撤退させるとしよう。陣形もオスティア寄りに変えよう」

少しでも帝国に近い地へ後から来る船団に速やかに乗れるようにしないとな。

＜ありがとうございます。私は連合側に爆撃後にグール以下輸送船は中央に配置して連合の足止めに入ります＞

ならば我々がする事は１つだな。

「ありがとう。聞いたか皆のもの今より我々は撤退に入る！より多くの兵を帝国の地に送り返すことが作戦の成功となる！」

「了解しました！各指揮官に伝達します」

「要塞の防衛システムの掌握も進めさせます！」

そういって、皆が自分ができることをするために走っていった。

「すまないな、君には多くの負担をかけてしまう」

＜いえ、自分がやりたいことですらか。＞

「そうか。では、健闘を祈る！」

しばらくの後に彼女は作戦通りグールは爆撃による足止め後グレート・ブリッジに着陸した。

（さぁ、これからが正念場だ！負け戦だろうがこのままで終わらせるものか！！）

（ｓｉｄｅ　マミ）

降り立った私は挨拶もそこそこにブード、サルードを呼び出し鉄仮面軍団と分身に護衛と誘導を頼み急いで前線に向かった。

連合の艦隊も要塞の砲火を沈黙させつつ徐々に近づいてきている。総攻撃までの残り時間は少ないかもしれない！

「さっきの爆撃でいったん引いてくれたみたいね。皆聞いて！司令部が今から陣形をオスティア方面に変えるわ。また負傷者も後方へ

の護送を決定したわ。まだ戦えるものは徐々に後退しながら連合を押しどどめるわよ！」

「しかし、それでは作戦が！」

「和平交渉があるって話だぞ！」

「けど俺は返りたい！」

「連合の予想以上の反撃に早期撤退を決定したの！大丈夫、連合も何時でもここを攻撃できるとなれば会談を強固に突っぱねないでしょう」

「それならば……」

「頑張った意味はあるのか」

「帰れるのか俺達！」

「ああ、連合がまだごねるのならまた来ればいいって事だな！」

「今はとにかく後退を！このままじゃ連合の攻撃に耐えられないわ！」

「わかった！負傷者には誰か付いて運んでやれ！腕に覚えがあるものを中心に連合を押し止めるぞ！」

「「「「おおおおおおおお！」」」」

ふぅ、何とかなったわね。後はここで頑張らないと。

「よぉ、また馬鹿をしたもんだな！」

「チョッパー！良かった無事だったのね」

「そう簡単にやられるかよ。今から前線に行くんだろ？案内してやる」

「ええ、お願いするわ」

彼や他の人たちと一緒に前戦にいきそこでラリーさん達にもからかわれたが今後の作戦をいい私はさらに前に出た。

＜おいおい、あぶねぇんじゃねぇか？＞

「でも、これが一番成功率が高いと思うわ。それに私が皆の側にいたら紅き翼も来ちゃうかもしれないわよ」

＜確かにそれじゃぁ俺達はひとたまりも無いか＞

「安心して大船に乗ったつもりでいて。泥じゃなくて超合金Z製の頼もしいやつのね」

＜超合金Zが何かしらねぇが、頼りにしているよ。じゃあ、死ぬなよ！＞

「ええ、もちろん！」

さぁ、派手にいきましょうか！

「参陣せよ機械獣軍団！！」

その声と共にダブラスＭ２がガラダＫ７がキングダムＸ１０がバルガスＶ５がブロッサムＸ２が出し惜しみはしない全力だ！後は…

「アンリミテッド！マスケット！ワーーーークス！！……ってね」

一度言ってみたかったのよね。彼のような呪文を言えればいいけど……覚えてない。思い出そう！

それはともかく私の周辺には多種多様なマスケット銃が次々に出現した。

ごく普通のモノ　大口径の榴弾をこめたモノ　散弾　煙幕　閃光等々等々……。

「さぁ、始めましょう！」

そのうちの１丁を手に取り、引き金を引いた。

バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン！バン

！バン！バン！

ガァァァァァァァァァァァァ！

おびただしい銃声と機械獣たちの咆哮を合図に長い撤退戦の幕があけた！

（ｓｉｄｅ船団）

「マミのほうは到着し参加したらしい。撤退も順調なようだ」

「「そうか、艦長こちらは後どれくらいでつく？」」

「そうだな１２時間といったところか。機械獣だけでも先に送るか？」

「「いや、先ほどの話だと我々の戦力が最終段階での護衛戦力のすべてになりかねん」」

「そうだな。……歯痒いが予定どうりいくしかないか」

（（マミ様、今しばらくお待ちください。このあしゅら必ずお役にたって見せます））

「グレート・ブリッジ」大分裂戦争最大の激戦地と後に語られる戦場は短期的に見れば帝国有利。長期的には連合が圧倒的有利で進んでいた。

巴マミの参戦、機械獣の投入は一時的に帝国は戦線を押し戻し順次後退し防備を固めて連合の損害は増えてはいた。

だが、帝国の損害もまた激しく前線戦力は撤退戦ということもあり急速に低下していた。

その中で機械獣の活躍は目覚しいものがあった。

キングダムＸ１０の太刀が鬼神兵を次々に切り払い、トロスＤ７が敵に突撃し多くの兵を巻き込み、ストロンガーＴ４の突風が海上より接近魔法使いを吹き飛ばした。

アブドラＵ６が鬼神兵を潰しつつ空中艦艇に狙撃を行うなどまさに圧倒的な力でＤｒ．ヘルが世界征服を決意した理由がわかるほど大暴れしていた。

「機械の獣」
「鋼鉄の怪獣」
「何で鬼神より獣が強いんだ！」
「あいつらやたらおどろおどろしいんですけど！」

など多数の異名が誕生し知れ渡った。ただの兵器が、である。

マミも活躍してはいるのだがそれ以上に機械獣が目立っているのは確かだった。紅き翼とさえ渡り合っているのだから。

しかし、その機械獣といえど無敵ではなく艦砲射撃や大規模殲滅魔法をくらい一機また一機と数を減らしている。1日目は機械獣に多くの犠牲が出たが紅き翼を後退させたところで開始より続いていた戦闘がほんの少し止まった。

予想以上の損害に連合も足を止めてしまったのだ。

だが、帝国もあまり良い状況ではない機械獣の大半が傷つき半数近くは戦線より離脱している。沖合いに集結している艦隊やメガロ方面の陸軍の部隊も鬼神兵などが乱立している。

おそらく明日に総攻撃が開始されるのだろう。鬼神兵を機械獣が多数撃ち破ってはいたがそれ以上に補充されている。

帝国が悲壮な覚悟でいるときに1つの吉報がとどいた。輸送船団が残り2時間の距離に到達したらしい。その報告を受け帝国軍司令部はオスティアに向けての進軍を決意敵を打ち破って少しでも早く接触するためだ。

幸いブードとサルードは兵員を満載しすでに出発している陸に場所を打ちしても問題は無い。しかし、それは同時に連合にこちらが撤退していることを完全に悟られるということだ。総攻撃も間近で

かさにかかって攻撃してくるだろう、その攻撃を受け止める必要がある。

殿として残る部隊を志願者で編成し、残りの全軍でもって帝国は輸送船団とのランデブーポイントへと進撃を開始した。

それを察知した連合は予定を早め総攻撃を開始。膨大な血が流れたグレート・ブリッジ戦その最終章が幕を開けた。

（ｓｉｄｅ　マミ）

「く！物凄い数ね！！」

「戦果の拡大ともう2度とこんな事させない為だろう！！」

「だろうな！実際二度も三度もされたいモノじゃないだろアチラさんも！」

私達は今、連合の包囲網を突破して収容作業に入っている本隊と船団に敵を近づけないためにグレート・ブリッジで激しい戦闘をしている。

艦隊のほうは飛行機械獣たちが気を引き付けてはいるがいい加減まずい。私はともかく他の人はそろそろ撤収に入らないと……。

「「マミ様！」」「兵員の収容」「および脱出の準備完了しました！」「「現在船団は帝国領内に向けて負傷者を中心に全速で退避中。健全なものは陸路をたどって帰還するとの事」」

やっぱり全員は無理だったか。

「なお船団の指揮官より最大船速で離脱するゆえ護衛は不要との事。また、追撃を分散するために船団をといて各個に離脱をおこなうもよう」「飛行機械獣は連合軍艦艇の足止めを、陸軍に対してはグロイザーXシリーズを使って足止めをおこなっております」「「このあしゅらとガラダブラ皆様の撤退支援のためもう一働きします！」」

船団に護衛がいないのは少し心配だけど引き付けてくれているなら何とかなるかしら…。どの道、喰いつかれたら船団なんてひとたまりも無いか……。

「へへ、おっかない外見だがこんなときは頼もしいな！」

「ああ、頼りにしているぜ！！」

「「任せて置け！このあしゅらがついたからには勝利は間違い無しだ！」」

「ええ、皆グールが戻ってくるまでもう一踏ん張りよ！」

「「「「おおおおおおお！！」」」」

グールが戻ってくるまで後1時間といったところかしらね。彼らはまだいないし何とかなるかしら？

（ｓｉｄｅ　連合）

「えぇぇい！まだ敵の殿を突破できんのか！！」

「はい、頑強に抵抗しているようでして先ほど増援がありましたのでよけいに……」

こちらは連合軍艦隊の旗艦、その中で今作戦の総指揮を取っている提督が一向に帝国の殿部隊を突破できないことに業を煮やしていた。

「あの傭兵連中はどうした！？他の戦線はほぼ終結しているのだろう！」

「彼らは昨日から戦い続けています。少しは休息を与えなければ」

「今働かせずして何時働かせるのだ！！あの化け物どもの後ろには帝国の本隊がいるのだぞ！少しでも多くの者を討たねばまた同じことをされる！そうなれば次は無いかもしれんのだぞ！！」

実際、今回の作戦は帝国のほうが大打撃を負っているが連合とて楽な戦いではない。もう一度それも決定的な場面で同じことをされれば……。ならばこそこのような作戦がおこなえる帝国の精鋭部隊を少しでも多くたたいておかねばならない。

まして今回大量に確認された化け物―機械獣―の存在がある。もしあれが直接転送されたら……。鬼神兵を遥かに上回る能力を持っているのだ1体だけでもどんな被害が発生するか。

だからこそ帝国があせってへまをした今回は千載一遇の機会、帝国と連合の差がわかっているゆえ指揮官は檄を飛ばしているのだ。

「紅き翼だったかあいつらはすぐに向かわせろ。…確か撤退中の部隊は航路と陸路で分かれたのだったな？」

「はい、突破した帝国軍を追撃した部隊の話によるとそうです。しかし、陸空共にあの化け物がこちらを攻撃して思うように追撃できていません」

「空はおそらくニャンドマ周辺を突破するつもりだろう。あそこは数週間前に襲撃があったせいであまり多くの兵力は残っていない。陸路はウェスペタリア近辺を通るしかないな」

「それぞれ高速艇を派遣し襲撃をかけますか？」

「陸はそれで良いだろうが空のほうは高速艇だけでは危険だな……」

「ならば、高速艇団は迂回しニャンドマ周辺に展開。艦隊は通常の追撃をしつつあいつ等を引き付けますか？」

「それが一番だな。少々危険だが単独行動の禁止と対空砲火を密にし必要以上の追撃を避ければ被害は少なくできるな」

連合の追撃作戦は決定し帝国軍殿部隊への最後の攻撃が開始され

た。

（ｓｉｄｅ紅き翼）

「ったく、人使いが荒いぜ！」

俺達は前回マミとあった後久しぶりに前戦に復帰そこで八面六臂の活躍をしていた、そこに来て今回のことだ！

当然俺達も参加してすでに多くの戦果も上げているぜ。あの機械獣だったか？あいつらも何体か叩き潰した！

あいつらは鬼神兵と違ってだいぶ強いし何より全て違っていておもしれぇ！この戦争が終わったら全部と戦ってみてぇ。

「人気者はつらいって事よ。そのれにこの作戦終了のあかつきには報酬もがっぽりだ！張り切っていこうぜ！」

「ったく現金なやつだぜ。でも殿にはマミもいるんだったか？それなら楽しめそうだ！」

アイツも強いからな。なんとしても仲間に加えたいぜ！

「ちょっと待て！次は俺だって約束だぞ！！」

「良いじゃねぇかよ。じゃあ、俺はあの変な奴にするかな、詠春あいつ強いんだろ？」

「そうだな。パワーだけならあの怪物然としたモノの方が上だろうが意思を持っている分厄介ではあったな」

「じゃあ、そっちとやるかな！詠春はあの髑髏な！」

あの髑髏も面白そうだが今回はこっちだな。

「なら私とゼクトは周りの機械獣の相手をしますか」

「あの2体より弱いといっても十分厄介ではあるじゃろうな」

「っと、見えてきたぜ」

マミが居るらしき所は機械獣が多数暴れていて要塞の一部が崩落さえしていた。

（ｓｉｄｅ　マミ）

「サンダー・ブレーク！っと、そこ！ティロ・フィナーレ！」

連合の私たちに対する最大規模の攻撃が開始された。そのおかげでさっきから休む暇さえない。

「突破されても困るがいい加減、引いてくれても良いってのによ！」

「まったくだ、こっちにかまうなってんだ！！」

「まったくね！マジンガーブレード！はぁ！！」

マジンガーブレードで近寄ってきた兵達をなぎ倒しているが本当にきりが無い！

「もう1回、グレート・ブリッジに光子力ビームを撃ち込んで足止めをするは皆は下がって！」

「了解！」

私は飛び上がりグレートブリッジを斜めに見る場所に移動し現在の最強の武器をはなった。

「光子力！ビーーーーーーーーム！！」

眩い超高密度のエネルギーの奔流がグレート・ブリッジを直撃し大穴を開けた。そのまま向きを変え薙ぐように動かしたため広範囲で構造材が消滅崩落し始めた。

その上にいた兵士たちは慌てて退避を始めたが私たちと連合軍の間には十メートル近い溝が出現ししばらくは圧力が低下しそうだ。

「はぁはぁはぁ。やっぱり短時間での連続照射は疲れるわね」

疲れても威力が変わらないとはいえあまり喜ばしい特徴ではないわね。

「グール到着まであと少し！これなら」

「よぉ、マミ何ださっきのすんげぇな！」

来てしまったか。

「久しぶり？なのかな、でも今は会いたくは無かったわね」

「でしょうね。あなたは帝国でこちらは連合」

「見逃してはくれないわよね？」

「こっちも仕事なんでな。それに帝国に連合を討たせるって分けにもいかねぇし」

やっぱりそうよねぇ。でも、私がいるから他の皆に被害が及ばないって思っておきましょうか……。

「今回は誰が誰と？」

「今回は俺がお前とだ！あれからどれだけ強くなったか見せてみろ！」

「俺はあの顔が左右で分かれている奴だ。詠春はあの髑髏な」

「私たちも今回は戦いますので」

紅き翼全員と私＋機械獣軍団か物凄く豪華ね。映画が1本作れそうなくらいタイトルは「紅き翼対マミ軍団～グレート・ブリッジの

決戦～」かしら？っとそんなこと考えてる暇はないわね。

「あしゅら、ガラダブラ」

「「ははっ！」」「グルルゥゥ！」

「グール到着まであと僅か場合によってはあれも使うわよ！」

「「了解しました」」「この小僧めに負ける私ではございません」

「吉報をお待ちください」

「へへ、準備は良いようだな。じゃぁ、いくぜ！」

（ｓｉｄｅ　ナギ＆あしゅら）

「さてとあしゅらだったか早速だがいくぜ！」

「ふん小童がひねり潰してくれる！」「最強の機械獣の称号は伊達ではない！」「「くらえ！ルストハリケーン！」」

開幕と同時にあしゅらが放ったルストハリケーン。強風もそうだが何よりの脅威はその強酸である。鋼鉄さえも一瞬でボロボロにしてしまう威力。生身人間ではひとたまりもない。

ナギは前回マミと戦った時の経験と天武の才ゆえの勘でその危険性を察知、危なげなく避けたところで魔法の射手を放ち詠唱に入っ

た。

「来たれ　虚空の雷　薙ぎ払え　雷の斧！へへ、どうだ！俺だって伊達に最強は名乗ってねぇよ」

「ふふ、確かにそのようだな」「あなどっていた事は素直に謝ろう」「「だがこのような人間用の小技では私には効かん！私を倒したいのならばもっと威力のあるものを撃ち込むのだな！」」

事実、先ほどの連携をまともにくらったはずのあしゅらには損傷らしきものは見当らない。

「へっ！その言葉後悔するなよ！すぐにスクラップに変えてやるよ」

「「さぁ、仕切りなおしだロケットパンチ！＆ドリルミサイル！」」

あしゅらが腕を飛ばしその断面から小型ミサイルを発射して弾幕を展開。ナギが避けるスペースを奪いにきた。例え避けたところでロケットパンチや他の武器が襲い掛かる。

普通は必死に回避するか全力で防御に入るが彼は違った。魔法の射手で迎撃しつつ後退し詠唱の時間を稼ぎ。

「南洋の暴風！」

3つ目の選択肢、弾幕を消し去ってしまうことを選んだ。

「「なに！ぬおおおぉぉぉ！」」

「なめるなって言っただろ！」

迫り来るミサイルの群れを薙ぎ払った南洋の暴風は勢いをそのままにあしゅらに直撃。海上へと叩きつけた！

「「ははははは、マミ様が手合わせしたいと思うわけだ！」」「見事よ！」「あの男より楽しめそうだ！」「「おおおおおお！」」

浮上したあしゅらには今度は損傷といえるものがしっかりと刻まれていた。しかし、彼はそんなものなどものともせず攻撃を再開した。

その後、三者は激闘を続けまた長期戦になろうかと思われたとき。

（ｓｉｄｅ　マミ）

「やっぱり俺の見込みどうりだな！あのへっぽへぼのど素人がここまで大化けするとはよ！」

「ラカンさんも相変わらずすごいですね」

「あったりまえだ、何せ俺は最強だからな！」

前回よりも激しく戦っていると

＜マミ！グールが到着したぞ！戻ってきて援護を頼む。あの2人のせいで機械獣はほとんどやられちまっているこのままじゃまずい！＞

「わかったわ！」

「なんだぁ！もう終わらせる気かよ」

「ええ！今回は戦うことが目的じゃないからね。」

「だが＜はいそうですか＞と行かせるわけにはいかないぜ！」

そうでしょうね。普通に突破したところで彼らもついて来たんじゃ意味がないしあしゅらとガラダブラも来て欲しい。……あれを使いしかないか。

＜あしゅら、ガラダブラ＞

＜なんでしょう＞

＜グルゥ＞

＜20秒後にアレを呼び出すわ。その後全速で帰還グール搭乗の支援を＞

＜了解しました。しかしアレを使うことになるとは＞

＜贅沢は言ってられないわ＞

グレートタイフーンを叩きつけ距離をとったところで

＜いくわよ！＞

「来なさい！地獄王ゴードン！！」

普通の召喚とは違う巨大な光の輪が形成されその中から3つの顔と2対の腕を持つ６０Ｍはあろうかという巨人が出現した。

『地獄王ゴードン』Ｄｒ．ヘル最強の機械獣。その力はあのカイザーと1対1で戦えるほどの力を持っている。

しかし、そのあまりにも出鱈目な性能せいかアーティファクトの入っているゴードンは未完成版のものだ。

力などはそのままなのだが活動限界が存在していて。その時間はどこぞの巨人張りにわずか3分。自立機能もかなり低くこちらが指示を出さないと木偶の坊、最悪暴走を引き起こしてしまう。

再召喚に掛かる時間もあしゅら達でさえ２４時間なのにこちらは４８時間。戦力としては期待できるものではない。

けど今は、その3分が何よりも貴重だからこそ呼び出した。

「ゴードンその3人を抑えなさい！」

ただ一言単純な命令を放ち私達は全力で現在紅き翼の2人と連合

の部隊がいる箇所に向かった。その後ろをゴードンの巨大な剣が通り過ぎた。

（ｓｉｄｅ　ラカン）

おいおい、とんでもねぇもん残していきやがったな。何だコリャ動きは微妙だが凄まじい力だ。

「ラカンお前も逃げられたのか？」

「こいつに気を取られているうちにな、詠春もか？」

「ナギもそのようだな。しかしどうする」

まぁ、驚くよなぁこんなのがいきなり現れたら。下の連中なんて足元ですげぇ騒ぎになってるし。あ、あの２人が吹っ飛んでいった。あいつらもか。

「なに、アイツが今まで出してこなかったんだそれなりの理由があるんだろう。まともに相手することはねぇよ」

「確かにそうだな。これほどのものを最初から投入されていれば戦いなんてすぐに終わっているだろう」

「じゃあ、しばらく付き合いますかね！」

（ｓｉｄｅ　マミ）

ゴードンに気を取られていた残り2人をすぐに排除できたのは僥倖だった。今はさらに後退しグールに乗り込む人たちの支援をしている。

「あなた達も早く撤退を！」

「無茶言うないくらお前とあの2体でもこの数は無理だ突破される！ならここで踏ん張っていたほうがあいつらに被害が及ばないんだよ！」

くっ、確かにそのとおりだ連合の攻勢はゴードンが現れたことでよけいに遮二無二突っ込んできている。このままじゃ。

「マミ！まずい連合の奴ら鬼神兵を大量投入しやがった！！」

まずいあの数じゃ抑えきれない！

「マミ！グールを発進させろ！このまま雪崩れ込まれたんじゃ全滅しかねん」

「でもそれじゃあ。あなた達は！」

「そんときゃ、歩いてでも帰ればいいそれか、お前たちに抱えられてな」

何にか方法は……。アレを使えば。でもかなり危険だし。って、そんなことより今は。

「グール聞こえる！」

＜何でしょうマミ様！＞

「現在の収容状況は？」

＜残りあと僅か１０分いえ、５分もあれば＞

「５分以内に必ず終わらせて！終わり次第緊急離陸！」

＜しかしそれでは！「いいから！！」了解しました！＞

５分か、なかなか難しいわね。ゴードンももうすぐ消えるしどうするか……。

「グルゥ！」

「ガラダブラ！？」

突如ガラダブラが単身連合艇兵を蹴散らし鬼神兵の群れに突っ込んでいった！

「「マミ様奴は単身時間稼ぎをするつもりのようです！今のうちに残った機械獣と部隊の再編を！他にも考えがあるようですしその準

備を！」」

「ええ！彼の犠牲は無駄にはしない！！」

（ｓｉｄｅ　ガラダブラＭｋ０１）

彼にはあしゅらのような人間と同じような思考をするようには作られていなかった。ただただひたすらに最強の機械獣として、最強の兵器としての本能があるだけであった。

だがその本能が主のために敵の中に突入することを選ばせた。それは兵器ゆえに、よけいな感情がないからなのかもしれない。

彼とて先の戦いで少なくない傷を負っている。詠春とて決して弱くはない。しかしそれでも少しでも時間を稼ぐために、帰還なき侵攻を開始したのだ。

「ガァァァァァァァァァァァ！！」

獰猛に咆哮し足元の連合兵を蹴散らし中央の髑髏の目より突き出た機関砲を乱射、蛇状の首からは破壊光線を撒き散らせつつ、先頭の鬼神兵に突っ込んだ！

鬼神兵も押し止めようとしたがパワーが根本的に違うのだ、正面だけでなく背中より突き出た翼に当たったものも容赦なく吹き飛ば

した。

そのまま中央付近で縦横無尽に暴れだした。豪腕により胴体を粉砕されるもの、尾の一撃で首がへし折られるもの、破壊光線により爆散、投擲された鎌に切り刻まれるもの。

一騎当千といえる光景であった。ゴードンが消えて攻撃がより激しくなっても彼は暴れ続けた。

味方のど真ん中ということもあり大規模殲滅魔法こそ無かったが。より強力な鬼神兵の投入、紅き翼の戦闘参加、遥かに多い数。

これではいくら紅き翼級の力があるといっても多勢に無勢すぎる。

翼が吹き飛び、首の一つが切断され、腕がもげる。徐々にしかし確実に崩壊へと向かっていた。

しかし彼はついに目的を達成したのだ。

＜収容完了！グール飛翔します！！＞

兵員の収容完了とグールの飛翔。それらを見届けるように彼は連合の攻撃を一身に浴び還っていった。

（ｓｉｄｅ　マミ）

ガラダブラ…、ありがとう。

「「マミ様次は私が」」「艦艇も近づいてきています」「チャンスは今しかありませぬ」「「では、また後ほど！」」

「あしゅら！……みんな今から帰還するためのモノを呼ぶけどこれはかなり危険よ」

「帰れるんならなんでもいいさ！」

「ああ、危険はもとより承知の上だ！」

「陸路で歩いて帰るよりはいいだろう」

「ありがとう。問題なのはこれには座席なんて気のきいたものが無いって事と最低速もかなりの速度なの」

さっき確認しても問題なくＯＶＡ版だったこれなら乗れはするけど、速度と乗る場所はどうにもならない。元々人員輸送用じゃないのだから。

「それにタイミング的に1回が限界よ。私は自力で離脱するけど、あなたたちは必ずしがみついて」

「ああ、死んでも放すもんか」

「おいおい、死んだら帰れないぞ」

「ああ、皆で帰ろう！」

「だな、マミ頼む！」

「わかったわ。来て！グレートブースター！！」

その掛け声と共にどこからとも無く巨大なモノが飛来してきた！

「皆来るわよ！」

「「ああ！」」

「ドンと来い！」

「来い来い来い！」

ぎりぎりまで速度を落としてもなお速いグレートブースターは彼らに向けて突っ込んできた。それにタイミングを合わせ彼らは跳び

「「「「よっしゅぁぁぁぁぁ！」」」」

無事に全員が飛び移ることができた。

「残っている人は……、いないわね。じゃあ、私も行きますか！スクランブルダッシュ！！」

私も翼を展開し徐々に速度を上げているグレートブースターに追いついた。

（ｓｉｄｅあしゅら）

「無事行かれたか」「後はここより先に」「「一兵たりとも通さん！」」

今までは翻弄することに重きを置いていた彼も先のガラダブラのように鬼神のごとく戦い最後は突出していた船に突っ込み果てた。

このガラダブラＭｋ０１とあしゅらＰ１は連合そして帝国双方に強烈に印象に残った。後年、この戦いで英雄とまで呼ばれるようになった紅き翼のライバル役として名前が残るくらいに。

「ふむ、どうやら作戦は成功したようだな」

「多少誤算があったがこれで帝国は精鋭の大部分を失ったか」

「逆侵攻こそできそうには無いですが、だらだらと続けるにはちょうどいいですね」

「しかし、こやつは少し厄介だな」

「ああ、前回の誤算もこいつが原因でしたからな」

「しかし、今回の事は誤算ではありますがちょうどいいのでは？」

「うむ、護衛官を蹴って命令違反と越権行為。帝国軍から追い出し、かかわりを禁じるにはちょうどいい」

「連合に流れないでしょうか？」

「あそこでアレだけ暴れたのだ。連合に入らせない理由などいくらでもある」

「それもそうですね」

「アチラのほうは大丈夫でしょうか？」

「そっちも問題ない。あれらを調べていた奴を仲間にしたらしい」

「ほう、なら」

「ああ、あれらがそのうち処分するだろう」

「なれば今回はこれで、終わりですかな」

「くくく、あの方の復活が待ち遠しいですね」

「ああ、それでは」

大分裂戦争＜グレート・ブリッジ２＞（後書き）

機械獣とガラダブラ、あしゅらの回でもあったりしますｗ
どうでしょうか？最強の機械獣らしさが出ていたらいいなぁ。

ちなみにあしゅらはミネルバＸも入れてみました。光子力ビームは無いけど。ってかこれならあしゅらマジンガーも入れてミネルバとあしゅマジがあしゅら状態のほうがいいかも…。

マミさんの魔法もちょこっと出しましたけどこっちはまた別に機会にｗ

２，３日で撤退ってものすんごくスピーディーになっちゃいましたがあまり時間をかけるとらくらく撤退。って事になっちゃいそうで＾＾；

機会があったら書き直したいなぁ。途中で長距離転送で補給ライン確保できんじゃね？とか思ったりもう少し戦闘を長引かせられたかもなぁ。

ともかく、最後のほうで何かやってる人たちも満足してマミは帝国軍から追い出されることにやっと大戦編を終わらせるコースに乗せれます。学園編どうしよう…

次回予告

「無事に皆を救出できたマミ。しかし彼女に待ち構えていた運命は追放。彼女はこの大戦の裏を知るため調査を開始する、時を同じく連合でも……」

真ネギま☆マギカZ　大分裂戦争＜完全なる世界＞

大分裂戦争＜完全なる世界＞（前書き）

え～と、実は前回ブロッケンＶ２シュタイナーを出そうと思ってたんですが…
完璧に忘れてました＞＜なので今回、彼に活躍してもらいます！

大分裂戦争＜完全なる世界＞

グレート・ブリッジでの戦いの後、私は帝国軍より追放されてしまった。

その理由は、王の命によって呼び出されていたのにそれを無視したこと、傭兵の領分を超えた作戦に対する越権行為や凄いもので無理な撤退を強要したことで損害を出したことに対する反逆罪ってモノもあった。

実際に最初の二つ、とくに越権行為のほうは完全に事実だ。

最悪処刑って話もあったらしいが撤退作戦に尽力したこともあって追放で済んだ。最後の物はおそらくだが作戦失敗の責任をついでに取らせようとしたものじゃないかしら？

あの戦いに参加した帝国軍はその数を7割近く失ってしまった。

帰還者はその逆に7割にのぼるが、重傷を負い前線復帰が難しい者、復帰は可能でも長期療養を必要とする者。無傷な者はいなく良くて軽傷、多くが重症だったため帰還した者でも半数以上がとうぶん戦線復帰が不可能なためだ。

いくら治癒魔法があるといっても今は戦争中、数が圧倒的に足りないのだ。そのため、重症患者の命を繋ぎとめ自然治癒でもって回復を待つしか方法が無くこの結果となってしまったのだ。

いくら一部で作戦を強行した者がいたとしても、この損害はその者を処分するだけで終わらせるわけにはいかなかった。作戦内容に無理があったのは当初から分かっていた事、口車に乗ってしまいましたで済むはずがなく何人かの処分が必要になってしまう。

しかし、ここまでの大打撃を受けた帝国にそんなことをしている余裕は無く。ちょうど、傭兵でありすでに重大な問題を起こしている私にその責任もかぶせることでお茶お濁したんじゃないかしら？

あの戦いの指揮官さんもそのことについては謝りに来ていたほどだ。

ともかく帝国軍を追い出されてしまった私だがこれはある意味でいい機会かもしれない。今回の戦いもそうだが最初の頃からあったこの戦争に対する違和感。誰が始めて誰が継続を望んでいるのか、帝国の方は今までも聞いて回っていたから連合にもいってみよう。

違った視点からこの戦争を見れば、それが判るかも知れない。

「なら膳は急げって言うし早速行きますか。来なさいグール！」

私はグールに乗ると一路、連合の盟主の首都であるメガロメセンブリアに向けて出発した。

（ｓｉｄｅ紅き翼）

よぉ、ナギだ！俺達はあの戦いの後、帝国軍を追撃してオスティアに迫っていた部隊を押し戻すなど大活躍したぜ！

ガトウって仲間も新たに加わり、「千の呪文の男」って二つ名やファンクラブができたり絶好調だ！

が、そこまでいったはいいがその後はまた戦況は膠着して、大戦の終わりは全く見えねぇ。

「俺の故郷があるあっちの世界じゃ、超強力な科学爆弾が発明されてこんな大戦はもうおこらねぇみたいだ。始めたとたん皆まとめて全滅するからしい」

たしか核兵器だっけ？

「でもよ、こっちの戦いはいったいいつ終わるんだ？帝都セラスを滅ぼすまでか？やろと思えば、こっちの世界にだって科学爆弾以上の魔法だってある。こんなこと続けてどうなるってんだ？意味ねぇぜ！！まるで……」

「まるで誰かが世界を滅ぼそうとしている。ですか？」

無茶苦茶なことだとは思う。だが、この戦いを見ているとどうしても思っちまう。

「ある意味ではそうかもしれないぞ」

「ガトウ」

こいつが新しい仲間のガトウだ。なんでも凄腕の捜査官なんだとか。弟子のタカミチもいるな。

「やっと、掴む事ができた。連合・帝国双方の中枢までに入り込み戦争を長引かせている連中。その秘密結社の名は＜完全なる世界（コズモエンテレケイア）＞」

「で、何だよ。わざわざ首都まで呼び出してさ」

＜完全なる世界＞の話をした後また戻って行ったガトウに今度は呼び出されて本国首都にまで来たはいいんだがなんなんだ？

「あって人、協力者がいるんだ」

「協力者？」

「そうだ」

ん？だれだ…って。

「マクギル元老院議員！」

おいおい、大物じゃねぇか。

「いや、主賓はあちらのお方だ」

違うのかよ。でも、元老院議員が敬語って。

「ウェスペルタティア王国…アリカ王女、彼女が協力者だ」

また大物が出てきたな。それもこの大戦の中心とも言えるオスティアを王都に構える国の王女とは。

俺達は＜完全なる世界＞は武器商人や国際マフィアつまり「戦争で儲ける」やつらが作った組織と踏んでいたんだが。

アリカ王女の話を聞くとオスティア内部にもシンパがいるらしい。

「彼らに世界全てが操られている」

って、アルの言葉がどうりの、けれど真の正体は謎のままの組織。

そこで俺達は休暇を利用して奴らについて独自に調査を開始したんだが、俺やラカンは調査向きじゃないから休暇を満喫。

……っといきたかったんだが。俺はあの女のおもりでそれどころじゃなかったぜ。

「アリカ王女を一昼夜連れまわした挙句、敵の本拠地を壊滅させた！！」

また、姫さんの付き合いで首都をみて回っているときに奴らの刺客から攻撃をくらったから乗り込んだだけじゃねぇか。

「何のために秘密捜査をしていると…。それにもしもアリカ王女にもしもの事があったら…」

ガミガミガミガミ…

手を出してきたのはアイツ等だぜ。それに

「姫さんノリノリだったぜ？」

楽しかったーっとかって。

「嘘をつけ！！どうせ貴様が無理やり…！姫にこんな迷惑を…！国際問題級の…！」

くどくどくど…

へーへー、次は気をつけますよ。

まぁ、タカミチと師匠が入ってきて姫さんが笑ってお礼を伝えてくれって言うと、黙っちまったがな。

「それに、ちゃんと証拠も見つけてきたぜ」

と、そいつら宛てのメガロメセンブリアの執政官が送った書を見せた。

後で聞いたんだが、ガトウも掴んでいたらしいが決定的な証拠まではいってなかったみたいだ。メガロメセンブリアの執政官さえもあいつらの手先ってのには驚いたが、少なくてもこれで戦争は終わらせれるだろう。

＜完全なる世界＞のことはまだ何もわかってねぇが―ガトウは何かを掴んだらしい―それは戦争が終わってからでもできる。

姫さんは戦争を終わらせることができるその情報を持って帝国の第三皇女と接触をするために出発し、俺もガトウ、ラカンと一緒にマクギル議員の元に向かった。

そして、奴らが現れた……。

「マクギル元老議員」

「ご苦労、証拠品はオリジナルだろうね？」

「ハ…、法務官はまだいらっしゃいませんか」

「法務官は来られぬこととなった」

何でだ…、ん？このマクギル議員…。

「少し考えたのだがね。先の戦いで帝国は大打撃を負った。…ここで慌てて休戦して水をさすのもどうかと思ってね」

「ハァ……」

やっぱり、こいつは…。

「いや、私の意見ではなく元老院でもそう考える声が多くてね。今が攻め時だと。時期が悪い、ここで休戦だなどと言っても味方は少ないだろう。君たちも無念だろうが今回は手を引き時を待つのだ。そうすれば…「待ちな」…何かねナギ君？」

ハッキリしたぜこいつは違うな！

「あんた、マクギル議員じゃねぇな何もんだ？」

先手必勝！偽者に魔法を叩き込んだが…。

「「な…」」

「ちょーーーーー！ナギおま……！何やってんだよ！！」

「元老議員の頭いきなり燃やしてってかもう火達磨だし！」

「バーーーカ、よく見ろおっさん」

「何っ…」

マクギル議員が居た所には1人の男が立っていた。

「よくわかったね千の呪文の男。こんなに簡単に見破られるとは、もう少し研究しないとね」

その後2人が乱入してきたが。気配からいって雑魚じゃねぇおそらく幹部クラス。マクギル議員にはわりぃが＜完全なる世界＞が大きな証拠が向こうから来てくれた！ラカンじゃねぇが政治じゃないガチの相手だ、遥かに楽で戦い易いぜ！！

…が、結果を言えば俺達は負けた。といっても戦えば勝つ自信はあるんだが、あのやろう。マクギル議員の声で俺達が議員を暗殺しに来た帝国のスパイだと言いやがった！

結局、見失った上に昨日までの味方と戦うわけにもいかず脱出。今は今後のことについて話し合っているところだ。

「これからどうします？」

「どうもこうも、このままここに居る訳にもいかないからな。オリンポス山の隠れ家にいったん移るか」

「それがいいじゃろうな」

「それと姫さんの行方が心配だ」

「なんだぁ～、やっぱりお前」

「茶化すなよ。俺達でもこれだったんだ。姫さんも無事じゃねぇだろう。」

「つまんねぇな。ま、実際そうだろうな。王女様もあの証拠については知っているんだし」

「そうなると辺境を迂回しつつ隠れ家にその途中に姫の行方に関する情報も探ったほうがいいな」

「方針が決まりましたし、行くとしましょう。何時までもこんなところにいては…」

「見つかっちゃうものね」

「「「「「「！」」」」」」

く！もう追っ手がって…、お前は！！

「久しぶりね」

「マミ！」

何で帝国にいるお前が？お前がこっちにいるなんて噂なんか聞いたことねぇぞ。

話しはマミが連合で調査を進めているときまで時を戻す。

（ｓｉｄｅマミ）

さて、なんとか見つからずにメガロメセンブリアに入れたわね。いくらなんでもグールで乗り付けるわけにもいかないし、ちょっとかかってしまったなぁ。

「宿もとったし道具の準備も整ったから早速開始しましょう」

調査要員なのだけれどあしゅらは有名になっちゃったしそれ以前に目立ちすぎるからなぁ。顔は仮面で隠せるけど、二重の声はどうにもならないし。なにか良いアイテムがあった気がするんだけれどなんだったかしら？

まずはガミアちゃん達を呼び出して後は忍術も使えるブラザスＳ１・Ｓ２も聞き込みと調査に向かわした。彼女たちは人間大の機械獣だから何かあっても大丈夫だしブラザスは潜入任務もこなせるだろう。

ただ、機械獣って事もあってあしゅらほど細やかってわけじゃないところが少し心配なのよね。

けど、そのための手も考えてある！私自身が行けば一番なのだけ

れどそのままいったんじゃさすがに拙い。顔を変える魔法道具を買ったのだけれど犯罪に使われても困るので大幅に変えることはできないみたい。

そこでこの身体の能力を利用するってわけ！…できれば利用したくなかったなぁ。

まず、身体を分身させた。戦闘力を保持したままだと3体が限界だけれど一般人と同じくらいなら１０体まではいける。機能を限定したり自動にすればもっといけるだろうけど今回の目的だと自分で操作をする必要があるからね。

その身体の上に人形の頭部を置き少し細工をした後にさっきの魔法道具を使用する。これによって１０種類の私とは全く違う顔をもった私ができた！後はこれにローブや眼帯、仮面を装備すれば多少の違和感を無視できるだろう。

これをメガロ各所に放って噂や怪しいところに忍ばせてみたりをした。

ちなみのその最中に女の人を連れたナギらしい人や妙な感じがするスーツの集団を見かけた。ナギは休暇中としてあのスーツの集団はなんだったんだろう？全然似合ってなかったわね。

それで暫く調査を続けていたのだけれどこれといった収穫は無し。帝国と同じように武器商人がどうの主戦派の議員がどうのって話は聞くけど、決定的なものじゃないのよねぇ。

武器商人にしたってこの戦争にこだわる必要性は無いわけだし、主戦派の人にしたって各国に1人はいるような人で国全体が戦争継続になるようなものじゃなかったわ。

そんなこれといった進展も無い日が続いていたある日。街中で大規模な魔法を使った事件が発生した。

ちょうど近くを歩いていた分身体の1体を派遣してみるとナギの目撃情報がその周辺であった。話を聞いてみるとナギが女の人を連れて魔法を放ってきた人達を追っていったらしい。

ナギが事件に巻き込まれたのは確実としてその理由は…、話の中にナギと女の人を狙ったように見えたってものがあったからもしかしたら戦争を続けたい人が英雄のナギを狙った？

考えすぎかしら、単なる犯罪者の突発的犯行や帝国の暗殺や破壊工作ってことも考えられるし。

でも、これといった進展も無い現状ではとにかくナギを追ってみる事が一番ね。ナギの実力を考えてブラザスを派遣してガミアちゃん達と分身を紅き翼の監視をさせた。もし何か動きがあれば見張っていて損はない！

ブラザスの情報だとどこかの拠点を襲撃したらしい。監視は宿泊している場所はわかったがそれ以上はどうすることもできず見張るしかないと思っていたが。ナギが帰ってきて暫くして動きがあった。それも特大の。

彼が仲間2人（一人はラカンさんだけどもう一人は知らないわね。

）と一緒に議員事務所に入って少ししてその事務所が巨大な石柱を生やして爆発した。潜入させていたブラザスの情報だとナギたちが議員を暗殺に来て失敗したとか。

あの2人に暗殺なんて器用なことできるはずが無い！やるならば事務所ごと吹き飛ばしている。彼らの暗殺はゴルゴのような細やかなものじゃなく目標付近を爆撃して葬り去る感じだろう。

おそらく、あの襲撃した拠点で何かを見つけてそれをもとに何かしようとして罠に嵌められたってところかしら？とにかく今は紅き翼の動きを徹底的に追わないと。

分身を3体にして機動力を上げ、私も出撃し徹底的に探索したところやっと見つけることができた。

どうやら、彼らはこの戦争を継続しようとしている人達を知っているようね。彼らも連合を追い出されたみたいだし、前から誘われていたし私も一緒に行ってみようかしら。じゃあ、声をかけないとね。

「方針が決まりましたし、行くとしましょう。何時までもこんなところにいては…」

……そんなセリフを聞いたら言ってみたくなっちゃうわね。追われているときに発見されるフラグ的セリフにいたずら心が刺激されて。

「見つかっちゃうものね。」

うん、こんなセリフ1回は言ってみたいものよね。まぁ、そのおかげですごい形相で振り返ってきたけど。ふふ、驚いてる驚いてる。

「久しぶりね」

「マミ！」

さて、どこから話そうかしら。

（ｓｉｄｅナギ）

「何でお前がメガロに！？いったい…」

「驚かせた私が言うのもなんだけど、今は移動した方がいいんじゃない？連合もその内嗅ぎ付けるわよ」

それもそうだな、話してくれるみたいだしとりあえずここを移動するか。

「それで、声をかけてきたのですから何か案でも？このまま帝国にって案は無しですけど」

「違うわよ、私も追い出されたし。その辺境に行くまでの足を提供できるわ。そこでなら落ち着いて話もできるしね」

と、いってマミは海の方に移動を開始した。どうするか少し迷ったが罠じゃ無さそうな事と追い出されたって話しも気になるし後を追った。

「ブード、来なさい！……速さならグールが一番なんでしょうけど、空を飛ぶからね。こっちなら潜水型だから潜ってしまえば見つからないわ」

海へ移動したあいつは突如巨大な船を出現させた。これがアイツのアーティファクトなんだろうがやろうと思ったら1人でメガロを壊滅できそうだな。

驚いたばかりいるわけにもいかず潜水艦に乗った俺達は目的地をオリンポス山に設定してもらいあらためて話し合いに入った。

「それにしてもすげぇな。こんなモンまで呼び出せるのか」

「色々制限もあるけどね。このまま外洋に脱出すればそこからはグールで一ッ飛びできるけどどうする？」

「そうですね、そのグールはある程度は見つからないようにする装備はありますか？」

「ええ、あるわよ」

「それなら俺とタカミチを乗せてアリカ王女が会談をするために向かった場所に届けてくれ」

「そうだな。俺達はこのままでいいが姫の安否が気になる、もしさ

らわれたならその行方は一刻も早く知っておいたほうがいいからな」

姫さん無事でいてくれよ。

「わかったわ。でもその前に互いの状況を確認しないと」

「む、そうだな。じゃあ、どっちから話すか」

「私から話すわ。私はあの後…」

マミの話だとあの戦いの後、責任を取らされて帝国軍を追放。元々この戦争に違和感を覚えていたから連合のほうも見にきてみた。その調査中に俺達を発見して接触してきたらしい。

「何だそりゃ！何でマミのせいになってんだ！！」

「責任の是非はともかくアレだけの活躍をしたあなたを追放という話しもおかしいと言えばおかしいですね」

「ああ、大打撃を負ったのなら彼女は手放せない気もするが」

「どうせあいつらの仕業だろ？それより、お前も紅き翼に入るのか！」

「歓迎するぜ！今度手合わせしようぜ！！」

「おい！今度は俺だぞ」

「いいじゃねぇかよ。あ、詠春もまぜてやらねぇとな」

仲間はずれは駄目だからな！

「今はそんなことはしてる暇は無いだろ。まぁ、興味はあるが」

「しかし、いよいよ我々紅き翼もチート、バグ軍団化してきましたね」

「じゃな、ナギとラカンでも十分じゃがさらにマミもか」

「ふふ、よろしくね」

次は俺達のことも話したら＜完全なる世界＞の名前になんか反応していたけど。どこかで聞いたのか？

その後沖合いでガトウとタカミチ、それにガミアって奴をグールって飛行機に乗せて分かれた俺達はオリンポス山の隠れ家に向かった。

（ｓｉｄｅマミ）

（＜完全なる世界＞そういえばそんな人たちもいたような…。原作のことかなり忘れてきてるわね。メモッといた方がいいかしら？）

どうやら転生後いろいろあったせいで原作のことはかなり忘れつつあるようだ。

（ｓｉｄｅ紅き翼）

無事に隠れ家に着いて今後のことを考えていた俺達にガトウから通信が来た。

「それでガトウ、姫の行方はわかったのか？」

＜ああ、どうやらアリカ王女は「夜の迷宮」に監禁されているらしい。俺も今からそっちに向かう、救出するにしても早くしたほうがいいだろうからな＞

そこに姫さんがいるのか！なら早速。

「ナギ少し落ち着きましょう」

「そうだぜ、愛しの彼女の行方がわかったからって張り切りすぎだぜ」

またその話か。何回言えばわかるんだよ！

「ラカンの話はともかく無策で飛び込めば姫にも危害が及んでしまうかもしれん。少しは作戦を立てないと」

む、それもそうか。

「一番確実なものは囮を使っい、その間に救出なのでしょうが」

「向こうも奪還されることは予想しているだろうからな。俺達が行っても囮とばれてしまうだろう」

「マミなら我々と関係が無いため大丈夫でしょうが。一人ではさすがに難しいでしょうし。マミ何か案はありませんか？」

「機械獣を使ってもいいけれど下手をすれば篭城されるわね」

「注目を集める意味ではいいかもしれんが、篭城をされると困るな。いくらなんでも攻撃するわけにもいかんし」

「ええ、冷静に対処されては囮ということがばれてしまいかねませんね」

「冷静に…、たしかアレが」

さっさと突っ込んで行けたら楽なんだがなぁ。ラカンなんか出したままの船の中を見に行っちまってるし。ん？何かマミが考えてるな。

「ねぇ。あなた達の中で霧か砂嵐を起こすことができる人っていない？」

「起こすことはできますが。敵の視界を塞ぐものとなるとかなり接近しないと使えませんよ？それでは近づく前に…」

「いえ、敵の近くで起こすのじゃなくて……」

マミが言った作戦に詠春とアル、師匠は唖然として俺と戻ってきたラカンは大爆笑した。

「あっはははは、とんでもねぇな！でも、それなら相手のドギモウ抜けるだろ！！」

戻ってきた、ガトウとタカミチにも話したが何か頭を抱えていたな。

作戦も決まったことだし行くか！

（ｓｉｄｅ夜の迷宮）

「おい、あいつらの様子はどうだ？」

「大人しいものですよ」

ここはアリカ姫と帝国皇女が監禁されている＜夜の迷宮＞その警備兵たちがつめている待機所だ。

「連合の紅き翼はどうやら追い出されたらしいぞ」

「馬鹿な奴らだな。傭兵は傭兵らしく命令どうりに戦えばいいものを」

「まったくだ」

そんな事を話しながら今日も上から命令された王女の監視という暇な任務をこなしつつ一日が過ぎていくはずだった。……あの報告があるまでは。

彼らがその後も話していると突如あわただしい足音と共に1人に同僚が駆け込んできた。

「た、大変だ！」

「どうしたんだ？外に何か見えたのか？」

「あ、ああ。そ、外に！」

「とりあえず落ち着け。竜の群れでも見たのか？」

「はは、そりゃ確かに大変だな」

駆け込んできた同僚に話しかけつつ持ち込んでいた酒を飲んでいると。

「そんなモンじゃねぇ！たぶん１５０Ｍはある巨人がこっちに向かっているんだ！！」

「「ブゥーーーーーー！」」

そのあまりにも予想外な一言にそろって呑んでいた酒を噴出すると問い詰めだした。

「ひゃ、１５０Ｍだぁ、何の冗談だよ」

「全身は見てないんだけど頭部は確認できているんだ。とにかく来てくれ見てくれればわかる。他の奴らも集まってる！」

にわかには信じられないが、とにかく向かってみることにした２人はそこでココにほとんどの兵が騒いでいるところを発見した。

「おいおい、マジかよ」

「誰か望遠鏡を貸してくれ！」

「ほらよ」

「真っ直ぐこっちに来るぞ！」

「嘘じゃないみたいだな」

「違いますよ、これで見てみてください！」

貰った双眼鏡で他の奴らが見ているのと同じ方向を見た彼の目には。

霧のせいで身体は見えないが周りの物から推測すると２０Ｍはありそうな巨大な頭部を持った男がこちらに近づいてくるところが移った。

「マジかよ……」

「船か張りぼてじゃないのか？」

「あんな悪趣味な船があるかよ！」

「張りぼてじゃないぜ、さっき近づいた竜を触手で打ち落としてた」

「そもそも地響きも聞こえるじゃねぇか！」

「足元が見えないのでわからないですけど、頭部の大きさから１５０Ｍは超えますよ。」

「１５０Ｍ以下ならよほど寸胴だろうな」

「顔だけって事は……、すまん忘れてくれありえねぇな」

これが王女奪還のために向かってきた艦隊が装備する鬼神兵ならまだ彼らも冷静に対処できたかもしれないが、鬼神兵ではなくどうにも髪や髭らしき物がある巨大な人間の頭部を持ったものが単独で来ているといったわけがわからない状況のせいで大混乱におちいっていた。

「とにかく！騒いでてもしかたなねぇ。あいつ等を連れて脱出する

ぞ！！軍ならまだ人質と立て篭もってもいいがあんなのと戦ったって意味がねぇ！」

なんとか、冷静さを取り戻した1人が今後のことを言ったがそれは少し遅かった。

「それは困るな。また探さなくちゃいけなくなる」

「な！だれｄ……」

言い終わる前に彼らの意識は深い闇に落ちていった。

（ｓｉｄｅ紅き翼・陽動班）

「どうらや、ナギたちはうまく潜入できたようですよ。向こうは大混乱のようです」

「それはそうじゃろ、こんな物が来るなんて想定しているわけが無いのじゃからな」

「だからこそ陽動の意味があるんじゃないですか」

私が陽動用に呼び寄せた機械獣は１５０Ｍを超える強力な機械獣。では無く１００Ｍ近くあるが建設用で戦闘力は低いタイターンＧ９

とブロッケン伯爵の頭部を模した巨大な顔のブロッケンＶ２シュタイナーだ。

やったことはタイターンにブロッケンを掲げさせてそれがばれないように霧で胴体を隠しつつ接近しただけだ。大きさもそうだがブロッケンＶ２シュタイナーはかなりブロッケン伯爵の、つまり人の顔に近い形なため遠くからだと巨人が接近してきているように見えるのだ。

１００Ｍ超とそれだけでもトンデモナイのに人間のような頭部を持った物体ということが強烈なインパクトを与えることに成功しナギ達の潜入に役に立ったようだ。

「後は、ナギ達しだいね」

成功を確信しつつ私達は撤収準備に入った。

（ｓｉｄｅ紅き翼・突入班）

のんびりしていた所にアレがよほど聞いたのか警備兵は殆どがアレを見に行っていて中はがらがらだった。

「ガトウから連絡だ。あっちは無事に制圧したらしい。油断していたが無駄に大量にいたから苦労したってよ」

「この様子だとほとんどあっちだろうな。マミの作戦は大成功だな！」

「アレだけ俺様を爆笑させたんだ、成功するに決まってる！」

「物凄い目立っているだろうな……」

だな、それにしてもマミもとんでもないが、あんなのが入ってるアーティファクトもトンデモナイな！

「っと、ココだな。まさかここもいないとは」

「楽でいいじゃねぇか」

「鍵もねぇし…オラァ！」　バガン！

「おい！ココも遺跡だぞ？」

「しるか、あいつらが壊したってことにすればいいだろ。っと、よぉ来てやったぜ姫さん」

「遅いぞ我が騎士」

姫さんとついでに居たもう一人を連れて俺達は隠れ家に戻った。

姫さんにもアレを見せてやろと思ったがマミの奴がもう戻してた。

（ｓｉｄｅナギ）

で、隠れ家に戻ってきたんだが

「なんだ、これが噂の紅き翼の秘密基地か！どんなところかと思えば、掘っ立て小屋ではないか！」

「俺ら逃亡者に何期待してたんだこのジャリはよ」

「秘密基地が見たいならサルードを呼びましょうか？アレは秘密基地っぽいわよ」

「何だ貴様、無礼だろう！」

「へっへぇ。あいにくヘラスの王族に貸しはあっても…」

「なにぃ？貴様…」

「まあまあま」

「あのやけに元気な少女が」

「ええ、ヘラス帝国の第三皇女です」

あっちはやけに賑やかだなぁ。

「さ～て、姫さん助けたのはいいけどこっからどうする？連合にも帝国にも、そしてあんたの国にも味方はいねぇ」

「恐れながら事実です王女殿下。殿下のオスティアも似たような状況…。最新の調査ではオスティア上層部がもっとも「黒い」という可能性さえ」

本当に味方がまったくいねぇな。それにしても姫さんの国が一番黒いとは。

「やはりそうか」

ん？あんまり驚いてないな。

「我が騎士よ」

「だからその「我が騎士」って何だよ！姫さん」

俺はクラスでいったら魔法使いだぜ？

「もう連合の兵ではないのだろう？ならもはやお主は私のものじゃ」

な…、どんな理論だよ！これが王族か！！

「連合に帝国、そして我オスティア…。世界全てが我らの敵というわけじゃな」

あらためて聞くと、とんでもない状況だな。

「…じゃが、主と主の＜紅き翼＞は無敵なのじゃろ?世界全てが敵。良いではないか、こちらの兵はたった8人だが最強の8人じゃ。ならば我らが世界を救おう。我が騎士ナギよ我が盾となり」

……へへっ、ココまで言われて答えられないなんて男じゃねぇな。

「剣となれ」

それと、俺は魔法使いだっての。

「やれやれ、相変わらずおっかない姫さんだぜ」

なら、言うことは一つだな。

「いいぜ、俺の杖と翼あんたに預けよう」

世界が敵か、元々世界を操ってる奴が敵だったんだかわらねぇか!

さぁ!反撃開始と行くか!!

大分裂戦争＜完全なる世界＞（後書き）

やっと、紅き翼と合流できた！ついでに久しぶりにブロッケンの能力が役に立ったｗ
大戦編ももうあと少しで終了です！その内、外伝で色々な間の事とかも書けたら良いなぁ…。

次回予告

「反撃を開始した紅き翼。しかし、完全なる世界も一筋縄では行かない相手。６ヶ月の大激闘、そしてついに部隊は最終決戦の地へ！」

次回　真ネギま☆マギカＺ「■■■■」

■■■■（前書き）

今回は短めです
真のサブタイは最後にあります！

■■■■

あの誓いの後、私達は「完全なる世界」に対して反撃を開始した。

といっても相手の全貌は未だに不明なため。彼らが世界に対してちょっかいをかけるのに使う下部組織である武器商人やマフィアの壊滅、私腹を肥やしたり利敵行為をしていた役人を法廷に突き出したりと、外堀を埋めつつ。お姫様たちが連合や帝国内で理解者を増やし味方にしたりといった事をしていた。

もっとも、敵味方の判別や証拠集め、説得は主にアルビレオやガトウと言った紅き翼の頭脳担当に任せていたのだけれどね。ナギとラカンの2人は致命的に向いてないし、私も前世はごく普通の一般人で、転生後も剣闘士と傭兵くらいしか経験が無い。ガミアちゃんや諜報に使えそうな機械獣を貸し出して入るけどもっぱら敵拠点の殲滅が仕事だ。

もっとも、いつも敵拠点に襲撃をかけてるわけでもなかったからナギやラカン、詠春とも何度か手合わせをしてもらった。彼らとの手合わせのおかげで超一流相手にも何とか勝てるようになったかしら？彼らのような使い手との戦闘経験はものすごく貴重ですものね。

そんな戦いが6ヶ月続いた。

そしてついに彼らの本拠地を突き止めるにいたった。そこは意外

なようでその歴史と上層部の多くが「完全なる世界」に染まっていたことを考えると当然とも言える場所。世界最古の都、王都オスティア空中王宮最奥部「墓守人の宮殿」。そこが彼らとの最終決戦地だ。

「不気味なくらい静かだな」

「なめてんだろ。悪の組織なんてそんなもんだ」

私たちがここに居ることは知っているはずなのに未だに動きが無いものね…。

「ナギ殿！帝国・連合・アリアドネー混成部隊、準備完了しました」

こっちの準備は完了したわね。あ、彼女はセラスさんアリアドネーの騎士団の方だ。アリアドネーは中立国の中でも少し特殊な方針で動いていることと、それなりの規模の戦力を持っているので今回、来てもらったのだ。

「あんたらが外の自動人形や召喚魔を抑えてくれりゃ俺達が本丸に突入できる。頼んだぜ」

今まではそっちも自分たちでしていたのだけれど敵は幹部たちと言うこととともう一つ理由があって余り時間をかけるわけには行かない、だから紅き翼全員で突入し速やかに拠点を制圧する必要がある。

「ハッ！…それで、あの…ナギ殿」

「ん？」

「ササ、サインをお願いできないでしょうか」

「おあ？ああ、いいぜそれくらい」

「ふふ、人気者ね」

「そ、尊敬してました」

ふふ、真っ赤になっちゃって。決戦前にこんな事を言える余裕があれば大丈夫かな？あ、連合に交渉に行っているガトウから通信が。

＜連合の正規軍の説得は間に合わん。帝国のタカミチ君と皇女も同じだろう。決戦を遅らせることはできないか？＞

「無理ですね。私たちでやるしかないでしょう」

「すでにタイムリミットだ」

「ええ、彼らは始めています…。＜世界を無に帰す儀式＞を。世界の鍵＜黄昏の姫御子＞は今、彼らの手にあるのです」

「ああ！（待ってろよ…、姫子ちゃん！）」

そうこれが私たちが急ぐ理由と部隊が混成といっても主にアリアドネーの部隊で構成されている理由だ。ただ、彼らの目的は未だに信じられない。世界を無に帰す…、そんなことをしていったい何の意味が？

「よぉしっ野郎ども」

それは彼らをとめてから考えましょう今は。

「行くぜ！」

儀式をとめないと！

混成部隊の人たちがつくってくれた、道を行き私達は無傷で「墓守人の宮殿」内に突入することができた。そしてそこには、

「やあ、＜千の呪文の男＞また会ったね。これで何度目だい？僕達もこの半年で君に随分と数を減らされてしまったよ。この辺りでケリにしよう」

どうやら幹部がそろい踏みね。でも、この人達を倒せば！

数はちょうど同じ、それぞれが戦闘にと突入していった！

（ｓｉｄｅマミ）

「あなたと戦うのはこれで何回目かしらね？」

「ふん、何回だろうが同じだ。貴様は我々の計画成就のためになんとしても潰させてもらう！」

私の相手は髑髏をあしらった頭巾をかぶりボロボロのローブを着た顔色が悪い人だ。ただこの人、顔色は悪いけど身長は３ｍ近くあって戦闘方法もリング状の光を投擲したりそれで直接切りつけてくるなど接近戦が得意なようだ。他にも足元から強烈な風を起こしたり、呪術も使えるようなんだけど。

ただ、私が一番気になるのはこの人のことを見たことが有る気がすることだ。転生後じゃないことは確実だから、前世？でも、こんな人が居るわけもないし。

「さぁ、語り合うのもこれが最後だ！もちろん互いの顔を見ることも！！」

何にせよ今はこの人を倒さないとね！！

その後のことはよく覚えていないが激戦であったのは確実だ。マミさんの魔法によって弾幕をはり、相手は対抗するように呪術で分身を作り多方向からの同時攻撃、マジンガーブレードで切り裂きアトミックパンチで吹き飛ばし、突風で吹き飛ばされたところをリングで切られた、手を掴み至近距離からブレストバーンをおみまいした……、そしてついに。

「はぁはぁはぁ、これでやっと終わりね」

分身を全て倒し片腕を切り飛ばし、残ったもう一つの腕にブレードを刺して縫い付けることに成功した！

「く、やはり！やはりお前は！！このようなところで私がぁ！！」

「恨み言はあの世でお願いね。もっとも、その前に自分たちが殺した大勢の人の恨み言を聞かされるでしょうけど」

止めを討つためにブレストバーンを発射する瞬間に

「このような所で人形共とともに滅びてなるものか！あの御方のためまだ私は！それに貴様は！貴様の力だけは！」

あの御方？まだ他に誰か？そのことを聞きたくもあったが時間をかけて回復されても困る！

「見苦しいわよ。これで終わりよ！ブレストバーン！！」

「がぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！！見ておれ今に必ずお前を…！」

最後まで恨み言を言いながら彼は炎に焼かれて消えた。

「ふぅ、なにか化けて出そうね」

皆は…、いたいた。どうやら皆のほうも終わったみたいね。ナギがリーダの青年を捕まえている。

（ｓｉｄｅ　ナギ）

「見事…、理不尽なまでの強さだ…」

「黄昏の姫御子は…どこだ?消える前に吐け」

こんな状態だってのにまだ余裕面でいやがる。

「まさか君はいまだに僕が全ての黒幕でトップだと思っているのかい?」

「なん…だと?」

なに?まだ上が居るってのか。

バスッ!!

（ｓｉｄｅマミ）

それは一瞬のことだった。突如としてナギが青年ごと後ろから撃

たれたのだ。そして撃った者がいると思える方向を見ると。

……アレは、なに？禍々しいって言葉さえまだ生易しいような。って、まずい！！

アレが、何かを放つ直前ギリギリでナギとの間に入ることができて防御したが。

ゼクトが張った絶対防御の多重障壁をクッキーでも砕くかのように粉砕し同じく防御に入ったラカンの腕を消滅させ盾として掲げたマジンガーブレード―超合金ニューZ―を粉砕し、私たち全員を吹き飛ばした。アレはこちらがもう戦えないと判断したのか姿を消した。おそらく儀式の場所に向かったのだろう。

「く、皆！大丈夫！？」

って、聞くまでも無いわね。ラカンは両腕消失、ナギも撃ち抜かれているから同じく重症だし。詠春だって、ナギを守って攻撃を受けたせいで戦える状態じゃないだろう。

「マミお前は？」

「こんなときは自分の頑丈さに感謝ね。私はあれの後を追うわ。皆は態勢の立て直しを」

「待てマミ！お前一人じゃ無理だ！！おい！！」

わかっているわよ、それくらい。でも、ここで引き返すわけにも行かない。

私はみんなの声を振り切って宮殿の奥へと向かった。

いた！それにしても禍々しい気配ね。さっきより増してるんじゃないかしら？

「ほう、あれをくらってこうも早く追ってくる者が居るとはな」

「ふふ、頑丈なのは私のとりえの一つでね」

実際に防御力は超合金ニューZのおかげで最高クラス。それにソウル・ジェムも付いているから魔力があれば超回復も可能。スパロボ風にいえばHP回復（大）ってところかな。もっともその魔力が今は残り少ないのだけれど。

「はぁっはっはっはっは、なかなかどうして。どうだ、我が元に来ぬか？貴様ほどの力、無為に散らすは惜しいな」

「お生憎、そんな要求は聞けないわね！」

「ならば、死して我の力にしてくれようぞ」

出し惜しんでたつもりは無いけど、全力全開。後先考えずいくしかないわね！

「マジンパワー！発動！！」

体内の光子力エンジンをフル回転させ膨大な光子力をまとっていく。これを使えば切れたときが最後…、正真正銘の最後の切り札。

「む、その力は！！くくく、ははは、はぁっはっはっは！！まさかもう一度その力を見るとは、なるほどそれならば納得できるな。そしてお前はここで我がじきじきに消滅させてくれる」

なに？いきなり笑い出してそれに光子力のことを知っている？…まさか！

「おおかた、奴が送り込んできたといったところだろう」

「まさかあなたは！！」

そんな！よりによってこんな時に！！じゃあ、もしかしてこの儀式の目的って！

「その様子だと聞いているらしいな。よかろう冥土の土産に聞くがいい！我名は！」

「闇の帝王」

■■■■（後書き）

これがやりたいがために短くてあのサブタイになりましたw
次回も短いと思います＾＾；長い戦闘シーンなんて無理です…

ついに登場した大ボスこと闇の帝王様！ハーデスって言ったた時から気がついてた人は多いかな？魔法との相性もよくて兜一族製の魔神の敵ってことでこうなりました。ちなみに今回マミと戦ったのは“彼”です。

設定のときにちょびっと書いてたソウルジェム、しっかり装備？しています。
マジンガー的にパイルダーって感じで丁度よかったりもしたのでw

6ヶ月間のことは後々外伝でしていきたくもありますねぇ。

次回予告
「ついに現れた真の敵、それは使命で倒すべき相手であった。だが、今の状態で勝てるのか…。」
次回
真ネギま☆マギカZ　「決戦」

この次回予告も学園編だと変えないとなぁ。

決戦（前書き）

今回で大戦編は終了！
ちなみに闇の帝王の姿は原作の創造主と同じです。

決戦

（ｓｉｄｅナギ）

「くそ！マミの奴、普段は無茶するなって言っておきながら自分が一番無茶じゃねぇかよ！」

くそ、確かにあいつは強いし傷も浅かったが、だからと言ってアレは魔力が少ない状態でどうこうなる相手じゃねぇぞ！

「アル、お前の残り魔力全部で俺の治癒を！」

「な、いけませんナギ！そんな無茶な治癒では、それにアレはそんな状態で…」

「３０分ももてば十分だ。それにマミの奴だっている」

無茶なのはわかってる。だが、あいつだけ戦わせるわけにはいかねぇ。

「ふふ、よかろう。ワシも行くぞナギ。ワシも傷は浅いほうじゃからな」

「お師匠…」

お師匠も居てくれるなら心強ぇ。

「待てナギ！奴はマズ過ぎる！今までの奴が雑魚に見えるくらいだ。マミを連れ戻して態勢を立て直してだな」

そんなことわかってるよ。だけどよ。

「バーカ、そんな時間残ってねぇよ。らしくねぇなジャック。それに、マミも誰かが来ると信じて先に行ったんだろう」

ならその信頼に答えてやらないと男じゃなぇよ。

ドゴォ！！

どうやらマミがあいつに追いついたみたいだな。なら早くいかねぇと！

「それにな、俺は無敵の千の呪文の男なんだぜ？俺達は勝つ！任せとけ！！」

「ナギ！！」

俺と師匠は全力でさっき爆発が起こった場所に向けて出発した。

マミすぐ行くからな！

（ｓｉｄｅマミ）

「マジンガーブレード！」

剣を振りかぶり全力で彼に切りかかる。

「ふん！その程度」

剣は弾かれたがそのまま次の攻撃を叩き込む！

「ブレスト！」

「させるか！」

く、攻撃を中止して回避をしたためまた距離が開いてしまった。

「ふふふ、どうした？その程度か」

く、やっぱり一筋縄ではいかないわね。さっきから攻撃をあててるけどあまり効いてないみたいだし…。

あの身体から出ている炎。あれが強固な障壁として機能しているみたいだけど。

「我を倒してこの儀式を止めるのではなかったのか？ふふふ、このままでは寝起きの一杯にすらならぬな」

「ええ、例え使命を受けていなくてもあなたは絶対に止めるわ！」

「勇ましいな。なにやら2つの力が近づいてきておるな」

ナギ達かしら？でも、大丈夫なのだろうか…。来る前に見た限りだとゼクトの傷は比較的浅かったけど。

「ふむ、3人なら少しは楽しめるか？ならそれまでに先ほどの貴様の質問に答えてやろう」

「あら、やさしいのね。」

「帝王たるもの下々の者には優しくせねばな。それにこれから死ぬのだ。地獄への土産話も持たせないのでは帝王の名折れだ」

向こうが時間をくれるならその間に回復と攻略法を！

「この騒乱は我が起こしたとかいっていたな。残念ながら我はつい最近まで眠っていてな。この器の元々の持ち主がやったことだろう。儀式の目的は大方の見当は付くがな」

「あら、そうなの。その身体の持ち主はあなたのことを？」

「知らぬよ。その必要もないのでな。だが、この儀式を利用すれば我もある程度の復活は可能か。そこは褒めてやらねばな、ふはははははは」

絶対に彼を倒して儀式を止めればいけないわね。彼が復活するなんて悪夢以外の何者でもないはね。

「もっとも、アヤツ等も少しは何かやっていたようだがな」

ん？何か違和感が…。「完全なる世界」の事じゃなさそうだし。

「アヤツ等？」

「我がミケーネは滅びてはおらぬと言う事だ。さて、土産はこれで十分だろう。今から来る２人には持たせてやれぬが我と直接顔を合わせただけでも名誉だ。貴様は１人で来た褒美だ。せいぜい自慢する事だな」

な…、ミケーネが滅びていない！？それはいったい…。

「マミ！無事か！！」

「ナギ！それにゼクトも！」

「全く無茶をしよる」

疑問は後だ！今は全力で立ち向かうしかない！！

「ふふふふふ、さぁ楽しませてもらうぞ！」

ゼクトにはサポートに回ってもらい私とナギ２人で切り込んだ、威力の低い攻撃は相変わらず炎によって防がれているけれど、３人になった事で炎の防御を突破できる攻撃を放つ隙を作る事ができている！

「ち、３人だとさすがに厄介だな」

「どうしたそんなものか！」

「あまり調子に乗るな！」

「く！」

「ナギ！ブレストバーン！」

「ぐお！」

これなら勝てる！

「マミ！デカイのいくぞあわせろ！！お師匠！」

「任せろ！マミお前はナギに合わせろ」

ナギは千の雷の詠唱に入り、私に変わってゼクトがあいつに攻撃を仕掛け気を引き付けているうちにグレートの最大攻撃の準備に入った。

「ちぃっ！ちょこまかと」

「余裕ではなかったのか？油断しすぎじゃな」

全くそのとおりね！でも、そのおかげでこっちは戦えてるのだから。ゼクトも離脱した！ナギのほうは詠唱を完了したみたいね。私もエネルギーのチャージは終わってる！

「千の雷！」

「ダブルサンダーブレーク！」

２つの巨大な落雷が闇の帝王を襲った！２つの巨大な雷は互いに影響しあい威力を高めた結果。それは最早、雷ではなくプラズマの塊だ。温度がどうなっているのか見当も付かない。

でも、これなら！

「やったか！」

ナギもこの光景に相手の敗北を予想したみたいだ。……だが、相手の力はそれ以上のようだった。

闇の帝王を焼いていたプラズマが巨大で禍々しい炎で吹き飛ばされ、その中から無傷で出てきた。

「ふふふ、今の攻撃はなかなか危なかったぞ。確かに油断をしすぎたようだな。だが、もうそれも終わりだ。我にはまだやらねばならぬ事があるのでな、貴様らの地獄への土産も十分だろう」

く！本当に最近まで眠っていたのかしら？ここまで強大だなんて。

「ナギ、後どれくらい戦える？」

「もう余り魔力も残ってねぇな。でかいのを１発２はつって所か。お前は？」

「私よりはいいわね。私は出せて１発かしら？それに…」

マジンパワーも、もう維持限界だろうこれが切れたら非常にまず

い。

どうやって彼をしとめるか…。再度先ほどの攻撃を仕掛ける…、駄目だ出力不足だろう。光子力ビーム…、おそらく防御を突破できるだろうがそう易々とくらってくれるか。それにあの炎を完全に吹き飛ばすには出力不足だろう。

く、まずいわね。光子力ビームなら何とかなりそうだけど、命中して防御を突破、なおかつあの炎を吹き散らせれるか。ダメージを与えられてもあれがあったらナギの攻撃が通らない。私が何とかしないと！

あの炎を完全にかき消すとなると光子力じゃないとまず無理だろうし、そうなると…。

はぁ、こんな手しか考えつかないなんて。もっと、修行をしていれば良かったわね。今更ではあるか。

「ナギ、今から私が全力で彼に攻撃をかけるわ。障壁を完全に消せるだろうから私に何があってもかまわず彼を倒して」

「マミ？」

怖くはある、いやものすごく怖い。できれば今すぐに逃げ帰りた。でも、そんなことをしてどうなる？私が逃げればナギとゼクトは負けて死ぬだろう。そうなると儀式は止まらない、魔法世界は無に帰すだろう。転生してから知り合った人たちも…。

それに彼を野放しにすればきっと向こうの世界も無事ではすまない。第3次世界大戦が勃発する可能性だって、いやもしかしたら北斗の〇の世界になるかもね。

逃げたところでどうにもならない、それに今ならナギがいる。彼ならきっと…。

なら後は、私がするべきことをするだけね。まだ怖いでも逃げて後悔するほうがもっと怖い！

「光子力エンジン、フルドライブ！！行くわよ！」

「む！まだそんな力が！！」

残っていたありったけの力を全て光子力エンジンに供給し膨大な光子力エネルギーを放ちながら私は闇の帝王に向かって突っ込んだ。

「じゃぁね、ナギ」

「く！はなれろぉ！」

闇の帝王に抱きつき溜め込んだ膨大なエネルギーを解き放ち。私の意識はなくなった。

（ｓｉｄｅナギ）

「私に何があってもかまわず彼を倒して。」

「マミ？」

そんな、ことを言ったあと、アイツは膨大な力を感じる光を身に纏って敵の親玉に突っ込んでいった。

その力から何か大きなことをする事は想像がついたが漠然とした不安が湧き上がってきた。

そしてその不安は現実のものとなった。

「じゃぁね、ナギ」

その言葉と共に敵に掴みかかったマミは膨大な力を解き放って、敵諸共自爆した。

「マミィィィィィ！」

「な！なんてことを…。じゃが、ナギ！」

「おう！」

悲しんでいる暇なんてねぇ！そんなことをしてたらマミのやった事の意味がなくなる。俺はありったけの魔力を、後先考えない全力の１発を敵がいるだろう場所に向けて撃ち込んだ！

決戦（後書き）

真ネギま☆マギカZ　　完！！

嘘です。すいません…。
ううん、文才が欲しい。もうちょっとかっこよく書けたらいいんですけど今の私の文才ではこれが限界です…。グレートもあんまり活躍させれなかったなぁ。

次回はまたゼウスとの語らいと帰還です。
その後、何話かしたら麻帆良学園行きです。
主人公設定も整理をかねてちょこっと載せます。
設定の不備等、気がついた事があったらどうぞ遠慮なく言ってください。
大戦期の外伝のネタも募集中ですw

帰還と新たな決意、新しい仲間（前書き）

新章開始です！

帰還と新たな決意、新しい仲間

「ここは？」

周りを見ると古代ギリシャをほうふつとさせる部屋が見えた。

確か私は敵の最後の拠点に乗り込んで……。

そうだ！敵の親玉が闇の帝王だったんだ。それで、何としても倒そうとして私は…。

「あの後どうなったのかしら。ナギは勝てたのかな。…いいえ、ナギならきっと勝ってるね」

彼ならきっと大丈夫だろう。

「それにしてもここはどこかしら？あんな事をしたんだから死んだと思うんだけど、転生したときの場所とも違うみたいだし。それとも天国ってこんなところなのかな？」

と、疑問に思っていると。

「おお！目が覚めたか！あれから全く目覚めぬので心配したのだぞ」

この声は。

「ゼウス様！」

「ゼウスでよい。」

「そんな「かまわん」わかりました」

彼が居るってことはやっぱり。

「ここはやっぱり…」

「まて、色々と話したいことがあるがまずは」

言葉を途中で切り彼は私の前に座りそのまま手をつき私に向かって。

「すまぬ」

謝罪の言葉をかけてきた。

「私の見込みが甘すぎたようだ。アヤツの力が年々増している事はわかってはいたが、まさかあそこまで力を取り戻しているとは」

「いえ、確かに驚きはしました。でも、闇の帝王の復活が早まった原因は私たち、人間にあります。ゼウスさんの想定を上回ってしまうほど彼に力を与えてしまっていたのでしょう」

闇の帝王が設定どうりならその力の根源は憎しみや絶望のはず。つまり、2度の世界大戦やそのほかの人間社会がつくってきた闇が彼に力を与えて、ゼウスの想定を超えるスピードで力を蓄えてしまったのだろう。

「闇の帝王それが今の奴の名前か。なるほど、奴に相応しい名だ。だが、私の見込みが甘かった事は事実だ。それに他にも謝らねばならぬ事もある」

「他ですか？」

「ああ、以前に本来の体の話をしたね」

そういえば今（前？）の身体は仮だったわね。

「その身体はとある遺跡に封印してあったのだ。君が力をつけたときに場所を教え、自力で得てもらうために。だが…」

嫌な予感がするなぁ。

「あの戦いの後、その遺跡が荒らされ身体の行方が分からなくなってしまったのだ。本来の持ち主以外に操れはせぬとはいえ…」

「彼がミケーネは滅びてはいないといってましたが、やはり協力者が？」

「そのようだ、すまぬ。あの身体はオリジナルだから私から与える事ができなかったとはいえ」

「あの後どうなったか。教えてくれませんか？それと私が今どんな状態なのか」

死んでしまったのならもう1度転生するのだろうか？

「そうだな」

それから、色々と話してもらった。ナギが勝った事、無事儀式が止められた事、そのせいでアリカさんの国が滅んだ事、アリカさんが捕まった事、ナギに助け出された事、今は闇の帝王の力がごく微弱なものだという事、あれから１０年の時間が過ぎている事。

そして…。

「マミ、お主は生きている」

「え？」

生きている？そんなどうやって、あんな事をしたんだから死んだと思っていたけれど。

確かに嬉しいが、余りにも意外すぎて。驚きと疑問のほうが大きい。

「運が良かった。そうとしか言えぬな」

そうつぶやくと当時のことを話し始めた。

「あの戦いは私も視ていたのだ。自分の不甲斐なさ、いってお前たちを助けてやれぬこの身の無力さに嘆いていた。お主が命を持って、

勝利するための道を作った時など特にな」

戦士である彼には悔しかったのだろう、顔がゆがんでいる。

「だが、無事封印も終わったとき、ふとお前の力を感じたのだ。その後は無我夢中だったな。ようやく調整が終わったお主のサポート役をすぐに派遣し捜索させ、何とか発見できたのだ」

サポート役か、どんな子なんだろう?そしてすごい不安を感じるのも何故だろう??

「見つけたお前は頭部だけでその状態も酷いものだった」

頭部だけってことは、爆発のときに偶然外れてしまったのだろうか?ブロッケンボディーに命を助けられるときが来るなんてね。

「魂を封じた器も損傷していたからな。そのものに安全な場所まで運び込み目覚めるまで守れと命令し。お主の魂はこの場所に召喚し力を注ぎ回復を促したのだ。それでも目が覚めるまで10年も掛かってしまったがな」

ソウルジェムまで損傷していたなんて…。本当に運が良かったのね。でも、身体はどうなっているのだろう?あっちは確実に爆散したはずだし。

「身体の事か?安心しろちゃんと用意してある。といっても以前の身体を強化したものなのだがな。あのときの身体は奴の力の大部分と共に散ったからな」

グレート時のZってことかな?グレート、今までありがとう。そ

して、おやすみ。

「あのような事になってしまったお主には辛いと思うがどうか奴を止めてくれ。今回の事でわかった、奴は封印などといってられぬ。例え再び封印したとしてもいずれまた復活するだろう」

そうね、ゼウスがどんな封印をしたのかわからないけど。それさえも破って復活しかかっているのだ。今の人間の封印術じゃ、またすぐに復活してしまうかもしれない。

「奴とはかつては仲間であった。考えの違いから対立し封印する事態となったが。封印されているうちに考えを改めるかと思ったが、それもかなわなかった。もやは奴をあの世界に残しておくわけにはいかん！」

改心してくれると信じていたけど、時間がたっても。いえ、年月を経た事でよけいに性質が悪くなってそうね。

「奴の封印されている地、奪われた身体、そして奴自身の力。これがどれほど困難な事かはわかっている。だが、どうか再びあの世界に行って奴に引導を渡してくれ」

その後も封印の地であるバードス島の状態を聞いたりした。確かに無茶なお願いね。完全な状態じゃなくてもあれだけの力を誇ったのだから。なのに、彼に終止符を討つには彼の本体とも対峙しなくてはいけない。

そのとき身体に魂が有るか判らないが前回とは比較にならないだろう力なのは容易に想像が付く。

逃げてしまいたい、そう思わなくもない。

…でも。

「わかりました。次こそは必ず彼を倒してみせます」

もう決めているものね。ここで逃げているのならばあの時あんな事はしてないもの。

「すまぬ…」

でもそうなると、色々と準備をしなくちゃね。彼の詳しい情報も必要だし、何よりこれは1人でできる事じゃない。彼に本当の意味で終止符を討つなら大勢の、いえ世界規模での協力者がいるわね。

「いえ、私がやりたいのです。やらせてください！」

「わかった、私もいろいろと協力したいのだが干渉できる時は限られている。サポート役を介して少しは協力できるようにしよう」

「ありがとうございます。それで早速なのですが彼についての情報が欲しいのですが」

「わかった、と言いたいのだが封印後の奴の情報は少なくてな。だが現在奴が活動するために奪っている魂の事ならわかる」

「奪っている魂？」

「ああ、詳しくはわからぬが、今奴の精神が取り付いているのは向こうでは＜始まりの魔法使い＞＜創造主＞と呼ばれるものだ」

創造主、それが本来の完全なる世界の首領だったのかしら？

「大方偶然バードスにたどり着いた者に魂に寄生する代わりに力を授けたといったところか」

色々調べる必要がありそうね。

「わかりました、残りは向こうに行ってから調べてみます」

「すまぬな。協力すると言っておきながら…。体の事と奴の行方はこちらでも調べてみるわかり次第連絡を送ろう」

でも、彼の復活の原因を考えるとこれは私たちが解決しなければならない事だろう。

「では、あの世界に送ろう。サポート役はすぐ側に居る。仲良くしてれ」

楽しみね。それに、心配をかけてだろう皆にも顔をみせないとね。それに対峙する時のために修行もしないと。忙しくなるわね。

「ではな。武運を祈る！」

今回はアレはなかったわね。とくだらない事を思いつつ私は帰還して行った。

「ここは」

目が覚めて周りを見渡すと始めてこの世界で目が覚めて時のような石造りの部屋だった。

「戻ってきたのね。なら、早速行動しますか。あ、そういえばサポート役の子は？」

気合を入れて立ち上がり、周りを見てみると。

「やぁ、目が覚めたみたいだね」

「あ、そっちなのね…。え？」

振り向いた先そこには身体の大きさは猫くらいで可愛い顔にルビーのような綺麗な紅い目を持ち、その身体は純白の毛で包まれていて声もかわいい小動物がいた。

でも、これって…。

「僕の名前は“キュゥべえ”聞いていると思うけどゼウス様から君のサポートをするように言われているよ。これからよろしくね。」

何でキュゥべえ！君どっちかって言うと闇の帝王側じゃない？

あの時感じた不安ってこれか！

私がものすごく不安そうにしていると。

「あ、心配しなくてもあのインキュベータみたいに実は黒幕ってことはないから。だから闇の帝王が送り込んだスパイじゃないから安心してよ」（まんまじゃ面白くないからね！ｂｙ作者）

それならいいのだけれど。あと変なコメントも入ったような…。

「ごめんなさい。いきなり失礼な事を思っちゃって」

「いやいや、彼の事を知っているならしょうがないさ。じゃぁ、改めてよろしく」

「ええ、これから一緒に頑張りましょう」

妙な事になったけど私はまた帰ってきた。そして今度こそは彼を必ず倒そう。

私は決意を新たに外へと踏み出した！

帰還と新たな決意、新しい仲間（後書き）

主人公帰還と彼登場ですｗ

主人公の真の身体、伝説の剣よろしくダンジョンに隠してたら魔王一味にぱくられたでござる。

その他、創造主がああなった過程とかは後々書いていきます。

で、サポート役は彼ですｗ彼にも色々暗躍させようかなぁ～とｗ

次回は設定です。

人物設定（前書き）

主人公とその他の設定です。

人物設定

主人公

名前　巴マミ

かつての身体は大戦時仲間を救うため爆散。現在は一番初めの身体をパワーアップしたもの。グレート時の強化したZと思ってください。

グレート時からの変更点で。

マジンガーブレードなし。（アイアンカッターもない）

サンダーブレークの機能なし。

各兵装の出力が若干ダウン。

スクランブルダッシュがなくなり、飛行するときは1回1回スクランダーを呼び合体する必要あり。付けたままでもいいが日常生活や接近戦では邪魔になる。

身体自体のパワーや防御力には変化はなく、ブロッケンの機能やマミさんの魔法も問題なく使用可能。

足裏の光子力ロケットで瞬動まがいの移動法も習得。

アーティファクトも健在、あしゅら達もいるけど当分ガミアQくらいしか出番はたぶんでない。

強さは紅き翼クラス。ラカンの強さ表でいくと1万とかそんなくらい。

打倒！闇の帝王。のために修行をする事を決意、また協力者を増やす事も画策中。

あしゅら

マミの副官的存在。

機械獣時は顔はあしゅらのモノだが体はミネルバXとあしゅらマジンガーがあしゅら状態になっている。出力は低いがマジンガーの武装を使えること、人と同じく思考することが出来るため最強の機械獣の1体である。

人間大の時はあしゅら男爵と同じだがそれなりに戦闘力は高い。

キュゥべえ

ゼウスが主人公のサポート役に遣わせた白くて憎いアイツ。

闇の帝王の手先じゃないのでご安心を。

でも、基本的な性格はアレッぽくする予定ｗ

カモ君のライバル。

蜂の巣にされてもすぐに蘇る。

闇の帝王（旧名ハーデス）

ミケーネ帝国の支配者

かつてゼウスと意見を違え戦った後、居城であったミケーネ島ごと封印された。

その後、色々あって原作の創造主に寄生。復活のために力を蓄え、ついに復活！…って、ところで主人公と紅き翼にやられて弱体化。

その後、創造主として振舞っていたがまたナギ達にやられて現在は原作の状態です。

ちなみに闇の帝王やその他の話はマミにしかしていなく彼女も話す前に行方不明になったので原作キャラ全員は現時点では闇の帝王のことを知ってません。

完全なる世界の面々も同じく、彼のことは原作と同じ創造主と思っ

てます。

ミケーネ

大戦編で最後のほうに何かやってた人たち

かつてのミケーネ帝国の末裔で闇の帝王復活を悲願として活動中。
周りからの認識は完全なる世界の下っ端と思われている。

現在はとある計画を実行中。

バードス島

闇の帝王の居城で彼の本体があるところ。現在は封印されてます。

人物設定（後書き）

学園編はギャグ主体で行く予定です。
また、学園編、魔法世界編はネギ君を主役として主人公はマミさん的皆のお姉さんなポジションで行こうかなと。

麻帆良へは数話後に出発かな？

では、最終回まで頑張っていきます！
マジーン・ゴー！

再開の旅と騒動と（前書き）

やっとネギ君登場！

再開の旅と騒動と

「それでマミ、これからどうするんだい？」

「そうね。闇の帝王の事とかやらなければならない事はあるけど、まずは紅き翼の皆のところに顔を出さないとね。他の皆にも帰ってきたことを言わないと」

肩の上のキュゥべえに今後の予定を話しつつ近くの町に足を向けた。

あんな分かれ方をしたんですもの。無事を知らせてあげないと。ふふ、皆びっくりするだろうな。

その後、チョッパーやラリーさん達に無事を知らせる挨拶をしながら紅き翼の事を聞いていたら。フラガさん達のところに顔を出したときにラカンが近くにいるらしいことを聞いて、現在そのいるらしい場所に向かっているところだ。

「皆の話だとこのあたりね」

「だね、それにしてもすごかったね。どうやら君は慕われているみたいだね」

「行く先々で宴会が開かれちゃったものね。でも、嬉しいけどそれだけ心配をかけてたってことだからちょっと申し分けないなぁ」

「君は謙虚というか何と言うか。…っと、あれじゃないかな？」

前方にオアシスが見えてきた。たぶんあれだろう、私は足を速めて目的地に急いだ。

「誰もいないわね」

着いたのはいいけど、そこには家やイスなどはあるのだけれど目的に人物が見当たらない。

「君の話からすると居る事に気がつかないようなおとなしい人物じゃないだろうから、街に行ってるんじゃないかな。食料もないからそれの調達だね」

「そうね、寝ていたとしてもすぐわかるような人だし。…って、キュゥべえなに勝手にのぞいてるの」

「ここが使われているか判断するためさ。当然だろ?ゴミとかもあるしここが別荘ってことはなさそうだね。ゴミも比較的新しいみたいだし」

確かに別荘かどうかとかは調べたほうがいいだろうけど、人の家なんだから。…なんでこんな所はあのQBと同じで人の感情とかを横に置いたような行動するんだろう?

「ここを第3者に見られたら思いっきり泥棒みたいでしょうね」

「おい!人の家でなにやってるんだてめぇら!」

「そうそうこんな感じに……え？」

何か早速そんな事態にそれにこの声って。

「ふてねぇ野郎だ。だが俺様の家に侵入したのが運のつきだな。ってことで行くぞ！」

「え！ちょ…！ラカン、私よ！！」

「俺の知り合いにこそこそする奴はいねぇ」

その後、数時間ほど戦い何とか誤解が解けた。というより彼、途中から私だって気がついていたわね。だって…。

「マミ！生きていたのかよ！」

「ええ、だから…」

「あれから１０年くらいか？どこに居たんだよ心配させやがって」

「だから。それを…」

「こうやって戦うのも久しぶりだな！宴会の用意はしてねぇからこれがそれの代わりだ！」

「だから、人の話を聞いて！」

と再会祝いの代わりで延々と戦うはめになって…。

昼くらいに始まって、終わったときにはもう夜だった。それで。

「いやぁ、それにしても懐かしいなぁ。生きてたんなら知らせろよ！」

「ごめんなさい。でも、それだけ酷かったのよ。つい最近やっと動けるようになったのだから」

「そうか、ナギの話をからすると生きてる事自体奇跡とも言えるか」

あのあと何があったのか、１０年の間完全なる世界を追っていた事。そして…。

「そうナギとガトウが…」

「ナギのほうは生きちゃいるとは言え、な…。だがあいつはその選択に後悔してねぇよ。それは確実だ。向こうの詠春たちにも会いに行くんだろ?その前にガトウの墓にもいってやってくれ」

確か原作でも死亡や行方不明ってなってたわね。でも、やっぱり知り合いがそんな事になるとわかっていても辛いわね。

詠春は京都か。アリカさんはナギの故郷のウェールズに向かったみたいだし、麻帆良ってところに居るアルとタカミチ君、アスナちゃんはその後になるかな。クルト君にも会いに行かないとね、それ

にしても元老院議員を目指すなんてすごいわね。

「それにしても闇の帝王とミケーネ帝国か…」

「ええ、おそらくそれが創造主の真の正体と完全なる世界の裏に蠢いている組織よ」

闇の帝王の事やミケーネの事もゼウスの事は少しぼやかしたが今もって居る情報は全部話した。ナギがその身を賭して封印したとは言っても、相手は神がかけた封印を破ってくるような相手だ。

いずれ復活してしまうだろう。ならば何年後かを目安に封印を解除してナギを救出し今度こそ完全に倒してしまう。今はまだ戦力が足りなく困難だろうが必ず実現してみせる。

その後夜を明かして語り合いラカンからクルト君に連絡を入れてもらい、私はメガロに向かった。

「マミさん！生きていたんですね！！」

「ええ、心配かけたわね。それにしても大きくなったわねクルト君」

クルト君も完全なる世界撲滅に動いているみたいだがそれと同時に大戦後に貶められたアリカさんの名誉の回復のために動いているみたいだ。

ミケーネ帝国のことについては協力を是非させてくれって言われた、議員の中でもまともな人に話して協力者を増やすつもりのようだ。

ヘラスのテオドラさんにも期を見て連絡を取るつもりのようだ。私自身が訪ねたいけれど最終決戦時にに死亡したって事になってるし、それに１０年たっても容姿が変わってなかったりで…。

そんなわけで生存報告とあわせて話してもらうことにした。そのあとはクルト君の職場での愚痴を聞いていた。汚職がどうの…、本当に世界のことを考えてるか！とか…。

「それに最近報告で魔力の減少が例年よりおおいとか…」

そのときは大変ねぇ。と思っていたが後でまさかあんな事になるなんて。

クルト君は明日も仕事のようだったから夜明かしでって事はなくほどほどのところで分かれた。

イギリスへのゲートは2週間後になるらしくまた向こうの世界の年は１９９４年みたいだ。

９４年かぁ～確かとんでもない事件が日本であったような…。

ガトウさんのお墓にお参りをすませ、ゲートの時間までメガロの

街中を見て回っていたて終戦１０年以上たったせいかそれ関連の書籍がいろいろあったので少し買ってみた。

「これが大戦や紅き翼の記録かい？そのわりには君の事があまりないようだけど」

そう、自分の事はどうなってるかなぁ。と思って買ってみたが…、あんまり書いてなく地味にショックを受けていたりする。

元々紅き翼が連合で活躍していたせいかナギの事はよく書かれてあるのだけれど。帝国で活動していてしかもその時は機械獣のほうが目立っていたせいもあって、私の事は途中で合流した協力者その１って感じだったりする。

最終決戦の事はちょびっとと載ってはいるが居たのは紅き翼の皆だけだったせいで詳しくは載ってなく、勇気ある人物がいいところだ。

結果資料不足や知名度の影響でちょこっと書かれているくらいだった。写真も戦後の撮られた物が多いから私の写真はなかったし…。帝国では違う事を祈りたい。

別に英雄としてもてはやされたいわけじゃないけど、仲間との差がここまであるとさすがにへこむ。

「君たちは何でそんなことに囚われるのかなぁ？結果さえよければそれが誰がやっても同じだろうに」

キュゥべえのそんな声を聞きつつその日は不貞寝した。

ゲートをくぐり久しぶりであり、転生後は始めてのこちらの世界に来た。イギリスの地だから全てが初めてではあるけど、なんとなく懐かしい気分にはなった。日本だとどうなるのだろうな。私的にはここって過去の世界になっているわけか。

感慨にふけっているのも程ほどにしてアリカさんがいるらしいナギの故郷に向かったが…。

「そうですか、彼女はもう…」

「ええ、自分がここに居てはあの子に迷惑がかかるからと…」

彼女が身篭っていた事は聞いていたが、まさか行方をくらませているなんて。確かにあの戦いの後のことは聞いているが…。

村の人に行方を聞いても皆知らないようで、ここで情報がないならおそらく見つけることは困難を極めるだろう。

アリカさんにあったら日本に行こうと思ってはいたのだけれど、ナギの子供のネギ君の事を聞いて暫く滞在することを決めた。子供一人という事ということが心配だしね。

「ネギの事ありがとうございます。本当なら私が側に居たらいいの

ですが…」

「気にしなくていいわよ。それにあなたも子供なんだから大人の私たちに任せて置けばいいのよ。魔法学校の勉強だってあるんだから」

「はい、でもマミさんが言うと説得力は余りないですね」

「ふふ、褒め言葉としておくわ」

この身体って歳を取らないっぽいのよね。嬉しい事なのだろう…たぶん。まぁ、それプラスに日本人って事でさらに幼く見えるみたいなのだが…。

あ、ちなみのこの子はネカネ・スプリングフィールドネギの従姉妹に当たるらしい。

「もう少ししたらネギも魔法学校に入学できる歳ですので、そうなれば向こうで暮らす事もできます」

「そうね。そうなれば私が居なくても大丈夫かな?」

「やっぱり日本に?」

「ええ、昔の仲間も居るみたいだからね」

「寂しくなりますね…」

「そうね、でも二度と会えなくなるわけじゃないんだから。大昔と違って電話もあるし飛行機だってある。寂しくなったらまた会えばいいのよ」

私はそれにプラスして裏技もあるしね。

「ネギは今、アーニャちゃんと？」

「ええ、アーニャちゃんも久しぶりにあえて嬉しいみたいですし」

トントン

「噂をすれば帰ってきたかな？」

「そうですね、もう夕飯の時間ですし」

そんな感じで私がネギ君の面倒を普段は見て１ヶ月に何回か帰ってくるネカネちゃんと世間話をしたり、ネギ君にナギ達の事を話せる範囲で話したりする日々を過ごしていたある日。

「ねぇ、お父さんと会えないってどーゆーこと？」

どうも誰かからナギが死んだ事を聞いてしまったらしい。

「お父さんとーくにお引越ししちゃったの？」

む～、ここはネカネちゃんに任そうデリケートな問題は苦手だし…。そこ！ヘタレとか言わない。

「そうね、遠い遠い国に引っ越しちゃったの。それが＜死んだ＞っていうのはそういうことよ」

ちなみにキュゥべえはさっさと退場してもらった。彼が居たらドストレートに言っちゃうだろうからなぁ…。

でも、ナギの事か…、ネギ君のためにも絶対に何とかしなくちゃね。

「お父さんは来てくれるもん！」

「あんた馬鹿ね！死ぬって言うのは…！」

ありゃ、ちょっと考え事していたらなにやらアーニャちゃんと喧嘩しちゃってる。

「はいこれ。あなたにあげるわネギ」

「これは？」

「初頭魔法の練習用の杖よ。あんたも来年から魔法学校に来るんでしょう？」

あら、もう仲直りしちゃってる。アーニャちゃんも素直じゃないなぁ。

帰る前に何か暖かいものを飲もうと思って村のパブに寄ってみる

と。

「スタンさん、こんにちは」

「おお、マミ達か」

この人はスタンさんっていて昔ナギにいろいろ苦労させられたみたい。

「全くあいつがいなくなってせいぜいしたわい。あいつには毎日苦労かけられたからな！」

「飲みすぎですよスタンさん」

もう、ネギ君だっているのに。

「お父さんは悪い人だったの？」

「ああ、悪ガキじゃったわい。あいつの後始末を何度させられたか。村が巻き込まれた事だって…」

まぁ、間違っても品行方正じゃなかったわねぇ。

カランカラン

「あ、ネギ！すいませんマミさん、私…」

「ええ、追いかけてあげて。私はもう少ししたら戻るわ」

「じーさん、もっと言い方ってもんがあるだろ？」

「ふん事実じゃわい」

「それにしたって相手は子供なんですから。いくら寂しいからって…」

「誰があいつのことを寂しがってるんじゃ！あんな子供と奥さんをほったらかして死んじまった奴なんて…」

ふぅ、この人も意地っ張りね。

でも、私のときも皆こんな感じだったんだろうか？私も人の事言えないわね。

その翌日、ネカネちゃんとアーニャちゃんが魔法学校に帰っていって。またしばらくは私とネギ君の2人だけの生活だ。

ネギ君もナギの絵を描いたり魔法の練習をしたりしている。

（私が魔法を見てあげれたら良いんだけど、この身体、魔法どころか気すら使えないみたいだからなぁ）

何回か試したり大戦中に皆と模擬戦や修行をしたときにもぜんぜん使えなかったのだ。

（当たり前だよ。君の身体はゼウスの身体を元につくったもだ。この世界の法則で創られているわけじゃないから使えなくて当たり前

だよ）

キュゥべえから回答がいきなり来た。なるほど、私の身体はいってみれば神のイミテーションだから人間用の技術は使えないって分けね。

それはいいとして、しょうがないとは言えアリカさんのことをネギ君が全く知らないってのは…。アリカさんの現在の評判を考えればしょうがないんだろうけど。いつか教えてあげたいな。

そんなこんなで毎日が過ぎていったあるとき。

「ネギ君がいたずらを？」

「ああ、木から飛び降りたり、犬の鎖を切ったりしてな。まったく似なくていいところが似てしまって」

「いやいや、あれくらいの年頃の男ならそんなものでしょう。元気があっていいじゃないですか」

「私のほうからもそれとなく言ってみます」

「ああすまんな」

ネギ君がいたずらをねぇ。そんな性格じゃないと思ったのだけどこういうのものなのかな？転生前は男だったとはいえ記憶も感覚もほとんどないからなぁ。

とりあえず、注意して様子を見ましょう。

ん？前から物凄く慌てた人が…ってネギ君！

その人の背にずぶぬれで酷く弱ったネギ君が背負われていた。

どうやら少し遅かったみたいね……。

その後、ネカネちゃんも飛んできたりと大騒ぎになっり今は状態も落ち着いてネカネちゃんが側に居る。

「はぁ、面倒を見るって言っておいてこんなことになるなんて」

もう少しネギ君の事をしっかり見ておかなきゃいけなかったわね。

「いや、お前さんは頑張っているよ」

「スタンさん」

「お前さんが悪いのなら、この村全員が悪いってことじゃ。本来な

ら村人全員で見守り叱ってやらねばいけないんじゃ。それをあの馬鹿や彼女が親なことを理由に今まで大丈夫だろうと甘えていたんじゃろうな」

しばらくして、ネギ君が寝たようでネカネちゃんが出てきて話しているとと

「ピンチになったら現れる、ね…」

「ええ、それであんな事を」

「ネギ君にとってナギはまさにヒーローですものね。わかったわ。もう反省して大丈夫だとは思うけれど、これからは目を離さないで置くわ」

「すいません、いつもいつも」

「いいえ、今回の事は私が悪いわ。ネギ君がいろいろいたずらをしていたみたいだからね。もっと早く聞いておけば防げたかもしれないのだから」

「ありがとうございます」

それからはネギ君がどこかに行くたびについていくようにして、行けない時はキュゥべえに頼んで様子を見てもらっている。

そんな日々がすぎて、ネカネちゃんがまた帰ってくる日が来て、今日は近くの湖に釣りに来ている。

「ネギ君、そろそろネカネちゃんも来る頃だし帰ろうか？」

「あ、そうだね！じゃあ、はやく帰ろうマミお姉ちゃん」

「ええ、＞ピピ＜あら何かしら？ごめんねネギ君、先に帰っていて私もすぐに行くから。キュゥべえ彼のことよろしく。」

「わかったよ、マミ」

「うん、マミお姉ちゃんも早く来てね」

彼らを見送ったああと通信相手を見てみるとクルト君だった

「クルト君から来るなんて珍しいわね？」

そう思って繋いでみると。

＜よかった！つながった！＞

「どうしたのそんなに慌てて」

＜それがついさっき元老議員の１人がネギ君を殺すために悪魔の大群を召喚して送り出したそうなんです！＞

「何ですって！」

＜今どこに居ます！？急いで彼の保護を！＞

「それなら大丈夫、今ちょうどそのネギ君の居る村に居るわ」

＜おお！なら早く！聞き出したのはさっきですが送り出したのはだいぶ前のようです！＞

「わかったはそっちもよろしく！」

＜ええ、必ず裁いて見せます！＞

く、こんな事なら先に行かせるんじゃなかった！最近、やることが後手に回ってばかりね。

「来てスクランダー！」

その掛け声を受けてどこからともなく紅の翼を持った物体が飛来してきた。

「スクランダークロース！お願い、間に合って！」

合体し全速力で一路村に向かった。

「く、酷い」

着いたときには村は火の海で包まれていてすでに何人もの人が石

になっていた。

＜キュゥべえ！ネギ君は！＞

＜彼の事は任せて君は敵を。でも、急いだほうがいいよ。今にも走り出しそうだ＞

＜わかったわ。あなたはそのままネギ君をお願い。村人もそっちに非難させるわ＞

キュゥべえとの通信を切り村を見据え。

「一気にいくわよ！」

久しぶりにアーティファクトを呼び出しガミアちゃん達人間大の機械獣を召喚し、私は無数の銃を滞空させて悪魔の群れにへと突っ込んだ。

「皆！丘の上に避難して！悪魔は私が何とかするわ！！」

「すまん、腕に自信はあったのだがこいつら上級悪魔のようだ！君も気をつけてな」

「ええ、丘の上のでっかい物は味方ですから安心して盾にしてください」

通常サイズの機械獣もついでに呼び出して丘の上に待機させて悪

魔を追い払ってもらっている。

「それにしても、数が多いわね！」

パンパンパンパ

＜了解しました＞

あとは悪魔を駆逐するだけね！

「って…、まだでてくるの？」

気合を入れたとたんまた地面から悪魔がわいてきた。これはさすがにしんどいわね。

「どうした、しばらく見ない間になまっちまったか？」

ん？この声は！

「ーーーーーー！ーーーーー！雷の暴風！」

ちょ！

「これで大半は片付いたか？」

「ちょっと、石化した人とかいるのよ！もう少し考えて…」

「あ……、大丈夫だ！寸止めにしてある！」

この馬鹿っぽさ間違いなくナギね。今のどこが寸止めなのよ？

「再会は後回しで今は殲滅を優先させましょう」

「だな！」

程なくして悪魔の殲滅も完了した。丘のほうにも何体か向かったらしいが問題なく撃破されたみたいだ。

今は丘に向かっている途中で。

「まさかお前が生きていたとわな！なんですぐに姿現さなかったんだよ」

「こっちも出られる状態じゃなかったのよ。それで相打ちであれを封印したんですって？」

「ああ、今は麻帆良ってところにある」

「はぁ、人の事言えないけど自分の子供を心配させるなんて」

「そういえば居るんだな。あそこに……」

「ええ、無事よ。しっかりと話してあげなさい。どうせ当分のあいだ出られないのでしょう？」

「当分てより最後かな…」

「当分よ。必ず助け出して決着をつけるわ」

「へへっ、それは頼もしいな」

そんなことを話しながら丘に到着すると皆、幽霊を見たみたいにびっくりしていた。

時間もあまりなくナギはネギ君と少し話して彼の杖を預けて消えていった。

犠牲はあったが多くの人が無事な人も多かったからよしとするしかないかな。そのあとはネカネちゃんとネギ君を魔法学校のある町いかせて残った人で復興作業と石化した人達を魔法学校に運ぶことになった。

私は魔法学校の校長先生の部屋に居て今回の件の原因ともしかしたら裏に居るかもしれないミケーネ帝国のことについて話し合っていた。

「なるほどのう。ネギ君を邪魔に思った元老院議員の差し金か、そしてミケーネ帝国か…」

「ミケーネが裏に居るかはわかりませんが今後、どこかで暗躍を始めるのは確実かと」

「おのが主が封じられているならそうじゃろうな。それで君はそのことを話してどうして欲しいんじゃ？」

「ミケーネの事は心に止めておいてくれれば今はそれでいいです。けれどネギ君のことは…」

「そうじゃな、今回だけが特別。などと甘い事は言えんじゃろうか

らな」

ナギの事、アリカさんのこと狙われる可能性は今後も十分にある。

「彼をこのままこちらに置いておく事は危険か…。ふむ、そうじゃな彼を近衛門のところに預けてみるか」

「近衛門？」

「ああ、ワシの知り合いでの。日本にある魔法使いの拠点の長をしているんじゃ。そこに卒業試験もかねて送ろうかとな」

「大丈夫なのですか？」

「大丈夫じゃ、日本、というよりアジア地域はワシら魔法使いにとってアウェーじゃからの。メガロがちょっかいをかけてくる確立も減るじゃろう。とは言ってもこれから話し合ってみんことにはなんとも言えんがな」

「それならば、私もその麻帆良でネギ君を見守りましょう。元々日本には行く予定でしたので」

「そうか君がいてくれると心強いの。ネギ君がこっちに居る間は我々に任せてくれ」

「ええ、任せてください。ネギ君のことよろしくお願いします」

その後2，3話し合いネギ君たちにもわかれることを伝えて私は日本へと。懐かしの故郷へと旅立った。

再開の旅と騒動と（後書き）

やっと、原作介入らしい原作介入をしましたw
本作では悪魔襲撃時でも多くの人が助かってます。

ミケーネ帝国と闇の帝王の事は話して回っていますが闇の帝王の事はともかく、ミケーネについてはこんなのが居るらしいってくらいなので具体的な行動とかは起こしません。

次で日本の詠春とタカミチなどと再会です。このまま次の話で一気にマミが入学するまで行くかも?話しを切ったりするのが下手なので長くなったり短くなったりします…。

新しい次回予告が決まらないなぁ…。他の作品のように作品内のキャラと対話形式の漫才や小ネタでも入れてみるか…。

感想など受付中！作者のやる気がアップしますw

おいでませ麻帆良！

「着いたわね。帰ってきた…、なんだかとても懐かしいわね」

私は今日本に居る。転生してから初めて生まれ故郷である日本の地に降り立ったのだ。

転生してからもう１５，６年。意識があった時間でも５，６年、短いような長いような時間が過ぎた。そもそもこっちの世界に返ってきたのもつい最近だが、やっぱり日本に居る事で帰ってきたと実感できる。

とは言っても前世とこの世界が同一ではなく、まして私の感覚では今は過去の世界になるわけだ。生まれ故郷の街にも行ってみたいし、東京見物もしたいが今は麻帆良のタカミチ君と近衛門さんに会いに行くことが先決だ。

詠春の所にも行きたいが、彼は今じゃ組織の重鎮みたいだからアポ無しで行くわけにもいかない。今から会いに行く近衛門さんが詠春の義理の祖父になるって校長も言っていたからその時に連絡を入れようかな。

降り立った羽田から電車を乗り継ぎ埼玉県にある麻帆良学園にきた。

来る途中の電車の混み具合や正確さ等々、どうでもいいことで日本に帰ってきたなぁと改めて実感している。

「なんで、あんな不快感しか感じない状況でそんなに感動できるん

だか。君たちの感覚は本当にわからないね」

人が感動に浸ってるのにこの子は…。確かに混雑していたりしたけど、懐かしいんだからいいでしょ。

で、現在タカミチ君との待ち合わせ場所の麻帆良学園中等部駅前にいるのだけれど、見当たらないわね？まだ来てないのかな。

と思っていると。

「マミさん！お久しぶりです！！」

あ、着たみたいね。

「久しぶりタカミチ君。ふふ、大きくなったわね」

「本当に…本当に生きていたんですね！クルトから聞いたときは何を言ってると思ったのですが…！」

あらあら、本当に心配させちゃったわね。

「ごめんなさいね。あの時はああするしかないって思ったから。それより詳しい話は後で、ここで話していたら見た目年下の子に“さん”付けはおかしいでしょ」

「そうですね。学園長室まで案内します」

「ええ、お願いするわ」

道すがらチョコチョコと話しつつ向かっていった。

「あとで、アルさんにも顔を見せてあげてください。彼も喜ぶでしょう」

「彼もいるの？」

「ええ、少し込み入った事情がありますが…」

「そのことは近衛門さんも交えてやったほうがいいわね。でも、あのタカミチ君が先生かぁ通うことになったらタカミチ先生って呼んだほうがいいかしら」

「え！そんな今までどおり君か呼び捨てで結構ですよ」

「そういうわけにもいかないでしょ？アスナちゃんは今幸せに暮らしているのね…」

「はい、けれどネギ君の事を聞いたら果たしてそれでいいのか…」

「時間は多くはないけれど少なくもないわ。そうね、彼女が高校生になるまでに決めればいいと思うわ。もちろん彼女の意思も大切だけれどね」

「そうですね。今は友達と楽しく遊ぶのが一番でしょう」

ネギ君もそうだけど、彼女の事も何とかしたほうがいいわね。

そうこうしている内に現在、学園長室前。

「でもなんで、学園長室が女子中等部内に？」

「僕も最初は不思議に思ったんですけど、どうも世界樹のほかに魔法的や霊的重心地がこの中等部近辺みたいなので学園長室、と言うよりは魔法協会の会長室を設けてあるそうです。学園の運営を行う部署などは他のもっとしっかりした所にありますよ」

「なるほど、そんな理由がね」

「では、入りますね。学園長！巴マミさんをお連れしました！」

中から了承の声がして入るとそこには…。

妖怪がいた。

「身体の左右で性別が違ったり、首が分離飛行できたりする人もいるけど後頭部が長いなんてまた奇抜だね。いや、大男の上に小男よりはましなのかな？」

ちょ！キュゥべえそのとおりだけど本人に向かって！あと、最初の二つ全部私関係じゃない、とくに後ろ！

「すいません、近衛学園長！この子いろいろストレートな物言いで！！」

「いえ、マミさん今の発言も結構…」

「い、いや、気にしてないぞ。大丈夫じゃ…そのくらい……そのくらいで…。ワシってそんなトンデモナイ人物と一緒なのか…、首はともかく左右で性別が違うものと……」

思いっきりへこんでるわね…。ここは何事もなかったかのようにするのが一番！

……のはず。

「申し送れました、私は巴マミと申します。タカミチさんから聞いていると思いますが紅き翼に所属していました。それとこの子はキュゥべえ君で私のサポーターです」

「よろしくお願いするよ」

「うむ、ワシはこの麻帆良学園に本拠地を構えている関東魔法協会会長の近衛近衛門じゃ。君の事はタカミチ君とウェールズの彼から

聞いて居る。今回は先の襲撃の件と他にもいくつか話したいことがあるそうじゃな？」

よし、近衛門さんも何とか立ち直ってくれた。

「はい。そのことなのですが先ほどタカミチさんからアルビレオさんの事を聞きましたので詳しくは彼を交えて後ほど話したいと思います」

闇の帝王とミケーネについては彼も交えたほうがいいでしょうからね。

「それほど重要だと？」

「はい、ここにある。彼の者も関係しています」

「！それについてはどこから？」

「ラカンさんから聞きました」

「なるほど、彼なら話しそうですね」

「あいわかった、彼に連絡を取って近日中に話し合いの場を設けよう。後は…ネギ君のことじゃな」

「はい、校長先生は卒業後の修行先をこちらに指定したいと。こちらならメガロの干渉を最小限にできるだろうからと」

「確かにの魔法学校にいる間はともかく、そのあとも欧州はまずいか…。了解した、そちらも受け入れ態勢を整えておこう。こちらに

来るのは履修終了が7年じゃから２００５年かの？」

「そうですね。ナギのように中退したり、１９９９年にあの予言が当たらなければそうなりますね」

「ふぉふぉふぉ！確かにそうじゃの。あの予言が本当ならワシらは大忙しじゃ。」

まだ２０世紀だからあの予言前なのよねぇ。懐かしいわねぇ。

「それで、お主はどうするかの？よければここで警備員として働いて欲しいが。なにぶん人手不足でのう、専用の人員を用意する予算も乏しく兼任の魔法先生や生徒で何とかやっている状態での」

「そうですね。詠春さんの所にも行って来たいのでその後でしたらかまいません。ネギ君が来たときには彼の側でサポートしようとも思っていますので」

「そうか！君がいてくれれば百人力じゃの。正式に採用するときには顔合わせと腕試しの場を設けたいのじゃが、いいかの？」

「はい、よろしくお願いします。あ、できれば私が紅き翼に所属していた事は内密に」

「ひょ？何故じゃ？知らせたほうが皆も喜ぶじゃろうに」

「あまり注目を集めたくないと言うのもありますが、紅き翼関係者が2人もいるとわかれば何がしかの恨みを持つものがこないとは限りません。それにここは戦場じゃ無いのですから、そこまでして士気をあげる必要は無いかと」

「確かにそれもそうじゃな。あいわかった、君の事はウェールズの魔法学校からの研修生としておこう。それと婿殿への紹介状も一筆書いておこう。明日取りに来なされ」

「重ね重ねありがとうございます」

「うむ、それでは詳しいことはまた後日じゃな」

「はい、それではありがとうございました」

その後はタカミチ君とアスナちゃんが住んでいる家にお邪魔してご馳走になってそのまま泊まり。次の日に近衛門さんから詠春への紹介状を貰い京都に出発した。

おいでませ麻帆良！（後書き）

主人公、日本と麻帆良の地を踏む！でした。

学園長に関してのお約束と麻帆良についての独自設定です。

次回は詠春やアルたちと話したあとで腕試しになるから長めになるかな？

呪術協会と内情と（前書き）

ＰＶ２万＆ユニーク３千突破！
これを励みに頑張っていきます！

呪術協会と内情と

そうだ、京都に行こう！

って、訳でもないけれど今私は京都の呪術協会に向かっている。

京都はさすがに前世に行った時とそんなに変わってないわね。いえ、魔法なんてモノがあるから実際は一番変わっているかもしれないわね。

っと、のんびり観光するのは詠春にあってからね。予定の時間までそんなに間がないし急がないと。待ち合わせ場所の協会の入り口はこっちね。

「ここが入り口のカガビコノヤシロね。立派な鳥居ね、それに伏見神社の千本鳥居みたいなもののもあるわね」

一般公開しているみたいだけれど大丈夫なのかしら？学園長の話だと呪術協会詰めの陰陽師の自宅でもあるみたいだし。

とりあえず入ってみますか。待ち合わせ場所はこの中の休憩所みたいね。

しばらく歩くと自動販売機と休憩所らしきものが見えてきた。周りを囲む鳥居はその先も途切れる気配が無いからこんな場所も必要なのね。全体でどれくらいあるんだろう？

そう思って近づくとすでに相手はきていたようだ、待たせてしまったかしら。

「お待たせしました、近衛詠春殿の古い知り合いで巴マミと申します。この度は日本に引っ越して来たのでご挨拶に来ました。こちらが近衛近衛門さんの紹介状になります」

「いえ、まだ約束の時間ではなのでこちらが早く来すぎたのでしょう。私は案内を仰せつかった橘楓と申します。」

綺麗な人だなぁ、それにやっぱり巫女さんはいいわね。っとと、どうでもいい事考えていたら相手が続きを話し始めた。

「この度は遠路はるばるご苦労様です。本山に案内しますので私の後についてきてください。ここより鳥居の全て抜けるまで振り返らぬようお願いします。」

なるほど何か秘密の通行方があってそれで本山と社を分けているのかしら。

そのあと話しつつ無事鳥居を抜けこれまた立派な門をくぐり呪術協会総本山に着いた。

「大きいわね。それにこんな季節でも桜が?」

「本山は数々の呪具や書物の保管場所、他にも集会場所や陰陽師の自宅の他にも社としての機能が移築されているのでここまで巨大になったそうです。桜は魔よけもかねています。」

麻帆良ではある程度は分散していた魔法関係の施設が全部一箇所に集めてあるからか、それだとこのくらいになるのかな。

詠春と話す場所まで案内される間の話だとここに有る物はほんの一部で多くは各地の寺院や国の管理施設にあるそうだ。その中でも使用頻度が高かったり扱える事ができるのが陰陽師だけだったりする物はここにおいてあるそうだ。

話を聞いているとＧＳ○神であった東京の地下に有る呪術要塞？見たいなモノがこの世界はありそうね。怖くて聞けないけれど。後はバチカンにも興味本位でいってみたいかも。……立川にもいってみようかしら。

そのあともあの二人がとある世界に降臨したらどうなるんだろう？など心底どうでもいいことを考えていると、襖が開き懐かしい顔が見れた。

「やあ、待たせてしまったかな？だが、本当に生きていたのだな」

「いえ、大丈夫よ。ええ、このとおり足はあるわよ」

そのまま再会を祝して！っていきたいけれど、詠春もそんなに時間が無いみたいだから闇の帝王とミケーネ帝国のことを話し警戒と協力者作りに協力してもらう事になった。

その後は自分が居ない間に何があったかなど話していて、

「そう、奥さんが」

「ええ、元々体が丈夫ではなかったところに木乃香を生んだ影響でしばらくして…。だが、あいつは最後まで幸せだった。だからこそ私は木乃香を守っていこうと誓ったのだ」

「そう、しっかりとお父さんとして木乃香ちゃんを守らないとね。…それで何か心配事が？」

「顔に出ていたか？やはり私は長なんて器じゃないな。…ここに来るまでにうちの者が何か失礼をしなかったか？」

そんなこと無いと思うけれど、少なくともあの二人よりは…。ん～、そんな感じはしなかったけれど。

「そんな感じはしなかったわよ」

「それならいいのだが。実はこれは木乃香の事も関係していてな」

詠春の話によると先の大戦の影響がこっちの世界にも飛び火して日本も少なくはあるがダメージを負った事、元々魔法使いとの仲は良い訳ではないけれどこの一件でさらに微妙な事になってしまっている事と。

日本全体が余りよくない運気に包まれているみたいで過激派の人

の中には麻帆良に侵攻し世界樹を奪取しそれによって陰気を祓おうって言う意見が出てきていたりと協会内がごたごたしているようで。

前ならそんな意見は全く相手にされなかったが今は全大戦の事で反魔法使いと言ってもいい人達と日本全体を包む閉塞感をどうにかしようと思っている人達がそれなりにいる事。

他にも協会内で多数の派閥が形成されていて、それぞれがどうしたらいいか分からずバラバラで動いているせいで上層部もうまく統制が取れていないらしい。

詠春は大戦を通して持つ事になった魔法使いたちに対する太いパイプをかわれて現在の地位に居るが気苦労が絶えないらしい。

その中で生まれた木乃香ちゃんは強大な魔力を保有していて、この事がさらにごたごたを助長させたりと…。詠春も木乃香ちゃんの保有魔力を考えると魔法使いか陰陽師になったほうがいいと思っていはいるのだけれど。

「今の協会の事を見ていると心配だと？」

「ええ、流石に権力闘争から来る暗闘は起こっていないが、木乃香の才能を考えるとおそらく長となる事は確実だろう。そうなると今の私と同じかそれ以上の苦労を強いる事になるのは確実だ。私はそれが心配で」

なるほどね。でも、今更ながら部外者にここまで内情を喋っちゃっていいのかしら？それだけ心配なのと苦労してるのかしら…。

「あなたの心配は分かるけれど。結局は決めるのは本人だと私は思

うわ。今すぐ出す答えでもないのだからしっかり考えたら？」

「そうだな、焦っていたのかもしれないな。木乃香が長になる前に私達が問題を解決してしまえばいいのだな」

「親なんだから当たり前だと思うわよ。彼の事についても私達がやり残した事ですものね。次の世代に残さず私たちで片をつけないとね！」

「ああ、そうだな。そういえばお前は麻帆良に住むそうだな？」

「ええ、そうするつもりよ。近衛門さんから？」

「ああ、義父さんから聞いている。お願いがあるのだが」

「なに、あらたまって？」

「来年にでも木乃香を麻帆良に転校させるつもりだ。木乃香を守ってはくれないだろうか。」

「いいけれど大丈夫なの？」

「皆には見聞を広めるためとでも言おう。これから協会内はより荒れるだろうからな、少しでも安全なところにと」

「私はかまわないわよ。でも、護衛は別に雇ったほうがいいと思うわ。専門じゃないしね。それに信用できる人くらいにはしっかりと話した方がいいわよ？」

「ありがとう。そっちは心当たりがある。話すものはこれから見極

めるつもりだ」

「心配無用だったみたいね、わかったわそれとなく見ておくわ」

そのあとも昔話に花を咲かせていたが詠春の予定が押してきたので私達は分かれて、私は本山を降りて京都観光に繰り出した。

呪術協会と内情と（後書き）

きりが良かったので詠春と呪術協会の話しで終了しました。
呪術協会の内情については完全に捏造で言ってますw無理があるかな？

次回はちゃんとバトル入れます！

小ネタコーナー

作者（以下作）「う～ん。」

主人公（以下主）「どうしたの？」

作「次の腕試しで誰を生贄にしようかと。」

主「生贄って…」

作「タカミチが相手としてちょうどいいんだけれど出自誤魔化してあるからね。」

主「無名の人が原作最強クラスと互角ってのは変ですものね。」

作「よし！瀬流彦先生、君に決めた！やられ役お願いします！」

主「ちょっと、それは色々と…。」

作「大丈夫しっかり手はある。」

主「瀬流彦先生、できる限り手加減します…。」

次回「顔見せと腕試しと模擬戦と」
瀬流彦先生は生き残れるのか！ってかあの人この時期（９７年）って教職なのか？
彼女も出ますよ！

どうでしょう？これを次回からの次回予告にしていこうかなと。
もう一つ愚痴……京都弁が分からない！！

顔見せと腕試しと模擬戦と

京都観光のあと麻帆良に帰ってきた週の週末に顔見せと腕をここの人たちに披露する場が設けられることになった。

「もう一度確認しますがマミさんは魔法世界出身でこちらでの職を探しているときに、知り合いのウェールズ魔法学校の人に麻帆良学園での警備員の事を聞いてきたという事になっています。また、僕とも向こうで知り合っていて、その伝もあったということになっています」

「そっちは問題ないわ。それで腕試しって何をするの？」

「純粋に力量がどれくらいあるかも示すためですが、捕縛もできるかも見せる事になります。面倒かもしれませんが、人員が少ないからこそ互いを知って信頼関係を構築する必要があるのでこのような方法を取っています」

「いいえ、もともとここで働いていて人達からすれば私は見ず知らずの、それこそこちらの世界を知らなかったかもしれない人になるのだから。だったら最初にしっかりと共に戦える仲間だってことを示さないとね」

「はい…。それと、アルビレオさんとの話し合いの場なのですが向こうは了承してくれたのですが学園長の予定があわずにしばらくは無理そうです」

「そう、まぁ1，2週間でどうにかなる事じゃないからね。しっかりと話し合える事が年内にでも出来ればいいわ。それと、年の事は

どうするの？」

何故だか不老みたいなのよねこの身体。

「向こうの世界の長命種の血がわずかに入っているという事になっています」

なるほど、魔法がある世界ならではの理由ね。

そんなこんなで顔見せ当日。私は集合場所の世界樹前広場に向かっている。

「こういうことは初めが肝心だからね。しっかりやらなくちゃ」

「こんな事はトップか人事担当が知らせれば終わるのに、何でこんな非効率なんだろうね」

人がやる気を出そうとしてるってのに……。それに挨拶は普通の会社でもするでしょう。いや、彼の事だからシステマチックに通知だけでいいってことか……。

それはいくらなんでもこれから一緒に仕事をやっていく仲間としてどうなの。

そのあとも今更だけれどキュゥべえが他の人には見えるのかとか

を話していると―ちなみにキュゥべえが見える見えないを選べるみたい―広場が見えてきた。もう結構な人がいるみたいだから急がなくちゃ。

「すいません、遅れましたか？」

「いやいや、まだ時間には間がある。ワシらがちと早く来すぎたようじゃ」

ほ、よかった。初日から遅刻は流石にまずいからね。周りを見回しても知らない人ばかりね、といっても原作の魔法教師なんて3，4人くらいしか出てないから知らない人が圧倒的に多いけれど……。

原作開始が確かネギ君が麻帆良に来たときだから7年後かな？そうなると生徒で原作キャラはいないわね。原作時点で大学生じゃないとここにはいないでしょうし。

と思っていると1人心当たりがある人物がいた。綺麗な金髪をした人形みたいなかわいい女の子、おそらくエヴァンジェリンだろう彼女は吸血鬼だから年なんて関係ないし、あの馬鹿が原因で確かここを出られないはずだったし……。

彼女、たしか修行に便利な道具を持っていたはず、仲良くなれないかしら。後でタカミチ君に紹介してもらおう。

っと、いけないいけないこれから彼のことは先生って呼ばないと

ね。今の私は向こうの世界出身の立派な魔法使いを目指していてこっちに来たって事になってるのだから。

「タカミチさんもこの度は紹介していただきありがとうございました。」

「いえいえ、未来ある若者に道を示してあげる事が僕たちのやるべき事でもありますから。マミ君もここで働いてみて自分が目指す立派な魔法使い像を持ってください。＜やっぱりマミさんをこう呼ぶのは慣れませんね＞」

＜あなたは女子生徒にも君付けでフランクに話してるんでしょ？それが私だけさん付けで丁寧だったりしたら変でしょ＞

＜そうなのですが、マミさん達は今でも僕の憧れであり目指すべき目標なので先生って呼ばれるのも変な感じですよ＞

そう思ってくれているのは嬉しいけれどここはしっかりやらないとね。

そんな事を念話で話していると人も集まってきて約束の時間になった。

「さて、これで集まれるものは全員集まったの。それでは本日より警備員として働いてくれる事になった者を紹介しよう。こっちへ来てくれ」

呼ばれて学園長がいるところに向かい他の人達を見回した。

「紹介しよう、巴マミ君じゃ。まだ若いが腕は確かじゃ。マミ君、皆に挨拶を」

「巴マミです。こちらの世界に来たのはつい先日ですがこちらの常識などは把握しています。まだまだ若輩ですが、よろしくお願いします」

挨拶を終え周りの人達を見てみるとやはりというか不安そうな顔がそれなりにあった。その感情は至極当然だ。普通の会社にしてみたらちょっと前まで外国にいた人が突然自分たちの職場にきたと同じなのだから習慣や常識とかが違ったりして一緒にやっていけるか不安になるだろう。

少しガヤガヤと話し合っていると

「皆もそしてマミ君もお互い相手のことを知らんからの、不安になるのは当然じゃ。じゃが、そこはこれから互いに接して知っていってもらわんといかん。マミ君のプロフィールなどは最近導入し始めた学園内の情報をまとめたライブラリーにすでに掲載してある。マミ君もそこに魔法先生などのことは載っておるからそれを見ておいてくれ」

そういえば、まだこの年だとそこまで電子化は進んでないのかな？前世で記憶があるころは情報化社会だったからなぁ。

「また警備の腕は今見せてもらおう。そうすれば皆の不安はとりあえずなくなろう？」

学園長の言葉に不安そうにしていた人もそれならばとうなずいてる。

「相手はそうじゃのぉ。瀬流彦君がいいかの」

「ええ！僕ですか！？」

選ばれた人も驚いてるわね。確かに見た目も雰囲気も荒事向けじゃなさそうですものね。

「そんな、無理ですよ！マミさんの腕がどれくらいなのか知りませんが僕じゃあ…」

「なに本気でやり合うわけではない。手加減なども捕縛技術のうちなのじゃからの。それに君の防御系の腕はなかなかと見ておるよ。ちょど良いだろう、君だって警備員として働くならそんな事を言ってる暇はなくなるぞ」

「ううぅ……、確かにそうですね。分かりました、マミさんよろしくお願いします。それとお手柔らかにね」

「はい、こちらこそよろしくお願いします」

「それでは両者は下の通りに、またあくまでもマミ君の腕を皆に示すためじゃから、勝敗に関わらず数分で終了とする。くれぐれもやりすぎんようにの」

瀬流彦さんと下に降り向かい合い後は合図を待つだけだ。

「それでは両者……、始め！」

開始と同時に私はうってでた。

時はちょっと戻ってマミが到着した時間。

（ｓｉｄｅエヴァ）

ほう、あれがタカミチが言っていた巴マミか。ふむ、見た目はガキだがあいつの話しだと１０年前もあの姿のようだからな。爺は長命種の血が入ってるというがどうだかな。

実際は私と同じ化け物といったところか？＜否定できないわねｂｙマミ＞

しかし、そうなると奴は紅き翼のメンバー、つまり『あいつ』と同クラスの腕を持っているはずだ、それが何故こちらの世界しかもこんな極東に？

爺が呼び寄せたのか？しかし何故…、世界樹や図書館島の防衛にしても過剰戦力過ぎる。牛刀で鶏を捌くどころかスリに騎士団を全て投入するようなものだ。

……駄目だな、情報が足りなさ過ぎる。爺に聞いてみるか？それかタカミチを介して接触してみるか。ただ待っているのは性に合わんしな。何よりそれでは求めるものなど得られんからな。

今は奴の腕を見てみるか、あいつが相手ではろくにわからんだろうが、何もわかってない今よりはましだろう。

時は戻って対戦開始！

（ｓｉｄｅ瀬流彦）

ううん、了承はしたけれど不安だなぁ。向こうの人って結構荒っぽかったりするからなぁ。でも、学園長の言葉ももっともだ！

いくらここが平和な日本とは言っても警備員なんて仕事をするんだから少しは荒事に慣れておかなきゃね。とりあえず時間まで耐えることを考えよう。

何をやってくるのかな、でもとりあえずは障壁を張って…。

パパン！

何か撃ってきた！それたのかな？当たってないね。障壁も無事に張れた、これならそうそう破れないぞ。あ、早速来たようだね。と

にかく時間待て耐え切って！

パリン……

「え？」

え？そんな！障壁がこうも簡単に！って、そんな事考えてる場合じゃ。次の行動に移さないと！

わぁ！何だこのリボン？は身体に絡み付いて。

「わ！わわ！」

慌てて拘束から逃れようとしていると目の前に手のひらが…。

「わぷ！」

ご！

「うご！」

何か後頭部に硬いものが当たった感覚と顔が温かいものに触れている感触を感じつつ僕の意識は闇に落ちた。

分かりにくいので視点を変更して！

（ｓｉｄｅエヴァ）

さて、始まったかあっちのボウズは障壁か？消極的だな。

あいつは…。

パパン！

な、銃だと？いったいいつの間に…。さっきまで持っていなかったはず。奴のアーティファクトか？狙いはそれたようだが元より当てる気は無かったみたいだな。

発砲を囮にして接近したがどうする気だ？すでに相手は障壁を張っている。そのまま行ったところで…。

パリン……。

「な……」

何だと……、障壁が破られるのは問題ない。力の差と言うのも、おこがましいほどの差があるのだ破られる自体は問題ない。

だが、気も魔力も使わずに破っただと？

……どういうことだ、いくら力の差があるといっても強化せずに破れるほど柔な障壁ではなかったぞ。

私とて単純な筋力であれを破れるか……。いくら吸血鬼だからといって限度がある。だというのに奴はまるで紙でも裂くかのようにあれを突破した。

む、考え込んでいるうちに終わってしまったようだな。

障壁があっさり破られてパニクっているところに、あの拘束魔法か？をかけられてそのまま叩きつけられたか。

あの魔法も見た事がないな、こちらは魔力を纏ってはいるが…。

ふふふ、これは今日にでも接触してみるか。

先ほど私を確認してもこれといったアクションを起こしてないところを見ると知らないか頭の固い魔法使いとは違うか。

ならば早速。

「おい、タカミチ」

視点は主人公に

（ｓｉｄｅマミ）

あちゃ～、やりすぎちゃったかしら?それに障壁を素手で砕いたのも大丈夫かな?

「マミ君、やり過ぎん様にと言ったじゃろうに。だれか彼に治癒魔法を」

「すいません。拘束して押し倒すだけで済ますつもりが…」

向きが悪かったわね。そのまま頭をたたきつけるようになっちゃった。

「おほん!少しアクシデントがあったが、これで彼女の腕は分かったじゃろう。少々手加減が不慣れなようじゃからなそこは皆が教えてあげてくれ。それではこれで解散」

「わざわざありがとうございました」

学園長が解散を告げると皆は帰路に着いた。彼にも一言謝っておかないとね、どうやら気がついたみたいだし。

「すみません。少し力みすぎたようで」

「ははは、今度は気をつけてくださいよ?でも、僕ももう少し修行しないとなぁ。ここまであっさり負けちゃうとは思わなかったよ」

すいません、もう少し自重します…。

「もう頭の痛みも引きましたし、大丈夫ですよ。それに、これからはよろしくお願いします」

「はい、よろしくお願いします」

そのあと周りの人と少し話して帰路につこうとした時に。

「マミ君、このあと時間空いてるかな？」

タカミチ君が呼び止めてきたけれどどうしたのだろう？

「はい、あいていますが何か？」

「家に送っていくがてら学園を案内しようと思ってね。＜紹介しておきたい人がいまして、マミさんもあって損はないと思いますよ＞」

「ありがとうございます。それじゃあよろしくお願いしますね。＜紹介したい人？わかったわ。とりあえず会ってみましょう＞」

「それじゃあ、行こうか。＜ありがとうございます＞」

それからタカミチ君に案内されて着いた先は、学園の市街地より少し離れた森の中のログハウス風の家だった。

（なにか、覚えがあるような？）

着いた家になんとなく見覚えがあるなと思っていると。

「エヴァ、もう帰ってきているかい？」

ああ、エヴァンジェリン邸か。あって欲しい人ってエヴァなのね。

しばらくして中から声が聞こえて。

「開いている、入って来い」

無用心だなぁ、まだ茶々丸はいないのかな？ファンシーな内装の家の中にはエヴァが1人でお茶を飲んでいた。

「こんばんは」

「ふふ、よく来たな。色々聞きたい事はあるが単刀直入に言おう。貴様何者だ？」

「それはさっき…」

「私が聞きたいのは表の履歴ではない。タカミチからある程度は聞いてるが、さっきの試合を見てな。貴様、気も魔力も使わずに障壁を破っただろう？」

やっぱりばれてる…。

「もう一度聞こう貴様は何者だ？」

ん～、彼女に話しても問題はないか。言いふらす様な人じゃない

だろうし。

「いいけれど、少し時間がかかってしまうわよ？」

「ふむ、そうだな。それに貴様の事だけ聞くのもフェアじゃないな」

「それならエヴァあの中で話したらどうだい？あそこなら時間は問題ないだろう。それに彼女にお願いしたい事もあるからね」

あそこ？なんだったかな、確か修行に便利なアイテムが確かそんな感じだったような。

「そうだな、最近まで貴様が使っていたからすぐに出せるだろう。その代りに手伝えよ」

「分かってるよ、その代りに1つ聞いて欲しい事があるんだ。マミさんこっちです」

話しながら奥に進んでいく二人を追って家の地下に入っていった。

その数分後、目的のアイテムが何だったのかを思い出した。

「すごいわねぇ」

「ふはははは、そうだろうそうだろう。」

「時間が短いものはそれなりに有りますけど、これほどの物はそう製作できませんからね。」

これこれ、いいなぁ。普通なら寿命とかで使いにくいだろうけれど、私だと大丈夫そうだからなぁ。修行用に貸してくれないかしら？ちょっと交渉してみましょうか。

「さぁ、ここなら時間に関係なく話すことができるぞ。貴様もどうせまともな人間じゃないんだろう？老化などは関係ない」

「いや、僕は関係あるよ」

「いいけれど条件が一つあるわ」

「ほう、なんだ？」

「ここを修行用に貸して欲しいの」

さてどうかな。

「なんだ、まだ強くなろうというのか？それに貴様の情報と私の情報で等価だ。ここを貸す対価にならんよ」

「いいえ、あなたの情報は要らないわ」

「なに？」

「あなたの情報は調べればそれなりにでてくるわ。それにタカミチ君に聞いてもいいしね」

「それはお前の情報もそうだろう」

「いいえ、私の情報は連合傘下のここではまず手に入らないわ。タカミチ君も私のことをそこまで詳しくは知ってないものね」

「確かに僕も知らないことはありますね」

ここに来る前に連合内で出回っている書籍だと私のことがほとんど書いてないのは確認済み！……なんだろう悲しくなってきた。

「私はあなたとはお友達になれればそれでいいわ。だからあなたの過去を急いで知る必要もないしね」

「ふはははは、私のことを知っていてお友達か。だがその友達は相手の事を知らなくていいなんて言うのか？」

ぐ…、痛いところを。ちょっと言葉を間違えただけじゃない！

「だがそれでもまだ対価には足りんぞ？私もゆっくりと調べればいいのだからな」

そうなるわよねぇ。じゃあ。

「じゃあ、私の血はどう？大量にはあげられないし、眷属にするのも無しだけれどね」

「ほう」

「ちょ！マミさん！」

ここは修行をするにはうってつけの場所。闇の帝王に勝つために絶対に必要だ。そのためならこれくらいは全然問題ない！

「ふむ、その場限りの嘘というわけではないな。何か決意もしているか…」

どうだ？

「ふふ、気に入った。いいだろう、その条件で飲んでやろう。ああ、お前の情報は追々話してもらうことにしよう。楽しみは後にとっておこう」

ふう、よかった。でも、心配があるとすれば彼女の牙が私の肌に刺さるのかと光子力が混じってそうな私の血を吸血鬼が飲んで大丈夫なのかって事よね。

「マミさん良かったのですか？エヴァはむやみに殺人などをしないとはいえ」

「ええ、問題ないわ。それにここで修行する事は絶対に必要よ」

「それはやっぱり」

「今度全部話すわ」

「はい」

けれど話をしないってことはこの後どうしよう。

「おい、何をこそこそ喋っている」

「いえ、なんでもないわ。それよりこの後どうするの？確か２４時間たたないと出られないのよね」

「ふむ、そうだな貴様の体のことを聞いてもいいが…、おいタカミチ」

「なんだい？」

「こいつと戦え。もちろん全力だぞ」

ええ！何でそうなるの！！

「ちょっと！」

「貴様から直接聞いてもいいがもう一度自分の目で見てみたくてな。それにさっきの様なヘッポコでなく、こいつなら貴様も思う存分戦えるだろう」

「はは、マミさんの全力は見せれないだろうけど、エヴァを楽しませるくらいはできるよ」

「タカミチ君まで」

「お願いします、僕がどれだけ強くなったか見てください」

ふぅ、そんな顔で言われたら断れないわね。物凄く男前っていうのかな？そんな顔だものね。前世では縁がなかったわねぇ

「わかったわ、その勝負受けてたつわ」

「ありがとうございます。それと一つお願いがあるのですが。」

「なに？」

「あなたを揺るがせれたら。君付けじゃなくて呼び捨てで呼んでください。何時までもタカミチ君だと子供みたいで」

「成長したところを見て欲しいと、わかったわ。そう感じたらそうするわ、判定はエヴァンジェリンさんにも頼むわね」

「いいだろう。それと私の名はエヴァでかまわん」

「ありがとうエヴァ」

じゃあ、タカミチ君が死なないようにしながら全力でいきますか。

（ｓｉｄｅタカミチ）

マミさんと全力の勝負か。たぶんマミさんは手加減するだろうな、だったら何としても本気の一撃を出させて見せる！今、僕が出せる全力をあの人に見てもらう。憧れ続けていたあの人たちに少しでも

近づくために。

そうなると問題はマミさんのあの防御力か……。

ナギさんやラカンさんも十分理不尽だったけれど、彼女もそれに負けず劣らず理不尽の塊のような人だ。

高位魔法使いの初級どころか下手をすれば中級すら牽制にならないあの出鱈目な防御力。ラカンさんも出鱈目だったけれど彼が防御に入る攻撃でさえ弾いてしまうからなぁ。

攻撃のほうは二人に比べて不得意って言ってたけれど、僕にとっては差なんてないだろうね。まともに当たれば死ぬだろう。

「それではいきますよ」

「ええ、私はいつでもいいわよ。でも、鉄の城を揺るがせるのはそう簡単な事ではないわよ」

「鉄の城？」

確か前は偉大な勇者って名乗ってたような？

「今はそう名乗っているの」

１０年の間に何かあったのかも。でも、こっちのほうがしっくり来る気がするな。少なくとも戦いを挑む側からしたら、彼女は勇者じゃなくてそびえ立つ城。まさに鉄でできた城だね。

「いきます！」

最初から全力でいく！温存する必要も意味もない！

咸卦法！！

ただの居合い拳じゃ彼女には通じない。彼女と戦うには豪殺　居合い拳以上のものじゃないと！

「豪殺　居合い拳！」

ドドドドドドドド

まず牽制に速度を重視した物を連続で打ち込み目くらましと少しでも牽制になればと思いつつより多くの力をためようとしたが。

「咸卦法できるようになったんだ。これはうかうかしていられないわね」

攻撃でできた砂塵を突破して現れた彼女は無傷で、すでに腕を振りかぶっていた。

「く！」

力を練るのを中断し瞬動術で一気に離脱した直後。

ドゴォ！！

一瞬前までいた地点が粉砕された。まさに破城槌の一撃だ、手加減しているんだろうけど。一発当たればそれで終わりだな。

「瞬動もうまくなったわね。気や魔力が使えない身としてはちょっとうらやましいな」

「その身体能力で使えたらさらに手に負えませんよ！」

「そうねだからこそ

ボ！

うかうかしていられない」

まずい後ろに。迎撃を。

「はぁ！」

「させない、ルストハリケーン！」

凄まじい強風が発生し無理に後ろを振り向こうとした僕は吹き飛ばされた。

「く！」

虚空瞬動で体勢を立て直すと同時に距離を離したけれど、この距離もどれだけ意味があるか。

瞬動が使えなくてもあの脚力と足裏から何か力を噴出する移動方で瞬動並みに動けるんだから十分な気もしますよ。

「さぁ、どんどんいくわよ」

ドン！

「く！」

その後も戦いは続いたが力の練りがあまい豪殺　居合い拳じゃ牽制にしかならない。逆に僕のほうはあの銃召喚でゴム弾を撃ち込まれて怯んだところを攻撃されて何度ヒヤッとしたか。何とかして最大威力のモノを叩き込まないと。

「強くなったわね。もっと修行すればまだまだ強くなると思うわ。じゃあ、終わりにするわよ」

ドン！

賭けになってしまうけれどこれしかないかな…。

パン！パパン！

牽制射をしっかりと避けて。

ドン！

2回目の加速をしたマミさんが目の前に周りには銃が待機していて、避けたところを吹き飛ばして一斉所かな…。繰り出される拳は

ここまで来るのに余った速度も加わるだろうから凄まじいモノだろう。

僕に耐えられるか分からない、耐えられたとしても攻撃に移れるか…。

でも、逃げてばかりじゃいられない！

「はぁ！」

「最大防御！！」

ドグゥ！

「グウゥ…！」

く、防御に全力を出してもこの衝撃…。でも、何とか耐えた意識もしっかりある。マミさんは…、驚いている。これなら間に合うかな。

ありったけの力を拳に練り上げ居合い拳を放った。本来の居合い拳の間合いじゃない。実際に居合い拳というより全力で殴ったって言った方があっているだろう。

でも、そんなのは関係ない！これだけの速度で殴るんだこれが当たればいくらマミさんでも…。この至近距離じゃ避ける事もできない！

ドゴン！！

「ぐあ！」

「ぐ！」

予想はしていたけれど、まるで鋼鉄の塊を殴ったみたいだ。でも、マミさんもうめき声を動きも止まってるし、これなら！二発目も！

「今の一撃は効いたわ、ロケットパンチ！」

振りかぶった方とは逆の腕を腹に当てられて。予備動作もなく強烈な衝撃を感じてそのまま壁に僕は突っ込んだ。

霞む視界に彼女の元に戻っていく腕を見て、そういえばこんな技も持ってたなぁと他人事のように思っていると彼女から。

「はぁ、無茶しすぎよ。下手したら腕が使い物にならなくるかもしれないのよ？それ以前にあれを受けに入るなんて」

はは、確かにそうですね。でも、これくらいしないとあなた達には。ぐ、意識もだんだん薄れて。

「でも、本当に。本当に強くなったわね。タカミチ」

薄れ行く意識の中でそんな言葉が聞こえてきて。僕は確認を取る前に意識を手放した。

（ｓｉｄｅエヴァ）

確かに最強格だという事はわかったが。それ以上にこいつの身体はどうなっているんだ？防御力といい最後は腕が飛んだぞ？

「ふぅ、エヴァ。彼の治癒頼める？私は魔法が使えないから」

「そうだな、魔法薬があるから大丈夫だろう。代金は奴からもらっておこう」

殴った手もボロボロだな。全く無茶をする。

「最後はああ言ったけれどエヴァから見てタカミチはどうだった？」

「よくやったんじゃないか？奴に出せる全力だっただろうし、お前も最後の一撃で落ちると思っていたのだろう」

「受けれるとも思ってなかったわよ。だから防御に回ったときはヒヤッとしたわ。」

「それは奴を見くびりすぎだな。だが、今の奴にあれが受け切れるかも五分五分だったろうからな。いいんじゃないか？」

「ふふ、ありがとう。それにしてもこんなに破壊しちゃったけれど大丈夫なの？」

確かに派手にやってくれたな。

「問題ない。ここの建造物などは魔力で構成されているからな。放って置けばじきに直る。もっとも逆に魔力が流出するなりして枯渇すると崩壊してしまうがな」

下手糞な奴が作るとあっという間に崩壊してしまうからこの手の擬似異界製造の技術は難しいのだがな。

「そうなの、便利なものねぇ」

「さて、タカミチの治療をするか。その後にお前の血をもらうぞ。私に手間をかけるんだ多めに貰うぞ」

「呑みすぎないでね」

さてどんな味がするか。それに体のことも少し聞いてみるか。

ちなみに牙は問題なく刺さり、毒でもなかったようだ。

味はすごく旨いが不思議な味らしい。

顔見せと腕試しと模擬戦と（後書き）

戦闘描写難しいよう…。
まだ原作5年前なのでタカミチは原作時点よりちょっと弱目って事で。
エヴァの口調や性格もこれで大丈夫かな？ナギの生存も教えるか教えないか…。

ついでに主人公の原作知識は結構あやふやです。現時点でも忘れていることや勘違いしている事も多いです。今回はネギが飛び級して9歳で来るって事を忘れてます。なので7年後と。

小ネタコーナー

エヴァ（以下エ）「さぁ、血を飲ませてもらうぞ！」

マミ（以下マ）「あんまり呑まないでね？（牙刺さるのかしら？）」

エ「けちけちするな。では早速。」かぷ！

マ「ん。（刺さるんだ、でもなんだかむず痒い感じが。）」

エ「チューチュー、ぷは！ふむ。」

マ「どうだったの？」

エ「旨いんだが、なんとも言えん味だな。」

マ「まずいって事？」

エ「いや旨い、がそうだな癖が強いといった感じか？そうだなまるで……」

以下エヴァの味についての意見が続いた。

わかった事は私の血が御気に召したのとエヴァがかなりグルメって事だ。

次回予告「麻帆良の日々」

次回は短編の細かい話を何個かって感じにしてみたいと思います。

2～3年ほど時間を進めるので。

麻帆良の日々（前書き）

短編2個と中編1個です

1．今後の事

「なるほど、闇の帝王、それが創造主の本当の名前であり人格ですか」

「ええ、今は彼ごと封印してあるみたいだけれど、私が聞いた話が本当ならいずれ復活するわ」

「それが遥かな未来であったとしてもですか…」

「そこだけを聞くとこの事を後回しにしそうな連中が多そうじゃの」

いつになるかわからないものね。でも…。

「先の大戦中に復活間近まで行った事とミケーネですか」

「ええ、ミケーネはその全貌が全く不明だわ。今この瞬間も復活に向けて動いているかもしれない」

「ガトウが逝ってしまった事が悔やまれますね。彼ならば完全なる世界のときのように尻尾をつかめたでしょうが」

「ならばこそ協力者を増やしてあぶりだすわけか。よかろう、この近衛門できる限りの協力をしよう」

「私もここを動けはしませんができる限りミケーネ帝国について調べてみましょう」

「ありがとうございます」

ミケーネ帝国については話がまとまり話題は次のことに移った。

「後はネギ君。彼自身いや、その両親にも何の罪もないのにごたごたに巻き込まれるか…」

「前回の事件は暴走した一議員が起こしたらしいですが、実際はどうなのでしょうね」

「この事についてはクルト君に任せるしかないわね」

「そうじゃのう、問題の原因は向こうにある以上こちらでは手出しできん」

「完全なる世界やミケーネ帝国が関わってるかも分からないですからね。我々ではどうにもなりませんね」

「そうですね。そうなるとできる事は彼が向こうのごたごたに巻き込まれないようにしながらこちらで修行をするしかないわけですか」

事が元老議院内で起こっているためここを動けないアルや向こうでの基盤がない近衛門、そちらが得意とはいえないマミではどうしようもないようだ。

「ネギ君のことはこちらで受け入れ準備を進めよう。卒業間近になれば先方から彼の修行内容が届くじゃろう。その時に改めて話し合おう」

「そうですね。事は私達だけじゃないです。」

「では会談はこれで終わりですか。では、お茶会としますか」

その後、彼らは話しに花を割かせた後、帰路についた。実はトンデモナイ誤算が待っている事に気がつかず。

「なにやら不吉な感じが」

地の文を読むな！

2．マミの麻帆良での一日

無事にアルビレオと学園長に闇の帝王と今後の事を話し終えて麻帆良での仕事に専念しだしたマミ、その1日の様子を覗いてみよう。

彼女は別荘内での修行と警備員の仕事をする事が多いが今回はそれらがない休日とでもいう日を見てみよう。

ちなみに彼女、警備員のほかに学園広域指導員もやってみないかと言われているが、どう見ても中学生か高校生にしか見えない事から無理がありすぎるということで断った。代わりに別の人物を紹介してあるがそれは別の話で。

「今日は何をやろうかしら？」

ちなみに現在は１９９７年。原作開始５年前であるが今回重要なのはそこではない。今回重要なのは今が９７年ということ。

９７年それはプレ○テ全盛期、ポケ○ンブームが巻き起こった年でもある。何を言いたいかといえば主人公にとって非常に懐かしい時代だったりする。

この小説を読んでいる時代からするとＰＣは非常に低性能でもあり、インターネットもまだまだな時代だ。その事に多少不便感も持ったみたいだが、今は懐かしのゲームなどをやっていたりする。

「電○でＧＯ！やた○ごっちとか懐かしいわね。ＥＶ○もこの年にブームだったのねぇ」

懐かしみながら色々見ていたがこれといった物が無く出かけることにしたようだ。

「それにしても本当に広いわね麻帆良学園都市は。とある世界の学園都市とどっちが大きいのだろう？」

どっちなんでしょうね？

「流石に町並みの違いは分からないわね。ただでさえ麻帆良は日本の都市とは全く違うのだから」

麻帆良の町並みは京都やそれに類する日本古来の町並みや戦後発展を遂げる首都東京などの近代的な大都市とも違う、ヨーロッパの歴史ある町に近いため周りから見れば異彩を放っている。

明治時代に建てられた物は麻帆良と似た欧州風の建物であったがその多くは先の大戦と日本に多い震災や戦後の発展の中で失われている。

そのため麻帆良のように都市一つ丸々欧州風というのはここくらいじゃないだろうか？

「ファッションなんてさらにわからないわね。でもそのうちコギャルとかが出てくるのかしら？」

美白どころか顔黒メイクの到来ですからね。ニーソなど遥か未来のファッションですね。

「ネットもとうぶんお預けだなぁ。ＰＣ自体は高性能なのは用意できるでしょうけどネット回線や他の人たちはまだまだですものね」

などと嘆いているかと思うと突然止まり。

「まてよ。先を知っているわけだから先駆者として、今から始めてもいいかもね…。続くかわからないけれど。よし、それなら今度要塞内の工廠で作ってみようかな」

などと言ってまた街の見物を再会した。

その後は店を見たりして夕方近くに帰るというごく普通の１日であった。

3．美しき指導員

マミが断った学園広域指導員とは何か。それにはまずこの麻帆良学園の教育方針から話す必要がある。

この麻帆良は生徒ののびのびとした学習を設立以来、心がけているそれによって生徒は自由な発想と失敗を恐れない精神を養ってきた。また、街の住人も非常におおらかな人が多くなった。

が、その弊害としてあまりにものびのびとそしておおらか過ぎる所がある。格闘技を極めてみようとするのはいいがいき過ぎて街中での乱闘騒ぎを起こしたり、科学の発展のためといって危険な実験や実験機の暴走を引き起こしたりなどの問題が発生している。

街の住民も多少の事は子供たちの未来の為と注意する事が少なかったりするためよけいに自体が大きくなったりしている。

当然、警察などから改善指示を受けたり理事会で教育方針の変更が議題に上がった事があるが、反対意見が多く現状維持や小規模の改善で終わっている。

その理由として麻帆良学園を選ぶ親や生徒はその校風に惹かれて選んでいるのでありそれを否定する事が難しい事。他にも、問題はあるが麻帆良内の大学は成果を確実に出しているためそれを惜しんでいるという事もある。

とはいえ、警察に負担をかけるわけにもいかず、生徒にとってもそのままで良いわけが無い事。どこぞの世紀末世界じゃないのだから野外乱闘が起きる街など外聞きが悪いという事もあって作られたのが学園広域指導員だ。

その職務内容はいたって単純で学園都市内で問題を起こしている生徒間の仲裁や場合によっては鎮圧である。資格はこれといって必要ではないがその肩書きを悪用されては困るので面接による人格判断はおこなわれている。腕っ節もあったほうがいいがそこは学園にいる魔法先生の指導員が担当しているためあまり重要ではない。

外部の人間もたまになる事があるが殆どが麻帆良で働くか働いていた教員のため、例え教員免許を持っていなくとも先生と呼ばれている。

さて、その広域指導員にマミが送り込んだ人物というのは。おや、ちょうどいいところに乱闘がおそらく彼女が現れるでしょう。

「どうした！そんなもんか！！

「へっ！やっと体があったまってきた所だ。余裕こいてると一発で終わるぜ！」

「さぁさぁ、空手部とボクシング部の期待の新人同士の勝負どっちが勝つか！賭けるなら今のうちだよ、ちなみに倍率はこっちね」

おそらくどちらが強いかで口論になって、なら実際にやってみようと対戦が始まったのだろう。野次馬が集まりトトカルチェも組まれている。目にしたいかどうかはともかく麻帆良に住んでいればそれなりに目にする光景だ。

一進一退の攻防が続きさらに白熱してきたところで。

「お前たち今すぐ乱闘をやめろ。」

とびっきりの冷水が浴びせかけられた。

「もう一度言おう即刻解散しろ。対戦していた者と賭けを主催した者は生徒指導室まで付いて来い。最後通告だ。」

スーツを着用し美しい金髪をポニーテールにしたきつめの顔をした美人がそこにいた。

「げぇー！ガ、ガミア先生！！」

「なに知っているのか雷電！」

「誰が雷電だ！それよりさっさと離れるぞ。こっちまで巻き込まれかねない！」

「離れたら教えろよ！」

その他にも彼女を知っているｏｒ知り合いが知っていた者は次々に現場を離れて遠巻きに事を見守るか３人の無事を祈りつつ離れていった。

「なんだ！これは男と男の真剣勝負だ！」

「ああ！部外者それも女は、先生だろうが引っ込んでいてくれ！」

「すいません！すいません！ごめんなさい！反省したので先に行っていてもいいですか？」

「戦闘を続行すると？」

「「当たり前だ！！」」

「ええ！スルー！完全にスルー！？」

対戦者2名は止めるつもりは無く、すぐさま無条件降伏を申し出た生徒はそれを聞いてもらえてない。他にも彼女の事を知らない野次馬も良い所で止められてブーイングをあげている。

「あぁ～あ、あいつらガミア先生の事知らないんだ。あいつも災難だな」

「それで雷電。あの先生は誰なんだ？」

「だから雷電言うな。彼女はガミア先生だ。リボンの色は赤だからキューワンさんか」

どうやら彼は彼女の事を知っているようなので説明を任せよう。

「リボンの色？」

「ああ、彼女は三つ子らしくてな全員が指導員をしているらしい。で、全員同じ顔だから見分けがつくようにリボンの色を分けてあるんだよ」

「なるほど、でもなんで彼女がこんなに怖がられているんだ?」

「知らないからそんな事が言えるんだよ。彼女は他の指導員とはまるっきり次元が違う…」

「そんなに強いのか?」

「強いんじゃない怖い、いや無為慈悲なんだよ」

「はぁ??他の指導員は生徒を見逃すけれど彼女は違うとか?」

「違う、確かに彼女は見逃したりしないがそんな事は他の指導員だってそうだ。彼女の恐ろしさは問題を起こした生徒だけじゃなく野次馬にも及ぶ事。鎮圧時に手加減せず問答無用で叩き潰すところが恐れられているんだ」

「…そんなにすごいのか?」

「軽いのもだと衣服を切り裂いて戦意損失したところを連行だが、それを避けるかそれでも止まらないと拳で黙らせに入るんだよ。」

「両方とも想像がつかんぞ。」

「服のほうは詳しく知らん。髪が揺れたと思ったら相手の服がバラバラなんだ。おかげで女子は彼女相手には強く出れないみたいだな。ちなみに下着は流石大丈夫だぞ」

「そりゃそうだろう。」

「腕っ節はもっとすごいぞ。鎮圧された事を逆恨みした一団が数十人で1人を囲んだときも全員鎮圧してたしな。いつの間にか他の2人も入ってきていたけれどそれにしたって10分もかからずにだからなぁ」

「とんでもないな。」

「ああ、トンデモナイ。他にも野次馬ごと相手を粉砕したり、途中で降参しても叩きのめすまで止まらなかったりとか」

「それはやりすぎじゃないか!?」

「流石に降参後もってのは相手がよっぽどじゃないとだけど。野次馬が巻き込まれることはしょっちゅうあるぞ。拳が叩き込まれることはまず無いが服がバラバラになったりな。鎮圧時は周りのことなんて全くおかまい無しに暴れるからな」

「だから逃げたんだな」

「そうだよ。誰だって下着で街中歩きたくねぇだろ?っと、どうやら終わったみたいだな」

2人が視線を向けた先には服こそ無事だが叩きのめされている対戦者2人と下着だけの賭けを主催した奴と野次馬が目に入った。

「うわぁ〜」

「だから、彼女は怖がられるんだよ。それでついた渾名が＜美しき鎮圧者＞だ」

そう、ガミアQ達がマミが指導員として送り込んだ人材だ。

彼女たちは無慈悲な指導員として今日も学園を見回っている。

麻帆良の日々（後書き）

今から15年前を懐かしむ主人公と恐怖のガミア先生でした。ついでにその他2人との会談。

どうでしょうか?原作開始までの5年はこんな感じで進めて生きたいと思います。こっちの方がいいかと思ったのでして見ました。

ガミア先生はネギ君が来た後も出す予定です。

小ネタコーナー

マ「何かガミアちゃんが恐怖政治の尖兵ののように…」

作「ようじゃないそのものだ!」

マ「もっと駄目じゃない!」

ガ「マミ様」

マ「あらQ2ちゃんどうしたの?」

ガ「付近を走り回っている暴走族の殲滅を完了しました。」

マ「そう…ありがとう……。」

作「またこうして秩序を乱すものは葬られ麻帆良の秩序は守られた

のであった。」

マ「綺麗にまとめない！」

ネギと主人公をどの段階で接触させるかなぁ…。やっぱりエヴァ編がいいかな？

ついでにアンケート、やるとしてもずっと先だけどマミとネギで仮契約するかしないか？（ネギが主）

仮契約するとしたらアーティファクトのアイディアなど募集します！

仮契約するとしても早くて魔法世界に行くときになります。

麻帆良の日々2（前書き）

今回は中編2個かな？

麻帆良の日々2

1．警備員の仕事

麻帆良学園都市、日本国埼玉県にあり多少過激なところがあるが他の諸都市のようにいたって平和なこの場所に何故、魔法使いのそれも高位の者が必要になるか。その原因は3つある。

1つが認識阻害で多少誤魔化しているが嫌が負うにも目に付くこの都市のシンボルといっても良い世界樹だ。あの手この手で騒ぎにならないようにしているがどうしても目立ってしまうこの樹、通称：バントウと呼ばれているがその来歴も何もかも分かっていない。

しかし、1つ分かっている事はこの樹自身が強大な魔力発生源になっており。魔力量でどうにかなってしまうような事は凡そできてしまうといった問題があり、それをよからぬ事を考えるものに悪用されないようにする事とその強大な魔力に引かれた魔に属するもの所謂妖怪が都市内に進入しないようにする必要があり警備員が求められた。

2つ目に図書館島がある、がここはそこまで重要度は高くないかったりする。確かに貴重な物や魔道書があるが持ち出されないようにする機構がすでにあるため盗まれる危険が少ない。むしろ外部の侵入者よりとある事情により閉じることができない危険区へ学園の生徒が侵入することのほうが問題になっているくらいだ。何度も注意をしているのだが詳しい説明ができない事や教育方針ゆえに止められずにいる、がここは指導員の領分といえるので警備員が駆り出される事は少ない。

特に最近追加さてた指導員が侵入したものを片っ端から捕獲しているので負担は減っている。

そして3つ目、これこそが麻帆良がある意味で警備員を必要としている原因でもある。

それは麻帆良地下に広がる全てが謎に包まれている遺跡の存在だ。世界樹は日本の裏関係の資料に何回か登場していたりするがここは一切記録に無く、またその形式も日本のものとは全く違っている事。明治期にここに都市を作り始めた魔法使いが発見したものだが呪術協会にもそれどころか本国メガロのどんな資料にも記載が無く。いまだにその全貌が不明なのである。また近年の世界中の聖地と呼ばれる地脈の集合地点で同種の遺跡が発見されておりさらに謎が深まっている。

あまりにも謎が多すぎる古代遺跡、またその内部から封印された鬼神兵や何らかの魔法装置などが見つかりなおさら放置するわけはいかなかなった。もし内部に入り込まれてしまったら追撃は困難を極め、有るかもしれない古代の危険な魔法兵器を手にしたら…。話し合いの結果、遺跡への侵入を阻止するために魔法使いによる警備員が組織された。また、遺跡はかなり広範囲にわたって存在しておりその結果、警備員の防衛線が麻帆良外縁部になっている。

さて、我らが主人公のマミの配属場所は当然というべきか外縁部の見回りにい配属されている。仕事は主に進入する妖怪の討伐でたまぁ～～～に侵入を企てる魔法使いや呪術師の捕縛である。

（ｓｉｄｅマミ）

「よろしくお願いします、瀬流彦さん」

「はは、僕じゃあまり役に立たないかもしれないけれどよろしく頼むよ」

今日は瀬流彦さんとペアを組んで見回りだ。え、新人同士で大丈夫かって？私たちの任務はあくまでも見回りで妖怪退治は後方で控えている神多羅木先生と葛葉先生が侵入された所に急行して殲滅という作戦のため、私たちの任務はあくまでも敵の発見……ということになっている。

「さぁ、張り切って行きましょう！」

「いや、そんなに張り切らなくても…」

そんなに不安そうにしなくても大丈夫よ。妖怪といっても大妖怪クラスは進入できないしそもそも発生しないように呪術協会が結界を張っているんだから。

＜そうだぞ、マミ君＞

「神多羅木先生？」

＜君がいくら強いとは言ってもまだ若い。それにここでのやり方はまだ多くは知っていないだろ？＞

若いかはともかくとして、ここでのやり方を知らないのは事実ね。

＜我々には我々のやり方がある。……とは言わないが君はまだ敵の傾向を知るところからするべきだろう。そんなに急がなくても問題は無い＞

むむ、確かにそれもそうね。日本に帰ってきて少し興奮してたかしら？

「すいません、少し落ち着きます。それでは見回りを続けますね」

＜ああ。瀬流彦君も頑張れよ＞

＜神多羅木先生、Ｄ９地区に侵入者のようです。少々数が多いので応援が欲しいと＞

＜分かった。２人とも少し離れるが無茶はしないようにな＞

「了解しました」

「分かりました」

＜瀬流彦さん、マミさんがやり過ぎないように見ていてね。隠蔽班から抗議が来るわよ＞

「了解しました！」

「うう、ちょっと失敗しただけじゃないですか…」

もう切れた通信に文句を言ってると。

「流石にアレはちょっとじゃないと思うよ？岩場だったから良かったけれど森だったらどうなっていたか」

ぐ…、間違えてルストハリケーンを酸込みで出しちゃったからなぁ。妖怪の群れごと周囲の岩がドロドロになっちゃってたからな。

その後も周囲を見回しながら歩いていると、何かの気配を感じた。

「待って。何かいるわね」

超感覚や探査魔法があるわけじゃないけれど伊達に大戦を経験してない。気配を感じるくらいはできるようになっている。

「探査するかい？」

「お願いします」

瀬流彦先生が探査魔法に集中している間、周囲を警戒しているとどうやら発見したらしい。

「見つけた。でもこれは…」

「どうしたんですか？」

「結構な数の妖怪がいるな。話からすると呼ばれてきた見たいじゃないけれど。この数はまずいな５０体はいそうだぞ」

「まずいですね。神多羅木先生達も戻ってくるのはもう少しかかるといってますし。ここは私が行きます。」

「え！」

「瀬流彦さんは突破した敵をお願いします」

「確かに強そうなのは見当たらなかったけれど…。後で僕が叱られそうだな」

じゃあ、いきますか！

結果は銃を滞空させて突っ込み暴れまわってすぐに片付いたが。また周囲に被害が出て怒られてしまった。

周囲に被害が出ないような戦い方を学んだほうがいいわね…。

そんなこんなでマミの警備員は続いていく。

2．図書館探検部

やぁ、我々は伝統ある部活、図書館探検部だ！私は現在、探索チームのリーダーを務めている渡辺吉雄だ。

我々の部活は図書館島の謎を解き明かす事を目的としている。直接図書館島に潜る探索班と持ち帰った情報を解析する解析班、他に

もそれを多くの人に知ってもらうための広報班などがある。もっともそれぞれは厳格に分かれている訳ではないのでかたっくるしい雰囲気はないぞ！

さて我々は謎を解き明かすために日々努力し部室に飾ってあるマップも年々大きく詳細になってきている。今年度も世間の妨害を潜り抜けて手ごたえを感じてきていたところだった。

しかし、その歩みはここ最近鈍ってしまった。

その原因は分かっている。学園が新たな刺客を投入してきたのだ、そしてその刺客は今までとは桁が違った。

ことは夏休み前にさかのぼる。夏休みは毎年多くの部員が図書館に潜り大規模なチームが編成されたり長期間調査をするといったことが恒例のになっていた。

その年も同じく夏休みでなければ組まれない大規模チームを編成して図書館島の探索を開始した。

下層は危険な罠があったりするが参加する人員はそのための訓練を受けている。危険ではあるが気をつければ大丈夫だと皆思っていた。

だが今年は全てが違っていた。

第1回目の探索隊がわずか2日で全滅し図書館島前に死屍累々と並んでいた。そしてそれを成した者が一言。

「図書館下層での活動は禁じられている。速やかに解散せよ」

それが彼女と我々の開戦の合図となった。彼女、ガミア先生との…。

今年に入り指導員になった彼女達、元々図書館島での取り締まりは指導員の人達の管轄だが今までは我々を追撃できるものが少なかった事と大学やOBの方達のおかげで問題なく活動をしてきた。だが彼女たちにはそれが通用せず奥深くまで潜った部員の取り締まりやOBの方達からの援護が効かず大学生や一部の部員など許可を貰った者しか今では安全に潜れなくなってしまっている。

おかげで我々の活動は大幅に縮小することになってしまった。…表向きは。もちろん我々はこの程度でへこたれない！現在も囮や妨害班を結成し探索班の援護体制を構築し、探索班もより短時間での目標地点の到達と情報収集ができるよう訓練をおこなっている。

そして今現在、私は多くの犠牲の元に目的地に到着し情報を収集している最中だが。

＜こちらガード・リーダー。上より連絡があった、彼女たちが第3防衛線を突破こちらに向かっているそうだ。＞

「こちらスカウト・リーダー了解した。作業を急ぐ」

「く！どうやら欺瞞情報には引っかからなかったようですね」

「ああ、こうまで早いとそうなるな」

「くそ！まだ探索範囲が残ってるってのに」

「口を動かす前に手を動かせ！護衛班が稼いだ時間を無駄にするな！」

作業をより早く、しかし丁寧にこなしているとついに聞きたくない通信が入った。

＜こちらガード・リーダー！スカウト・リーダー、渡辺！＞

「どうした！」

＜彼女が来た！それも3人でだ！＞

な！全員でかよ！速いわけだ、クソッ！！

＜こちらももうじき突破される！＜ぐわ！＞田中ぁ！！また一人やられた！そっちもはやくしろ、もうもたねぇ！ぐあぁ！＞

「岡田！！」

それっきり通信が途絶えた、あいつがやられただけなら誰かが引き継いで通信してくるがそれが無いって事は全滅したか…。

その後も少しでも持ち帰るものを増やそうと作業をしていると。

「全員、作業を中止しろ」

「ここは許可の無いものは活動禁止だ」

「作業を停止しない又は抵抗するなら実力行使で連れて帰るぞ」

ついに到着した3人の美女、「美しき鎮圧者」ガミア3姉妹。我々に彼女を倒すすべは無くその必要も無い。我々の使命は情報収集とそれを持っての帰還、ならばすることは一つだ。

「分かりました。地上まで帰ります。皆も作業を止めろ戻るぞ」

「「「はい…」」」

降伏する事だ。彼女たちは禁止された場所での部活を取り締まりに来たのであって情報を取り上げられる事はない。この情報を得るのにも犠牲を払ったが。今は得た資料を持ち帰り解析することが先決だ。

彼女との戦いはまだ始まったばかりだ。来年もさらにその後も続けていけば良い。歩みは遅くとも得るものはある、それに彼女たちへの対抗策もきっと見つかるだろう。

こうして第五次図書館島探索は終わりを告げた。しかし、彼女達と探検部の戦いはこれからも続くだろう。

麻帆良の日々2（後書き）

警備員と図書館探検部の話でした。

ん～、話を作るって難しいですねぇ＾＾；ネタが思いつかんｗ
もうちょっとやろうかと思ったけれどネギ君情報を流して中学入りさせるかな。動かせるキャラが足りない…。

あ、主人公は3A入りさせます。理由は次話で。

小ネタコーナー

学園長室でその主の近衛門がある書類を手に頭を抱えていた。側にはタカミチもいる。

近「マミ君から人員を借りたがこんな事態になるとは…。」

タ「彼女、ガミアQ達かなり活躍してるみたいですからね。」

近「活躍なんてもんじゃないぞい。アルビレオ君からまるで上で戦争が起こってるようだと来たわい。」

タ「ははは…、でも生徒間の問題は少なくなっているんでしょう？」

近「だから頭を抱えてるんじゃよ。君も恐れられているが彼女はもっとじゃ。問題が起こっても彼女が現れると収まってしまうくらいにの。」

タ「彼女、容赦ないですからね。前も学園外から来たチンピラや都市周辺で問題を起こしている暴走族を殲滅したみたいですからね。」

近「じゃから、マミ君に引き取ってもらえんのじゃよ。過激ではあるが問題は確実に減っているからの。彼女も問題を起こしていない生徒や住民には何もせんからの。」

有能ではあるが扱いが難しい部下ができてしまって苦労をしているらしい。
もっとも彼の苦労はこれからなのだがな。戦え近衛門！君の胃の未来はどっちだ！！

近「不吉なことを言うんじゃない！」

次回はネギ君の報と３Ａ結成かな？
ガミアやマミにやって欲しいネタなど募集中！

回る物語の歯車と吸血鬼の悩み（前書き）

短編2本です。
読みにくいとご指摘を受けたので少し変えてみました。
少しはよくなったかな？

回る物語の歯車と吸血鬼の悩み

1．大誤算

「近衛門さんから呼び出されてけれど何かしら？」

「そうだね、それも至急来てくれなんて」

マミがいつもどおり警備員の準備をしていると突然、近衛門から至急来て欲しいと連絡が来た。緊急事態でも発生したのかと思い急いできたところだ。

「失礼します。近衛門さん何かあったのですか？」

中に入るとそこには近衛門だけではなくタカミチも難しい顔をしてなにやら話していた。

「おお、マミ君。実は少し問題が発生しての。まぁ、立ち話もなんじゃしかけてくれ」

「問題？」

「ネギ君のことでの。ああ、彼に何かあったわけではない。逆に成績優秀で良い子だそうだ、少し問題もあったりもするがの」

ネギの名前に腰を浮かせかけたマミにネギの現状をいい安心させた。

「それならいったい何が？」

「成績が優秀すぎるんじゃよ。アルバートから連絡を受けての、彼の学習状況じゃと本来7年のところを彼の場合5年ぐらいで全て収得してしまいそうだとな」

ちなみにアルバートはウェールズの魔法学校の校長の名前です。

「5年…。彼が入ったのは97年だから卒業は…」

「2002年になるね。実際に彼に何度か会っているけれど、彼の向上心と吸収力はすごかったよ。本当に5年で卒業できてしまうだろう」

「あやつもそう言ってたの…。本来なら嬉しい事なのじゃが、他にも問題があっての。やれやれあの予言がワシらには的中でもしたのかのぉ」

ちなみに現在99年でノストラダムスの予言も何事も無く外れていたりする。

「しかし、来る事が早くなりはしましたが、まだ3年もあるのだからいったい何が?」

「彼が来る時期が問題ではないんじゃよ。ウェールズで彼の修行するのに適した職を占ったのじゃよそうしたらのぉ…」

「彼の場合、教師と出たみたいなんだよ」

「ええ!何で教師なんかに!?だって彼の歳は…。(そういえばネギまって子供先生が主役だったわね…。まさか現実は違うだろうと

思ったけれど、こっちが現実になるなんて）」

例え7年でも11歳ですからね。無理がありすぎる。

「向こうも間違いかと思って何度もしてみたらしいがの、全て同じじゃったそうだ。だからこそ今頭を抱えてるんじゃよ」

「教師をやるにしてもどの年齢にするかとかでね。たぶん担当は中学生になるだろうけど、学年もどうするか…」

「準備も合わせると彼が担当するのは中学の3年になるじゃろうな。初等部は難しいじゃろうし高校は彼には無理じゃろうし、反対意見が多すぎるじゃろう」

「他の職は無理なのですか？たとえば占い師とか。」

「そうしたいのじゃが、あの占いはかなりしっかりした物での。あの占いどうりにやれば人生の指標を見つけ、占いに出た以外の事をするとたいがいよくない結果になったりするのじゃ」

「効力がある期間が子供の頃だけだから、使っているそうなんだけれど今回の事はあまりにも異例らしいよ。普通はさっきマミさんが言ったような占い師だったり、住み込みでのお手伝いだったりするみたいだけど」

「それはそうでしょう。子供に教師なんて普通務まらないもの。でも、彼を預かるって約束もしてるとなるとどうしましょう？」

「そこなんじゃよ。案として魔法関係者や準関係者といってもいい者を集めたクラスを作り副担任にタカミチ君をすえようかと思う」

「それで大丈夫なんでしょうか？」

「問題が多いことは承知の上さ…。ネギ君のためのクラスを作るようなものなんだ、他の先生方に申し訳ないよ」

「ただ、そこまでやったとしても実際に大丈夫かはわからん。それにタカミチ君も出張が多かったりするからの。そこで君にもそのクラスに入って大丈夫か様子を見てくれ」

「子供たちがネギ君を受け入れられるかどうか、ネギ君が来てからのサポートをお願いしたい。お願いします！」

マミは少し考えた後。

「ネギ君は担任じゃないといけないのでしょうか？」

「ぬ、そうじゃの。占いには教師としかでとらんかったようじゃ。おそらく担任でなくても問題は無いじゃろう」

「それなら彼を副担任か補佐役にしてみてはどうでしょう？それならば彼の修行にもなり生徒にも負担はかからないと思います」

「ふむ、それは可能かもしれんが、あいにく人材がおらぬぞ？他の魔法先生方はすでに担当クラスを持っておるし、一般の先生方だとネギ君を助けることは厳しいぞ」

「魔法のことが出てくると一般の先生方はいろいろまずいからね」

「いえ、教員ではないですがその知識はあると思います。出てきてあしゅら」

私は心当たりがある人材。あしゅらを召喚した。

「「お久しぶりですマミ様」」

「久しぶりねあしゅら。やって欲しいことがあるの、あなた教師ってできる？」

「教師ですか。やったことはありませぬが」「我らとて馬鹿でも盆暗でもありませぬ」「「しばしの間をいただく必要がありますが必ずや使命を果たせるだけの力を身につけてみせましょうぞ」」

う～ん、なんともいえないわね。性格は真面目だから問題は無いと思うけれど。とりあえず彼らにも話を、ってぽかんとしちゃってるわね。

「マ、マミ君。ひょっとして人材とは……」

「はい、彼のことです。性格は真面目なので問題は無いと思いますが、しばらく教員の訓練を受けさせてもらえないでしょうか？それから適正のほうを判断…」

「まってください！確かに学園長も人間離れした後頭部を持っていますが彼ほどじゃないです。何より普段はあまり見かけないので生徒の精神衛生上も問題ないですが、彼が教師となれば流石に誤魔化しきれません！」

「確かにわしも誤魔化しきれぬといいたかったのじゃが。君も…そんなことおもとったのか……」

なにやらタカミチが必死に反対して近衛門さんがすごく落ち込んでいる……。何か問題が……って、そうか！

「すいません説明不足でした！あしゅらあの変装セットって持っている？」

「「あのマスクでしょうか？それならばここに」」

これこれ、この「弓弦之助変装マスク」よ。これをかぶればあしゅらも顔だけじゃなく声も弓教授に早変わりになるって優れものよ。

前に完全な世界の事を調査しているときに何かあったはずと思って探していたらあったのよね。

「それをかぶって、できればスーツもあるといいのだけれど」

「「了解しました。スーツもありますので今着替えます」」

というと止めるまもなくいきなり着替えだした。スーツどこに持っていたんだろう？

ちなみに2人は物凄く不思議そうな、それでいてどこに目をやればいいのかと戸惑っていた。最終的には目を逸らすことにしたけれど気になるわよね。彼の下半身がどうなってるのかって。

マスクをかぶりスーツも着用して、最後に普通の肌の色の手袋をして振り返った彼は先ほどのあしゅらの顔ではなく、弓教授の姿に

なっていた。いや本人見たこと無いけれどね。

「どうでしょうこれなら問題ないと思います。あしゅら、いえ今は弓先生ね。弓先生何か言ってみてください」

「マミ様、私に敬語な必要ありませぬ。弓と及びください」

うん、声も完璧ね。こっちには本人がいないから性格とかも問題ないしね。

「先生を呼び捨てにはできないわよ。その姿のときは私に対する敬語とかは無しでお願いね。あくまでも弓弦之助として行動してね」

「わかった、マミ君。これで大丈夫かな?」

「ほぉ〜、これはすごいの。確かに先ほどの面影は全く無いの」

「はい、これなら教師として活動しても問題ないでしょう。彼なら魔法についても問題ないのでネギ君のサポートも任せられますね」

「そうじゃの、実際に彼が教師として問題ないか見る必要はあるが。ネギ君が来るまで彼を副担任にし、ネギ君が来たら彼を担任にネギ君を副担任にすれば問題は無いの。お主はそれでよいかの?えぇと…」

「この姿のときは弓弦之助と及びください。マミ様の命とあらば必ずや、やり遂げて見せましょうぞ」

「私もサポートの件お受けします」

「すまぬの、詳しいことは入学式が近づいたときにおこなう。彼には後日またこちらに来てもらおう。そこで担当教科や簡単な試験をしてもらうぞ」

ここに子供先生の誕生が決定し、後の３Ａの結成もほぼ決まった。物語の歯車は刻一刻と回る。

「まったく、そんな些細なことで呼んだのかい？能力が有るならやらせればいいじゃないか、年齢なんて小さなことだ。それに彼は英雄の子で、今の話からするととても優秀なんだろ？ならただの一般人よりも彼が大成する事を優先すればいいじゃないか。そのほうが世界にとってもとても有意義だ。わざわざ回りくどい事をする必要なんてあるのかい？それにそんな子を育てたなら君達のこうせｋ「パン！」きゃぷ！……」

「……すいません」

「いや……、気にしとらんよ」

最後になにやら気まずい空気が流れて話し合いは終わった。

2. 修業風景とエヴァのマミ調査記録

ここはエヴァの別荘。ここでマミは何日か置きに別荘内で数日、現実時間で数時間の修行をしている。

「違う！そこはそうじゃない！！全くよくそれで今まで戦えていたものだな！」

「はいぃー！」

修業内容は主にエヴァが修めている格闘技の習得だ。元々身体能力は桁外れに高い事と戦闘経験も大戦時に嫌というほど積んだため問題ないが、格闘技などの技術は最初にラカンに教えてもらった基本的な事の他には剣闘士時代に受けた訓練ぐらいしかなかったりする。

剣闘士時代の途中から格闘技ではなくマジンガーの能力を重視して戦ったため、格闘技のレベルは紅き翼内では実はダントツで低かったりする。実際に格闘技に限定しての手合わせだと黒星が多かった。

ただ、それを補って余りある身体能力と特殊技術が有る事とそれらを活かす戦闘法はずっと鍛えていたので、最強クラスの実力を保持していたのだ。

しかし、この後もそれで大丈夫とは限らないこともあって、エヴァから格闘技の指南と今までどうり能力の修業をしているわけだ。戦闘訓練は今更なのでることはまず無いが…。

「今日はここまでだ！」

「ありがとうございました！」

「ケケケ、コノ後少シ戦ワネェカ？」

一名（一体？）戦闘狂がいるので毎日誘われているが。

「一昨日やったばかりでしょ？」

「サァ、知ラネェナ。オ前ノ血ノオカゲデ最近ゴ主人ノ魔力ガ少シハ戻ッテキテ、よちよち歩キクライハデキルヨウニナッタガ。暇ナコトハ変ワッテネェンダヨ」

だいたい毎日こんなやり取りが繰り返されている。

「きゅぅベエノ奴モオ前モ酒スラ飲メネェシナ」

「キュゥべえは飲めるんじゃないかな？」

「アレハタダ飲ンデイルダケダ。マッタク楽シクネェゼ」

などと従者と弟子が話しいるがその主人のほうはというと。

（ｓｉｄｅエヴァ）

「ここ2年、奴の事を調べてはいるが本当に何もないな。身体については別荘内も入れると3，４年だがよけいに謎が増えるばかりだ。

」

奴も私も時間はあるのだから直接話を聞くことはもっと後、と思ってまずは自分で調べては見たが。本当に何もないな…。

紅き翼なのだからあのような事を言ったところですぐに見つかるだろうと高をくくったが。

奴の話しどうり連合内で手に入る紅き翼関連の書籍だと奴はせいぜい追加メンバーか協力者その1程度のことしか書いていなかった。奴に関しては戦争に参加した兵士の回想録のほうが敵として詳しく語られているくらいだ。

もっともそれとて奴自身よりもアーティファクトから呼び出される怪物たちのことが主に書かれているのだがな。

この事を奴に聞いてみたところ大戦時は機械獣の指揮を主にしていたせいで、紅き翼のように自分の傭兵団をもっていたわけじゃないから敵方の知名度が低いのだろうといっていたな。紅き翼に合流後も連合での知名度はナギ達のほうが遥かに高かったせいで資料の関係でこうなんだろうと。

話していくうちに落ち込んではいたが。

あとは帝国だがまだまだ向こうの品は手に入りにくいからな。奴の経歴はとうぶんお預けだな。

「まぁ、奴の経歴なんぞあまり興味は無いが。問題は身体か…、こちらは大いに探究心を刺激されるがわけがわからんな。」

身体についてみては聞いてはみたが、誤魔化しているが奴もあまり把握していなかったな。

把握しているだけでも、腕が分離飛行でき口から強酸を含む強風を発生させ、髪の先端からは極低温の光線を発射できる。他にも目から尋常じゃない光線を発射でき胸のリボンを変形させ高熱を放てる。他にもあるが極めつけは首が分離でき身体も首無しだが増やせるか…。

本当に人間かあいつは?デュラハンといっても納得できるぞ。私と同じ化け物かと思ったがそれ以上じゃないか?

魔力は体内で反応させているようで特定の形でしか利用はできず、気に関してはからっきしか。まさか、あの力と防御力が純粋に肉体の力とはな。

そもそも気が発現しないとはどういうことだ?あれは生命エネルギーといってもいい、素人でも修行をすれば出るようなものだ。それが出ないだと?

それに魔法にしてもそうだ、あの銃を召喚する物はアーティファクトと思っていたがあれが魔法だと?使える魔法は後はリボンの操作といったが、普通の魔法よりこっちの方がよほど難関だぞ。

アーティファクトも謎が多いな。何故魔法の産物のはずのアーティファクトから機械の化け物が出てくるかも不思議だが、カードがある以上やつのマスターも書いてあるはずだがそこがなぜだか読めないしな。

「ふぅ、これは本格的に研究しないと埒が明かないな。魔力が封じられている事をここまで腹立たしく思ったことは久しくなかったな。私が万全なら直々に色々試せるのだがな…。タカミチを引っ張ってきて奴に実験させるか、それとも……」

なにやらタカミチ君に不吉な未来が迫っている気もするが頑張れエヴァンジェリン！謎が解き明かされるその日まで！

回る物語の歯車と吸血鬼の悩み（後書き）

あしゅら男爵　改め　弓弦之助を投入する事にしました！ネギ君を担任で～ってのはやっぱりと思っていたら閃いたので加筆して彼を担任として投入を決定！彼がメインで授業をしつつも時折ネギ君も……と予定しております。

彼の教師抜擢もきつい気がするけれど子供先生よりはましって事で…。これから彼はネギ君が来るまで教師として頑張っていきます。

マミはネギ君のサポートと来るまでにクラスがネギ君を編入しても大丈夫か見極めるために入ります。
アーティファクト内の人材も豊富だけれど、麻帆良内にどんどん妙な先生が増えているｗ

修行は戦闘経験は先の大戦で積んでいるし肉体作りも必要ないので全くやってなかった基礎的な技術の習得を重視しています。

そしてマミの身体の不思議に悩むエヴァｗ。

小ネタコーナー

今日も街を見回るガミアQ達

ガ「何か視線を感じるな？」

何か視線を感じるらしいが気にせず進むその背後では。

研究生１「やっぱりガミアさんって…。」

研２「だが確証がないぞ。」

研３「そもそもそうだったとしてどうやって協力してもらうんだ？彼女の噂は知っているだろう。」

研１「だがもし彼女がロボットであるなら協力してもらえれば我々の研究は今よりもっと…。」

研２「だが…。」

研３「落ち着け気付かれるぞ。」

ガミアの正体に気付きつつある人達もいるようだ。

茶々丸完成まで後２年。

次回は入学までいけたらいいなぁ。

次の舞台へ（前書き）

中編３短編２です。
物語は次の段階へ！

次の舞台へ

1. タカミチの悩み

彼、タカミチ・T・高畑は悩んでいた。彼が保護責任者になっている少女、神楽坂明日菜について。

元々彼女の将来などで悩みは尽きなかったが最近は特に悩む回数が増えている。ネギ・スプリングフィールドが住んでいた村に起こった悲劇と彼がこの麻帆良に予想よりも早く来る事がわかったためである。

彼女はその特殊な生い立ちと能力によって永い時を幽閉され一般的な人生を歩めなかった。前大戦終結後に紅き翼が彼女を連れ出したためその運命も終わり紅き翼のメンバーたちとの新しい運命が始まるかと思われた。

しかし、6年前にナギがいなくなりアルビレオも動けなくなったときに、彼の師でありそのときの彼女の保護者であったガトウ・カグラ・ヴァンデンバーグが所属不明の一団の攻撃により命を落とした事で彼女の運命はまたも急転する事になった。

マミが帰還する少し前であった。

襲ってきた集団が何処の者かは分からなかったが、彼女の事が知られたという事実は何も変わらない。彼女がアスナ・ウェスペリーナ・テオタナシア・エンテオフュシアであり続ける限り安穏たる日常は来ない。

襲撃され瀕死の状態のガトウはそう考えたのだろう。

彼がとった手段は彼女を殺す事、彼女が黄昏の姫御子という記憶を全て消し去り記憶が無い子供にする事、魔法から遠ざける事によってただの人にしようとした。

ガトウからアスナ―師の名前を貰い名を変えた「神楽坂明日菜」―を託された彼は魔法世界を去り、詠春を頼りに日本に渡りそこで現在の麻帆良学園を紹介された。

かけられていた成長阻害の魔法も効力を失ってきており記憶消去後の状態も落ち着いてきていた事から、彼は彼女をただの子供として麻帆良学園に入学させた。

その後、感情に乏しかった彼女も同年代の子供たちと触れ合ううちに年相応の明るさを取り戻し成長阻害の効力も完全に消えすくすくと成長していた。このまま何事も無く日本人としての人生を歩めると思っていたが、事態はまたもや変わってしまった。

ウェールズのネギが預けられている村が襲撃された事、マミによってもたらされた闇の帝王とミケーネ帝国の情報。完全なる世界は最早かつての勢いをなくしているが彼らを狙う勢力は依然多い。

ガトウが命を落とすきっかけになったときも、そしてネギの村もどちらもその情報はほとんど知られていなかった。それなのに襲撃者はその情報を調べ襲い掛かってきた。

例え記憶を消してもその身に宿している力は何も変わってはいない。もし、彼女の情報が洩れてしまったら。

その時に彼女に降りかかる惨劇が脳裏を掠める。本当にこのままでいいのか、魔法について話しかつてのような防衛体制を敷いたほうがいいのか…。

マミが帰還した折にその事について相談して、高校になるまでに結論を出すと決心した。ちょうどネギも来るのだから2人を守るためにもちょうどいいかもしれない。

しかしそれはネギが優秀すぎるという本来なら喜ぶべき事によって変更を余儀なくされた。彼がこちらに来るのは早くて２００２年遅くとも０３年には来るだろう。彼は中学生まではただ子供のままでいて、高校になったら今後の事を考えればいいと思いそのつもりでいた。

本来の予定で彼が来たのならば高校に上がり次第魔法のことを少しずつ話していき、高校3年に進路をどうするか話し合う予定であった。

彼が来るときが高校1年か2年になるはずであったのでちょうどよかったのだ。ネギと関わらせるかどうかも含めて準備期間が十分に取れるはずであった。

しかし、予定は変わり彼は中学の2年か3年に来る事になる。確かに中学生から今後の進路を決めていくべきではある。

だが、もし魔法に関わる事になれば子供らしく遊ぶことは彼女の生い立ちを考えると難しいだろう。だからこそ高校3年のときに今後の進路を決めれるようにしていたのだ。

一人ではどうにもならないと思い、彼はマミの元に相談に来ていた。

「確かに彼女の場合、魔法に関わるかどうかは修正が効かないくらい大きな人生の分かれ道になるわね」

「はい、高校3年以降。大学に行くか就職するかは分かりませんが、ここで僕も含め魔法と完全につながりを絶てば日本にいるのならばおそらく襲われる心配は少なくなるでしょう」

「そうね、アジアは魔法使いの勢力は欧州と比べてだいぶ小さいものね。ネギ君と明日菜ちゃんを別にする事は難しいの？」

「それも考えましたがネギ君はナギさんのことを追っています。ここでの修行を終えればおそらく魔法世界に渡りいろいろ調べて回るでしょう」

「そうでしょうね。ウェールズに居たときもナギに憧れていたものね」

「そうなれば完全な世界の残党や彼を疎ましく思う者が危害を加えてくるでしょう。そのときは彼を守らなければいけない。しかし、同じ時期に彼女の今後についても話しあわなければいけない」

「つまり手が足りないって分けね。確かにネギ君を狙う勢力のことを考えると生半可な護衛じゃ意味はないし、彼女の素性は極秘中の極秘。他人に任せておけるものじゃないわね」

「はい、他の魔法先生やアチラの人達を信用してないわけではないのですが、万全にしようと思うとどうしても……」

「私が付いていてあげられたらいいけれど、ミケーネの事もあるから確約ができないからね」

「はい、なので彼らを別個で扱うのは現状では厳しいですね」

「だからといって中学に入ってすぐに人生の大きな分かれ道を突きつけることは酷ね……」

「はい……」

「……明日菜ちゃんがどっちを選ぶかは置いておいて。タカミチはどうしたらいいと思っているの？」

「僕は……、彼女は魔法に関わってしまうと思っています」

「やっぱり黄昏の姫御子ゆえに？」

「はい、完全なる世界やミケーネ帝国との戦いはいつ終わるかは分かりません。例え早期に終わったとしても、今後も彼女を狙わない勢力が出ないとは限りません」

「魔法世界で覇を唱えるなら、彼女の力はとても重要ですものね」

「はい、それにさっきは日本なら襲われる心配は少ないと言いましたが、最近は分からなくなってきました」

「どうして？」

「昔は大丈夫と思っていました。けれど最近はどんどん情報の伝達速度が上がってきていますよね」

「そうね。インターネットが一般家庭に来るなんて２０年前は考えられなかったものね」

「４年前もそうですよ。けれど最近はどんどん凄くなってきてるじゃないですか。これが今後続けばもっと伝達速度が上がってきて世界中の情報が誰でもすぐに見れる事になるかもしれません」

「……。（後数年で情報化社会の到来ですものね…）」

「考えすぎとは思うんですが、そうなったら彼女の力が何かのきっかけで一般の目に触れてしまったら……。恐らくあっという間に広がってしまうでしょう、それが騒ぎになるかは別として。そうなれ彼女を狙う勢力の目に付くかも知れない。それがあと８０年以上もないといえる自信はないですね」

「それに彼女が海外に出るかもしれないしね」

「はい、そうなれば魔法使いと接触するかもしれない。だからといって彼女の行動を制限するわけにもいきません」

「なるほどね。だから関わってもらってしっかりと守れるようにしたいのね。」

「はい」

「ふぅ、ほんとうに難しい問題ね。（未来を知ってる身からすると

彼の懸念は的中ね。いえ、それ以上にたちが悪いわね）」

２０１１年、今はまさに情報があふれ、日本人も海外に出ることが多くになっている。情報化、グローバル社会だ。

この世界が現実と違うとはいえ概ね同じ歴史をたどっている、おそらくその流れは変わらないだろう。そして今後も世界はより狭くなっていく可能性が高い。

彼女の事がネットの情報に出る可能性は十分にあり、彼女も海外に行く可能性はある。そうなれば彼の不安は現実のものとなるだろう。

「彼女は魔法を知り自分で身を守ったほうがいい。でも、今はまだ子供でいさせてあげたいか……。彼女自身に話を聞かないとなんともいえないけれど、彼が来るまで待ってあげたら？早くはあるけれど中学３年のときにね」

「はい、そうですね。彼もいろいろと問題を抱えていますからね」

「ごめんさいね。あんまりいいアドバイスをしてあげれなくて」

「いいえ、話を聞いてもらえただけでもよかったです。一人だとどうしても思い悩んでしまって」

「ネギ君が早く来る事は詠春も慌ててたからね。木乃香ちゃんは彼女ほど深刻じゃないからいいみたいだけれど」

「確か、魔法とはあまり関わって欲しくなかったのでは？」

「明日菜ちゃんほど大きな分かれ道ってわけでもないからね。知ったとしても、呪術協会に関わらないようにすればいいだけみたいだからね。もっとも、今後の状況で変わるかもしれないけれどね」

「あの人も大変ですね」

明日菜のことはとりあえずではあるが決着が付き、彼が来るときまで待つこととなった。これが良いか悪いかはまだ分からない。

2．弓先生の教師生活

彼、あしゅら男爵こと弓弦之助は今、新田先生の下で教育実習生扱いで経験を積んでいる。

生徒から「鬼の新田」と呼ばれるほど厳しい教員であるが、経験も豊富で彼の指導役に適任という事で厳しくはあるがそのおかげで彼は教師として問題がない段階に来ている。

「新田さん、今日もありがとうございました」

「いえいえ、私はあくまでも現在の教育現場を教えて差し上げているだけですから。逆に弓さんの知識に私のほうが驚かされるくらいですよ」

「今まで、山の中に居たものですから。暇なときは本を読んだり、

子供たちに聞かせる話のネタを集めてばかりでしたからね。教師をしていたといっても私塾の先生のようなものですから、書類もあまりなかったですからこちらこそ勉強になります」

ちなみに彼の設定は田舎で教師をしていたが過疎によって子供がいなくなったので、旧知を頼りにこちらに越してきたという事になっている。

これなら多少変でも誤魔化す事ができ短期間で教師にする事ができるという事でこうなった。

「来年から副担任として配属されるそうですね？」

「はい、高畑先生が担当するクラスになるようです」

「そうですか。彼が担当するクラスは毎回騒がしいものが多いですからね。良い経験になるでしょう」

広域指導員という事で毎回、小学生のときに騒がしかった者が多く割り振られているらしい。

「今から楽しみですね。彼にもお世話になってますからしっかりとサポートしませんと」

「あなたなら大丈夫ですよ。すぐに担任になる事ができますよ」

あしゅらの性格が真面目である事と弓弦之助としての落ち着いた雰囲気、深い知識や問題児にも毅然と立ち向かう様子が少しの期間で多くの信頼を勝ち取ってきている。

「ただ、話しているとたまに左右を向く癖は直したほうがいいですよ。少し奇妙に見えてしまいますから」

「すいません、今までは生徒たちの間を行ったり来たりしていましたから」

ただ、あしゅら男爵としての癖はまだあるようだ。

3．アルバイトと年末とナンパ

ここは麻帆良内にある龍宮神社、後にマナ・アルカナこと龍宮マナの実家となる神社だ。

そして今は年末大晦日。日本中の神社が大勢の人であふれるように、ここもまた数多くの人が訪れ過ぎ行く今年と訪れる新年を迎えるのだが、今年はさらにもう一つイベントがあった。

今年は２０００年そして来年は２００１年。そう２１世紀の到来である。そのため今年は麻帆良中がお祭り騒ぎになっており新年を今か今かとまっている。

さて、そんな中すでに1回２１世紀の到来を経験しているマミはというと。

「すごい人ですね」

「新年だからね。それも新世紀となればここの連中なら騒がないほうがおかしいよ」

毎年のことながら人の多さに驚きの声を上げている彼女の服装は白衣に緋袴、白足袋と巫女装束を身に纏っている。早い話が巫女のバイト中なわけである。

「前はこれに便乗していろいろ問題が発生していたんだけれど、ガミア先生たちが巫女の仕事を手伝ってくれたおかげで被害がぐっと減ったみたいよ」

「彼女たちに手を出したのが運のつきね。（それって囮捜査の気が…）」

と話しているも、新年までもう少しに、

「5」

「4」

「3」

「2」

「1」

「「「「0！ハッピー・ニュー・イヤー！あけましておめでとう！！21世紀だーーーー！！」」」」

カウントダウン終了と同時の大歓声、そのまま年始の祭りだとばかりにさらにヒートアップして神社だけでなく麻帆良全体が大騒ぎになっていった。

「新世紀開幕ってこともあるんでしょうけどすごい規模ね……。花火に飛行機にって下手なテーマパークよりすごいんじゃないかしら？」

各サークルや部活もさまざまな形で新年と新しい世紀の到来を祝っていて、学園祭と同じくらいにぎやかになっていた。

「休憩を貰ったから少しみてみようかしら。ここで参加しなかったら物凄くもったいないものね」

時計を確認し交代まで十分時間があることを確認し、マミは喧騒の中に入っていった。

路上パフォーマンスや出店を見ていると

「ねぇ、君。そこの巫女服着た子」

後ろから声をかけられて振り向いてみると、３人のそれなりに顔がいいと思われる男たちがいた。

「よかったら僕らと新年をお祝いしない？」

「私とですか？」

「そうそう、食いもんとかは奢るからさ」

「ああ、損はさせないぜ」

（ナンパか。マミさんになってからよく声をかけられるけど、それを嬉しく思うほど精神は女になってないからなぁ）

主人公、こっちの世界に来てそれなりに経っているがいまだに精神は元々の状態に近かったりする。流石に男のままってわけではないが、今まで剣闘士や傭兵などをしていたせいで、貞操の危機ってくらいでしか女である事を感じたことがなく。しかもそれさえ難なく跳ね除けてきたので自覚がまだまだ薄い。

だから、綺麗と言われて喜びはするが、愛してるや今回のようなナンパはソッチの趣味はないと嫌がっている。だんだん百合方面に行っている気がしないでもない主人公だったりする。

なので返答は当然。

「いえ、せっかくですがまだバイトの途中ですから」

「いいじゃないか。多少遅れても謝れば大丈夫だって」

「そうそう、バイトなんかより俺達とすごしたほうがよっぽど有意義だよ」

「それに君、地元の子でしょ？俺達ここ初めてでさ、人助けと思って案内してくれよ」

その後もマミが断ってもしつこく言い寄ってくる男たちはついに。

「あぁーー！いいからついて来い！！」

「まったく、空気が読めないね」

「ああ！さぁ、もっと近づけよ！！」

なかなかうなずかないマミにキレた男たちは強引に腕を取って連れて行こうとした。

（はぁ～、めんどくさい事になったなぁ）

マミは他人事のように心の中でため息をつき、周りの麻帆良の住人は巻き込まれないように離れていった。

「はん、周りの奴もなさけねぇな」

「こちらが強気になったとたん逃げ出しましたね」

「ははっ！これならこの街の奴はやりたい放題にできるんじゃねぇか？」

「そうだな、ここまで腑抜けぞろいだとな！」

彼らは街の外から来たから知らなくて当たり前だが、ここ麻帆良では自分たちが何かしなくてもどうにかする人たちが大勢いること。

まして最近は恐怖の秩序の番人がいるのだ。その時に巻き込まれたら困るから離れたのである。

だから彼らがここでとる最善の行動は、誰か来る前にさっさとマミを放して逃げる事である。騒ぎを聞きつけてきた指導員があの3姉妹の誰かだった場合、謝罪など聞くまもなく制圧されるだろう。

もっとも、彼らを叩きのめす相手が誰なのかは麻帆良の住人も予想を外していたが。

「先に手を出したのはそっちだから、これは正当防衛よ？」

「は？何いって……ブギャ！」

「高村！お前よくｍ……ハガ！」

「え？え？？……アベシ！」

絡まれていた本人が難なく男たちを制圧してしまったのだ。

そこに指導員が到着した。

「マミ…君！これはいったい？騒ぎがあって駆けつけたけれど」

「高畑先生。しつこくナンパに誘われて強引に連れて行かれそうになったので、正当防衛ではらいのけました」

「彼らも運がなかったなぁ…。わかった、後はこっちで処理しておくよ」

「ありがとうございます」

その後もエヴァと会って少し話した後、強引に巫女のバイトに連れて行ったり、仕事を交替したタカミチと合流したりして初日の出まで騒いでいた。

4．入学式とクラス

ウェールズ魔法学校から来年にネギ君が卒業する事は確定し、こちらに来るのは03年の初頭になるだろうと知らせが来た。

あしゅらの教師としての訓練も終了し、クラスも明日菜ちゃんやこのかちゃんなど魔法関係者を多く配置したクラスも組み受け入れ態勢は整った。

私もネギ君のサポートをするために中学生として入ることになった。

まだ彼が来るのは先だけれど、私はこれから1－Aの一員としてすごしていくことになる。

学園長、校長と長い挨拶を終え。入学式は終わり私達はこれから3年間お世話になる教室に向かった。

そこでタカミチとあしゅら、っと高畑先生と弓先生ね。の挨拶の後一人ひとり自己紹介をし私の番に。

「巴マミ君」

「はい！」

ネギ君や闇の帝王と心配事も多いけれどこれから3年間、彼女達と楽しく過ごしましょう。

物語の歯車は再び大きく動き出した。彼が来ればより大きく動くだろう、その進む先にはいったい何が待っているのか。

次の舞台へ（後書き）

明日菜を関わらせる理由作りとその他です！

明日菜を関わらせる理由を作ってみました。いささか強引ではありますが、隠れても隠し通せるかわからないので打って出よう！ってな感じです

この形態はネギ君が来るまでもう少し続きます。内容は超の困惑とかそんな感じをもうちょっとしたところでネギ君襲来です！

エヴァ編はある程度できてきたのですが、あしゅらを活躍させようかキュゥべえを暗躍させようか迷ってます。

あと、ネギ君を原作通り明日菜&このか部屋に放り込むかあしゅらと同居させるかも迷ってたり

小ネタコーナー

エ「オイ！こら、放せ！」

マ「いいじゃない、減るもんじゃないんだから。ちょっと巫女装束着るだけよ。交替してももう残りの時間も長くないんだから。」

エ「だからなぜ、私があんなもの着なければいけないんだ！」

マ「きっと似合うわよ。」

エ「人の話を聞け！」

その後、抵抗むなしく連れ去られ、終わった後もガミアに監視され、結局全てが終わるまで脱がせて貰えなかったらしい。

エ「くそ！今度はこっちがやり返してやるぞ！」

リベンジを誓ったエヴァだが果たして達成されるのか。

教師と生徒それぞれの悩み（前書き）

短編２本

もう少しできるかと思ったけれど、ぜんぜん３－Ａの日常ネタが浮ばず…。

教師と生徒それぞれの悩み

1. クラスの様子

ネギが受け持つ予定であり、マミが入ったクラスはある意味で麻帆良らしいとも、麻帆良の利点と欠点が両方そろっているともいえるクラスであった。

別に問題児が多いというわけではない。成績優秀者や技能保持者など褒められるべき点は多数ある。委員長に決まった雪広あやかなど才色兼備、文武両道、人格者と完璧超人といってもいいくらいの子もいる。

では何が問題か、それはおおらかを通り超え自由すぎるといっても良い性格と、中学生なら当たり前かもしれないが各々自分の興味があることには自重をしない部分である。

このクラスで何かがあるとそれがどんなに小さなことでもほんのわずかな時間で、大騒ぎに変わっているなどこのクラスでは日常茶飯事である。

自重しないことについてもクラスの武闘派の古菲と長瀬楓は自己紹介時にタカミチと弓に勝負を申し込んだり、絡繰茶々丸の製作者である葉加瀬聡美と超鈴音がガミアをロボットと判断し顔を出している麻帆良大学工学部と一緒に解析しようとして制圧されたりと何かしらの騒ぎの元を提供している。

とはいえ他の生徒に過度の迷惑をかけているわけではなく、むしろその何でも受け入れる超ポジティブなクラスの雰囲気が塞ぎこみ

がちな生徒を明るくしたりと良い方向に働いていることもある。

入学式からしばらくたって判断できた事は、このクラスならネギを受け入れることは可能な事と並の教師ではこのクラスを制御することは不可能という事だった。

そのため当初予定していた弓が担任、ネギが副担任あるいは弓の補佐という配置は決定となった。

とタカミチと弓が今後のことを話し合っていると、少し先の学園祭でのクラスの出し物を超が持ってきた。

「と言う訳でクラスの出し物は中華料理の飲食店にナタネ」

「ふむ、料理人や調理法、衛生管理や食材も問題なさそうだね。それにしてもよくまとめられているねこの資料は」

「けれど何故、超君が？こういうことはいつも雪広君が持って来ているが」

「実は先生方にお願いがあって変わってもらたネ」

「お願い？」

「詳細はこの資料に書いてあるネ」

と超が取り出した資料には。

「なになに……「超包子」出展計画！？え！学園祭以後も営業するのかい！？」

「お金の管理とかは問題ないヨ。食材もあやかを通して雪広グループから仕入れるから大丈夫ネ」

「しかし、中学生が商売するというのは……」

「学業には影響ないようにしっかりと調整するヨ。トラブルが出たら中止にしてもいいからネ。味は学園祭のときに判断して欲しいヨ」

「一応話しは持っていってみるけれど、実際に許可を出すのは僕達じゃないからね。あまり期待しないでくれ」

「大丈夫、先生達が話を通してくれるだけで全てＯＫヨ」

「ははは、自身があるんだね」

「もちろんネ！」

その後、この話を学園内の営業活動を管理する部署に持っていき、学園長が最後に判断を下す事となったのだが。超が言ったとおりに許可が下り、それだけでなく超包子は瞬く間に学内一の人気の店になった。

「……」

生徒が自主的に活動する事は嬉しいが、その規模が中学生の範囲を超えていることに複雑な心境のタカミチであった。

ちなみに古菲が学内の格闘家を全て破り、日々挑戦を受けていることを知ってさらに複雑な顔をしたとか。

2. 超の困惑

さて、先ほど話しに上がった超だが、実は入学以来ある悩みを抱えていた。

万能の天才といわれている彼女の悩み、それは彼女がここにいる理由と深く関わっている。

彼女がここにいる理由と悩み、それは進学といった普通の理由でも、あの理論がどうのこの数式がどうだといった天才としても悩みではない。

それは彼女が現在の遥か未来からの来訪者であり、その未来にて起こる悲劇を回避するためにここに来たのだ。

そしてその悩みはある2人の人物に関することだった。もう少し幅を広くすると5人になるかもしれない。

その人物たちとは「弓弦之助」「巴マミ」「ガミア3姉妹」だ。

彼女は未来の悲劇を解決する計画を胸に秘め、またそれに深く関わるネギ・スプリングフィールドに接触するために麻帆良学園に来

たのだ。そしてその計画実行のために日々いろいろとしているわけだが。

それを実行するに当たり間違いなく学園の勢力とぶつかる事になうため、学園の警備員の情報や最大の障害になりかねないネギの事をいろいろ調べて来たわけだ。

流石に昔のことなので失われている情報は多いが、クラス構成や担任の事など麻帆良学園の表の事は簡単に入手できた。

しかし、その中に弓弦之助と巴マミの名は記載されていなく入手した情報だとクラス総数は３１名、担任は１～２年の２学期までは高畑が担任、それ以降はネギが担任になっていた。しかし現実には２人はクラスに関わっている。

もちろん超とて過去が完全に情報通りとは思っていなかったが、この二人は流石に見過ごせない理由がある。

弓に関してはネギの事を考えると一般の教員とは思えないが、いくら調べてみても魔法との関わりが見つけ出せず、ならばネギが来るときに副担任が交代するのかと思ったが。

どうもネギが来たら担任になりネギを副担任にするという予定らしい。普通に考えれば当たり前の事だが、これを大きな変化と判断しており彼が何者なのかと悩んでいる。

マミに関してはそれ以上に気にかかっている。このクラスからネギの従者候補が多数出ることは調べてあるため、彼女が何者なのかを調査したのだが、調べれば調べるほど彼女の情報が無かった事に対する不安が増してきている。

彼女が普通の魔法と関わりの無い一般人なら問題は無く誤差と判断できたが、調査の結果はその真逆であった。

警備員として数年前より活動し多くの魔法使いの教員より信頼されており学園長やタカミチ、エヴァと親しいなど情報が残らない事などありえない人物であった。そのような人物がクラスにいる……、自身の計画を進める上でどう判断するか。まだ時間があるとはいえ何らかの対策を立てるべきかと考えている。

ここは超と葉加瀬の研究所。ここで彼女たちは日々研究と計画の準備をしている。そして今日は計画の準備のためにマミの偵察をしているようだ。

「調べれば調べるほど、謎が増えてきますね」

「現在わかっているだけでも魔法世界出身で長命種か不老、実力も高畑先生より上でエヴァンジェリンと同クラスの化け物。さらに最近判明した事は弓先生とガミア先生たちともかなり親しい、と言うより彼らの上位者ってところネ」

「ガミア先生たちが彼女と上に見ているらしい映像を録画できましたからね」

「未確認情報では元紅き翼とも出てきてるネ。どう考えても彼女は私の世界の過去にはいなかった存在ヨ。もし居たら私は今後情報と言うものが信用できなくなってしまうネ」

「欠片も情報が残らないなんてありえないですね」

「私たちの計画において最大の不確定要素ネ」

「実力を考えると敵に回ると大変ですね」

「武力だけでどうなるってわけでもないが。彼女はそれを判断できる材料が決定的に不足してるネ」

とマミについていろいろ悩んでいるようだ。

そして二人の後ろに白い影が居た事は誰一人として知らない……。

その白い影の主人でさえ。

教師と生徒それぞれの悩み（後書き）

タカミチの悩みと超の悩みでした。

ぜんぜんネタが思い浮かばず…、ホントはもう少しやろうかと思ったけれど無理そうなので時間を一気にとばしてネギ来襲まで進めます

次話はネギ君が麻帆良に来ます。

エヴァ編の配役と部屋割りも決まったので後は文字にするだけです！

小ネタコーナー

超「彼女の謎は解けないが、他の悩みの解決の糸口がみつかたネ。」

葉「なんですか？」

超「ガミア先生の事ネ！」

葉「なるほど！彼女がガミア先生の上位者、たぶんマスターでしょうか？なら彼女にお願いすればガミア先生のことを解析できますね！」

超「その通りネ！何としても彼女とガミア先生の関係をまとめるヨ。なに、クラスメイトの頼みならきっと聞いてくれるネ。」

葉「そうですね！うふふふふ……。」

超「そうすれば科学はさらに！ふふふふふふ……。」

研究室内には不気味な笑いがこだまし、メンテナンスにやってきた茶々丸が思わずUターンしてしまった。

彼女が感情を得るのは原作よりも早いかもしれない。

ネギ来日！&開幕（前書き）

リアルの都合で遅くなりました＾＾；

やっとネギがやってきます！

ネギ来日！&開幕

２００２年７月。ブリテン島ウェールズ地方のとある辺境にある村に存在する学校で卒業式が執り行われていた。

「卒業証書授与！君たちは本校にて……」

田舎の村にあるせいか生徒、教師は共に少なく卒業生も片手で数えられるくらいしか居ない。

「君たちはこの７年間、よく頑張ってきた。しかし、修行はここからが……」

もっともその原因は田舎と言う事もあるが、それが主な原因ではない。

「ウェールズ魔法学校の誉れとなるよう。そして自分が目指す立派な魔法使いになれるよう努力を怠らぬように！」

そうここは、魔法使いの子供たちが大人たちから魔法の初歩を学ぶ場所。現代社会の裏で暮らす魔法使いたちの子供達のための場所だ。総数が少ないゆえに子供の数も少ない。

だが、子供達の門出を祝う大人たちにとってそんな事は関係なかった。

卒業式が終わっ魔法学校の廊下。そこで卒業生2人とその保護者達が話し合っていた。

「ネギなんて書いてあったの？私はロンドンで占い師よ」

「修行の地はどこだった？」

「早いものだな、ちょっと前に入ったと思ったらもう卒業か」

「イングランドまで行くなんて、離れるだけでも心配なのに…」

「子供はいつか旅立つもんじゃ。そんな事言ってはいつまでも未熟者で終わってしまうぞ」

子供達は卒業後の修行内容について、保護者たちは離れて暮らす事になる子供を心配して話し合っていると。

「今、浮かび上がるとこ」

話しかけられた少年の証書に、同じ卒業生である少女と同様に修行の地とやるべき職種が浮かび上がってきた。

「あ…」

「どう？」

「え～と、「日本」で「教師」をする事」

「「え？」」

「なんじゃと！」

「「えぇーーーーーーー！」」

そこには予想外の事が書かれており、経験豊富なはずの老魔法使いさえ驚愕し、他の人は半ば思考停止に陥っていた。

「こ、校長先生！「先生ってどういうことですか！？」

その後、何度読んでも逆さにしても裏から見ても文字は変わらず校長に問いただすために皆で移動してきた。

「ほぉ……、『先生』か…」

「何かの間違いではないのですか！？１０歳で先生など無理です」

「そうよ！ネギったらただでさえボケでチビで…」

そう問い詰める２人の少女に校長は。

「しかし、卒業証書にそう書いてあったのなら。決まった事じゃ。立派な魔法使いになるために頑張って修行してくるしかないの」

と変更する事はできないと告げた。

「あぁっ」

「あ！お姉ちゃん！」

その無常な現実に少年を実の弟のように扱い、少年も姉と慕っている少女はめまいがしたのかふらついてしまった。

「ふむ、安心せい。修行先の学園長はワシの友人じゃからの。生活面では何も心配は要らんよ。ま、頑張りなさい」

「……」

校長が安心するように声をかけたがそれでも初めての異国の地、責任重大な職業に幼馴染の少女は沈黙してしまったが

「はい！わかりました！！」

少年は元気に返事をした。

「それにしても、あやつといいあの子といい波乱万丈な修行じゃの」

その後、子供達とその親が去り老魔法使いと校長が残り話していた。

「修行の地を日本にした事は、ワシらの判断じゃが。教師は占いが示したものじゃからな」

「あやつのときは出なかったそうじゃな？」

「でたとしても傭兵とかじゃろうな」

「確かにそうじゃな。しかしいくらなんでも教師は……」

「ああ、いくらあの占いでも教師は流石にどうかと思ったのじゃが…」

「こんな時は魔法使いである事が恨めしいの。例え無茶とわかっていてもやった時と、やらなかったときの差を知っていてはの」

「全くじゃよ」

当たりすぎる占いもそれはそれで困った事になるようだ。

「じゃが、日本に行かせたのはやはり？」

「ああ、こちらに置いていては彼の成長に悪影響が出てしまうじゃろう」

「まったく、未来を創るのは若者じゃが過去の遺物と今の問題を何とかするのがわれわれじゃというにの」

「まったくじゃ……」

２人は少年の未来が明るい事を願い、その後も語り合った。

それから時は流れ２００３年２月

「本当に日本は人が多いなぁ。ロンドンに着いたときもそうだったけれど日本はそれ以上だな」

少年―ネギ・スプリングフィールド―は修行の地である麻帆良学園の地に居た。

「え～と、たしか女子中等部の校門前だったよね。空港に迎えに来てくれるのをわざわざ断ったのだから遅れないようにしなくちゃ」

どうやらネギ、始まる修行に気合が入りすぎて迎えを断ったみたいだ。

しばらく歩いてようやく目的地の到着してあたりを見回していると。

「やぁ！久しぶりだねネギ君！いや、これからは先生かな？」

「タカミチ！久しぶり！」

目的の人物であり久しぶりに会う友人との再会の挨拶をし、今までの事や日本の感想を話し合いながら学園長室に向かった。

「なるほどの、修行のために日本で先生を。そりゃまた大変な課題

をもろたのぉ」

「は、はい。よろしくお願いします」

ネギはこれからの事を思ってか、それとも学園長の奇怪な（それはもうよいじゃろ！）ともかく緊張した面持ちで挨拶をした。

「しかしまずは教育実習ということになるかの。今日から3月までじゃ。学期末に今後も教師として働けるかの試験をだそう。本当の修行はそれからじゃな」

「はあ」

「ネギ君。この修行はおそらく大変なものになるじゃろう。ダメだったら故郷に帰ることになる。二度目は無い、その覚悟はあるのじゃな？」

学園長の最終確認の問いかけに彼は。

「は、はい！やります。やらせてください！」

決意のこもった目と言葉で応じた。

学園長もそれを確認し。

「うむ、わかった！仕事は来週からになる、今日と明日はゆっくり休み日本の生活に早く慣れなさい。正式な挨拶は月曜日の改めておこなうが、今日も来ている先生方は居るからの。これから君と一緒に働く人も来てもろうておる、挨拶や少しばかり話してきてはどうかの？高畑君、案内してあげてくれ」

「わかりました。さぁ、ネギ君行こうか」

「はい！学園長先生ありがとうございました！」

タカミチとネギは連れ立って職員室へと向かった。

「ふふ、あれから結構経つけれど変わってないわね」

「ふぉふぉふぉ、久しぶりに会って懐かしかったかの？」

２人が出て行った学園長室に先ほどは居なかった人物の声。マミが久しぶりに会ったネギに一緒に居たときを思い出してつぶやいていた。

「とりあえずは3月まで様子見ですか？」

「そうじゃの、いくら占いで適してるとはいうても、１０歳に教師は辛かろう。期末テストの時にちょこっとしたものを出して、後は君と弓君の報告しだいかの」

「合格したら本格的な修行ですけれど、どうします？ナギじゃないんだから腕試しの旅なんてするわけにもいかないですし」

そもそも教師と関係ないですね。

「そうじゃのう。生徒とのふれあいも修行の一つと思うておるが、彼の場合それだけじゃと不安じゃからな。エヴァに闘ってもらおうかの？」

「一人じゃかなわない敵をぶつけてみて、精神を鍛えるってところですか？でも、エヴァがそんな事に付き合うでしょうか…」

「そこなんじゃよ。あやつは茶番とわかれば決して肯かんじゃろうしの。ネギ君の血で呪いが解除されるかも知れん、と情報を流してみようかと思うておる」

「それだとネギ君が危険だと思いますよ。それにだまされたとわかったら彼女が怒りますよ」

「どうしたものかのぉ。君がやるわけにもいかんしの」

「私だと迫力が足りませんからね」

と2人でネギの修行内容について話していると。

「なんなら僕が彼女と交渉してこようか？」

とどこからともなく現れたキュゥべえがそんな事を言いだした。

「あなたに任せるのはいろいろ不安なのよね」

「僕はあくまでも最も効率のいい最善の方法を提供しているつもりだよ？」

「その効率のよいってところが不安なんじゃが」

あのキュゥべえですからね。このキュゥべえもしょっちゅう黒かったり人心を無視した物言いをしていたりしますから。

「でもあなたの交渉力はすごいものね…。じゃあ、条件としてネギ君に過度の危険がかからないようにとエヴァも納得して参加する事、一般生徒や事情を知らない魔法使いに被害が出ないようにして」

「それなら簡単だよ。そうだマミ、君も少しは協力してくれよ」

「ええ、いいわよ」

「了解だ。きっとすばらしい修行になるよ。じゃあ、いろいろ準備があるから結果は時期が迫ったら言うね」

と言い残すと来た時と同じくいつの間にか居なくなっていた。

「いささか不安ですね…」

「そうじゃの…」

後にもっと条件をつけておくべきだったと後悔するわけだが。

さて、一方のネギとタカミチの方は職員室につき、紹介と挨拶を終え。今日からネギの場所になる机まできていた。

「ここが今日からネギ君の場所だよ。弓さん、彼がネギ君です」

「ああ、彼が。こんにちはネギ君、私は弓弦之助。これから一緒に仕事をする事になるがよろしく」

「はい！よろしくお願いします！ウェールズから来ましたネギ・スプリングフィールドです！」

「うん、いい返事だ」

弓がネギの返事に満足していると。

「彼は今僕が担任をしているクラスの副担任をしているんだけど、君には彼の補佐をしてもらうよ。しばらく出張で忙しいから、彼が担任で君が副担任のような形になるかもしれないけれど頑張ってくれ。」

その後は教師についてや書類整理の仕方を教わりっていたが、次第に日も暮れてきた。

「もう日も暮れてきたね。今日はここまでにして夕食を食べて帰ろうか」

「うん。あ、タカミチ。僕はどこに住めばいいの？」

「高畑先生、住む場所を伝えてなかったのですか？」

「すまない伝え忘れていたよ。ネギ君はこれから職員寮の弓さんと一緒の部屋に住んでくれ。弓さん彼をお願いします」

「ネギ君いろいろ大変だろうけど、お互いがんばろう」

「はい、弓さんこれからよろしくお願いします」

彼らはその後、夕食に日本料理店に行きネギの故郷のウェールズ

のこと、日本のことの話しに花を咲かせ、弓とネギは職員寮に向かった。

「ここが私の部屋だ。ネギ君に必要な家具や食器は明日にでも買いに行こう」

「でも僕お金は…」

「なに、遠慮する必要はないよ。これでもそれなりのお金はもらっているからね」

「そんな、わるいですよ！」

「ふむ、それなら今は君に貸しておくという事にしよう。正式な教員になって学園長から給料を貰えるようになったら少しずつでいいから返してくれればいいよ」

「それなら…、しばらくお借りします」

「遠慮する必要はないよ。これでも蓄えはあるほうだからね」

実際に弓、というよりマミの月の収入は5人分ある割りに使うのは実際は1人のため、貯金はかなりあったりする。

マミは最初断ろうとしたが、学園長が働いているのに給料を払わないわけにはいかん、と言い5人分の給料を振り込んでいる。

なのでネギ1人が増えてもよほど無駄使いをしない限り、生活が苦しくなるということはない。

その日はネギも疲れていたために早めに眠り、日曜日にネギ用の机や食器、いくつかの嗜好品を買うついでに麻帆良の街を案内した。

その夜、机の設置などで疲れたネギが寝た後、部屋に備え付けの浴槽にて弓ことあしゅらの声が。

＜あしゅら、昨日と今日彼を見ていてどうだった？＞

「「そうですね。頭の回転は悪くはないといったところでしょうか。本当にあやつの息子なのですか？」」「顔こそ似ていますが性格は真逆の気がします」「それと魔法の制御に少々、難点があります。魔力量が大きいせいかくしゃみなど突発的なことでもれてしまっているようです」

どうやら2日間、一緒に居たときの感想を聞いているようだ。

ネギの事を知っているマミとタカミチはあまり心配してはいなかったが、あの事件の事もありあしゅらにサポート兼様子見を命令していたのだ。もっとも、性格などは問題がなく予定どうり進めても問題ないだろうと判断された。

「「それと、もう一つ報告する事があります」」

＜まだ何かあるの？＞

「キュゥべえの奴から協力要請がきたのですが」「私どもでは何故そのような事を言うのか判断ができず」「「マミ様の指示を仰ごう

かと」」

＜あの子から協力要請か。おそらくエヴァとの交渉に関係する事でしょう。あの子に協力してあげて。ただ、やりすぎると判断したらこっちに報告をしてね＞

「「了解しました」」

話が終わりあしゅらも明日のためにと浴槽から出て弓に変装した後、彼もまた眠りについた。

いよいよ明日からネギの教師生活が始まる。ついに全ての役者が舞台に上がり物語は本当の意味で開幕した。彼と彼女はどのような物語をつむいでいくのか。

「真ネギま☆マギカZ」

始まります

ネギ来日！&開幕（後書き）

クラスに行くまでやりたかったのですが、長くなりそうだったのでいったんここで切りました。

ネギ君はあしゅらと同室にしました。彼関係のネタはネギにばらしてから、ちょこちょこっとやろうかと思います。

エヴァ編の監督はＱＢに決定！いろいろ暗躍してもらう予定です。マミ達の中で魔法側として一番最初にＱＢを接触させます。

小ネタコーナー

「「しかし、これからしばらくはのんびり風呂にも入れんな。」」

「ああ、この姿を見せるわけにもいかん。」

「マミ様が信用されて任された任務だ。」

「それを我らの不手際で台無しにしては、その信頼を裏切る事になる。」

「今しばらく耐えねばな。」

「「だが、目的が達成されたならば、元通りこの部屋では変装を解いてよいとおっしゃっていた。小僧それまで楽しみに待っているんだな。はっはっはっはっはっはっは！」」

頑張れネギ君！君は誰もが経験した事の無い日常を送れるのだ！君ならきっとあの謎を解けるはずだ！！

「ネギ君、今から私達が担当するクラスに行くが、緊張する事はないよ。みんな良い子できっと君もうまくやれるよ」

「はい！」

一夜明け月曜日、ネギは先ほど職員室で同僚となる教員に挨拶を済ませ現在担当する２－Ａの教室に向かっていた。

タカミチも先に向かいネギが来る事を話しているし、弓も一緒のため心配する事は少ないがそれでも何もかもが始めてのネギは緊張していた。

「まぁ、元気すぎると言ってもいいかもしれないかな?前は朝教室に入るといろいろな罠を仕掛けてあったりしたからね」

慌てた事もあったね、と弓は笑っているがネギは。

「ええ！大丈夫なんですか！?」

よけいに不安が増したようだ。

「前は水が入ったバケツや吸盤付きの矢が飛んでくる事もあったけれど、今は黒板消しか足元に紐くらいかな。過激すぎるって事で１回叱られたからね」

ちなみに直接叱ったのは新田先生だが、生徒の捕獲にガミア姉妹が出たこともあってそのときの恐怖が忘れられないせいか、騒がし

い事は変わりないが過激すぎるいたずらや問題はぐっと減ったらしい。

一切の弁明を聞かずに淡々といたずらに関わった生徒を狩って行く姿に、関わっていない生徒さえも少しは自重することにしたとか。

ちなみにいたずらに参加した魔法関係者のある生徒はアーティファクトを使っても逃げる事ができず、主と思われる生徒に泣きついたがはぐらかされ引き渡されたそうだ。

「さぁ、ついたよ。私が呼ぶからそしたら入ってきてくれ」

「わかりました！」

そういい弓は先に教室の中に入っていった。教室の中ではタカミチが教育実習生が来る事、自分は長期の出張が入ってしまってしばらく弓とその子で授業をする事を伝えており。到着した弓にも早速質問が飛び交っていた。

その喧騒とまた出てきた不安にしり込みしていたが、ウェールズを出発するときに見送りに着てくれた姉と幼馴染の姿を思い浮かべて決意を新たに顔を上げた。

「詳しくはその子に入ってきてからにしようか。ネギ君はいってきてくれ」

「はい！」

名前が呼ばれネギは教室に踏み入った。

教室に入ってまず向けられたのは驚愕の視線がほとんど―いくつかは興味深そうに見ていたが―その次には次々に興味津々な視線を向けてきた。

「それじゃあ、ネギ君。皆に挨拶をしてくれ」

「はい。皆さんこんにちはウェールズから教育実習生としてきました、ネギ・スプリングフィールドです。3学期の間と短いですがこれからよろしくお願いします！」

彼の自己紹介が終わり教室は沈黙に包まれた。

そして……。

「「「「「か、かわいいぃ！」」」」」

少し前の静けさが嘘のように一気に騒がしくなった。

「え！子供！？」「何歳なの！」「担当教科は！」「ウェールズってどこ！？」

ネギは次々にかけられる質問に完全に混乱してしまっていた。

「高畑先生！この子がしばらく弓先生の補佐で一緒に授業をやるの！？」

質問の矛先はそれを眺めていた教師にも向けられた。

「ああ、彼の学力は問題ないからね。弓先生に見ていてもらって授業もしてもらおうと思っているよ」

「やったーーーー！」

とネギを歓迎している生徒が多いがもちろんそうじゃない生徒も居るわけで。

「あんなガキが教師ってどういうことなんだ…。弓先生が居るから大丈夫だろうけど。ホントどうなってんだここは…」

とただでさえロボやその他に頭を抱えていた生徒はさらに悩みの種が増えた事を嘆き。

「ほぉ、あれがあいつの…。まずは様子見だな。あいつがしめした期限までまだある、あせる事はないか」

彼と因縁がある生徒は今後について考え。

他にも魔法関係者や自分の目的のために彼に注目する生徒などが居た。

ネギの周りには生徒が大勢集まりいろいろと質問してはいたが、

このままでは授業にも影響が出かねないのでタカミチが。

「みんな彼に興味あるのはわかるけれど、そろそろ一限目が始まるよ。今日は……、ちょうどいい英語のようだね」

「そうですね。ネギ君少しやってみるかね？」

ちょうどタカミチが担当で今後、弓が引き継ぐ予定の英語と言う事でネギに少しやらせてみることにしたようだ。

ちなみにタカミチの担当は英語、弓は化学を担当しており。来年度からタカミチは非常勤となるため彼の担当していた英語は他の英語教師と弓に引きつがれることが決定している。弓も英語を教える事に問題がないため、ネギの補佐ということもあって英語をすることになっている。

それはおいておいて、いきなり授業を任されたネギはというと。

「ええ！タカミチそんないきなり無理だよ！！」

弓の補佐と聞いていたこともあり大慌てであった。

「なに、私たちも居るのだから大丈夫だよ。フォローもするからまずはしてみてはどうかな？」

「弓さんの言うとおりまずはしてみたらどうだい。わからなければ僕たちに聞けばいいから」

が両者ともネギにやらせてみる気のようで、彼に救いの手が差し伸べられる事は無かった。

その後、ネギは授業をしてはみたがやはり全て始めてであった事もあり、うまくいかず途中からタカミチにバトンタッチする事になった。

２－Ａの授業のあとも弓とタカミチについて授業を見たり、やり方を教わって放課後になった。

まだ、やらなければいけない書類などがあるが、今日は疲れただろうからと弓がネギを一足先に仕事を終えて帰らせた。

「はぁ、やっと一段落したよ。やっぱり教師って難しいなぁ…。うーん、落ち込んでばっかりじゃいけない！弓先生やタカミチに聞いてしっかり勉強しないと！」

やはり１０歳で教師は難しいのか少し自信を無くしていたが、初日なんだからと思い直し明日から頑張ろうと気合を入れなおした。

気持ちも切り替えた事だしとタカミチから貰った２－Ａの名簿を見てみることにした。

「でも、みんな元気だったなぁ。でも、あの神楽坂さんはひどいなぁ。タカミチが居なくなるのが嫌だからって、僕に言われても」

どうやら明日菜、タカミチの変わりにネギが入ってきたことが嫌で八つ当たりをしたようだ。確かにネギが入ってきたからという面もあるがネギ自身にとっては完全に八つ当たりだ。

「それにこの人。巴マミさん……、マミお姉ちゃんに似ている気がする」

似ているも何も本人だが、マミの姿がネギの記憶の中―5年前―の姿と変わっておらず、何より何故彼女が日本のそれも中学生をしているのかネギにわかるはずなく。

「きっとすごく似た人なんだろうな、マミお姉ちゃん今頃どうしてるかなぁ。彼女とも仲良くなれたら嬉しいな」

他人の空似だろうと思い、魔法学校に入学後に旅立ったもう一人の姉を懐かしみ。それとよく似た生徒とも仲良くなれたらと願った。

「弓さんは先に帰っててもいいって言ってたけれど、どうしようかな?ん、あれは」

これからどうしようかと思案していると、視界の先に朝教室で見かけた姿が入ってきた。

「あれは27番の宮崎のどかさんかな?あんなに本を持って大丈夫かな……」

そこにいたのは本をいくつか抱えたのどかが居た。図書委員だから本を抱えていても不思議ではないかもしれないが、少しふらついており見ていて不安だなと彼が思っていると。

「きゃ!」

バランスを崩した彼女が階段から外へ……、そこから地面まで数Mはあるだろう。まともに落ちれば命の危険さえある。

「やっぱり！間に合え！！」

彼女が落ちた事を確認したネギは魔法を使いその落下速度を低下させ、間一髪のところで彼女と地面との間に入り身体が叩きつけられる事は防げた。勢いがつき過ぎてネギが顔面スライディングしてしまいはしたが、のどかに傷一つつくことはなかった。

「あたた、大丈夫ですか？宮崎のどかさん」

とっさの事とはいえ魔法を使ってしまったことに不安はあるがまずは彼女の無事を確認しようとして。

「あ、あんた……」

第三者の声が…。

「あ、いや…その……」

彼の魔法を使ったためばれてないかを心配してはいたが、それは目の前にいるのどかに対してであり第三者のことは頭の片隅にもなかった。

そしてその第三者、神楽坂明日菜はとある用事でネギの事を探していて偶然居合わせたわけだが。

「……んぅ？」

ネギも混乱を抜け出しておらず、時間だけが過ぎていくかと思われたが、のどかが目を覚ましかけたとき。

明日菜はネギとネギが持っていた杖を掴み近くの茂みに飛び込んだ。深い考えからのものではなく、ただこのままではまずいと思ってのことだろう。何がまずいかは彼女もわかっていない。

「あ、あんた！さっき何したの！？超能力！？」

「え、違いますさっきのは…」

「誤魔化そうたってそうはいかないわよ！現行犯でばっちり見たんだから！！」

「あうううぅ」

もっとも、場所を移したが彼女もまだ混乱から抜け出してはおらずネギのが超能力者かと考え叫んでいるだけでもあるのだが。

「白状しなさい！あんた超能力者でしょ！！」

「違います！僕は魔法使いです！って、ああ！！」

そしてそれに引っ張られてネギも、自分から正体をばらすという大失敗をしてしまった。

「魔法使い！どっちにしろ似たようなものでしょ！」

「あ、あの、このことは内緒にしてください。ばれたら僕大変な目

に……」

「そうねぇ、どうしようかしら」

この世界では服を吹き飛ばされたり、問答無用で同室にされていなくネギに恨みがないとはいえ。彼と入れ替わりでタカミチが担任を辞めることや魔法使い発見という事が、彼女を少し意地悪な考えに走らせていた。

（ふふふ、困ってるわね。どうしてやろうかしら）

弱みを握ったという優越感と鬱憤が晴れる爽快感に浸っている彼女だが、別にネギに対して何かしようとは考えてはいない。流石にかわいそうになってきて許してやろうかとしたが、いささかその判断は遅かったようだ。

「ううぅ、仕方ないですね」

「な、何よ」

当初の混乱から抜け出す事はできたが、今度は魔法バレという混乱に入ったネギは最終手段に打ってでるしかないと決意を固めてしまっていた。

殺られる前に殺れ！と言うわけだ。

「何！何か物凄く不吉な感じが！」

「秘密を知られたからには記憶を消させていただきます！！」

「ええ！」

普通はその前に説得などがあったりするわけだが、混乱するネギは早々に説得を放棄し記憶消去の魔法を唱えだした。

「ちょっとの間、パーになるかもしれませんが許してください」

「え、ちょっと！パーって！！」

何とか止めようと思いはするが、もう手遅れの状態に明日菜は慌てついに。

「消えろーーーーーー！」

「きゃーーーーー！！」

パーーーーーーン！！

発動した魔法は綺麗に消し去った、……彼女の服を。

「あ、あれ？」

「いやーーー！」

それにネギは困惑の声を、明日菜はあらためて悲鳴を上げた。

「ごめんなさい、間違えちゃったみたいで」

「どう間違えたらこうなるのよ！」

あまり事に逆に冷静になり上着を明日菜に貸そうとした時。

ガサ

「明日菜君とネギ君？こっちで叫び声が聞こえたけ…れ……ど」

同じくネギを探していたタカミチが2人の叫び声を聞きつけて、茂みの中に入り込んできてしまった。

そして目にした半裸状態の彼女。

「ひっ、い、いやーーーーーーーーーーーーーー！」

子供先生ネギ！（後書き）

教師就任と明日菜に魔法バレの回でした

次回はいきなりの魔法バレを受けてのタカミチとマミの話かな？

エヴァ編までのイベントフラグはほとんど折れちゃってるのでエヴァ編にはちゃっちゃと移ると思います。

小ネタコーナー

「高畑先生。」

「何でしょう弓先生？」

「いえ、ネギ君を先に帰らせましたが、彼女たちのことを考えると歓迎会を企画しているのでは？」

「確かに彼女たちならしそうですね。そうなると失敗しましたね。」

「ええ、ですから高畑先生は彼を連れ戻してきてくれませんか？残りの書類はやっておきますので。」

「ありがとうございます。彼女たちが来たら探しに行ったと言っておいてください。」

そういって彼はネギを探しにいったのだが…。

彼はネギを先に返した事と探しにいくのがもう少し早ければと、そして自分の間の悪さに後悔してしまう事になる。

タカミチの決断と試験と（前書き）

リアルが忙しくなってきて速度とが低下してますが頑張っていきます！

タカミチの決断と試験と

（ネギ君の様子を見ていずれは話そうと思っていたが、まさかそのネギ君からそれも初日に彼女に魔法がばれるなんて）

いずれはと思ってはいたが想定外にも程がある事態にタカミチは頭を抱えていた。

本来はネギの修行の様子を見て少しずつ魔法の事、彼女の生い立ち、かつて何があったのかそして今なのがおこっているのかを話そうとしていたが、その予定は一瞬にして瓦解してしまった。

あの後、彼は明日菜に換えの制服を渡した後に職員室に戻ってきていた。

弓から後でネギの歓迎会をやる事を聞いたが、それどころではなく大いに苦悩していた。

（一人で考えていても埒があかないか…。学園長は忙しそうだし、マミさんに聞いてみるか）

彼女も準備に忙しいかもしれないが、呼びに来たという事はそれもある程度終わっているだろうと思ったからでもあった。

＜マミさん、今大丈夫でしょうか？＞

＜タカミチ？どうしたの突然＞

念話でマミに事のあらましを伝えたら、

＜それは、なんというか……＞

それを聞いたマミはやはりというか困惑したような、声を上げた。

＜なんというか、運命ってモノが本当にあるんじゃないか信じたくなってしまう事態ね……＞

＜確かに引かれ合ってしまうんじゃないかと思ってしまいましたね。しかし、もしそうなら彼女の記憶を何とかしても＞

＜同じ事が再び起こらない保証はないわね＞

マミの言葉にタカミチもまた運命といったものがあるのじゃないかと思え、もしそうなら今回のことを記憶消去でなかった事にしても再び起こるのではないかと思えてきた。

マミが考えていた事は実際は原作についてだったが、ここは物語ではなく現実なんだからそんな都合よくならないだろうと……。

＜（思っていたんだけれど、まさか本当に原作通りの展開になるなんて。原作であった明日菜とのイベントは全くなかったから大丈夫と思っていたけれど……。彼の指し示された職業といい世界の流れってモノをあまく見すぎていたわね。そうなると……）＞

今後発生する事件は全部起こる可能性が高いと思ったほうがいいだろう。

＜少し早いけれど、彼女に魔法について教えていったほうがいいのかもしれないわね＞

＜隠し通す事は難しいでしょうか？＞

＜今回の事だけで判断するのは早計ではあるけれど。起こらないと思って行動するより、おこると考えて行動したほうが最悪の事態にはならないわ＞

＜……そうですね＞

確かに楽観視をするよりも、もしもの事態に備えたほうが被害が少ない事はわかっているが、また彼女をあの世界に関わらせる事にタカミチは躊躇していた。

＜何も今すぐ全てを話すわけじゃないわよ。そうね、ネギ君と一緒に修行させてはどうかしら？＞

マミはあえて原作通りに進める事で不測の事態が発生する事を最小限にしようと考えた、学園に居る間に起こる事件は自分が動けば何とかなるだろう。

問題は魔法世界編だ。ネギがあちらに行くことは押し止める事ができるかもしれないが、事件そのものを止める事は不可能だろう。

完全なる世界が関わっているとなれば自分は向こうに行くことになるだろう。

そうなったときこちらに居る彼女を守る事ができるのか。例え魔法世界に行かなくてもイギリスにいく可能性は十分にある。そして魔法について知らなければそれを押し止める事は不可能だろう。

ならば今から少しずつでもその時に備えて魔法に関わらせたほうがいいかもしれない。

こちらが事態をコントロールできるうちに……。

＜まだ彼女と彼がこちらの庇護下にあるときに準備をさせた方がいいわ＞

＜……＞

＜彼女が心配なのはわかるわ。でも、彼女を狙う人たちが強硬手段に打って出たらその時は……＞

＜そうですね……、あの時でもそうだったんですから。今だとよけいに＞

ガトウが死んだときを思い出しているのだろう。少し声が震えていた。

＜その時に居なかった私が言うのもなんだけれど、彼女は自分の運命と向き合ってその上でその運命を断ち切らないといけないのかもね＞

望む望まざるに関わらず、彼女を取り巻く運命が厄介事を持ってくるなら自分からその厄介事を乗り越えその根源を絶たなければいけない。

彼女が平穏に暮らすにはそれしかないのかもしれない。

＜そうですね。またあの時を同じ顔を見たくは無いですし、それ以

前の顔にも戻したくはないですね＞

＜なら＞

＜はい、少しでもいい未来が彼女に訪れるように頑張りましょう。しかし、ネギ君の修業につき合わせるといってもどうします？＞

かつて師であるガトウを失ったときの泣きじゃくる顔やそれ以前の無機質な顔はもう見たくない。だからこそ、そうならないようにと彼女が運命に抗う事ができるように彼女がネギの修行に参加する事を了承した。

＜まだ決まってはいないけれどエヴァとの対戦の時に関わらせようと思っているわ。もっとも、どう巻き込むかは彼の采配によるだろうけどね＞

＜わかりました、僕もできるだけ手伝います＞

＜おねがい。じゃあ、この話はここまでよ。高畑先生もそろそろネギ先生の歓迎会に来てください＞

＜ああ、わかったよ＞

彼女の今後についてはとりあえず決まりネギの歓迎会に向かった彼だがそこでもうひと悶着あったりする。そこで彼はより強く今後に不安を抱いたとか。

初日は大波乱のネギの教師生活だったが、その後はこれといった問題もなく日々を少しずつ教師として力をつけていっていた。

バカレンジャーの面々も弓とタカミチが根気よく指導していたこともあり原作ほどひどくはなく、明日菜やこのかと同室で無いからそれ関係のごたごたもあまり起こっていない。

あまり起こっていないだけであって、何回かはあったりするのだが……。教師と生徒の交流という建前でガミア姉妹が来ないとわかったので、何回かネギを大浴場に拉致したりといった事は起こっていたりする。

ドッチボールにいたってはそんな事をすれば、すぐに恐怖の治安部隊が来ると知っているので喧嘩はともかく。原作の授業妨害レベルの事は起こりえなかった。喧嘩とてちょっとした言い合いで原作のような指導教員が出てくるレベルにはいたっていない。

彼女たちは制圧されても懲りない格闘馬鹿達とは違って、威張ってはいるが普通の女子高生なため1度受けた恐怖をもう一度受けたいとは思ってはいない。

そんなこんなで2月末、彼は学園長から教育実習生としての課題を言い渡されていた。

「彼女たちの成績アップですか？」

「うむ、とは言っても合格かどうかはそれだけでは計りにくいからの」

成績が上がったといってもそれは彼の努力の結果なのか生徒の結果なのかは判断できないため学園長は追加でもう一つの課題を言いだした。

「クラス全体の成績アップや学習意欲の向上もそうなんじゃが、２－Ａには勉学に関して少し問題がある生徒がいるらしいの？」

言うまでも無くバカレンジャーたちだ。それでなくてもあのクラスは全体的に考えが甘い事は前々からタカミチも頭を悩ませていた事ではある。

「そこで彼女たちの成績を少しでも上げるように対策をする事とクラスの勉学に対する姿勢を少しでも改善する事かの。難しいとは思おうが高畑君や弓君、他の先生方に協力を仰ぐなりして達成してくれ」

「はい！頑張ります！！」

「うむ、よい返事じゃ。これは教師としてだけではなく立派な魔法使いを目指すならば非常に重要な事じゃ」

「重要な事ですか？」

「ふむ、わからぬか。ならそれも課題として追加しようかの。テスト終了後に呼び出すのでその時に答えを聞かせてくれ」

「は、はぁ」

彼は今回の課題で、何が自分にとって重要かいまいち把握していないようだった。それも課題に加えられて困惑している。

「連絡事項はこれでしまいじゃ。それでは正式な教員になれるよう頑張ってくれ」

「はい。失礼します」

彼が出て行った扉を眺めつつ学園長は。

「ふぉふぉふぉ、さてどうなるかの期末テストが楽しみじゃわい」

「う～ん、どうすればいいんだろう？」

さて課題をもらったネギだが、どうすればいいか悩んでした。

「バカレンジャーの人たちは、今まで通り放課後に勉強会をすればいいかもしれないけれど。クラス全体の学習意欲を上げるってどうやればいいんだろう？？」

成績が特に悪い５人には今までも特別授業を組んでいたので、テスト対策を弓とやれば問題は無いだろう。

問題はクラスの学習意欲の向上だった。弓が期末テストについて知らせたりテストについてネギから質問したりしたのだが…。「中等部から高等部へは試験を受けなくてもエスカレータ式に行けるので中学では勉強を真剣にしなくても大丈夫！」といった意識の生徒が多い事がわかってよけいに頭を抱える事態になったのだ。

これには弓やタカミチも悩んでいるらしく、ますます自分ができるのかと不安になってしまっていた。

「ううぅ、バカレンジャーの人たちは何とかなったけれどクラス全体だとどうすればいいんだろう…」

自分が受けた課題だから相談もできないし、と悩んだときよく行く場所で同じように悩んでいると。

「あら、ネギ先生？どうしたんですか、なにやらお悩みのようですけれど」

「あ、マミさん（そうだ、彼女にも意見を聞いてみようかな。生徒に頼るのは情けないけれど…）」

マミがかつて一緒に居た人を思い出させるのか、彼女から心配されて声をかけられたときは比較的素直に悩みをうちあけている。

その後、マミにクラスの学習意欲を上げるにはどうすればいいかを聞いたが。

「う～ん、難しいですね。私も学生の身ですからどう指導すればいいかは…」

「そうですよね。すみません、へんなことを聞いてしまって」

「いいえ。でも、それなら新田先生に聞いてみてはどうですか？」

「新田先生にですか？」

「はい、新田先生は厳しい人ですけれど経験豊富ですからきっと力になってくれますよ」

「でも、これは僕が受けた課題だし…」

解決案を他の先生に聞いてもいいのかと思ったが。

「課題？」

「えっと、それは…その！」

思わず内緒にしなければいけない事をもらしてしまう。

「どんな課題なのかはわかりませんが、課題をもらったときに人に頼ってはダメといわれましたか？それにこんな事は人に頼らないと無理ですよ」

「それは…」

確かに学園長は頼ってはダメと言ってはいなく、むしろ協力しろといっていたが自分に渡された課題なのだから自分が何とかしなくちゃいけないとネギは考えていたのだ。

「それを含めて新田先生に相談したほうがいいかもしれませんね。

これ以上は私では力になれそうもないので」

「いえ、ありがとうございました」

「いいえ、どういたしまして。それじゃあ、私はこれで」

「はい、気をつけて帰ってください！」

彼女と別れた彼は少しの間悩んだが新田先生に相談するために職員室に向かった。

「それでネギ先生、相談したい事とは？」

「あのですね…」

ネギは学園長からもらった課題のこと、クラスの学習意欲を上げる事に悩んでいる事を全て話した。

「なるほど学園長も教育実習生に難しい課題を出される」

「生徒にもいろいろ聞いたりしたのですけれどいい案が浮かばなくて。新田先生に相談したらと言われてきました…」

「ふむ、そのような事なら、最初に私や高畑先生は今はいないから弓先生に相談してくれればいくらでも力になれましたよ」

「でも、僕に出された課題なので僕自身の力でしなくちゃいけないと思って」

「確かに出されてすぐに来るのは感心しませんが、ネギ先生もいろいろ考えてそれでも難しいと判断されたのでしょう？」

「はい」

「なら、誰かに相談する事は悪い事ではないですよ。どんな仕事でも一人でできる事なんてたかが知れています。だからこそ皆で協力しないといけないのですよ。ネギ先生は確かに頭はよろしいでしょうが、まずは人に頼る事も覚えたほうがいいかもしれませんね」

「人に頼る事…」

「はは、歳をとると説教くさくなってしまいますな。ですが、一人するよりも力を合わせたほうが何倍もいい結果が出るものですよ。さて、この話はこれくらいにして弓さんと２－Ａについて話し合いますか。」

「はい！（人に頼る事、みんなで力を合わせるか…）」

その後は3人で２－Ａがどうすればやる気が上がるか相談したが、それとは別にネギは学園長が追加で出した課題の答えを見つけることができたようだ。

そして、テストが終わり２－Ａは毎回テスト後の順位発表で毎年と似た順位ではあったが、３人で相談したやる気を上げる作戦がよかったのか前に比べてテスト前１週間は今までと違い全員真剣に取り組んでいた。

これなら次のテストは期待できるかもしれない。と新田先生も言っていた。

そして、ネギは学園長室に呼び出され課題の回答と結果を聞きに来ていていた。

「それではネギ君。ワシが問うた立派な魔法使いにとっても重要な事とは何かわかったかの？」

「はい、それは協力する事です。今回の事で一人ができる事は限られているわかりました。ですが、力を合わせれば自分ひとりではできない事もすることができる、よりいい結果が出す事ができます。立派な魔法使いを目指すなら仲間と協力することが重要です！」

「うむ、お主は優秀ゆえに今まで人に頼ったことは少ないじゃろうからの。じゃが、今回のように自分だけではどうにもならぬ事もある。立派な魔法使いを目指すなら、まだ多くのことを経験せねばならぬだろうがそれはとても重要な事じゃ」

「はい！」

「うむ！君が正式な教師になっても問題は無かろう。後日、正式な書類を送ろう。来年度からもよろしく頼むぞ。」

「はい！ありがとうございます！」

こうしてネギは正式な教師となる事ができた。まだまだ未熟だが彼の教師生活は続いていく。

麻帆良某所

「それであの話は載ってくれるのかい？」

そこではとある話し合いがおこなわれていた。

「確かに魅力的ではあるがそれの対価がピエロを演じろと？ばかばかしいアレにそこまでの魅力は感じんな」

どうやら交渉は難航しているらしい。やる事と対価がつりあっていないと拒否されている。

「君もなかなか強情だね。呪いが解けるかもしれないのにだよ？」

「ふん、それとて可能性の話しだろ？話しにならんな」

「なら、取って置きの情報が有るけれどそれたならどうだい？」

「ほう。半端なものじゃないだろうな」

「いいや、君ならきっと知りたいはずさ。……の情報だよ」

「なに！」

よほど驚いたのだろう。座っていた椅子から立ち上がり相手に詰め寄っていく。

「どんな情報だ！言え！！」

「それを言ったら報酬にならないじゃないか。まぁ、ほとんど正解だけど君が望む情報である事は確かだよ。」

「なん…だと…。しかし、奴は…。ありえん。あいつだって一言も…」

思い当たるようだが信じられないのか動揺し何度も否定の言葉をつぶやいている。

「彼女が持っている情報と僕が持っている情報は必ずしも同じじゃないからね。この情報だって裏は取れているよ。君が納得する形で提示する事だってできる」

矢継ぎ早で提示される情報に対する自身に彼女は……。

「よかろう、演じてやろう」

「おお！本当かい！？」

「だが、情報がいんちきのときはわかっているだろうな！！」

「そんな事は無いから安心してくれ。作戦はこっちで立てるがそれでいいかい？」

「しゃくだが、いいだろう。せいぜいボウヤに私の怖さを見せ付けるのだな！」

「じゃあ、僕はこれで失礼するよ。詳しい内容が決まったらまたお邪魔するね」

交渉がまとまりその人物は部屋から出て行った。

＜やあ…、交渉はうまくいったよ。作戦は今度はなすから。え？危なくないかって？大丈夫だよ。彼にも協力してもらう予定だから話しておいてよ＞

主に交渉が成功した事を告げる口調は成功した事を誇っているからなのか、どこと無く楽しそうだ。

タカミチの決断と試験と（後書き）

明日菜のこととネギの試験でした！

ちょいちょい介入してたりするのでイベントが無くなったりしてます

試験の部分はネギ方面だけだったのであっさり終わってしまいました。

指導内容まで考え付きませんでした…。

２－Ａので動きも短編でいつか上げたいですね。

そして交わされる秘密の交渉（笑）！

まぁ、誰だかわかると思いますが

次回からはエヴァ編です！

ここはとばさずにしっかり書いて行こうと思っています！

小ネタコーナー

「ははははは！まさかあいつがな…。まだ確定はしてないが今夜は旨い酒が飲めそうだ！」

あるはずが無いと思っていた事実に彼女は大いに喜んでいた。

「ふふふ、間っていろよボウヤ！せいぜい舞台の上であがいてみるのだな！」

彼女のテンションは天井知らずに上がっていきそれを見守る影もまた

「ああ、マスターがあんなに喜んでいる」

おのが主人の喜びを我ことのように喜んでいた。

もっとも後々、実際はとんでもないペテンに引っかかっていると知って激しく落ち込んでしまうのだが。

桜通りの吸血鬼（前書き）

エヴァ編スタート！

４月それは学校関係者にとって新たな一年の始まり、ここ麻帆良でも始業式や就任の挨拶がおこなわれていた。

その一角の女子中等部でもまた、今年度より正式な教員となる人物の就任の挨拶がおこなわれようとしていた。

「それでは本日より中等部担当教員になりますネギ・スプリングフィールドさんから挨拶を」

「はい！皆さん本日から教員になりましたネギ・スプリングフィールドです。先月まで教育実習生だった未熟者ですがこれからよろしくお願いします！」

ネギのお辞儀と同時に割れんばかりの拍手が起こり、教員・生徒関係なく彼の就任を祝福していた。

拍手が一段落したのを見計らい司会が次の連絡事項を読み上げた。

「なお彼は昨年担当したクラスに副担任として配属されます。担当教科は英語を任せます」

その後も滞りなく始業式は進み、閉会のあとそれぞれのクラスで残りの行事を行いに行った。

「「「「「3年A組み弓先生&ネギ先生!!」」」」」

ここ2－A改め3－Aでも新年度の挨拶が他と同じように。……いや、いつもの倍以上の勢いでおこなわれていた。

「みんなと一緒に入れるのは今年で最後だがだからこそ多くの思い出を作っていこう。」

「皆さんのおかげで正式な教員になれることができました。今年いっぱいですがよろしくお願いします。」

「「「「はーい!よろしくお願いします!!」」」」

挨拶を終え、これから1年の事を思いもっともっと生徒のみんなと交流を深めていこうとネギが思っていると。

（あれ、なんだか強い視線を感じるような?）

ふと、誰かに強く見つめられている気がしてその気配をたどってみると、廊下に面した列の最後尾の生徒と目があった。

すぐに逸らされたが、目が合った瞬間に言いようの無い不安に襲われた彼は慌てて名簿を開き、問題の生徒を確認した。

（あの子は……出席番号26番のエヴァンジェリン・A・K・マクダウェルさん。タカミチのメモには困ったときは頼れって書いてあるけれどどういうことだろう?それにさっきのあの感じは…）

と思案していると。

「ネギ君、この後は身体測定だから私達は外で待機してようか。みんなは服を脱いで準備をしてくれ、そろそろ担当の教員が来る頃だから遅くならないように」

「あ、はい。わかりました」

「「「は～い！」」」

今日は始業式と同時に身体測定などもおこなう事になっていた。
弓はネギを促し外に出ようとしたところで。

「先生ぇ～、見ていきますぅ？」

「え！えぇ！！」

「こらこら、大人をからかうもんじゃないよ。それに年頃の娘が冗談でもそんな事は言ってはいけないよ」

生徒からのちょっとした悪ふざけで弓はやんわり注意したが、なれてないネギは慌てた。

男二人が出て行った教室内では。

「ネギ君はからかいがいがあるわね」

「この一年楽しくなりそうね」

「弓先生も頼もしいし心配事は無いわね」

と2人について話していると

「あれ？今日マミさんは？」

「……さぁ？」

「そういえばいないね。真面目な彼女にしては珍しいね」

「何で休んだのか心配だけれど、あの戦力を見ないですんだ事は…」

「まき絵胸ぺったんこだもんね！」

「風香ちゃんには言われたくないよ！」

と来てないクラスメイトを心配しつつもそこからそれた話で盛り上がっていると。

「ねぇ、ところでさ。最近寮とかで流行っているあの噂どう思う？」

「え？なによそれ柿崎？」

「ああ、あの桜通りの噂？」

「えー、何の話？」

「何の話や？」

話しは最近広まっているある噂に移った。が、寮に広まっている

わりにはこのクラスではあまり知られてはいないようだ。

「あんまり知られてないのかな？春休みくらいから出てきたんだけどさ。満月に近い夜に桜通りで出るんだってさ」

「出る？」

「暗い服を着た正体不明の人物がさ……」

「え！？それって変質者じゃ……」

暗がりにそんな格好だと変質者以外の何者でもなくおびえた声をあげるが。

「それが人間かも怪しいんだって、背格好もバラバラですごいのだと男性と女性の声が同時に聞こえたりとか」

「えぇーーー！なにそれ！」

噂の人物はそれを遥かに上回る正体不明の人物だった。

「ただ、血をよこせって言ってるみたいで、吸血鬼かもって言われているの」

「へぇーー」

「マミちゃんもその吸血生物に襲われたのかな？」

「いや、吸血生物じゃなくて吸血鬼ね」

ちなみに彼女達の想像図はチュパカブラで吸血鬼どころか、UMAか宇宙生物じゃないだろうか？

そんな友人たちの吸血鬼話を聞いていた明日菜は

「も～、そんな噂デタラメに決まってるじゃない。アホな事言ってないで早く並びなさいよ」

とさっさと身体測定を終えるよう促したのだが。

「そんな事言って明日菜も怖いんでしょ～」

「違うわよ！それにあんなの日本にいるわけ無いでしょ！」

すでに黒板に吸血鬼予想図（チュパカブラ図）が書かれており手遅れの状態だった。

（ん…？待てよ、魔法使いもいるんだから吸血鬼がいたっておかしくは無いのかも…？）

少し前に判明した魔法使いの少年と彼が巻き起こしたトラブルに何回か巻き込まれたため、もしかしたら本当に吸血鬼なのかと考えていると。

「そのとおりだな神楽坂明日菜」

普段滅多にクラスの話しに入ってこない人物から声をかけられた。

「噂では吸血鬼はお前のようなイキのいい娘が好みらしいからな。十分気をつけることだな」

「え？は、はぁ…」

ただ、普段全く接点が無い人物から思わぬ忠告を受けたが、あまりに突然だったため返事をするのがやっとだった。

同じ頃、廊下のネギは不思議な感覚を捉えていた。

だがそれが何かを確認する前に彼の生徒が大慌てで駆け寄ってきた。

「せ、先生！大変や！マミが、マミが…！」

ここにいない生徒に何かあったのか、名前を叫びながら駆け寄ってきた生徒にまず落ち着くようにと弓が話しかけようとしたときに。

「何！マミに何かあったの！！」

友人思いが多い３－Ａの面々が扉を開けて事情を聞こうと出てきた。

……下着姿で。

麻帆良女子中等部保健室

あのあと制服を着てから保健室に来るようにと言い、ネギと弓は先に保健室に移動し事情を聞いていた。

「それでマミ君はいったい？」

「どうも桜通りで寝ているところを発見されたようね」

マミには外傷も無くぐっすりと寝ているため遅れて到着した友人たちは。

「甘酒でも飲んで寝ちゃったのかな？」

「マミはたまにぽやってすることもあるからなぁ」

と深刻には考えてなく春の陽気にあてられたかな？と話しているが、ネギはとあることに気がついていた。

（違う…。これはほんの少しだけれど魔法の力を感じるぞ。でも、どういうことだろう？僕以外にも魔法使いが？でもそうだとしても何でこんなことを…）

「ネギ」

マミからわずかに漂ってくる魔法の気配、それが意味するところを考えていると。

「ちょっとネギ。なに黙っちゃってるのよ？」

魔法バレ以降なんやかんやで親しくなった明日菜が、いきなり黙って考え込んでしまったネギに声をかけてきた。

「あ、はい。すいません」

「どうしたんだいネギ君？何か気になることでもあったかな」

「いえ、何でもありません。あ、弓先生。僕今日は帰りに寄りたい所ができたので帰るのは遅くなると思います」

「そうか、わかったよ。晩御飯はどうするかね？」

「いえ、外で食べてきます」

「？」

弓はネギの答えに納得したようだが、明日菜は何か引っかかったのか難しい顔をしている。

そのあとは保健室で騒ぐわけにもいかず、中断していた身体測定をするために教室に戻っていった。

ネギは最後にマミを見て何かを決意したかのような顔をして最後に出て行った。

そしてそれを確認して、笑みを浮かべるものが…。

日が落ち月も出てきた時刻、一人の少女が寮への道を歩いていた。

少女―宮崎のどか―は先ほどまで友人たちと一緒にいたが、友人たちは買い物をして帰るといい彼女だけ先に戻っているところだ。

「フンフン♪あ、桜通り…」

視界の先に寮の屋根が見えてきたところで、彼女はここが教室で噂されていた桜通りということに気がついた。

「風強いですね。ちょっと急ごうかな」

怖さを紛らわせるために独り言を言い、少しで早く桜通りを抜けるために足を速めた。

時折、風が吹き桜並木の枝が揺れるとそのたびに驚いていたが、すぐ側でひときわ大きな音がしたのでその方向を見てみると。

「27番宮崎のどかか。悪いが血を少し分けてもらおう」

ボロボロのマントを羽織った小柄な人物が街頭の上に立ち先ほどの言葉をつぶやいた。

「キャアアアアアッ！」

あまりの事態に叫び声を上げたが、吸血鬼はそれにかまわず彼女に襲いかかろうとして。

「待てー！」

聞き覚えのある声を最後に彼女は気を失った。

「僕の生徒に何するんですかー！」

マミから感じた魔法の気配と噂が気になって、桜通りで見回っていたネギが杖にまたがり、今まさに襲われそうになっている生徒を助けるために詠唱しつつ間に割って入った。

「魔法の射手・戒めの矢！」

捕縛用の魔法を放ったが。

「ふふ、しっかりと来たか。氷楯…」

魔法の射手は全て吸血鬼と思われる人物が出した氷の楯で弾き返された。

「僕の呪文を全部弾き返した！（やっぱり犯人は…）」

「くっ…」

魔法の射手は全て弾く事ができたが、その余波が吸血鬼の帽子を飛ばした。

「驚いたぞ、凄まじい魔力だな」

全て防いだにもかかわらず余波で防止を吹き飛ばし、指にも傷を負わせる年齢にあわない魔力量に驚く吸血鬼の顔は。

「君はうちのクラスの…。エ、エヴァンジェリンさん！」

朝自分に視線を投げかけていたであろう生徒、エヴァンジェリンであった。

「ふふ、新学期に入ったことだし改めて歓迎のご挨拶といこうか？先生、いやネギ・スプリングフィールド。それにしても１０歳にしてこの魔力。奴の息子なだけはあるな」

（え…）

エヴァが言った言葉に動揺しつつも、彼は彼女へと。

「な、何者なんですかあなたは！僕と同じ魔法使いのくせに何故こんな事を！」

子供の頃から立派な魔法使いである父親に憧れ、魔法学校でも魔法は世のため人のために使うものだと教えられてきた彼には彼女の行動が理解できないでいた。

「この世にはいい魔法使いと悪い魔法使いがいるってことだよ、ネギ先生。氷煙！」

バン！

彼女が呪文と共に投げた魔法薬にとっさに防御に入ったが、幸いただの煙幕だったようで彼にものどかにも外傷は無かったが。

「なんや今の音！」

「あ！ネギ」

今の音を聞きつけて心配になって戻ってきた彼女の友人たち―明日菜と木乃香―が近寄ってきて彼を発見した。

そして今現場は煙に覆われていてエヴァの姿は彼女たちからは確認できず、確認できるのは気絶したのどかを抱える彼。

「ネ、ネギ君が吸血鬼やったんか！？」

「違います誤解ですー！」

原作のように服が破損していないとはいえ、傍目にはまるで彼がのどかに襲い掛かっているようにも見えた。

「って、こんな事してる場合じゃなかった！」

すでにエヴァは煙にまぎれて撤退しており、まだ魔法で探知できているがこれ以上はなれると完全に見失ってしまう可能性があった。

「すみません、宮崎さんをお願いします。僕は彼女を襲った犯人を追いかけます！」

明日菜たちが事情を聞こうとしたが、ネギはすぐさま風の魔法によって身体能力を上げてエヴァを追うため駆け出していった。

「なんでエヴァンジェリンさんはこんな事をしているんだろう？それに…」

エヴァを追跡するネギは何故エヴァがこのような事をしているのか、そして…。

（彼女は奴の息子っていっていた…。もしかしてお父さんの事を知っているのかな？）

先ほどの彼女の言葉からもしかしたら探している父親の情報を知っているのじゃないか。

そんな考えが頭をよぎったが、今は彼女を捕まえることが先決と頭を振りそんな思いを振り払って前を見据えたとき。

「いた！」

前方にエヴァの姿がぼんやりとだが見えてきた。

「まてぇ！止まってください！」

少しずつ近づいてきて、後もう少しで彼女を捕まえる事ができそうな距離になったときに。

「あ！」

エヴァは突如走っていた橋の欄干から外へと身を投げ出し、羽織っていたマントで飛行し逃走経路を陸から空へと移した。

ネギもすぐに杖にまたがり追跡を再開したが、違和感を感じ始めていた。

（杖も箒もなしに飛ぶなんてただの魔法使いじゃないぞ…。でも、凄腕の魔法使いのわりには感じる魔力は少ないし、さっきの魔法も魔法薬を補助に使っていたしなにか変だぞ。）

杖や箒の補助無しに飛行できるのに魔法の発動は魔法薬を補助に使ったりといった、エヴァのちぐはぐさが気になるが先ほど少し離された距離も追い上げる事ができた。

「まちなさーい、エヴァンジェリンさん！何でこんな事するんですか、先生としても許しませんよ！」

エヴァに対して再度止まるように声をかけたが。

「はは、先生は奴の事を知りたいんだろう？奴の話しは聞きたくないのか？」

返ってきた返事はネギの父親についてだった。

「私を捕まえたら教えてやるよ！」

（！！）

あまりにも露骨な挑発だったが父親に関する手がかりが何としても欲しい彼は。

「…本当ですね」

その言葉にエヴァは笑みで持って返答とした。

その後、空中の逃走劇は風の精霊を囮に使い、武装解除でエヴァのマントを散らした事で決着がつき今はとある建物の屋根で向かい合っている。

「こ、これで僕の勝ちですね。約束どおり教えてもらいますよ。何でこんなことをしたのか、それに…お父さんのことも」

そう、ネギは勝利宣言をし約束どおり理由と父親のことを言うようにエヴァに迫った。

ちなみにネギはできるだけエヴァを見ないようにしているのだが、その理由は武装解除のときにマントどころか衣服も消し去ってしまったからだったりする。

「ふふ、勝利宣言には少し早いんじゃないのか?」

「な!魔力も無く、触媒もマントも無いあなたに勝ち目はありませんよ!素直に…」

絶体絶命であるはずなのにいまだに自信たっぷりな態度に素直に投降しろといっている最中に。

「それにこの国のことわざで勝負は下駄を履くまでわからないというものがあるぞ」

ズシャァ！

その言葉とほぼ同じくらいに彼女の背後に新たな人影が現れた。

「さあ、お前の得意の呪文を唱えてみるがいい」

（新手！仲間がいたのか、仕方ない二人まとめて！）

その言葉に答えるように捕縛用の魔法の詠唱に入り、敵の眼前で無防備に詠唱する姿を見たエヴァは。

「ふ…」

うっすらと笑みを浮かべ、それに反応するかのように背後の人物はネギへと駆け出していった。

「サギｔ…
ぴしっ
あいたっ！」

そしてあと僅かで魔法が放たれようとしたときに。おでこにそれなりの衝撃が襲いかかったせいでネギは最後の詠唱が言えず不発に終わってしまった。

「あたた？」

いったい何がと思いおでこをおさえながら攻撃―でこピン―をしてきた人物を見てみると。

「え！あれ！？君はうちのクラスの！！」

「紹介しよう私のパートナー。魔法使いの従者、絡繰茶々丸だ」

「え…なっ！えええぇーーー！？茶々丸さんがあなたのパートナー！？」

現れた人物がまたも自分のクラスの生徒だった事と、さらにはエヴァのパートナー発言にネギは驚きの声を上げた。

エヴァだけでも信じられないのに、もう一人も生徒だったことにパニックにおちいってるネギにエヴァは。

「ふふ、パートナーのいないボウヤはこれでもう勝てんぞ」

「な！パートナーがいなくたって！」

その勝利宣言にに、たとええパートナーがいなくても勝てると魔法を放とうとしたのだが、ことごとく詠唱中に妨害され全て不発に終わってしまった。

ネギも魔法使いの従者の事は知ってはいたが、それは結婚のプロポーズや伝統としての物と思っており本来の戦闘時での役割については全く教えてもらっていない。

魔法世界ならともかく、こちらの世界で魔法学校の卒業生くらいの年齢の子供が戦いに巻き込まれる事などまず無いため魔法学校で

は教えていなかったのだ。

戦場に行くときなどは必要になるが、その時は周りが教えるだろうからと本来の役割については教育課程に入っていない。

もっとも、そんな事は現在進行形でピンチのネギには何の慰めにもならず、茶々丸に羽交い絞めにされエヴァから彼女が真祖の吸血鬼である事、自身の父親が彼女にかけた呪いの事、その呪いにどれだけ苦しめられているか、解呪にはネギの血液が大量に要ることを話された。

そして今は解呪のためにと血をすわれている。

（そんなぁ！僕ぜんぜん知らないよぉ。こんなことなら、パートナーを作っておくんだたぁ！）

絶体絶命のピンチにパートナーを作っておかなかった事を嘆いていると。

「コラー！そこの変質者ども！うちの副担任に何するのよ！！」

ずっと追いかけてきた明日菜の飛び蹴りがネギを取り囲んでいる、エヴァと茶々丸に当たる瞬間。

ガシ！ブン！

「え！」

また新たな人物が出現し明日菜の足を掴んで来た方向に投げ返した。

（えええぇ！また新手が！！）

2人でもまずいのに3人目が現れた事に、ネギは諦めるどころか絶望しかけたが。

『何を遊んでいるエヴァンジェリン？今夜は顔見せだけのはずだぞ。』

「ふん、まさかここまでうまくいくとは思わなかったのでな。少々味見をしていたところだ」

「え！ちょっと何がどうなってんの！！ネギを掴んでるのはうちのクラスの子だし。あきらかに不審者っぽいやつも出てきたし！」

事態が飲み込めない明日菜は混乱していた。ネギを捕らえている2人はクラスメートで3人目はローブに身を包み左右で色違いの仮面をかぶっておりどう見ても怪しい、さらに声も低音と高音が混じった不思議な声をしておりあまりにも不気味すぎた。

『そろそろ時間切れだ、撤退するぞ』

「ちっ、しょうがないか。命拾いしたなボウヤ。それに神楽坂明日菜」

「まさかあんたたちが犯人だってわけ！？そんなあきらかに不審者と一緒にいるし、子供はいじめているし。答えによってはただじゃおかないわよ！！」

勝手に話を進める2人に問い詰めようと声を荒げた明日菜だが、

問題の2人は明日菜を無視しさらに言葉を続けた。

「じゃあ、月の綺麗な晩は気をつけておくんだな」

その言葉を最後に3人は屋根から飛び降り姿をくらました。

そのあとは恐怖の一夜を体験したネギをあやしたり、今夜自分たちの部屋にネギを止める事を連絡したりと一波乱あったが。

この日、エヴァンジェリンとネギの戦いが幕を開けた。

桜通りの吸血鬼（後書き）

エヴァ編第1話でした！

いろいろ、バレバレな人も出てきたりはしてますがこの調子でいきたいと思いますw

次回はカモ君登場かな？襲撃あたりまでいけるかな？

小ネタコーナー

「出だしはまずまずかな。」

とある建物の屋根の上。そこから先ほどの一件を監視しているものが。

「しかし、彼があの調子だと少しまずいな。少しばかり梃入れ必要かな。」

結果にはそれなりに満足はしたようだが、そのあとの事から今後の予定に問題がでかねないととるべき手段を考えていると。

「この情報は……。ふむ、使えそうだね。僕も少し表で動いたほうが良さそうだな。」

次の手が決まったらしく、瞬く間に姿を消し行動を開始した。

まだまだ、ネギに降りかかる災厄は続きそうだ。

感想・ご意見お待ちしています！

カモ参上！そして…

「こらーっ、ネギもう8時よ！いい加減起きなさい！」

エヴァとの邂逅から一夜明けて翌日、明日菜と木乃香の部屋に止まったネギだが。

「あんた先生なんでしょ！先生が生徒より遅刻しちゃってどうするのよ！」

朝になってもなかなか起きてこないネギに明日菜が声を荒げ。

「なにか、かぜをひいたみたいで……」

と風邪で起きれないとネギは訴え。

「もー」

それにしょうがないとあきらめ…。

「昨日、怖い目に会ったのは分かるけど。先生が登校拒否してんじゃないわよ！」

…るわけも無く。布団を引っぺがし強引に服を着せて学校に向かった。

そう、ネギは昨日の一件でエヴァに対して恐怖を抱いてしまい。そのエヴァがいる学校に行くことを拒否して、仮病を使ってまで逃げようとしていたのだ。

完膚なきまでに負け、相手は真祖の吸血鬼としょうがない部分も有りはするが、少々情けなくもある。

「おっはよーネギ君！それ何か新しい遊び？」

「ひ～ん、おろしてくださいぃ！エヴァンジェリンさんがいたらどうするんですかぁ！」

さらに現在は明日菜に担がれているせいもあって余計に情けない姿になってしまっている。

「校内で襲ってきたら停学にしちゃえばいいじゃない。それにエヴァンジェリンさんも騒ぎは起こさないと思うけどなぁ」

「そ、そんな簡単な話しじゃないですよ！」

明日菜は魔法使いはネギしか知らないため、エヴァに対する恐怖など全く感じておらず。魔法使いのイメージもネギのようなお騒がせなものか、テレビであるような魔女っ娘といったものがせいぜいなので大騒ぎしているネギを大げさだと思っている。

「みんな、おはよー！」

「ああ、まだ心の準備が！」

「おはよ～。あ、マミ体もう大丈夫なん？」

「おはよう。ええ、ちょっとした貧血だったからね。もう大丈夫よ」

明日菜たちはクラスのみんなと朝の挨拶を交わしている横で、ネギはエヴァが襲ってこないか身構え、彼女の席を見たが。

「あ…、エヴァンヴェリンさん…いない」

肝心の彼女は席にも教室内にもおらずホッとしたとき。

「マスターは学校に来ています。すなわちサボタージュです」

「わ、わぁ！」

「お呼びしますか先生？」

「い、いえ！とんでもない。いいです、いいです」

後ろから茶々丸に声をかけられエヴァがサボり中という事を知らされた。

しかし、驚いた事と彼女を怖がっているとはいえ、その返答は教師としてどうなのだろう？

結局エヴァは教室に姿を現さなかったのだが、エヴァに襲われる事を考えてしまい、その日は授業にも支障が出てしまうどころかパートナー発言も出てしまい散々な結果になってしまった。

弓にも心配されたが相談するわけにも行かず、明日菜たちを頼りにしているならしばらくの間は止まってきても良い事を許可されてしまったりと、ますます申し訳なく思ってしまった。

タカミチや学園長に相談しようと思いはしたが、あいにくタカミチは長期の出張中で学園長も新学期が始まって多忙らしく相談内容をぼやかして言っても取り次いでもらえなかった。

「だから心配し過ぎだってば、ネギ。あの子だって、いきなりあんたを取って喰ったりしないわよ」

「そんな事言っても～」

授業のあと今にも死にそうな表情をしたネギを追って、慰めていた明日菜は弓からもネギの事をしばらく頼むとお願いされてしまい。一緒に帰っている途中だ。

「とにかく、今度何かあっても私が追っ払ってあげるわよ。元気出しなさい」

当初はいろいろ最悪な印象しか持っていなかったが、その後なんだかんだあっり元々面倒見がいい性格だった事もあってか。今ではかなり仲良くなっている2人だ。

だから明日菜も何かあれば協力するというが。

「明日菜さんはあの人たちの恐ろしさがわかってないんですよ～」

エヴァ、正確には真祖の吸血鬼がどのような存在か知っているネギはそんな簡単な事じゃないと嘆いている。

「真祖の吸血鬼とｈ…。！？」

ガボッ！

明日菜にその事を説明しようとしたとき、彼らの背後に迫っていた人物によって彼は連れ去られてしまった。

「……あ、あれネギ？」

言葉が途中で途切れた事に不思議がって振り返った彼女の視界にはすでに誰もいなかった。

（もがが！明日菜さん助けてー！）

ドポーーーン！

わけもわからず袋をかぶせられ、さらには先ほど服も剥ぎ取られたネギはお湯に放り込まれた。

「ぷは！こ、ここは……おふろ？」

エヴァにさらわれたのかと思っていた彼は、お湯から顔を出して周囲を見渡すとそこが前に１回強制的に招かれた事がある女子寮の大浴場なことに気がついたが。何故お風呂なのかと疑問に思っていると。

「ようこそネギ先生！」

声をかけられ振り返ってみると自分のクラスの子達が水着を着てそこにいた。

話を聞くと落ち込んでいたネギを元気付けるためにみんなで集まったらしい。

それを聞いたネギは感動し目を潤ませたのだが、あの３－Ａであるあっという間に大騒ぎになりいつしか彼を元気付ける会のはずが、もみくちゃにして何がなんだかわからなくなっている。

（わ～ん！気持ちは嬉しいけど、何コレー！）

それが今のネギの偽りない思いであり、状況を良くあらわしている。

一方、行方不明になったネギを探している明日菜はエヴァと茶々丸に遭遇していた。

「あんた達、ネギをどこにやったのよ！」

明日菜はエヴァがネギを連れ去ったと思い問い詰めたが。

「ん？何の事だ、私は知らんぞ」

「へ？」

エヴァはネギを連れ去っておらず。それどころか満月までは吸血鬼としての力は封じられていて、ネギをさらったところでどうしようもないと説明された。

実際に彼女の歯を見せられたが、現在の彼女には牙といってるような歯は存在しておらず彼女も納得した。

ネギがいなくエヴァもまた次の満月まで襲うことができないとわかり安心しならどこに行ったのかと思っていると。

「それにしても、お前やけにあのボウヤの事を気にかけるじゃないか。子供嫌いじゃなかったのか？情でも移ったか」

本来なら子供嫌いでオヤジ趣味、また魔法などほんの少し前まで知らなかったはずの明日菜が、ネギを気にかけていることに興味が出たのかエヴァからそんな言葉が。

「な…。か、関係ないでしょ！とにかくネギに手を出したらただじゃ済まさないわよ！」

自分でも何故これほど気にかけているかわからないず、誤魔化す意味もこめてエヴァに対して叫んだ。

「フフ、まぁいいがな。それより私は仕事があるのでな、失礼するよ」

「仕事？」

中学生であり昨夜ネギを襲った人物が何をするのか疑問に思ったが、寮のほうから叫び声のようなものが聞こえたためそっちらに向かった。。

さて、一方のネギと3－Aの様子はというと。

「ひゃあ！」

「いやぁん！」

「きゃぁーー！水着がぁ！」

（なななな、何が起こってるんですかぁ！）

先ほどより輪をかけて混沌とした状況になっていた。

どうも、何か動物が入ってきて騒ぎを起こしているようだが、胸などを重点的に触ったり、水着を脱がしたりするらしくこの騒ぎになったらしい。

「ネギ！どうしたのよ！」

そこに騒ぎの元をたどってきた明日菜も到着した、悲鳴が聞こえたからか手には武器なのか桶を持っている。

「明日菜！そっちにいったよ！」

動物は新たな獲物に照準を合わせ明日菜へと飛び掛っていったが。

スパコーーーーン！

とっさに迎撃に出た明日菜が振るった桶に叩かれてしまい、それに驚き一目散に逃げていった。

しかし、ただではやられなかったようで明日菜の制服のボタンをちぎっており胸がはだけていた。

「な……。なによいまの小さいの」

そのことに驚いた明日菜だが。

「こらー！あんた達もネギ連れ込んで何してんのよ！それも裸で！！」

浴槽の惨状？に気がつき問い詰めだした。

「いえ、明日菜さんこれは誤解です！」

「元気付ける会だよーー！」

当事者たちも説明という名の言い訳をしだして、また騒がしくなってきたが。

「お前たちいつまで騒いでいるつもりだ」

暖かな春、そしてあったかいお湯が張られた浴場に極寒のブリザードが吹き荒れた。

「「「ガ、ガミア先生!!」」」

指導員であり騒ぎを起こす者には一切容赦がないことで有名なガミアが混沌とした浴場に現れた。

「騒ぎがあるからときて見ればなんだこれは?何故女子寮に男子がいる。それと浴場で騒ぐな。」

「こ、これはですね!」

「落ち込んでいた彼を元気付けようと!」

彼女の怖さを知っている彼女たちは必死に事情を説明し、何とかお小言だけに止めてもらえるようにとクラス一丸となって協力し合った。

結果として後日、改めて説教を受けることになったが噂に聞くガミアの実力行使がなかった事に全員が安堵した。

落ち込んでいた者を励まそうとした事、利用者が多くなる前の時間であった事、騒ぎの原因が外から入ってきた動物であったことからその程度で済んだのだ。

最悪、説明の途中で実力行使でもって浴場からたたき出されることも覚悟していたので十分な成果だったのだ。

「ふー、今日もどたばたな一日だったわね」

「でも、皆さんのおかげで少しは元気が出ました」

「へ～～～～」

あの後、改めてゆっくりと入浴し、今日も明日菜と木乃香の部屋に止まることにしたネギは明日菜と一緒に部屋にきていた。

ネギは元気が出たというがアレで元気が出るのかと疑いのまなざしを明日菜は向けていた。

ちなみに木乃香はまだ入浴中で、もう少し入ってくるらしい。

「おじゃまします」

「あんたも早く弓先生のところに戻れるようになりなさいよ」

「ううん、すいません……」

エヴァの事があり、いろいろ相談できる明日菜のところに泊まっているわけだが、いつまでもそのままで良いわけもなく早く何とかしたいネギであった。

＜景気悪そうな顔してるじゃないか兄貴。助けがいるか？＞

「だ、誰！？」

「え？」

ネギはどこからかかけられた声に相手を捜したが見つからず、明日菜はそもそも聞こえてないようでそんなネギを不思議そうに見ていたが。

「下、下！」

「え？あ！」

見当違いのところを探しているネギに足元から声がかけられ見てみると。

「おれっちだよネギの兄貴。アルベール・カモミール！久しぶりさー！」

「あー！カモ君！久しぶりだね」

「へへっ、恩を返しにきたぜ兄貴。姉さんもなかなかやりますね。さっきのは効きましたぜ」

「お、オコジョがしゃべった？ってかあんた、さっきの！」

そこにいたのは白い毛並みの１匹のネズミ。ではなくオコジョ妖精のカモがいた。

ネギは久しぶりに会ったことを喜んだが、明日菜はオコジョがしゃべったことと先ほどの浴場で暴れていて自分が吹っ飛ばしたのもだという事に気がついて驚いていた。

「……って言うのが俺っちと兄貴の出会いなんでさ！」

長いので割愛するが（ちょっ！ｂｙカモ）５年前に罠にかかっていたカモをネギが逃がしたことに恩を感じてそれ以来ネギを兄貴と慕っているわけだ。

「へぇ～～～？」

「いやぁ。懐かしいなぁ。カモ君も大きくなったねぇ」

「兄貴も立派になりましたよ」

であったときを懐かしむ2人に対して明日菜の反応はいまいちであった。

「それよりも、なんでイギリスにいるはずのあんたがここにいるわけ？」

「明日菜さんウェールズですよ」

「あ、いえそれは…。って兄貴あっちのほうはぜんぜん進んでねぇみたいじゃないですか」

「え?あっち?」

言いよどみ、いきなり話を変えたが、彼の言う事がわからず聞いてみると。

「パートナー選びっすよ!パートナー選び!!いいパートナー探さないと、立派な魔法使いになってもカッコつかないでしょ!」

「う……、それは…これから探そうと思ってたんだけどなかなか」

エヴァにぼろ負けしてパートナーが欲しいが、だからといってすぐに見つかるものじゃないし、とネギが言いよどむと。

「そうすか、でも俺っちが来たからにはもー大丈夫!俺っちは兄貴の姉さんに頼まれて助っ人に来たんすよ!」

「ええ!?本当!?」

「も~さっきここの風呂場で調べてきたんですけどすごくいい素材だらけで。あの中に運命的なパートナーは絶対いますって!」

「やっぱりさっきのはあんたなのね。それにそんなことわかるの?」

「俺っちにはそれがわかる能力があるの!」

やはり騒ぎの原因はこいつかとあきれ、そんな事がわかるのか?と疑いのまなざしを送る明日菜にカモは自分にはそんな能力があるといった。

「よかった～。これでパートナー探しも楽になるかも！お姉ちゃんにお礼のメール送らなきゃ。あ、ここってペットいいんですか？」

「よかったじゃない。それとペットは大丈夫よ。でも、教職員用のほうはわからないわね。お姉さんにもお礼しっかり書きなさいよ」

「はい！向こうは戻るときに確認を取ってみます。お姉ちゃんにもお礼の手紙を書かないと」

まだ見つかったわけではないが、どう見つけるかさえわからなかった先ほどまでと比べ、オコジョ妖精のサポートがあるおかげで難易度はだいぶ下がったことに、ネギは喜び彼をよこしてくれた姉に手紙を送ろうということになったが。

「いい、いい！！兄貴そんな事を書かなくても！」

「え？何で？」

「え～と、その…」

カモがそれは必要ないといい、わけを聞くと言いよどみ。

「実は…」

トントン！

「はーい！」

カモが何かを話す前にドアがノックされ明日菜が出て行き、カモは何か話したかったようだが人がいるので黙るしかない。

戻ってきた明日菜の手には1通の手紙が。

「ネギ、あんたのお姉さんからみたいよ。そいつのことについてじゃない？」

「え？お姉ちゃんから見せてください。」

（うおおおぉーーー！まずい！何とかあの手紙はきっとあのことにちげぇねぇ！！なんとか見なくてすむようにできねぇか！）

差出人はネカネのようでネギと明日菜は早速開いてみてみることに、そして先ほどから妙に怪しかった彼はさらに妙に悩み始めていた。

そして手紙を開いて内容を確認してみると。

「あんた、これはいったいどういうこと？」

「カモ君、脱走して日本に来たの！！」

カモが下着泥棒の罪で捕まり、そのご脱走し日本まで来たことがそこには書かれていた。

「あ、兄貴それにはわけが…！」

何とかうまく誤魔化そうとしたが、そう簡単に良い言い訳が考え付かず進退窮まったときに。

「やれやれ、どうして君は勢いで話していこうとするかなぁ。そんなんだからボロが出てしまうんだよ。」

「え？だれ！？」

「今度は何よ！」

「この声は！」

突如会話に加わってきた声にそれぞれが驚いて姿を探すと。

窓際に配置されている明日菜たちの机の上に白い毛並みの見たこともない生物がいて再び。

「やぁ、僕の名前はキュゥべえ。困っているようなら手を貸そうかい？きっと力になれるよ。」

カモ参上！そして…（後書き）

カモ君登場！そしてあいつもついに表舞台に！

思ってたより長かったのでここでいったん終了。

次話は茶々丸襲撃かな？

小ネタコーナー

「とりあえずは順調といったところかしら？ネギ君が予想以上に彼女を怖がっちゃっているのは誤算かな。」

「あやつも動くようですが、どうしますか？」

「そうね…。少々早いけれど私も接触するわ。」

「しかしそれでは。」

「出す情報は必要最低限よ。となるとちょっとした舞台が必要かもしれないわね。」

「そこはあやつがやるでしょう。」

「そうね。連絡を入れましょう。」

ネギの受難はまだまだ続きそうだ。

カモの事情と相談！（前書き）

キュゥべえ大活躍？の回ｗ

追記：なぜか木乃香の名前表記をひらがなと勘違いしてました…。
一通り直せたはずです。もし変なところがあればご指摘ください＾＾；

カモの事情と相談！

麻帆良某所

麻帆良のとある場所で2人の人物がなにやら会話をしていた。

「―様、あの件はどうでしたか？」

「大丈夫だって。調整して合流できるようにするみたいよ。でも、あなたも参加していたのは知っているけれど姿まで見せていたのね」

「はい、―から魔法の危険性を知らせるために少し相手をして欲しいと。当初は奴のサポートが主と思っていたのですが」

「そう。まぁ、あなたがいれば必要以上に危険にはならないわね」

ところどころ聞き取りにくいが、どうやら何か現在進行しているものについてのようだ。

「それじゃあ、私は戻るわね。私が合流するのにはもう少しかかるかもしれないから彼らの事頼むわよ」

「ははっ、必ずやご満足できるようにしてみせまする」

話すことは終わったらしく2人は離れていった。

場所は移り、明日菜と木乃香の部屋に。

先ほどまでカモに詰め寄っていた明日菜とネギは突然の侵入者―キュゥべえ―に驚いていた。

「今度は何よ！てか、あんたどこから入ってきたのよ！！」

「君はいったい？」

「キュゥべえの旦那！」

明日菜はまた喋る動物が登場した事とどこから入ってきたかを問い詰め、ネギは彼が何者かを聞き、どうやらカモは知っているようで、しかも旦那とまでいっている。

「こいつの知り合いってことはあんたも！？」

明日菜はカモの知り合いから、彼もまた下着泥棒の一味かとくってかかったが。

「少しは落ち着いてくれ。これじゃあ、説明さえできないよ」

「あ、明日菜さん落ち着いて」

「む～、わかったはでもこいつと同類ってわかったら一緒にたたき出すわよ」

「ちょっ、姐さんひどいっす！」

明日菜の言葉にカモは非難を上げたが明日菜もキュゥべえも無視して話を進めだした。

「それで、あんたはいったい何なの？それとこいつとの関係は？」

「さっきも言ったとおり、僕の名前は“キュゥべえ”。魔法使いのお供と思ってもらえればいいよ。」

「アニメとかで出てくるマスコットのようなもの？確かにこいつよりそれっぽいわね」

実際に見た目は普通のオコジョと同じカモと違って、キュゥべえはまさに『魔法使いのお供』といっていい明日菜が知っているどの生物とも違った不思議な動物ではある。

「そんな感じだね。それと彼との関係だけど、追われていた彼をここまで送ってきたのが僕なんだ」

「じゃあ、やっぱりあいつの仲間じゃない！ネギそこの下着泥棒諸共たたき出すわよ」

「だから落ち着いてくれって、せめて最後まで話をさせてもらえないかい？最終的な判断はそれからでも良いんじゃないかな？」

「そうですよ、まず話しだけでも聞かないと」

「じゃあ、続けるね。それとカモはあまり喋らないように、僕が聞いたことに対する返答も最小限でいいからね」

「わかりやした。でも、俺っちも少しは…」

「君が喋ると不必要な事や誤解を受ける事までしゃべりそうだからね。彼の使い魔になりたいなら黙っている事だ」

「へい……」

「使い魔？何よそれ」

聞きなれない言葉に明日菜は疑問を持ち、キュゥべえに聞いてみた。

「使い魔ってのは魔法使いのお供の事だよ。妖精が専属でついてくれて、いろいろなサポートをしてくれるカモみたいな妖精の職業の一種だね。彼がここに来た目的はそこの彼の使い魔として雇ってもらう事だからね」

前足でネギを指しキュゥべえは使い魔のことと彼がなぜ魔帆良を目指したかを話した。

「そうだったんだ」

「へい、追われる身だったんですが、その途中で兄貴のことを思い出してたずねてみようかと」

「それを見つけた僕が魔法使いから追われている彼をかくまって日本まで送り出してあげたのさ。罪のほうの撤回はちょっと時間が足りなくて、とりあえず様子だけでも見に行ってみるかと思って来たらね」

「すいやせん…」

「なんで罪がなくなるのよ。実際にそいつは下着を盗んだんでしょ！それの2千枚も！！」

「うん、それは事実だし彼にも反省をしてもらわないといけないんだけれどね。でも、それだってちょっとした説教と今後の監視で十分なんだよ」

「2千枚も盗んで何でちょっとした説教になるのよ！」

重罪でなくても十分な窃盗罪になる事なのにちょっとした説教ですむのかと声を荒げる明日菜だったが。

「じゃあ、聞くけれど君はペットが物を隠したら保健所に連れて行ってしまうのかい？」

「何でそうなるのよ！しかってもうしないように躾ければいいじゃない！それに今はそんな事関係ないじゃない」

いきなりとんでもないことを言い出したキュゥべえに怒鳴る明日菜だが。

「関係あるさ。確かに彼のしたことは人間で言う窃盗罪に当たるけれど、彼は人間じゃなくてオコジョだ。人間の常識ではかって罪に問うのはどうなんだい？」

「え、でも！」

「彼は動物であって人間じゃないんだよ。ただ、暖を取るために布を集めただけじゃないか」

「でも、何で下着なのよ。それも女物の！」

「そのほうが良いからに決まってるじゃないか」

「な！」

「男物より女物のほうが肌触りも保湿、保温も良いだろうからね。それと匂いもかな？動物にとって匂いはとても重要なんだよ」

「でも」

「それに、確かカモ。君には病弱な妹さんがいたんじゃなかったんだっけ？」

「え？」

＜話をあわせて＞

「へ、へい。います！」

「おそらく2千枚という数もより暖を取るためと、自分では持ってくることができない妹さんのための予備だろうね」

「……」

「もう一度言うけれど。確かに彼は罪を犯したが、それはあくまでも人間視点での話だ。彼は冬篭り用のわらを集めたのと同じ感覚な

んだよ。それに最適な素材がたまたま他人の下着だったってだけさ。」

「だからってやっていいわけじゃないでしょう」

「もちろん二度とこんな事をさせないために言い聞かせる必要はあるけれどね。だからって閉じ込めるのはやりすぎだろう？彼は人間の法を犯したけれど、オコジョの法を犯したわけじゃないんだから。脱獄だって同じさ。」

「ううぅぅ……。ネギあんたも何かいってやりなさいよ！」

キュゥべえに反論ができなく、さっきから黙っているネギに話を振ってみたが。

「ネギ？」

彼からの反応は無く振り返ってみてみると。

「し、知らなかったよ。カ、カモ君がそんな苦労をしていただなんて…」

目に涙をためて、先ほどの妹の話しに感動していた。

「え！？」

「カモ君、君をペットとして雇うよ！お給料は月5千円が精一杯だけど良いっ？」

「あ、兄貴…。十分です！ありがとうぜぇやす！！」

「明日菜さん、改めて彼をしばらく預かってはもらえないでしょうか？」

どうにも胡散臭いが、ネギに真っ直ぐな目で見つめられキュゥべえの言葉にも反論できそうも無く彼女は。

「はぁ、いいわよ。でも、下着泥の件はしっかりと躾けときなさいよ」

「あ、ありがとうございます！」

「姐さん、恩に着ます！」

これ以上言ってもどうにもなりそうも無く、下着の件をしっかりするように念押しをして許可を出した。

「じゃあ、これで一件落着のようだから。僕はお暇するよ。当分はここにいるから何か相談したいことがあったら呼んでくれ」

「旦那もありがとうごぜぇやす」

「それじゃあ」

とその言葉を最後にキュゥべえはいつの間にか部屋から姿を消していた。

「それじゃあ、兄貴あらためてよろしくっす！」

「うん！カモ君これからよろしくね」

この後、木乃香が帰ってきてカモを見つけたときにまた一波乱あるのだが、無事にカモを飼っても良いということになった。

明日菜から、満月まで襲われないと聞いたので昨日のようにおびえたり、パートナーについて悩んだりしなくはなかったが。

相変わらずエヴァがサボっている事に安心してしまったり、帰りぎわにいろいろ言われたが言い返せなかったことを落ち込んでいた。

「兄貴！なんなんすかあの2人は！あ！朝に言っていた問題児っすね！！許せねぇ！ネギの兄貴をこんなに悩ませるたぁ！！」

エヴァの態度とそれに悩むネギを見てエヴァに対して怒りがわいてきた彼は。

「舎弟の俺がぶちのめしてきてやんよぉ！すぐに済みやすぜ！！」

どこからか取り出したオコジョサイズの釘バットを振り回しながらエヴァを追おうとしたが。

「エヴァンジェリンさんは吸血鬼なんだ。……しかも真祖の」

ネギからエヴァの正体を聞き。

「……故郷へ帰らせてもらいます」

昨日の話とさっきの威勢はどこへ行ったのか故郷へ帰ろうとした。

「コラ。昨日の今日でもう止めるつもり？」

「いや、冗談すよ。冗談」

ネギから事情を聞き。

「なるほど、それで吸血鬼の真祖にしては力を感じなかったのか。でも、よく無事でしたね」

「うん、前は顔見せだって言ってたから途中でひいたんだと思う」

「そんなにヤバイの？2年間一緒のクラスだけど、そんな感じはしなかったけど」

魔法を知って日が浅い明日菜は吸血鬼のすごさがわからずに質問した。

「やばいってもんじゃねぇですよ。そうですねぇ、姐さんはゲームってします？」

「あんまりやんないけど」

「じゃあ、ドラ〇エは知ってます？」

「知ってるわよ流石に」

「真祖の吸血鬼ってのは、それに出てくる魔王かそれに近い力を持

った化け物なんすよ」

「ええ！とてもそうは見えないわね……」

彼女のエヴァに対するイメージはいつも気だるげにしている少女といったものなので、カモが言ったことを信じれなかった。

「まぁ、力を封じられているにしても、なんでこんなところにいるのかは疑問なんすけどね（それにエヴァンジェリンってどっかで聞いた事があるような？）」

「とにかくどれくらい力があるか知らないけれど、満月にまた襲われるからどうしようって悩んでるのよ」

「うう…」

「でもそれならいい手がありやすぜ」

「ええ！あの人たちに勝つ方法があるの！！」

さんざん悩んでいたところにカモがあっさりと手があるといったことに驚いてその方法を聞いてみると。

「簡単な事ですよ。姐さんが仮契約して2人で片方をぼこってしまえば良いんですよ！」

「ええ！それは卑怯なんじゃ。それに明日菜さんと仮契約だなんて」

「そうよ！それはいくらなんでも」

襲われたとはいえ2対1で襲い掛かる事に抵抗を受けたのか2人はあまり乗り気ではなかった。

「いい案だと思うんですがね、じゃあキュゥべえの旦那にも相談してみますよ」

「昨日のあいつ？役に立つの？」

見た目はかわいい小動物なのでとても役に立ちそうには思えない明日菜とネギだった。

見た目だけは無害そうですからね、見た目だけは。

「旦那はすごいですぜ！とにかく今日は旦那と相談しましょう！」

「でもどうやって呼ぶのよ？」

「ひとまず人気の無いところに行きやしょうぜ」

「明日菜さん相談してみましょう。僕達だけじゃぁ…」

「じゃあ、校舎裏が良いかしら？」

校舎裏に向かったネギ達。

「それでどうやって呼ぶのよ？何かアイテムでもあるの？」

「いや、旦那はいつも悩んでいて旦那に頼ろうとすると現れるんですよ」

「なにそれストーカー？」

「たぶんそういう能力を持ってるんじゃないでしょうか？契約を交わした人の悩みがわかって移動できるって」

「本当に妖精ね、キュゥべえって奴は」

いまいち妖精っぽくないカモと比べて見た目やその能力？に感心していると。

「呼んだかい？」

「「わぁ！！」」

噂をすれば影、というわけでもないが彼について話していると、前と同じように突然出てきて会話に加わったせいで明日菜とネギは驚きの声をあげた。

「何か悩んでいるようだけど。どうしたんだい？」

そんな事を無視して聞いてきたキュゥべえにエヴァのことを話すと。

「なるほど彼女に襲われるから何とかしたいか」

「はい、このままじゃいけないと思いますし。でもどうしたらいい

か…」

「兄貴…。旦那何か良い案は無いですかね？」

ネギを心配してキュゥべえに何か良い案はないかと問いかけてきたカモに。

「君の案でいけばいいんじゃないのかい？」

彼が返した答えはカモが考えた方法でいいのではといったものだった。

「ええ！あんたもそんなこと言うの！それに仮契約って何よ！！」

「パートナーの事は聞いたことあるけれど仮契約って？」

キュゥべえもまた２人がかりで襲えと言ってきたことと仮契約について問うをする明日菜。

ネギもまた聞きなれない単語に対して質問した。

「まだ説明してなかったのかい？」

「そういえばまだでした。え～と、仮契約ってのは…」

仮契約とは従者契約のお試し版のようなもので得られる利点は少ないがお手軽に交わすことが出来て、本契約と同じくお助けアイテム―アーティファクト―がもらえるといったことをカモは説明した。

しかし、契約にはキスそれもマウスｔｏマウスが必要と。それを

聞いた明日菜は。

「えぇぇ！キ、キスですって！できるわけないでしょう！」

「減るもんじゃないから良いじゃねぇですか。もちろん他にも方法はありますが複雑でお勧めはしませんよ？」

「いいわけないでしょう！他に方法があるならそっちにすれば良いじゃない！」

「やたら時間がかかったり、血の契約。血判状って知ってますか？それが必要だったりでお勧めできませんよ」

キス以外の方法をやればいいと明日菜はカモに詰め寄るが、カモはあまりお勧めできないとキスによる契約をおした。

「明日菜さんとキス…」

ネギも明日菜とキスをする事に困惑していたが。

「やれやれ、なにやら切羽詰っているようだったから来てみたけれど、その様子じゃ大丈夫そうだね」

「だ、大丈夫じゃないですよ！このままじゃまた、エヴァンジェリンさんに！」

そんな3人の様子を見ていたキュゥべえは深刻な状況じゃないと判断したがネギはピンチだと声を荒げたが。

「じゃあ何故、仮契約して各個撃破しようとはしないんだい？」

キュゥべえからそんな質問を受けて2人は。

「そんな2人がかりでなんて卑怯だと思います」

「私だってキスしたくは無いわよ！」

と2人は答えるが。

「そんな事を言っていられる状況なのかい？」

キュゥべえからは何をくだらない事をと言わんばかりの返答が来た。

「えと、それは……」

「それとこれとは関係ないじゃない！」

「大いにあるよ。卑怯って言うけれどエヴァンジェリンは最初から2人がかりだったんだろう？最後は3人に増えたようだしね」

「でもエヴァンジェリンさんは」

「悪い魔法使いだって？もう一度聞くけれど、君にそんな余裕はあるのかい？血を吸われてまた襲われるんだろう？その時も卑怯だからって正々堂々と戦うのかい？」

「で、でも」

「次は抵抗する間もなくやられて、血を吸い尽くされてしまうかも

しれないね。その時も卑怯だって言ってるのかい？」

「……」

矢継ぎ早に言われるキュゥべえの言葉にだんだんネギは押し黙っていき。

「ちょっとネギ！」

「君もキスぐらいで何を騒いでいるんだい？」

「騒ぐに決まってるでしょう！だって、私まだ…。そうじゃなくても！」

「何度も言うけれど、そんな余裕はあるのかい？彼が死んでしまうかもしれないのだろう？それなのに君はキス一つで見捨てるのか？」

「そんな事言ってないでしょう！！」

「じゃあ、彼と仮契約をすればいいのだよ。それで全てがうまくいくんだから」

「ぐうぅぅ……！」

「まぁ、実際に決めるのは君たちだからね。もしかしたら他にいい案があるかもしれないし。」

「だんな少し言いすぎじゃ？」

自分で言った案だが、少し言いすぎではとカモはキュゥべえに言

ったが。

「しかし全て事実だよ。彼がまた襲われることも、このままじゃ確実に血を吸われてしまうことも。そうなったとき、彼は果たして生きてるのかな?それを仮契約して、各個撃破するだけで打破できるんだ」

「それはそうなんですが…」

「やっぱり……」

逆に現実を突きつけられてしまい、2人はさらに落ち込んでしまった。

「まぁ、今日はもう遅いし、やるとしても明日以降だろうね。それまでに答えを出せばいいんだよ。もっとも時間は有限だけどね」

そう言い残して彼は姿を消した。

「明日菜さん…」

どうするのかとネギは明日菜に問いかけた。

「…とりあえず今日は帰りましょう。また明日考えれば良いんだから」

「はい」

答えを出す事をひとまずおき、彼らは帰路についた。

カモの事情と相談！（後書き）

……すいません、また襲撃までいけませんでした。

説明とかが思ったより長くなってしまって＾＾；

次こそはいけます！そして久しぶりにマミ登場ですよ！

キュゥべえのアノ雰囲気を再現できたかな？

屁理屈と脅し満載の説得術でしたｗ

小ネタコーナー

「やぁ、―準備は整ったよ。」

「そう、それで私はどうすればいいの？」

「まだ、最終段階じゃないからね。でも近日中。早ければ明日にでも出てもらうよ。」

「わかったわ。いつでもいけるよう準備しておくわ。」

「それと―に―と最後の打ち合わせがしたいから呼んでくれと言っておいて。こっちも早ければ明日になるかもしれないよ。」

「そんなに急ぐの？」

「彼の準備が整ったら、あとは一気に最後までいってしまうからね。」

「そう、わかったわ。くれぐれも彼が大怪我を負うことの無いようにしてね。」

「大丈夫だよ。」

一抹の不安を抱きつつ彼女は―に連絡を取るために携帯を取り出した。

襲撃と果たし状と決戦準備（前書き）

今回は長いです。

襲撃と果たし状と決戦準備

「兄貴ぃ、どうするんですかい？」

あれから一日経ったが、ネギはまだカモが言った作戦を実行するか決めかねていた。

「早くしないと満月になってまた襲われますぜ？」

「でも、やっぱり2人がかりってのは卑怯なんじゃ…」

「だから、姐さんはあまいって！チャンスは今しかないんですぜ！キュゥべえの旦那が言ってたように時間は限られてるんすよ！！」

そんな2人の言い合いを聞いるネギは。

（確かに満月になったら、また襲われる事になるし…。そうなったら）

『死んでしまうかもしれないんだろう？』

今のままでは再び襲われる事は確実であり、そのときに自分はどうなっているのか…。

キュゥべえが言った不吉すぎる未来が頭に浮かぶ。

実際にあの夜、ネギは命の危険を感じていた。あのときの恐怖をもう一度、あの時以上に完膚なきまでにやられて味わう。

『君たちにそんな余裕はあるのかい？また襲われたら、命は無いかもしれないね』

キュゥべえの言葉が何度も頭をよぎりネギは……。

麻帆良学園茶道部部室、学校施設より少し離れた場所にあるそこにエヴァと茶々丸はいた。

「結構なお手前で」

和服姿の茶々丸が立てたお茶に茶道部の部長は作法どうりに褒め言葉をかけ、マスターであるエヴァも満足していた。

日本の文化が好きな彼女は他にも囲碁部にも所属しているが今日は茶道部に顔を出しているようだ。

部活も終わり帰路についたエヴァ達だったが。

「おーい！エヴァ」

元担任であり出張中であるはずのタカミチが声をかけてきた。

「ん、タカミチか。何の用だ？仕事はしているぞ」

「ははは、違うよ。彼女から連絡があってね。彼が最終段階が近いから、それの確認がしたいから話し合いたいだって」

「わかった。茶々丸、先に帰って夕食の支度をしていろ。一応用心して人目があるところを歩け。あのボウヤにそんな根性があるとは思えんが一応な」

「了解しました、マスター」

どうやら現在彼女が参加しているネギの修行に関することだったようだ。わざわざ2人で行く必要も無いだろうと、茶々丸を先に帰してタカミチと共に会合の場所へと向かった。

その後、茶々丸はエヴァに言われたとおり、人目が多いか騒ぎが起こればすぐに人が集まってくる場所を選びながらよく訪れている場所に向かっていた。

その背後に彼女をうかがう不審な影。

「兄貴、茶々丸って奴が一人ですぜ！やっちゃいましょうよ！！」

「まだダメだよー！人目につくわけにもいかないんだから、もう少し待って」

「なんか辻斬り見たいで嫌ねぇ、しかもクラスメートが相手だし…」

不審な影―ネギ達―はあの夜に感じた恐怖とキュゥべえの言葉に作戦を実行する事にしたようだ。

そして襲撃をかけようとエヴァ達を探していたところに、ちょうど茶々丸がいたので尾行中だ。しかし、まだ人目が多いためチャンスをうかがっているようだ。

「でも、あんたとマミを襲った悪い奴だしね。何とかしなくちゃ」

明日菜もまだ若干の抵抗はあるが、すでに2人は襲われている事とネギの必死のお願いに仮契約もしっかりとしている。

チャンスをうかがうために茶々丸を見張っているわけだが、風船を木に引っ掛けて泣いていた子供を見つけたら風船をとってあげたり。歩道橋の階段で困っている老婆を反対の道まで連れて行ってあげたり、川で流されている猫を助けたりと街の人からしたわれていることが判明した。

ちなみに、その途中でブースターを出し飛ぶ姿を目撃して彼女がロボってだったという衝撃?の事実が判明して。彼女がロボットという事に気がついてなかった明日菜とネギにカモが驚く場面もあったりした。

そして今は麻帆良にある教会の裏で野良猫たちにエサをあげていた。普段はロボットらしい無表情な彼女だが、今はうっすらとではあるが優しい笑みが浮かんでいた。

それらを目撃したネギ達はというと。

「いい人だ」

「うん」

感動に打ち震えていた。

「ちょっと！兄貴も姐さんも今が絶好のチャンスなんすよ！！兄貴も命を狙われたんでしょう！しっかりしてくださいよ！！」

感動して当初の目的を忘れてしまっている2人にカモが慌てて声をかけた。

「で、でもー」

茶々丸したことを見たため、決意が鈍ってしまったネギが躊躇したが。

「心を鬼にしてボカーンとかましてやらないと兄貴が危ないんですよ！あの茶々丸ってのはともかく、エヴァンジェリンてのは向こうから襲ってきたんでしょ！！」

「……しょうがないわね」

カモの言葉に促され決意を新たに茶々丸に襲撃をかける2人だった。ただ、猫のエサやりが終わるまで待つことにしたようだ。

そして、エサを食べつくして猫たちがそのぞれのねぐらへと帰っていったことを確認した2人は。

「……茶々丸さん」

「…こんにちはネギ先生、神楽坂さん。油断しましたか…、これより対象の排除を開始します」

ネギと明日菜の姿を確認した茶々丸は普段、頭についているゼンマイの取っ手をはずして戦闘態勢へと移った。

「茶々丸さん。あの…、僕を狙う事を止めてはいただけませんか？」

ネギは最後の望みと茶々丸に襲う事を止めてもらうように説得しようとしたが。

「申し訳ありません。私にとってマスターの命令は絶対ですので」

一礼と共に返ってきた言葉は交渉の余地がない事を示すものだった。

「ううぅ……。仕方ないです。明日菜さん、さっき言ったとおりに」

「うまく出来るかわからないわよ」

その言葉にネギは覚悟を決め、小声で明日菜に事前の打ち合わせどおりにと言葉をかけた。

「……では、茶々丸さん」

「はい。神楽坂明日菜さん。彼女があなたのパートトナーですか」

「いきます！契約執行１０秒間！ネギの従者『神楽坂明日菜』！！」

ネギが明日菜へと魔力供給を開始して戦いの鐘の音がなった。

時間は少し戻してまだネギ達が茶々丸を尾行している頃。

「え、ネギ君が茶々丸さんを尾行してるの？」

＜ああ、あの夜襲われたことが効いているようだね。片方だけでも排除することにしたようだよ＞

彼女はキュゥべえからネギ達がおこなおうとしてる事を報告されていた。

「（原作でもそういえばあったかしら？カモが来ている事は昨日確認したし。）私も万が一の事があるといけないから向かうわ。どこにいるの？」

＜たぶん教会の裏かな。彼女はよくそこで猫にエサをあげているようだからね＞

「わかったわ。何かあったらまた知らせてね」

通信を切り教会裏へと向かった彼女だが、肝心の教会の場所を聞き忘れて到着に少し手間取ってしまった。

そしてやっと教会の屋根が見えてきたときに。

＜大変だマミ。ネギが使おうとしている魔法が強すぎる。このままじゃ茶々丸が致命的な損傷を受けてしまうよ＞

「何ですって！」

最悪の事態が頭をよぎり彼女は全力で教会へと駆け出した。もし彼女が原作の事をもう少し覚えていたら…。キュゥべえの声にセリフとは裏腹に感情がこもっていなかった事に気がついたなら。

この後の悲劇は回避できたかもしれない。

場所は再びネギ達が戦っている場所へ。

契約執行の効果により、元々高い身体能力がさらに上昇した明日菜は茶々丸を押していおり、ネギは魔法の詠唱に集中できていた。

「光の精霊１１柱…。」

『兄貴、相手はロボなんだ手加減しちゃダメッすよ！』

「集い来たりて…」

『千の呪文の男か、私に勝てたら教えても…』

「ううぅ…」

『次に襲われたら命はあるのかな？』

ネギの脳裏にカモの助言や父親の事、そしてキュゥべえが言った未来のことがよぎった。

「魔法の射手！連弾・光の１１矢！！」

それらが―特にキュゥべえの一言が―彼に必要以上の緊張と、それによる魔法の射手へと過剰な魔力供給を促してしまったのだろう。

放たれた魔法は１つが当たっただけでも茶々丸を破壊するには十分なものがあった。そして明日菜によって足止めされていた茶々丸にそれを避けるだけの余裕はなかった。

それを優秀な演算力を持つ彼女は、自身の破壊が免れぬことを知り。

「すいません、マスター。もし私が動かなくなったら猫のエサを…」

遺言ともいえる、もしもの時のためにログを残そうとした言葉が自然と口からもれ、それを聞いたネギは。

「や、やっぱりダメー！戻れ！！」

やはり茶々丸を破壊するなんて出来ない！と慌てて魔法を引き戻しにかかったが時すでに遅く、魔法の射手は全弾命中してしまった……。

（ｓｉｄｅガンドルフィーニ）

やぁ、読者諸君。頭の固い魔法使い代表ガンドルフィーニだ。

私は学園長から教会裏で戦闘が行われたので見てきてくれと通信があって、今その問題の教会裏にいるんだよ。

学園内でおこなわれているネギ君の修行で発生したもののようだ。

私は今回の計画を聞いたときに一番に反対をした。何せ相手はあのエヴァンジェリンだ。もしネギ君の身に何かあったら…、そう言って学園長や高畑先生に意見したわけだ。実際に最初の戦闘のときに少しやりすぎたと本人が報告してきていた。

それを聞いたときに今からでも計画を中止して私達が彼に手ほどきをすべきだと、学園長に詰め寄ったものだ。

え、じゃあ何故まだ計画が進んでいるかって?そもそも何で計画が発動したかって?

それはだね、学園長が用意したネゴシエーターに我々が完敗したからに他ならないんだよ…。

彼曰く。

「彼女は犯罪者だがこの１５年間は問題を起こしていないのだろう？それなら危険は少ないよ。それに君達もいつまでも身内を見張っているわけにもいかないだろう？そんな労力があるならもっと他に使うべきだよ」

それに彼女は賞金首だった事を反論として言うと。

「確かに君たちの心配はわかるよ。でも、君たちの仕事は内部にしこりを抱えたままでやっていけるのかい？僕は別に彼女を擁護しているんじゃないよ。彼女は実際に罪を犯しているし、それは償わないといけないからね。今も働いているようだけどこれを機に彼女が君たちに反抗をしないと証明されれば君たちの負担は減るんじゃないかな？」

実際に彼女ばかりにかまかけてられないのは事実ではあるが…。

「それに重要な仕事を達成いできれば彼女が更生へと向かってるって証明にならないかい？君たちが目指す立派な魔法使いは罪人を罪人のままで終わらせるものなのかい？罪人を更生させてこそのものだと思うのだけどな」

と言われてしまい、様子を見ながらという事になってしまった。

確かに立派な魔法使いを目指すなら道を誤ったものを元の正道に戻すことも目指すべきだとは思うが…。なぜかペテンにかけられたか

のように感じるのは何故だろう？

襲撃の後の計画中止の意見もマミ君を合流させることでエヴァンジェリンを牽制・監視させる事になり続行となった。やり過ぎたと言っても少し血を多めに吸ったくらいだったので、あまり追求できなかったのが悔やまれる。

画面の前の君はどう思う？え？メタ発現をし過ぎだって？そもそもお前そんなキャラか？

ははは、私もそう思うよ。でもこの現場を見れば誰だって現実逃避をしたくなるよ。

その現場なのだがね。

まず、ネギ君と神楽坂君が真っ青な顔をして泡を吹いて気絶してる。神楽坂君がいることが気になるがそれよりも、よほど怖いものを見たのだろう、顔が凄い事になってしまっている。

エヴァンジェリンの従者の茶々丸君は煙を上げて意味不明な言葉を発している、挙動もかなりおかしい。バグってるってやつか？

ネギ君と神楽坂君もそうだが、茶々丸君もあのエヴァンジェリンの従者とは思えない良い子だからこの姿は痛ましい。

そして、おそらく彼らがこの状態に陥った原因である。同じく倒れているマミ君。

彼女ほどのものが何故？とも思うのだがそれ以上に問題は彼女の身体に頭部と言うものが無い事だ……。

誰かこの状態になった経過を教えてくれ！！

（ｓｉｄｅ　ｏｕｔ）

さてガンドルフィーニを混乱させている状況がどうやって形成されてかと言うと。

ネギが魔法の射手を反転させる直前にマミが到着し、そのままとっさに茶々丸との間に飛び込んできたのだ。

茶々丸を突き飛ばすではなく、自分で全部受けるように飛び込んだため。本来なら茶々丸に当たることなくネギへと反転するはずが、全てマミへと着弾してしまったのだ。

紅き翼時代やそれ以前も相手の魔法を受けて防ぐといった、ラカンと同じような事をしていたため今回も自分が身代わりとなって受けに入ったのだ。

もっとも本来なら問題なくネギの攻撃を全て防げたわけだが。実際に身体は傷一つついてない。

今回はとっさに飛び出したため体勢が悪かった事、ネギの魔法の威力が大きかった事、その内のいくつかが首付近に着弾さらに１発

が首に着弾したため首が外れてしまい、しかも回転しながら飛んでいったためガンドルフィーニが駆けつけたときはまだ目を回していたのだ。

そして、首が外れた体は本人が目を回して意識が朦朧としているため糸が切れた人形のように倒れた。

それを目撃した3人は煙が晴れた先には首無しの体が…。茶々丸にいたっては飛んでいくマミの頭部をしっかりと捉えてもいた。

あまりの事態に完全に精神が許容できる限界を突破してしまい。ガンドルフィーニが到着したときのような状態になってしまったのだ。

ちなみに茶々丸はマミの体のことを詳しくは知っていない。マミ自身が頭部が外れることを忘れたいため滅多に、その能力を使わないこと。エヴァの調査は茶々丸が完成する前にあらかた終わったので、茶々丸がエヴァ一味に参加後にマミの頭部が外れることが無かったから茶々丸も同じようになったしまったのだ。

チャチャゼロならおそらく知らなくても笑っていそうだが、茶々丸はそんな性格じゃなかったことが災いか?

その後、応援に駆けつけたタカミチとやっと回復したマミによって現場の片付けが始まったのだが…。

3人の混乱は続いていたので茶々丸をマミが。明日菜とネギを出張から一時戻ってきたと誤魔化したタカミチが送っていく事になった。

結局マミとネギ達の合流は日を改めて学園長からの増員という事で接触する事になった。

キュゥべえのプランだと、偶然通りかかったマミがネギ達の戦闘を目撃して止めに入り事情を聞いた後に協力という設定だったようだ。

げに恐ろしきはギャグ補正か？

そんな事があった日の翌日、木乃香がでかけた後3人で今後の事を相談していたのだが。

「どうすんすか兄貴！昨日の茶々丸ってやつを逃がしちまって！きっと今頃エヴァンジェリンにチクってますぜ！！」

茶々丸を逃がした事がまずいとカモは声を荒げたが。

「でもカモ君、茶々丸さんは僕の生徒なわけだし…。それに昨日は何かあったような…。」

「あまい！兄貴は命を狙われてんでしょ！生徒の前に敵っすよ！敵！……確かに何かあった気もしますが」

「ちょっと、カモそこまで言う事ないじゃない。2人と2年間一緒

のクラスだったけれど命を狙いそうな感じじゃなかったわよ?そりゃあんまり話したこと無いけれど。……何があったんだっけ?」

ネギはやっぱり生徒に大怪我をさせるのはどうかと思い、明日菜も2人がそんな危険人物とは思えないと言ったが。

ただ3人ともあの惨劇?は記憶からなくなっている、というか思い出すことを拒否しているようだ。あの後タカミチも何事も無かったかのように振舞っていたために夢か何かと思ったのだろう。

それはともかくカモは2人があまり危機感を持ってないことに業を煮やして。

「あまい!姐さんもあまあまっすよ!!見てください俺っちがまほネットで調べたんすけど…」

と言ってどこからかオコジョサイズのノートパソコンを取り出しとあるサイトに接続すると。

「あのエヴァンジェリンって吸血鬼。15年前まで賞金首だったんすよ!それも6百万ドルって超高額の!」

そこには賞金額に斜線が引かれてはいるが、しっかりと当時のエヴァの手配書が写っていた。

「6百万!何でそんなのがうちのクラスにいるのよ!」

「それはわからねーが…。でも不味いっすよ、昨日の事で奴等が本気になって攻め込んできたりしたら…。」

「確かに今日は休みだから寮には人がいっぱいいるわね…」

「だから兄貴が今日寮にいるのは…」

などと心配なのはわかるがそれを聞いているネギがどんどん追い詰められた顔になっていき…。

「うわぁぁーーーん！」

耐えられなくなってしまい、窓から飛び立っていってしまった…。

「ネギーー！あんたがあんなこと言うから！」

「兄貴ーーー！姐さんだって！」

突然飛び出していったネギに互いに相手を責めたがそれで解決するわけでもないので、後を追おうとしたときに。

「こんにちは。ネギ先生と明日菜いる？」

誰かが尋ねてきたため、まずは来客に対応しようと玄関に向かった。

「は～い。ごめん今悪いんだけれど…」

「ああ、ネギ先生のこと？すごい勢いで飛んで行ったけれど」

来客であるマミの口から出た一言で、都合が悪いから帰ってもらおうといいかけたところで明日菜は止まってしまった。

「え、えっとそ、それは……！」

何とか誤魔化さないと、と思い慌てる明日菜だったがマミからの第2弾の爆弾発言が飛び出した。

「ああ、誤魔化さなくて大丈夫よ。私も関係者だから」

「え……えぇぇぇーーー！」

「明日菜、声大きすぎよ。詳しくは中で話しましょう」

「う、うん。でもネギが…」

「大丈夫、私の使い魔に見ててもらってるから」

それを聞いてしぶしぶ明日菜とカモは部屋に戻りマミの話を聞くことにした。

そこで自分が学園長からネギ君を助けてくれと頼まれてきたこと。ネギは楓に保護されたから、明日には帰ってくるだろうことを話されて明日菜はひとまずは安心した。

「明日菜、少しは落ち着いたら？」

「ううん、でも心配で…」

ネギが無事なことを確認した後、マミが持ってきたケーキでお茶会をしてる彼女たちだが、やはりネギが心配なのか落ち着かない明日菜。

「だから大丈夫だって。今は楓と仲良く魚を取ってるわよ」

「楓ちゃんも結構謎よね…。それにしてもこんな近くに魔法使いがいたなんてね」

「そういうものよ。見た目にわかりやすいならともかく、そうじゃなかったらわからないものよ」

「確かにエヴァンジェリンさんのことは意外だったわね」

と、その後も会話は弾んでいった。明日菜も話す相手がいなくていろいろ溜まっていたのかもしれない。

エヴァについてはネギが戻ってきたときに話すことになって、その日はマミは帰った。

一夜明けて一方のネギの方はというと。

昨日は不安に押しつぶされるように飛び出してきて迷子に。というより遭難しかけたが楓に拾われていろいろな事を話して不安を晴らすことが出来たのか、今は決意に満ちた表情をしていた。

「よし！」

杖も呼び出すことに成功して戻ろうとしたときに。

『ほう、昨日まではしょぼくれた顔をしていたが、今はなかなか良い顔をしているな。』

突然背後より声をかけられて振り返るとそこには、あの夜最後に現れた仮面をかぶった人物がそこにいた。

「お、お前は！」

慌てて戦闘態勢に入ろうとしたネギだったが。

『まて、今回は戦いに来たのではない』

「え？」

敵から返って来た意外な言葉に疑問の声をあげると。

『今回は逃げ出した貴様の様子を伺いに来ただけだ。そのまま帰られても、腑抜けていても我が主は困るからな』

「……」

『まぁ、これなら問題は無かろう。次ぎまみえる時を楽しみにしているぞ』

「わかりました。絶対に勝ってみせます！」

そう決意を相手に叩きつけてネギは寮へと飛んでいった。

それを確認した仮面の人物は。

『いつまでこっちに殺気を飛ばしてる気だ？』

背後に向かって問いかけた。

「貴様は何者でござる？何ゆえネギ坊主を狙う」

『それを知ってどうすると言うのだ？』

「敵うかはわからぬが、ここで見てみぬ振りすることはできぬでござるよ」

ネギは気がついていなかったが、起きていた楓が仮面の人物が何かを仕掛けたときいつでも飛び出せるようにしていた。

『安心しろ、我が主はあやつをどうこうする気は無い』

「それを信じろと？」

『どちらでもかまわん。心配なら大停電の日にあやつを見張っているのだな。もっとも邪魔をするならこちらも排除することになるがな』

「……本当にネギ坊主は大丈夫と？」

『多少の怪我はするだろうが、それくらいだ』

「なら当日は見張らせてもらうでござるよ」

仮面の人物はそれを聞くと会話は終わりとばかりにネギを追うように街のほうへと駆けていった。

「ふむ、ネギ坊主もなにやら厄介な事になってるでござるな。あの者は只者ではなかったが…。拙者も手合わせ願いたいでござるな」

残った楓はそんな事を行って今日の修行の準備に取り掛かった。

戻ったネギは明日菜とカモに心配かけたことを謝り、再び訪ねてきたマミに事情を説明されてとある決心を胸に休みが明けてエヴァにある物を渡そうと思っていたのだが…。

「え？エヴァンジェリンさんお休みなんですか？」

その日はエヴァが風邪をひいたらしく来ていなかった。

吸血鬼が風邪を？と疑問に思い放課後エヴァ宅へ家庭訪問ということで向かったのだが。

実際に風邪をひいており薬を取りにいく茶々丸の代わりに看病したり、寝言で父親の事を言ったので夢を覗いてしまったり、ばれて一騒ぎあったりと結局渡そうと思っていたもの―果たし状―を渡す事ができずに帰ることになった。

その翌日、やっと果たし状を渡す事ができたネギにエヴァは。

「どうやらやられる決意は固まったようだな？」

「やられません！必ずあなたを倒して授業に出てもらいますよ！」

「授業に出たところで意味は無いんだが…。だが奴との取引もあるからな…」

最後に小声で言ったことは聞き取れず聞き返したが。

「え？」

「なんでもない。そうだな、決戦のときは大停電の日にしよう。それなら人目につく心配は無いからな」

「え、大停電の日ですか？」

「別に問題なかろう」

「先生として見回りの仕事が…」

「そんなものサボれ！」

年に2回ある麻帆良の一斉メンテナンス時に決戦日を設けたエヴァだが、ネギはそのときは教師として見回りの仕事があると言ってごねたがエヴァが問答無用に襲うと言ったので折れるしかなかった。

「でもなんで満月じゃなくて停電の日に？」

「何、前回の襲撃で貴様は例え従者を手に入れても満月を待つ必要が無いくらいの実力だとわかったからな。血は満月になるまでゆっくりと待てば良いのだからな。」

「むぅぅ～～～。次は大丈夫です！」

「フフフ、せいぜい無駄な足掻きを頑張るのだな。それと決戦の場所は麻帆良大橋が良いだろう」

満月前にやる事に疑問を抱いたネギだったが、返って来た言葉に次は大丈夫と言い残して明日菜とマミに当日どうするか相談するために帰っていった。

ネギが帰った後のエヴァ邸でまだ話し声が聞こえてくる。

「それでこれでよかったのか？」

「ああ、ばっちりだよ。彼女も了承したし。学園長から許可も取ってあるからね。」

話し相手である人物―キュゥべえ―はすでに学園側の準備が終了していることをエヴァに伝えた。

「しかし、電力を利用しての結界か…」

「意外なのかい？」

「私の生まれは知ってるだろうが、だからどうしてもな。それよりよくジジイが結界の解除を許可したな？」

中世生まれで魔法に深く関わってきた彼女にはどうにも違和感が出てしまうようだ。それよりも結界の解除などよく許可が下りたなと聞いてみると。

「おりる訳無いよ」

「オイ！」

返って来た言葉に突っ込むと。

「彼がそんな危険冒すわけ無いだろう？僕が言った許可ってのは、ネギ君との戦いで舞台を整えるためにいろいろおこなう為の許可だよ」

「ならどうやって解除する気だ？それにいいのか…」

「茶々丸君に協力してもらうよ。すでに準備は出来てる。それに僕は舞台を整えるために必要な全ての事の許可を取ったんだ。結界の解除もそれの内さ」

「……」

「結界を解除した弊害と言っても、短時間のことだしガミアたちも投入するからね。問題は起こらないさ」

エヴァは自身のことを悪の魔法使いだと自称しているが。こいつの方が遥かに悪党なのではないかと思っていた。

襲撃と果たし状と決戦準備（後書き）

茶々丸襲撃とその後でした！

混沌とした現場にはガンドル君に行ってもらいました。

それと楓とのシーンや看病や覗き見もカット。機会があれば外伝で書こうかと思うけれど、時間あるかな…。
今後も原作とほぼ同じで流れ的にはしょっても良さそうな所ははしょるかも。

マミももう少し出したかったなぁ。しばらくはネギメインとはいえどんどん陰薄くなってるなぁｗ

キュゥべえの方が出番あるな。今回の事件の全ての黒幕だからかな？

次回はやっとエヴァ編クライマックスです！

小ネタコーナー

「う～ん、このケーキおいしいわね。」

「ありがとう、喜んでもらえて嬉しいわ。作ったかいがあるわ」

「え！これマミが作ったの！！」

「ええ。」

どうやら主人公、マミさんと言えば紅茶とケーキだよね！と練習したようだ。

「これからは魔法の事で話し合うことになるでしょうから、定期的にお茶会を開くのも良いかもね。」

その提案に明日菜は。

「お願い！私も相談したい事とかいっぱいあるからさ！」

と、あきらか本音はケーキだろうといった感じがありありの目でそれを了承していた。

決戦！（前書き）

リアルが忙しくて遅くなりました＞＜

今後も忙しいので遅くなりそうです＾＾；

決戦！

エヴァに果たし状を叩きつけたネギは作戦会議をするためにマミの部屋にお邪魔していた。

（ｓｉｄｅネギ）

「おじゃまします」

僕はエヴァンジェリンさんとの決闘の打ち合わせにマミさんの部屋を訪ねてます。これも家庭訪問になるのかな？

「いらっしゃい。明日菜たちもきてますよネギ先生」

「それでどうだったの？」

「はい、日時と場所なんですが…」

僕はエヴァンジェリンさんに言われた決闘に日時をマミさん達に話した。

「大停電の日かぁ。たしかにあの日は外に出る事なんてまず無いからちょうどいいのかな。それで作戦はどうするのよ。マミなにかいい案ない？」

「取れる作戦はそう多くはないわね。向こうが熟練のチームに対してこっちは即席のチームである以上、チーム戦じゃなくて１対１に持ち込むしかないでしょうね」

「そうっすねぇ。連携が取れないのにチーム戦を仕掛けたら1人ずつやられるのがオチッすね。前みたいな作戦はダメなんでしょう？」

ううぅ…、たしかに連携なんか一回もしたことがない僕らがエヴァンジェリンさんとチーム戦なんかしても勝ち目は無いだろうなぁ。

「果たし状を渡して決闘の日時まで決めておいて、不意打ちなんかしたらそこで止めでも刺さない限りその後も復讐戦を仕掛けられるかもしれないわよ？」

「そうっすねぇ…。」

……それに。

「それに僕はちゃんとエヴァンジェリンさんと正面から戦ってみたいんだ」

「例え負ける事になっても？」

「はい」

茶々丸さんを襲撃した後に逃げ出しちゃった先で楓さんに教えられた事……。今まで僕はつまづく事もなく進んできた。けれど、今回エヴァンジェリンさんという「越えられない壁」が立ちふさがったせいで、どうしたらいいかわからなくなってあの時は逃げちゃった。

だから今度こそ正面からエヴァンジェリンさんに挑んで「壁」を乗り越えようとあのときに決意したんだ。例えそれが敗北という結果になっても。

「……そう。なら私と明日菜はネギ先生とエヴァの決闘に邪魔が入らないように頑張らなくちゃね。」

「うう～、大丈夫なの？」

マミさんは納得してくれたけど、明日菜さんは反対なのかな？でも、心配してくれるのは嬉しいな。

「自信はないですけど、きっと勝って見せます！」

「たしかに女・子供を手にかけたって話は聞かないけど、大丈夫なんすか？」

「さすがに目の前で血を吸われるのを黙ってみないわよ。説得して呪いが解けるまで少しずつってことになるようにするわ。」

「学園長は無理なの？」

「学園長も忙しいみたいだからね。それに結界があれば最悪の事態にはならないって言ってたから大丈夫よ。エヴァの事は聞いたんでしょ？」

学園長も大変なんだなぁ。エヴァンジェリンさんの事ってたしか。

「満月にならないと血が吸えないのよね？」

「ええ、だから負けてもすぐに吸い殺されるような事態にはならないって」

「それなら…」

明日菜さんも納得してくれた。僕がもっとしっかりしていたら心配をかける事なんてなかったんだろうな……。

そうだ！エヴァンジェリンさんと戦うなら。

「当日はコレクションの魔法道具を持っていこうと思います！」

「魔法道具？」

「ネギ先生は魔法道具を集めてらっしゃるの？」

「はい、持っているものは……」

僕は趣味で集めているアンティークの魔法道具を決闘のときに持っていこうと提案したけれど。

「ネギ先生。たぶん持っていっても役に立たないと思いますよ」

「ええ！」

そんな……。良い案だと思ったのに。

「魔法銃などは使いやすいかもしれませんけれど」

それなら持っていってもいいんじゃないかな？

「ネギ先生はそれを自由自在に操れるんですか？」

「むぅ～、扱う事くらいできますよ！」

子供だからって馬鹿にしないでください！ウェールズでは狩りは得意だったんですよ。

「いえ、そうではなくて……。ネギ先生は銃がでてくる映画や漫画って見た事あります？」

「西部劇とかですか？」

「ゴ○ゴとか？」

かっこいいですよね！でも、明日菜さんゴ○ゴってなんです？

「ええそんな感じのです。ネギ先生はあれで出てくるガンマン達みたいな事って出来ます？それと明日菜、ゴル○くらい出来るならネギ先生だけでどうにかなっちゃうわよ」

「それもそうね」

あれに出てくる人たちみたい？……無理ですよ！それにその○ルゴってどんな人なんですか！エヴァンジェリンさんに勝っちゃうくらいって。

「無理ですよ！できたらいいなぁって思いますけど」

「でも、エヴァンジェリンさんと戦うとなるとそれくらい必要になるかもしれませんよ」

ううぅ……、たしかにエヴァンジェリンさんがおとなしく当たっ

てくれるわけないから、あれぐらいできないといけないのかなぁ。

「そうなると魔法薬も無理かなぁ」

「慣れないもので挑むより、自分が得意な事で全力を出したほうがいいですよ。それにその杖だってかなりいい品物のようですし」

そっかぁ。よし、いつもどおりで全力でいこう！

「そういえばいつもあんたが持ってるその杖ってなんなの？どう見てもあんたには大きすぎるし」

「これは小さい頃にお父さんからもらった自慢の杖なんです」

「そうなんだ」

あのときの事は今でも忘れられない……。うん、あの時に見たお父さんを目指すならこんなところでつまずくわけにはいかないんだ！

でもマミさんってマミお姉ちゃんに本当によく似てるなぁ。あれから5年もたってるし何より日本で中学生をしてるわけがないけれど。

（ｓｉｄｅエヴァ一味）

決戦の日である麻帆良の大停電の日は街のあちこちでは電池やロウソクのセールがおこなわれていた。

そんな街の騒ぎを尻目にエヴァ達は多くのＰＣが置いてある部屋にいた。

「マスター、ウイルスの設定完了しました。これでメインの結界システムが停止すればサブと共に１時間の間は結界が完全に機能を停止します」

「よくやった。しかし、案外簡単なものだな」

「それだけ彼女が優秀ってことさ。それにシステム切り換えの一瞬の隙をつくものだから、そう何度も使えるものでのじゃないよ」

「まぁいい。これで今夜は坊やが相手とはいえ楽しめるな。どうせなら貴様の主と戦いたかったのだがな」

久しぶりに魔力が戻る事に上機嫌のエヴァはキュゥべえにマミとの対戦を希望したが。

「それは契約違反だよ。君の役割は彼の壁なんだからね」

「ソウダゼ、ゴ主人。今回ハ俺ガ相手ダゼ。横取リスンジャネェヨ」

だがそれにキュゥべえは契約違反と己の従者は獲物を横取りするなとそれぞれ非難の声をあげた。

「わかっている、全くわがままなやつらだ」

「ドッチガダヨ」

「うるさい！それとお前も大丈夫だろうな」

従者との言い合いをやめ側で控えていた人物に問いかけた。

「もちろんだ、私は明日菜君だったな」

「そうだよ。彼たっての頼みだ」

「なら、彼が満足できるように頑張ろう」

それにその人物―弓弦之助―は自信たっぷりに返事を返した。

そしてついに決戦の時間になり街は闇に包まれていた。

（ｓｉｄｅネギ）

「わぁ、話しに聞いていましたけど。本当に真っ暗ですね」

ウェールズの村も夜は暗かったけれど、本当に街の光がなくなっちゃったよ。

「まさか、大停電の日に外に、それも魔法使いの決闘に参加する事になるなんて……。でもエヴァンジェリンさん来ないわね？」

そういえばぜんぜん姿が見えませんね？それにさっきから感じるこの気配は？

「そうね。……あ、来たみたいよ」

「え？どこどこ？？」

真っ暗で何にも見えませんね。

「はぁはははは！悪とは遅れてやってくるものなのだよ！」

声のしたほうを慌てて振り向くとそこには……。

「誰ですか？」

「だれ？」

すごい衣装を着た女の人と茶々丸さんと仮面の男がいた。茶々丸さんはなんで人形を頭に乗せてるんだろう？

あ、女の人がこけた。

「私だ私！」

ボン！

そういって煙が晴れた先にいたのは。

「「エヴァンジェリンさん！」」

そういえばカモ君に見せてもらったエヴァンジェリンさんの手配書にさっきの姿で写っていたような？

「なになに、エヴァンジェリンさん。さっきのなんなの」

「たぶん変身魔法じゃないでしょうか？」

「へぇ～、まさに魔法って感じね」

「えぇい！和むな！それと巴マミは笑うな！！」

あ、マミさんうつむいて笑ってた。マミさんはわかっていたのかな？

「くそ、せっかく悪の魔法使いらしく決めようとしたのに台無しじゃないか！」

「そんな事にこだわらなくても……」

「私が納得いかんだ！それに神楽坂明日菜。お前は物語のクライマックスに出てくる魔王の城が掘っ立て小屋で嬉しいのか？悪には悪の義務ってモノがあるのだ！」

「たしかにそれは嫌だけど……」

たしかにワクワクが台無しだけど、いま関係あるのかなぁ。

「まぁいい、よく逃げずに来たな。それは褒めてやろう。だが今宵、勝つのは私たちだ。そしてそのあかつきには私の目的は達成される！」

「まだ続けるの？それより後ろにいるやつもいい加減顔を見せなさいよ！」

あ、明日菜さん！ああ、エヴァンジェリンさんがまた怒りの顔にーーー！でも、仮面の人の事も気になるしなぁ。

「……まぁ、いい。お前もそろそろ正体を教えてやれ」

「それもそうだな」

あれ？仮面の人の声が前に聞いたものと違うような？それになにかよく聞いている気がするぞ？？

「あれ？この声どこかで聞いたことがあるような？」

「明日菜さんもですか？僕もどこかで聞いたことがあるような気が」

「そうね、毎日聞いている感じがする声よね。」

「ふふふふふ、ならばとくと見よ！」

男が仮面とローブに手をかけて脱ぎ捨てた！

って、えええぇ！

「「ゆ、弓先生！」」

「ふふふ、やぁネギ君。夕方以来だね」

「え！？何で弓先生が！」

はっ！もしかして！！

「エヴァンジェリンさん酷いですよ！弓先生を操って人質にしようなんて！！本物の仮面の男を出してください！」

たしか吸血鬼には噛んだ人を眷族にして操る能力があったはず。きっとそれを使って！

「なんですって！エヴァンジェリンさん卑怯よ！」

「フフフ」

「ちょっとなに笑ってるのよ！」

「なに、貴様らが誤解してるからだよ。弓は操られてはいないし、あの時の仮面の人物もこいつだ。おい、そろそろ本当の姿になれ」

え？操られていない？？それに本当の姿っていったい…

「そうだよネギ君。それに…」

弓先生は仮面を拾い顔の前に持ってくると。

『あの時の声とはこれだろう？』

！この声だ！！じゃあ本当に！？

『さぁ、目を見開いてよく見るのだな！！』

そう言うと弓先生は。

『あるときはネギ・スプリングフィールドを襲う仮面の男！』

え？あ、仮面を投げ捨てた…。

「あるときは中等部教員、弓弦之助！しかしてその実体は……！」

え、え？なにこれ？？って、今度はスーツを掴んで、もう片方の手は首辺りに？？

「なにこれ！？アレってよくドラマとかで覆面をとる時のやつ？？」

「あ、それですか！」

なるほど確かにそうだ。って、そうじゃない！いよいよ正体がわかるぞ！

「「最強の機械獣！あしゅら男爵だ！！」」

「「え？……ええええぇぇぇーーーーー！」」

スーツと覆面を脱ぎ捨ててそこに立っていたのは左右で別々の顔を持った人だった！

「どういうことよ！弓先生が仮面の男で、それで弓先生は左右で顔が？？」

「あ、明日菜さん。お、落ち着いてください。き、きっとあの人が僕たちを混乱させるために弓先生に変装してたんですよ！」

そうに決まってますよ！

「そ、そうよね。弓先生があんな化け物のわけないわよね」

「そうですよ！」

そう僕と明日菜さんは自分達を納得させたが。

「「残念ながら私が弓弦之助、本人だ。なんなら貴様たちの成績などをここで読み上げてやろうか？」」

それは無残にも否定されてしまった。確かにエヴァンジェリンさんが知ってるはずがない情報だけど……。

でも、成績を読み上げるのは卑怯だと思いますよ。明日菜さんなんて完全にパニックになってますよ。

「そ、そんな弓先生もエヴァンジェリンさんの一味だったなんて」

なんとか落ち着いた僕たちはあまりにも衝撃的な事実に打ちのめされていた。

「やっと、話が進められるな。そうだ！貴様が来ると知ったときからこいつを学園にもぐりこませていたのだ！」

そんなに前から！

「そして今夜、大停電の一瞬の隙を突いて学園結界を停止させる事に成功した！！」

弓先生のことで忘れていたけれどさっきから感じていた力って！

「ボウヤにもわかるだろう？私から感じられる力が」

「どうなのネギ？」

「は、はい。前の夜とは比べ物にならない力がエヴァンジェリンさんから感じられます」

「これはまずいわね……」

「そんな！」

勝てるんだろうか……。

「どうした怖気づいたか？まぁ、最強の魔法使いたる私が復活したのだ。それが当然の反応だな。この力とお前の血があれば確実に呪いを解呪できるだろう」

想定外の事態に僕が黙っていると、エヴァンジェリンさんはさらに。

「我が配下になるならば、命だけでも助けてやろうか？」

「な！なに言ってんのよ。エヴァンジェリンさん！」

その言葉に明日菜さんは即座に反発の声をあげた。

それに僕だって……。

「お断りします！確かに状況は絶望的かもしれませんが、必ず勝って見せます！！」

もう逃げないとあの時に誓ったんだ。

「ふふ、あの時の情けない顔よりはましになったな」

「あの時とは違いますよ！」

「ならそれを見せてもらうか。あしゅら、お前は神楽坂の相手をしてやれ。茶々丸とチャチャゼロはマミだ」

「「了解した」」

「了解しました、マスター」

「ヤットカゴ主人、待チクタビレタゼ」

「え！人形が喋った！じゃなくて私はあいつなの！？」

分断する手間が省けたけれど。明日菜さん大丈夫かな……。

「頑張って明日菜。私も茶々丸さんたちを倒したら駆けつけるけれど、これからこっちに係わるなら明日菜も覚悟を決めたほうがいいわよ」

「ケケ、ソウ簡単ニイクカナ？」

「「逃げるなら今のうちだぞ？」」

「わ、わかったわよ！こんなところで私だって逃げ出したりしないわよ！」

「話し合いは終わったか？ならば開幕といこう！『氷爆』！！」

エヴァンジェリンさんの放った魔法が、僕たちの目の前に着弾し、それを合図に決闘は開始された。

（ｓｉｄｅ近衛門）

学園長室

同時刻、今夜の決闘の主催者の一人である近衛門はエヴァ一味がおこなった学園結界の停止による各魔法先生の対応に追われていた。

「その事については大丈夫じゃ。マミ君もついておる、何があっても彼らは君たちが駆けつけるまで無事じゃ。じゃからまずは結界消失によって妖怪が都市内に侵入しないように今は防衛に専念してくれ」

予定にない結界の消失、限定的とはいえ復活した『闇の福音』。突如発生した緊急事態に魔法使い達は主催者の一人であり、自分たちの統括者である近衛門に次々に連絡を入れてきたのだ。

そのため先ほどから彼は同じ言葉を何人もの人物に言っている。

一通り裏関係者に事情の説明が終わった彼は、結界復旧について学園のシステムを担当している明石教授と話し合っている。

「赤石君か。システムのほうはどうじゃ？」

＜停止しているのは力のある魔に属するモノを封じる物だけですから、都市内部で妖怪が大量発生するようなことはありません。しかし、あと1時間は結界の復旧の見込みはありません＞

「そうか、わかった。君たちは引き続き結界の復旧に努めてくれ」

そう、彼に言葉をかけ通信を切った彼は虚空をにらみ。

「ワシは結界の停止なんぞ許可してないはずじゃが？」

彼がにらんだ先。そこに白い毛並みを持った小動物―キュゥべえ―がいた。

「ちゃんと許可は取ったよ」

「ワシが与えた許可は“決闘の舞台を整える”事じゃ。これと結界の停止がどう関係するのじゃ」

「それともう一つ“ネギ君が成長できるよう全力を尽くす”事も約束したよ。だから僕は封印されていないエヴァンジェリンを敵役に持ってきたんだよ。結界解除だって限定的だから、十分舞台を整えただけの範囲さ」

―事実、警備状況に問題は発生していないだろう―と結界の解除の理由を説明した彼に。

「やりすぎではないのかの。それとこの事をどう皆にどう説明するのだ」

「もちろんネギ君のために学園が用意できる最高の敵を用意するためと言うさ」

最初の襲撃から少しばかりやり過ぎではと思っていた近衛門は、どう責任を取るつもりだと質問したが。キュゥべえは悪びれる様子もなく全てはネギのためと言い切った。

「それで皆が納得するかの？」

「させるさ。じゃあ、僕は彼らの様子を見に行くよ」

それを最後に彼はまた姿を消した。おそらく言ったとおり、自身が演出した舞台の最終章を見に行ったのだろう。

「ふう、なんとも厄介な者じゃ。たしかにエヴァとの戦いはネギ君にとってよい経験となるじゃろうが……」

確かにキュゥべえの整えた舞台は、学園で考えられる最高の修業のための劇だろうが。あまりにも人の感情や気持ちといったものを横において結果だけを求めたものだ。

後日、何らかのフォローをしなければエヴァに対しての風当たりは、前よりも酷くなってしまうかもしれない。

「もしや、そうなってもエヴァなら今更と考えてはいないじゃろうな……」

確かにエヴァはかつては賞金首だったが……。

「いや、考えすぎじゃな。とにかく全てが終わったらマミ君にも、彼をもう少し何とかするように言っておかねばの」

今後の対応に頭を痛めたが、彼もまたネギとエヴァの戦いを観戦するために遠見の魔法を使った。

（ｓｉｄｅ明日菜＆あしゅら）

もう、なんなのよこいつ！蹴ってやろうにも全然当たんないじゃない！

「「どうした、そんなヘナチョコな攻撃では私を倒せんぞ」」

そんなこと言っても古ちゃんみたいに格闘技なんかしてないんだから仕方ないでしょう！

「こちらからもいくぞ！」

「きゃあ！」

ドゴォ！

いきなり突っ込んできたから、とっさに避けたけど。すごい音がして恐る恐る目を開いたら……

「ちょ！」

そこには橋の鉄骨をパンチでへこませているあいつの姿が目に入った。

「あぶな！当たったらどうするのよ！」

骨が折れるだけじゃすまないでしょ！

「ならばせいぜい避ける事だな。もっとも…」

なによ、もったいぶっちゃって。言いたい事があるならはっきりいなさいよ！

「「これからあの小僧に係わるなら、これくらいで驚いて入られぬ

ぞ！」」

また来た！

でも確かにそうかもしれないけど……、ほっとけないのよね。って、そんなこと考えてないで避けないと！

（ｓｉｄｅマミ&茶々丸、チャチャゼロ）

戦ってると言うか過激な鬼ごっこのようにも見える明日菜たちと違って、こちらはいたって普通のそれでいて激しい戦いが繰り広げられていた。

「アノ餓鬼共ガ相手ダッテ聞イタトキハ、サボロウト思ッタガオ前モ参加スルッテ聞イテ来テヤッタゼ！」

チャチャゼロは自身の身の丈よりも巨大な剣を飛翔しながら縦横無尽にふるいながら今回の茶番に自身が出向いたわけをマミに語った。

「それは！期待に！答えないとね！」

一方のマミは銃口下部を銃剣状に変化させたマスケットをさながら二刀流のようにふるいチャチャゼロを迎撃していた。

マジンガーブレードを失いその代わりを考えていた彼女はマスケット召喚の魔法が材質や形状も変化できる事から、ガンブレードのような大型銃剣付きの超合金Z製の銃を呼び出す事を思いついたのだ。

もっとも、あくまでもマスケット銃を召喚する魔法のため、弾が入ってないと急速に崩壊してしまうので振るっているときに常に暴発の危険が付きまとっている。

事実、最初思いついたときに見事に暴発してしまい、役目を終えて急速に崩壊する銃身でチャチャゼロの攻撃を防御したせいで折れた銃身とチャチャゼロの剣が顔面にぶつかったり、終わった後にエヴァに叱られたりと散々な目にもあっている。

今ではさすがにほとんど無くなったが、敵の攻撃を防御していて暴発する危険は常にある。味方には迷惑極まりない使用法だったりする。

それはおいておいて、最後に茶々丸は対物ライフルとグレネードランチャーでもってを牽制していた。

「姉さん、マミさんに目立った損害は見受けられません。このまま続けるのですか？」

いったん引いてきたチャチャゼロに作戦を変更するか聞いたが。

「相変ワラズ硬ェナ。妹ヨ、ソレシカ残念ナガラ手ガネェヨ。ゴ主人モイレバ、マタ違ウダロウガ俺達ダトドウヤッテモ、アノ装甲ハ突破デキネェヨ。」

しかし、茶々丸が来る前から何度もマミと戦っているチャチャゼロは自分達だけではマミを削りきる事は難しい―不可能といってもいい―事を知っているのでこのままいくしかないと返した。

技量ならばエヴァと長年共に戦ってきたチャチャゼロのほうが圧倒的に高いが……。火力が全く足りていなかった。

チャチャゼロも茶々丸は両者ともエヴァから魔力供給を受けて各能力が上がっているがチャチャゼロは人形ゆえのパワー不足、茶々丸もまた遠距離攻撃は魔法ではなく通常の兵器による攻撃のため超合金ニューZと同等の防御力を誇るマミの装甲を突破できないでいた。

チャチャゼロは何回か切り裂く事に成功したが―代償としてそのときに振るっていた剣が折れてしまったが―ソウル・ジェムによる超回復によって瞬く間に修復されてしまった。

マミを倒す場合は紅き翼の面々やエヴァが、大火力を次々に叩き込み魔力を消費させて回復力を鈍らせるか回復が追いつかないくらいの破壊を与える必要があった。

ラカンをも超える圧倒的タフネスと人間どころかドラゴンでさえ致死の攻撃力が彼女の武器だった。

もっとも、戦闘は一方的ではなくマミもまたチャチャゼロを捕ら

え切れていなかった。

体格の差とまともに当てるわけにはいかない事もあるが、マミ自身がチャチャゼロの動きについていけてないのだ。マミが1回銃を振るう間に3回はチャチャゼロの斬激を受けており、茶々丸の援護射撃で何度も体勢を崩している。

しかし、2人がマミの防御を突破できないのと同じく、マミもまた彼女たちに攻撃を当てる事ができないでいた。

元々が一般人であった事と学園に来るまでは身体能力頼みに近い力押しだった事、何より彼女の格闘の才能は一般人のそれと同じくらいだとエヴァが言い渡してもいた。

圧倒的な火力と防御力ゆえに相手に近づいて攻撃をあてればいいため、剣闘士時代も紅き翼と合流後も、とにかく近づく事と必中距離に留まるような戦法を組んでいた。

闇の帝王との戦闘後にそれではダメだと、格闘技をエヴァに頼み込んで教えてもらっていたが、別荘内の時間でも10年に満たないため前よりはましになった程度しか向上していない。

剣闘士時代にとったトリッキーな攻撃はチャチャゼロ相手にはきかず、地形を変えるような事も場所が場所ゆえ出来ない。

そのため現在のような状況では、相手の技量が上だとどうしても苦戦してしまう。

火力こそマミを攻めきるには足りないがマミを茶々丸に近づかせない事、マミの体勢を崩せる箇所に的確に攻撃できる事、そして完

壁といってもいい連携で2人は傍目には優勢と見えるほどの攻勢をかけていた。

そして戦況は互いに攻め手に欠けていて千日手の状態だった。

チャチャゼロは斬れない事が多少不満だが15年ぶりの全力戦闘を楽しんでいて。茶々丸はマミがちょっかいを出さないようにしろと言われているので現在の状況で問題は無く、マミもいつもの修業の延長と考えているのでなおの事、戦況が動く可能性は少なかった。

（sideネギ&エヴァ）

2組の戦況は膠着しており勝負が決するならこの2人の勝敗次第だろう。

そもそも今回の事はネギの修行のいっかんなので、これこそがメインであり他はおまけと言ってもいいだろう。

「喰らえ！魔法の射手・氷の11矢！」

「くう！魔法の射手・連弾・雷の11矢！」

何とか相殺できた！

「ハハ！詠唱に時間がかかりすぎじゃないか？いつまで追ってこれるかな！」

もう次の詠唱の準備に入ってる！

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　闇の精霊２９柱！」

ええ！２９人！って、驚いてる暇なんてない！！

「ラ、ラス・テル・ラ・スキル・マギステル　光の精霊２９柱！」

「魔法の射手・連弾・闇の２９矢！」

間に合え！

「魔法の射手・連弾・光の２９矢！」

ドドドドドン！

「くぅ……」

「ハハハ、よくついて来れたな！それ次だ！闇の精霊…！」

「まだまだ！光の…！」

本当に強い！お父さんはそれをあんな簡単に……！

僕だって！

「フフフ、まさか最後までついてくるとはな。だが、もう限界か？」

「ま、まだいけます！」

はぁはぁはぁ、何とかついて来れたけれどもう魔力だって少ない。
それにエヴァンジェリンさんは少しずつ詠唱の速度を上げている？
これ以上早くなったら……。

「フフ、最初はどうかと思ったがなかなか……」

今のうちに息だけでも整えないと。

「もう少し楽しみたかったが、そろそろ時間だ」

こうなったら相殺できなくても、今の僕が出せる全力の一撃を打ち込もう！

「ラス・テル・マ・スキル・マギステル　来たれ雷精　風の精！！」

「リク・ラク・ラ・ラック・ライラック　来たれ氷精　闇の精！！」

「え！」

「フフ」

え！この詠唱は同じ系統の魔法！？エヴァンジェリンさんならもっと強いモノだってあるはずなのに？

「雷を纏いて吹きすさべ　南洋の嵐！」

「闇を従え吹雪け　常夜の氷雪！さぁ、来るがいいボウヤ！力比べといこうじゃないか！！」

力比べ！だから同種の魔法を！

「雷の暴風！！」

「闇の吹雪！！」

ぐう！す、すごい力だ…。このままじゃ。

「どうしたその程度か？お前の父親はこんなものじゃなかったぞ！そんなんじゃ、いつまでたってもあいつを見つけることなぞできんな！！」

その言葉を聞いた僕は。

「く、う…、うわぁぁぁぁぁ！」

ただ無我夢中で全ての力を杖にこめていた。エヴァンジェリンさんにとどけと、そしてお父さんに少しでも……。

「なに！」

ドゴォォォォォン！！

「はぁはぁはぁはぁはぁはぁ」

「ネギ！」

明日菜さん？そうだ！エヴァンジェリンさんは！

「フフ、フフフフフ。やりおったな、さすがはやつの息子か。最後の最後でこちらの予想を上回る」

いた！って！

「あ、あわわわ」

あれを喰らって無事なのはホッとしたけれど服が破れてすごいことに！

「だがその様子だと勝負はついたな」

「うう……」

言い返したいけど、もう魔力はぜんぜん残ってない…。

「ネギ！エヴァンジェリンさんネギに何しようっての！」

「決まっている、私が勝ったのだからボウヤの血を、な」

「そんなの許さないわよ！ネギ逃げて！！」

「「コラ暴れるな！」」

「きゃ！」

「僕の血はあげますから、明日菜さんに乱暴しないでください！」

負けたら血を吸う約束だけど、明日菜さんは本来は関係ないんだ！

「フフ、ではさっそく。」

エヴァンジェリンさんが血を吸おうと近寄ってくる。

「うう…」

「はい、ストップ！エヴァ、もう終わったんだからあんまり怖がらせないで」

「何だつまらん。これから恐怖に震えるボウヤの血で勝利を祝おうというのに」

え？マミさん？？

「それが報酬？」

「それもあるが…そうだな血は明日にアノ情報と一緒に味わうほうがいいか」

「情報？」

「ああ、取って置きのな。お前も驚くぞ」

え?報酬?情報?え、何が起こってるの!?

「ちょっとマミ!なに和んでるのよ!ネギを助けて!」

「ん~、今話してもいいけれどもう遅いしね。それとあしゅら、もう放してあげて」

「わかりましたマミ様」

え?マミ様?エヴァンジェリンさんと話してることも気になるけど、何であの人がマミさんを様って??

「とりあえず学園長のところに行きましょうか」

「そうだな。最低限のことを話さないと後で聞きに来そうだ」

まだ事態を把握してないけれど、みんなが移動し始めたので僕と明日菜さんは慌てて後を追った。

それで僕達は学園長先生のところに来たんだけど。

「ふぉふぉふぉ、ネギ君、明日菜君。試練ご苦労じゃった」

「どういうことですか学園長！試練って！」

「そうですよ！僕はエヴァンジェリンさんに襲われて！」

僕は『悪い魔法使い』のエヴァンジェリンさんに襲われて、勝つために…。

「ごめんねネギ君、明日菜君。あれは全部、僕らがエヴァにお願いしてやってもらったことなんだよ」

え？

「最初はどうかと思ったが、なかなか楽しめたぞ」

え？え？

「なにかキュゥべえが迷惑かけちゃったみたいね。今度、埋め合わせするわ。」

「マミさんもですか？」

「マミもなの？」

「と言うより、今回のことを主催したのはマミかな」

わぁ！って、君は！

「「キュゥべえ」」

「旦那！」

「僕の主はマミだからね。そして僕は彼女に頼まれてエヴァンジェリンに君の襲撃を交渉したんだ」

「「「えぇーーーーー！」」」

「落ち着いたかの？」

「は、はい」

「……はい」

うう、本当にあれは全部学園長たちが僕に魔法使いとしての修行でやったことだったんだ…。

「さて、ネギ君。今回はわしらが用意した試練じゃったが、ネギ君が立派な魔法使いを目指すならば今後も何回も同じような困難な試練が待ち受けていよう」

「明日菜君も覚えておいて欲しい。僕たちの周りではこんな危険がいっぱいあることを」

「まぁ、私くらいの障害はそうそうないがな」

「でも、今後もネギ君と一緒に魔法に係わるなら覚えていて。こっ

ちも決して安全な世界じゃないことを」

「それでもネギ君を心配して付いて行くならば、ワシらも手助けしよう」

「私は断るぞ！」

「ちょっとエヴァ、いいところなんだから」

そうか、それを知らせるために今回の事をしたんだ……。

「さて、夜も遅い。今日はこれまでとしよう。ネギ君にはまた試練を課すことになると思うが、日々努力して立派な魔法使いを目指してくれ」

「はい！」

「ボウヤついでにバカレッド！」

「バカレッドって言わないで！」

「うるさい！明日私に家に来い、そのときにやつについての取って置きの情報を教えてやろう」

え！お父さんの！

「でも、僕負けちゃったし…」

「なに、勝利と待ちに待った情報だ。うまい飲み物が欲しいだろう？」

え……、それって。

「それって……」

嫌な予感がして恐る恐る聞いたら。

「もちろん貴様の血で乾杯といくわけだ！ジジイもタカミチも納得済みだ。これは正当な報酬なのだからな」

「う、うむ」

「ごめんネギ君……」

えぇーーー！そんなぁ！

「エヴァ」

そうだまだマミさんが！

「吸い過ぎないでよ」

「わかっている！お前も覚悟していろよ」

そんなぁーー！

「ちょっとマミ！それでいいの！？」

明日菜さん！お願いします！貴女が最後の希望です！！

「そうは言ってもこれは正当な報酬だからね」

「だからって！それになんであんたが話すのよ！」

キュゥべえが？……終わった。

明日菜さんも論破されてしまい、僕の運命は決まってしまった。

お父さんの事を聞きたいけど行くのが怖い……。

決戦！（後書き）

エヴァ編戦闘終了！あいも変わらず少ないですけど……
マミの戦闘力説明のほうが長いし……。

あしゅらのアレは永井作品つながりって事でｗちょうど変装していたし

エヴァ編は次で最後です！その次は修学旅行編、キス騒ぎどうしようかな？

小ネタコーナー

NGシーン

「しかしてその実体は……！」

弓が変装をとくためにマスクとスーツに手をかけ脱ぎ捨てた！

「「マミ様、最高の配下！あしゅら男爵だ！！」」

「マミ様？」

「……マミどういうこと？」

思わず口走ってしまった事実にネギと明日菜はマミへと疑問のまなざしを送った。

「あしゅら？」

あきらかに怒っている主を見たあしゅらは。

「申し訳ありませぬ！マミ様ぁ！！」

それは見事な土下座をして謝り倒したとか。そしてそれはまるで何度もして慣れていると思えるほど見事だったとか。

ナギの情報と呪い

あの戦いから一夜明けて。

（ｓｉｄｅネギ）

僕は今、エヴァンジェリンさんの自宅にお父さんの事を聞くためにきています。

……それと、血を吸われるために。なかなか部屋を出ようとしなかった僕を弓さんが抱えてつれてきました。

エヴァンジェリンさんの事がもう大丈夫になった事と弓さん（あしゅらさん？）も魔法関係者とわかったので、僕は職員寮にもどってます。

明日菜さんと木乃香さんの部屋にいた時間は数日でしたけど、元の部屋に帰るときはちょっとさびしかったな。

別に弓さんと一緒が嫌ってわけじゃないんだけれど……、未だに信じられないと言うか。

昨日もあの後。

「「さぁ、ネギ帰るぞ」」

明日の運命が決まり落ち込んでいた僕にあしゅらさんが声をかけてきた。

「え？」

何でこの人が帰るって言うんだろう？

「何をとぼけた顔をしている」「我らは同室ではないか」

『同室』その言葉の意味が最初は理解できなかったけれど、そういえば……

「本当に弓先生なんですか？」

「「当たり前だろう。さあ行くぞ！」」

そういって彼は僕を抱え出口へと向かっていった。

「「これでやっと部屋の中まで変装をし続ける必要がなくなったな。そうだネギ、記念に一緒にフロに入るか！」」

え！？お風呂！！未だに苦手なのにこの人と一緒に！！それにもしかしなくても、これから部屋に帰ったらずっとこの状態なの！！

「明日菜さーん！助けてくださーーい！」

いろんなことに耐えられる自信がありませーーん！

「え～と、頑張んなさい？」

何で疑問系で応援なんですか～。

結局、抵抗むなしく連れて行かれちゃった。悪い人じゃないんだけどやっぱりあの顔はすごく気になるって言うか。

え？なんですか明日菜さん。お風呂はどうだった？

……ガクガクガクガクガクガクガク

ネギが少し話せない状態になってしまったので視点を変更してエヴァに

（ｓｉｄｅエヴァ）

ボウヤはいきなりどうしたのだ？震えだして。

私は何もやってはいないし、そうなると……。神楽坂の質問か。確かにやつの下半身がどうなっているのか気にはなるが、ボウヤには刺激が強すぎたんだろうな。

とは言ってもこれでは話が進められんな。

「茶々丸」

「了解しました、マスター」

私の命を受けボウヤに近づいた茶々丸がやつの頭を持ち。

「茶々丸さん？」

神楽坂のまなざしを無視して一気にボウヤの頭を回した。

グキ！

「ぴ！」

「きゃーーー！ネギ！！ちょっと、いきなり何すんのよ！って、口から何かでてる！！」

「うるさい。おい、起こしてやれ」

「はい」

再び頭を掴んだ茶々丸がさっきとは逆方向、元の位置に戻すと。

「あ、あれ？僕はいったい？」

「ネギ！大丈夫なの！？」

「明日菜さん？はい大丈夫ですけど？」

よしよし、正気に戻ったなうまく記憶も飛んでるようだ。これで

やっと……。

「これで話す事ができるかな？」

「エヴァ、乱暴すぎない？」

ふふふ、あの茶番劇をしてでも手に入れたかった情報。やつの生存情報がついに！

「フフフフフ！さあ、話してもらうぞ！それとボウヤこっちに来い！飲み物が無くては話しにならんだろう」

「ううぅ……。お父さんの事を聞けるのは嬉しいけれど、やっぱり怖いな」

献血程度に血で聞けるんだ。感謝されても文句を言われる筋合いは無いぞ！

「ただで教えてあげてもいいじゃない！相手は子供なのよ！」

「ふん。血を吸われるのが怖いなら帰るのだな。生憎、これは私が今回の報酬として受け取るものなのだ。ナギの事にしたって本来なら貴様らが聞けるものじゃない」

「マミも何か言ってよ！」

「キュゥべえが何を話すかは知らないけれど、それを教えるかどうかはエヴァしだいだからね。私が何かいってもエヴァが納得しなかったら意味は無いわよ」

「でも！」

本当にうるさいなこいつは、つまみ出してやろうか。

「大丈夫です明日菜さん。エヴァンジェリンさんは僕を殺すつもりは無いんですから、血を少し渡すだけでお父さんの事が聞けるならむしろありがたいです」

「ネギ……」

「さて、やっと準備もできたな。それじゃあ、キュゥべえ貴様の言う取って置きの情報とはやはり？」

「ああ、君たちが求めてやまない情報。ナギ・スプリングフィールドの生存情報さ」

「ええ！？」

「しかし、それだけでは確たる証拠とはいえんぞ？」

「何処にいるかまではわからないけれど、生きている事は確実だよ。5年前に彼をとある地方で確認した。証言者もいるよ、そうだよねネギ？」

ん？何故ボウヤが？

「じゃあ、やっぱりあの時の人は！」

「ああ、彼が君の父親のナギ・スプリングフィールドだよ。その杖だって彼のものだからね」

なん…だと……。

「じゃあ…本当に……？」

「ああ、詳しい場所は不明だけれど生きている事は確実だよ」

……。

「本当……だったんだ。夢じゃな、かったんだ……」

「よかったわね、ネギ」

ボウヤとバカレッドは感動しているが私は……！

「マミ！ちょっと来い！！」

「エ、エヴァ？？」

困惑するやつを無理やり引っ張って私達は別荘へと向かった。

「どういうことだ！！」

「え？」

「まだとぼけるきか！！貴様あの事を知っていたんだろう！！」

「ええ。現場にいたからね。」

「やっぱりか！じゃあ、私はお前たちにまんまと騙されていたわけか。『闇の福音』も落ちたものだな……」

「？？話が見えないのだけれど？」

「……いい加減にしろ。騙されたほうが悪いから納得はするが、まだとぼけるなら……」

「だから待って！いったいどんな条件でキュゥべえと話をつけたの？」

ん？これは本当に知らないのか。

「奴と交わした条件は……」

どうも話さないとらちがあかないようだから話すか……。

「彼らしいというか、なんと言うか……」

結論を言うとナギの事はマミに聞けばすぐにわかったようだ。奴が言ったことは真実であるが、こちらが動揺していた事と嘘ではないが事実とも違う話によってのものの見事に騙されていたのか。

「確かに嘘は言ってないわね。私と彼は感覚を共有しているわけじゃないから、彼じゃないと知らない事もあるだろうけれど」

だが今回の事は両方が知っていた事だったんだな……。

「私が言わなかった事にしても、そもそもエヴァが私にナギの事を聞いてきたことも無いわよね。呪いの事もナギにかけられたってくらいしか聞いてないような……」

これは私のせいだろうな。ナギの死亡は今更聞く必要はないと聞いていなかったことがあだになったのか。

そういえば呪いもそうだったな……。コミュニケーションが大切だと今ほど思った事は無いぞ！

「わかった、疑って悪かったな」

「いえ、元はといえば私が彼をしっかり監督してなかったのが原因だし」

「うむ、だから…」

これくらいしても文句は無いな？

ブン！

「きゃあ！ちょっと、いきなりね」

「憂さ晴らしくらいは付き合ってもらうぞ！」

その後は別荘から出られる２４時間が経過するまでマミに、このむしゃくしゃをぶつけ続けた。

くそーーーー！

もっともエヴァのあずかり知らぬ事だが、エヴァがキュゥべえにだまされた責任はマミにもあったりする

原作知識で呪いの事をそれなりに知っていたので、マミの方からもエヴァにナギ関連で何かを聞くといったことも少なく互いに情報を交換したつもりでいたのだ。

しかし、実際は全く情報を交換しておらず、知ったつもりだった情報も穴だらけだったわけだ。

マミも最初はナギの事を話そうか悩んでいたが、日々の修行で多忙だった事と実際に得た知識と原作知識を混同してしまったため今回の事態を招いたといってもいい。

なので別荘を出た2人はナギの事は生存していると情報交換をしたので、次はエヴァの呪いをと、1時間もいなくなっていた2人に不思議がっているネギと明日菜も引っ張っていって学園長の所に強襲をかけていた。

（ｓｉｄｅマミ）

「な、なんじゃいったい！」

「なに、思えば呪いの事はやつがかけたせいで解けない、といった事以外はあまり知らなかったのでな。先ほど情報の交換の大切さを知ったばかりでな。呪いの事も私たちでしっかりと情報を共有しておこうと思ったわけだ。」

だからって何もドアを蹴破らなくても……。言わなかった私も悪いけれど。

でも、私も原作で書かれてる事以外は知らないわね。

「実際にどんな呪いなんですか？１５年も卒業させず、学園都市から出る事も許さないなんてちょっと妙な気もしますよ」

『登校地獄』だっけ？名前から不真面目な生徒を学校に通わせるものみたいだけれど。いくらなんでもおかしいような。

「まさか、お前たちで呪いを上書きしているんじゃないだろうな？」

「ひょ！そんな事はしとらんぞい。むしろ緩和したんじゃよ」

「じゃあ、何でいつまでも中学生なんだ！」

「ちょっとエヴァ落ち着いて」

学園長に掴みかかり前後に揺さぶっていたエヴァを引き剥がして落ち着かせた。

「話すが少し長くなるからの。とりあえず座りなさい、お茶も…」

「学園長先生、私が入れますのでマスターに事情を説明してください」

「すまんの。ではそうじゃな、まずこの呪いが創られた経緯から話そう」

この呪いはやっぱり注意しても学校に来ない生徒にかけることで、強制的に来させるものみたいだ。

ただ、エヴァにかけられているのは……。

「問題はエヴァンジェリンにかけられているモノなんじゃがの、ランクが『究極最終ウルトラモード』なんじゃよ」

「何だその頭の悪い名前は……」

「開発者に聞いてくれ。それで内容なんじゃがの、これは通常の登校地獄でただ学校に来させただけでは素行が改善されない生徒にかけるモノのようじゃ」

「それでもやりすぎでは？」

「それはこれをかけられる生徒が並のワルではないんじゃよ。まず学園都市から出られない事は学区外に出すと、登校することが不可能な状況に容易くなってしまう生徒を想定しているからじゃ」

「登校することが不可能な状況？」

「うむ、例えば次の日に学校があろうが関係なく遠くに行ってしま

い、どうやっても登校することが出来ない状況になるのを防ぐためじゃ」

「峠に挑んでくるとか言って県外に行ってしまう感じですか？」

「まさにそのような事を防ぐためじゃな。隣町ならまだしも、県を跨いでしまっては次の日に戻ってくるのは難しくなろう？」

「だから、そもそも確実に通える範囲から出さないと……」

「修学旅行に参加できないのも修学旅行中に逃亡してしまったり、問題を起こす事を防ぐためじゃ」

「本当にワルの中のワルを想定してますね……」

「そもそもそんな生徒っているの？」

「想像もつきませんね……」

「私はそんな生徒と同列なのか……」

ところ変わってこちらそのワルの中のワルが多く在籍している学校

その名も『クロマティ高校』

「どうしたんだ、神山？」

「何か僕以外の人たちの事を噂されていた気がしまして」

「何だそりゃ？普通自分が噂されて感じる事だろう」

「そうなんですが……」

「それより、ゴリラが暴れているのを止めるのを手伝え！！」

今日もクロマティ高校は平常運転のようです。

なにかしら、今物凄くその魔法をかけたい生徒が、いっぱいいる学校が思い浮かんだわ。

「最後に１５年間卒業できない事なんじゃが。お主達はそんな生徒が３年で更生すると思うかの？」

「無理ね」

「ちょっと…」

「無理だな」

「不可能だね」

「大変困難かと」

「無理そうね」

満場一致ね……。でも、よほどすごい先生が指導しないと難しいでしょうね。

「じゃからこれはその生徒が更生したと、呪いの精霊が判断するまで続いてしまうんじゃよ。呪いを使う魔法学校は何年で卒業といった明確な区切りはあまり無いからの。ある程度の卒業にかかる年数は決まっているが、その生徒の実力で短くなったり長くなったりするからの」

短くなった例はネギ君がまさにそれね。

「じゃあ、エヴァは……」

「６００万ドル級のワルと精霊が認識してるんじゃな」

「何だそれはーーーーー！」

「ろ、６００万ドル級……」

「あ、明日菜さん、ダメですよ笑ったら…」

「あ、あんただって」

「お前らも笑うな！」

ギャグとしか思えないものね……

「そもそもアンチョコで呪文を唱えているアイツがこんなモノを知っていたって事は、アイツが実際にかけられた可能性は高いぞ！」

「確かにナギは魔法学校を中退しておったな……」

「そういえばそうだった……。お父さんもワルの中のワルなのかな……」

ネギ君に当たらないの！ああ、落ち込んじゃってる……。

「それにエヴァンジェリンは『悪の魔法使い』としてのプライドを持っておるからのう。よけいに卒業させてもらえないんじゃよ」

「なるほど……。じゃあ、正攻法で呪いを解くには」

「エヴァンジェリンが『悪の魔法使い』から足を洗い、今の尊大な態度を改めて清く正しく穏やかな淑女ぜんとした」

想像も出来ないわね。

「『キレイなエヴァンジェリン』に生まれ変われば呪いは自然に解けるじゃろう」

「そんな身震いするようなモノになってたまるか！そもそも『キレイな私』って何だ！！」

「しかし、ワシにはこれ以上は難しいのう。今も何回も同じ授業を受けるのは辛かろうと思うて、サボったり居眠りしてもペナルティーが発生しないようにしているんじゃが……」

「そうなるとナギに解いて……解けるのかしら？」

あのナギが解呪？

「……」

「おい、不吉な事を言うな。ジジイも黙るな！」

結局、呪いは立ち直ったネギ君が将来勉強して解く事を約束して、当分は何とか呪いを緩和させるよう努力する事になった。

もう少しで修学旅行だから、今回の事で学校の頼みを聞いてくれてしっかりとこなせたので修学旅行に行っても大丈夫だと。精霊と学園長は交渉するようだ。

ナギの情報の埋め合わせなんだとか。

ナギの情報と呪い（後書き）

言い回しって怖いね。嘘は言ってないですからね彼もw

呪いについて独自解釈をして見ました。やっぱり妙ですからねあの呪いは。なのでエヴァにかけられているのは最強モードでワルの中のワル用って事でw

ついでに掲載しつながりでその代表例の学生をゲストにちょこっとw

次からは修学旅行編です！

小ネタコーナー

「「さぁ、坊主。風呂に入るぞ。」」

部屋に戻ってきたネギとあしゅらはさっそく備え付けの風呂を沸かして入ろうとしていた。

「どうしてもですか？僕はシャワーだけのほうが……」

「向こうではそれでよかっただろうが」「ここではそれでは不十分だ」

「「それに風呂につかると気持ちがいいぞ！」」

ネギの気持ちを知ってか知らずかあしゅらはなおも迫ってきてついに。

「「面倒だ放り込んでしまえばそれでいいか」」

「え？ちょ！」

その後ネギは抵抗する間もなく再び抱えられて服を脱がされ、一緒に風呂に入る事になった。

逃げようにも、先に入れられて脱衣所ではあしゅらが服を脱いでいるのでそれも叶わずに……

次なる試練！

「ジジイ、しっかりと精霊と話を付けろよ！」

呪の軽減のために精霊と交渉することになった学園長に成功させろと釘を刺してエヴァ達は学園長室を退出して行った。

「エヴァンジェリンさんも修学旅行に来れるといいですね！」

「ああ、それに今回の行き先は京都だ！１５年も日本に居ながら行く事が出来なかったんだ。ジジイにはなんとしても参加できるようにしてもらわねばな！」

自他共に認める日本通のエヴァは、かつて訪れて気に入った京都を再び訪れたいと常々思っていたのだが。今までは呪いによって麻帆良から出られず悔しい思いをしていたため、今回こそはと若干興奮した声をあげた。

「え！京都なんですか！！」

「なんだ、ボウヤは行きたくないのか？」

エヴァの修学旅行の行き先が京都と言った事に驚きの声をあげたネギに、それを嫌がっての発言かと思ったエヴァはネギをにらんだが。

「まさか！日本に来たからいつか絶対に言ってみたいと思っていたんですよ！」

しかし、ネギから返ってきた言葉は自身も京都に行ってみたいと思っていたことだった。

「ほう！ボウヤにもあの良さがわかるか！」

「はい！木で造られた古い建物とか凄くいいです！」

「ははは、わかってるじゃないか！向こうの連中は自分達こそがと言ってあの良さをわからん無粋な奴らが多いからな！」

同志とわかった2人は京都のよさについて熱くなっていたが。

「あんな、お寺ばっかりの所のどこがいいのよ？」

見てもつまらないじゃない、といった明日明日菜に。

「貴様！あのわびさびの良さがわからんとはそれでも日本人、いや人間か！」

「そうですよ明日菜さん！日本の人たちはもっと自分達がどれほど凄いか知るべきですよ！！」

「何もそこまで言わなくてもいいじゃない！！」

2人はそろって非難の声をあげて明日菜はその迫力に思わずたじろいでしまった。

「それにボウヤ、京都に行くならナギの別荘に寄るのもいいかもしれないぞ？」

「え！お父さんの！？」

「一時期、京都に居たらしいからな。今までここを離れられなかったし、死んだと思っていたから興味はなかったが生きているなら何らかのヒントがあるかもしれんぞ？」

「う～ん、でも行ってる暇があるかなぁ？」

先生としての仕事があるだろうから、行きたくてもそんな暇があるかと思ったネギだが。

「場所を確認するだけでも意味はあるだろう？ここから京都までなら少し暇が出来たらいける距離なのだからな」

「そうですね！うわぁ～、今から楽しみだなぁ！」

「あんた生徒より楽しんでない？」

「ふふ、でもネギ先生もせっかく行くんですから楽しまないと、ある程度はあしゅらが居れば何とかなるからね」

「「ええ、お任せを。坊主もはめをはずし過ぎない範囲で、楽しみながら仕事をするんだな」」

「ありがとうございます！」

「生徒に気を使われるのは教師としてどうなんだ？しかし、貴様とは京都旅行の後はいい酒が飲めそうだな」

「まだ子供なんであんまり飲めませんよ……」

「旅行じゃないでしょ。そもそも子供が飲むな！」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに……」

とにぎやかにその日は過ぎていった。

それから数日後、ネギは学園長室に呼ばれていた。

（修学旅行についてって聞いたけれどなんだろう？連絡事項なら弓さんか新田先生から来ると思うけど）

「失礼します」

呼ばれた理由に心当たりがなく不思議に思いながらネギは学園長室に入った。

「おお、呼び出してしまってすまんかったの」

「いえ、それで修学旅行についてとは？」

「うむ、実は向こうから抗議がきての。なので中止してハワイにでも……」

「ええ！中止！！」

学園長が言い終わる前にネギは京都行きが中止と聞き途端に落ち込んでしまった。

「そんな、京都……。エヴァンジェリンさんもあんなに喜んでいたのに……」

「これこれ、話を最後まで聞かぬか」

「は、はい。でも抗議っていったい？京都の市役所の方ですか？」

とりあえず立ち直ったネギはいったい誰が抗議してるのか問うと。

「う～む、ちと複雑な事情があるんじゃがの。相手は市役所とかの表の組織ではなくて呪術協会という組織なんじゃよ」

「呪術協会？」

聞き慣れない言葉にオウム返しで疑問の声をあげたネギに学園長は説明を続けた。

「うむ、ワシらは魔法使いの組織である魔法協会じゃが、元々この日本には他にも裏関係の組織があっての。それらを統括しているのが呪術協会なんじゃ」

「でもその人たちが何で？」

「まだネギ君には難しいかもしれぬが、元々彼らが日本の裏関係を統括して一般市民を守っていたんじゃが、明治ごろに魔法使いたちが入ってきたときにいざこざがあっての、それからあまり仲がよくないんじゃよ」

「でも、それってかなり昔なのじゃ？」

ネギは世のため人のため働いている魔法使いや話を聞いた限りでは同じようなことをしている呪術協会の人達が、そんな長い間いがみ合っていることが信じられなかった。

「もちろん長い間に少しずつ歩み寄っていたんじゃがの……。少し前にワシら魔法使いが原因の迷惑をかけてしまったんじゃよ」

「ええ！」

「そのときは向こうも大変じゃったからの。それ以来また疎遠になってしもうたんじゃよ」

「そんな事が……」

「じゃから向こうは魔法使いが来る事に難色を示したんじゃ。」

そう学園長は抗議が来た理由をネギに話し、次に。

「しかし、いつまでもそんな状態を続けるわけにもいかん。なのでネギ君には向こうの長にワシからの親書を届けて欲しいんじゃよ」

「仲直りをしようって事ですね！」

「そのとおりじゃ」

「あ、でも？」

任せて下さいと言おうとしたネギはふと、これも学園長が用意した試練なのではと思い視線で問いかけてみると。

「ふぉふぉふぉ、確かにこれもネギ君への試練じゃが、両者の仲が悪い事は事実じゃよ。前の時のようにワシらが手助けできぬやも知れぬ危険が多い任務になるがやってくれるかの？」

その言葉を自分を信用して任せてくれているととったネギは元気よく。

「はい！しっかりとお届けします！」

「うむ、すまんの。向こうの反対派の妨害があるかも知れんから気をつけるんじゃよ」

「はい、マミさん達とも相談します！」

話が終わり出て行こうとしたネギは振り返り。

「それとエヴァンジェリンさんの呪いはどうなりましたか？」

あれ以来、これといった連絡もなくエヴァもいつもどうりだったので疑問に思い聞いてみると。

「おお、そういえば伝えるのを忘れておったわい。大丈夫じゃ、彼女も修学旅行に参加できるぞ」

「本当ですか！」

「さすがに魔力は封じた状態でないと精霊が許可を出さんじゃろう

が、京都に行くくらいは問題はない」

「わぁ！さっそく知らせてきます！失礼しました！！」

言うが早いかネギはエヴァに早く知らせようと部屋を飛び出していった。

「ふぉふぉふぉ、随分と仲良くなったの」

ネギの様子に部屋の隅の影に問いかけるとそこには

「ふふ、まぁな。まだまだではあるが、なかなか分かるやつだったからな」

どうやら京都の話しで親しくなったようだ。

「それで、今回もお前らが用意した茶番なんだろ？」

「うむ、婿殿と協調派にはすでに話をつけてある。向こうも準備はすでに終えていると、先日連絡もきたしの」

どうやら今回もネギのための劇のようだ。

「ククク、ボウヤも前回アイツにさんざん振り回されたんだから、もう少し聞いてもよさそうなのだがな？」

「それだけ純粋なんじゃよ」

「それではアイツやお前にずっと騙され続けるぞ？」

アイツとはもちろんアイツです。

「人聞きの悪いことを言うな！いくらなんでも彼と同じ事はせんよ」

さすがに彼と同類と思われるのはいやらしい。

「どうだか。しかし、よく向こうが納得したな。アイツを向かわせたのか？」

「そんな、終わった後によけいに事態が悪化しかねん事はせんよ……。今回の報酬に今後定期的に対談の場を設ける事とあちらが魔法使い組織に接触するときに橋渡しをすることを約束したんじゃよ」

「ほう、随分と大盤振る舞いだな」

茶番に付き合うだけにしてはかなりの報酬に驚きの声をあげるエヴァに学園長は。

「いや、こちらの我侭につき合わせるんじゃからこれぐらいはの。それに両方ともワシらにとってもメリットはあるからの」

元々、魔法使いと日本古来の裏関係者が互いに仲良くなって欲しいと願って、こちらに来た彼からすればこれくらいの苦労は苦労の内ではないと言った。

「それで先ほどの事だが」

「呪いの事かの？もちろん本当じゃよ。後日、参加許可書と魔封じの魔法道具を渡すから受け取りに来てくれ」

「ボウヤが聞いたせいで来る必要がなくなったな」

「そうじゃの。それにしてもゲートの魔法が使えるようになったのか？」

気がついて影に声をかけたとはいえ本来なら使えないはずと聞いてみると。

「ボウヤとマミの血と呪いが少しは緩和されたせいで結界にも抗えるようにはなったからな。もっともいける場所や範囲はかなり狭く限定されてしまうがな」

多少は和らいだおかげで結界と呪いの両方からの魔力封じも緩和されて、全く魔力が使えない状態からは脱していた。

もっとも、攻撃魔法は相変わらず使用できずで移動系も遠距離や学業と関係ない所には行けないといった制限はあったりするが。

「だがこれであの忌々しい花粉症からは解放されたんだ！それだけでも十分だ！！」

「そんなに苦労してたのか……」

毎年苦しめられていたせいか、花粉症にかからなくなっただけでもかなり嬉しそうだ。

そして今回の試練のもう片方の主催者、呪術協会でもネギをもてなす人員決定がおこなわれていた。

「それでは千草さんお願いできますか？」

「は！此度の任、謹んでお受けさせていただきます」

彼女―天ヶ崎千草―は少し前までは反詠春派であり魔法使い排除を標榜する一派に属していた。

そんな彼女がネギの修行の呪術協会側の人員として抜擢された理由を説明するには、呪術協会内の事情を説明しなければならない。

呪術協会内部の勢力図は、ここ数年の詠春の地道な説得と少しずつとはいえ国内の状態も安定してきたことで過激派や急進派の数も減少し。詠春が語った大戦の真実とマミから知らせられたミケーネ帝国のこと、それらに対抗するためには今までのように日本単独ではダメだ。

前回の悲劇を回避するためには魔法使いとも情報交換をしなければいけない、と根気よく説得して回ったことが少しずつではあるが実を結んだのだ。

千草も最初は、何を世迷言をと反発していたが日本にも飛び火したあの大戦の裏に居た者が只者でなかった事、魔法使いも騙されて

いた事、彼らも自分たちと同じく多くのものを失ったと説明されて当初よりは態度を軟化していた。

もっともミケーネ帝国にいいように踊らされて未だに偉そうにしているＭＭ元老院の事は嫌っているが、一般の魔法使いに対してまで憎悪を向けることはなくなっていた。

話を戻して彼女が人員に抜擢されたわけだが、それは彼女が少し前まで属しており今もそれなりに接触している反魔法使い派からの要求でもあった。

魔法使いと交流を深めるのはいいが奴らは本当に信用できるのか？それを見極めるために親魔法使い派からではなく、こちらに近い魔法使いに疑いを持っている者をそれに参加させろ。と要求してきたのだ。

最初は詠春達も修行にかこつけてネギを害するのではないかと反対していたが、魔法使い側から監視役を派遣してもよい事と、現在も反対派に属している者ではなく少し前までいてまだ魔法使いに疑いの眼差しを持っている者にしてはどうかと中立派からの提案を呑み、ちょうど任務がなくあいていた彼女に白羽の矢が立ったのだ。

最初は渋っていた彼女だったが、魔法使いを見極めるよい機会と思って任務を受けることを承諾したのだ。

「すいませんね。こちらの都合につき合わせてしまって」

「ほんまやわ。お父ちゃんたちを殺した魔法使いを未だに怨んでは

りますが。このまま協会内がごたごたしてて日本がまた荒らされる方がお父ちゃんたちも悲しむやろから受けたんどす」

「はい、もう二度とあのような事がないようにしませんと」

「頼みますえ？それでは、うちは人員の選抜をしますさかいこれで」

「彼のことよろしくお願いします」

部屋を出た彼女は今更ではあるが自身の両親の命を奪い、日本に混乱をもたらした魔法使いの英雄の子を育てる手伝いをする事に納得はしてはいなかった。

しかし、もし長の話が本当なら事は魔法使いだけで終わらない。向こうがしくじるか前回の時のように無様に踊らされたならば、こちらの世界にもまた被害が出るだろう。

こちらの被害を防ぐためには向こうの事もある程度は知っておかなければいけない……。その言葉には納得したが、やはり理性では納得することが出来ても感情が追いつかない。

「ま、今更ゆうてもしゃあないな。さて誰を連れていこか？」

―小太郎はちょうど良さそうやけど、２人は少なすぎるやろし……―と連れて行く人員に頭を悩ませながら準備のため自室へと向かった。

次なる試練！（後書き）

ってことで修学旅行編スタートです！

エヴァも参加させます！魔力は多少復活はしたけれど本調子にはまだまだほど遠いです。ゲートもエヴァだから使えるってくらい封印は効いています。

修学旅行のアレは千草の独断と長同士での馴れ合いじゃなくてしっかりとした組織間での計画にして見ました。

国内の治安を守る組織が騒ぎを起こしちゃダメだろと。

そして京都弁がわからん！標準語か似非関西弁にしようかな？

ちなみにネギの飲酒発言は外国だと子供でも薄いお酒を飲むってどこかで聞いたことがあるのでいれてみました。

修学旅行開始！

修学旅行前日、ネギは呪術協会の長に渡すための親書を受け取るために学園長室に着ていた。

「これが親書じゃ、くれぐれもなくさないように頼むぞい」

「はい！必ず呪術協会の長さんに届けて見せます！！」

自身に任された魔法使いとしての初めてであり、両組織の今後を担う大任にネギは興奮気味に返事を返した。

「そんなに緊張しては肝心なときにへばってしまうぞ。少しは肩の力を抜いたほうがええ」

「は、はい……」

肩の力を抜けといわれてよけいに緊張してしまったネギに学園長は続けて声をかけた。

「もしもの時はほかの人にも頼るようにの。羽目を外し過ぎず、教師としての仕事もしつつじゃが君も楽しんでおいで」

「はい！頑張ります！」

そう最後に元気よく返事をしたネギは、明日の準備のために寮の自宅へと戻っていった。

（ｓｉｄｅネギ）

え～と、準備は昨日までに弓さん達としたから、最後の確認をしなくちゃ！

親書を届けるなんてお仕事任されるなんてあらためて緊張してきちゃったなぁ……。

ううん、これから立派な魔法使いを目指すんならこんな事で緊張してられないな！

それに京都！日本に着たんだから一度入ってみたいと思っていたけど、こんな早くに行けるなんて♪

先生としての仕事もあるけれど、今から楽しみだなぁ！

それにエヴァンジェリンさんの話しだとお父さんの手がかりも……。

うん！今日は早く寝て明日に備えなくちゃ！！

その後、部屋に戻ったネギだが弓ことあしゅらに京都に対する熱い思いや父親の手がかりを延々と方って聞かせて、夕飯が終わるとすぐに就寝に入るなど。

話を聞かされたあしゅらは辟易としたが、報告を聞いたマミや学園長をほのぼのさせたとか。

そして翌日の早朝、やっと朝日が顔を出したころ。

すでにネギは起きていて、目覚ましがなるのを今か今かと待っていた。

……それは目覚ましの意味があるのだろうかと言ってはいけない。

そして5時半、ついにセットした時刻に達し目覚まし時計が己の役割を果たすべくベルを鳴らした瞬間！

「おはよーございまーす！！」

ネギは早押し問題の回答者のごとく早業でベルを止めるボタンを押して飛び起き、朝の挨拶を高らかに発した。

そのまま彼は日々働くサラリーマンのお父さんのごとき早業で―具体的に言うと3コマで―朝の支度を終え、荷物を背負い準備万端に待ちに待ったこの日を迎えた喜びの声をあげた。

「やっほーーー！今日は待ちに待った修学旅行の日だ！」

全身でこの日を迎えられた喜びを表しているネギに比べて、すでに何回か修学旅行にも同行しているし、京都にこれといった思い入れがないあしゅらは。

「何だネギうるさいぞ……」「まだ5時半ではないか……」

「むにゃむにゃ、おはようございます。アニキ……ｚｚｚ」

あしゅらは眠そうにネギに非難のまなざしを向け、カモにいたっては挨拶はしたがまた夢の中へとフネを漕ぎ出し始めていた。

しかし、興奮するネギはそれに気付かずに。

「あしゅらさん、おはようございます！教員は早めに行かなくちゃ行けないんですから、あしゅらさんも起きてくださいよ！」

確かにそうだがいくらなんでも早すぎるだろう。ちなみに生徒の集合時間は9時で教員でも8時ごろであろう。

「「わかったわかった、我らも支度が終わり次第向かう。お前は先に行っていろ」」

「はい！お先に行っています！！カモ君行こう！」

「Ｚｚｚｚ」

あしゅらがおきたことを確認したネギはそういい残してあっという間にカモを連れて（掴んで？）飛び出していった。

「まったく、あれでは教師というより見たままの小学生だな。さて髭をそるか」「そうだな、それも飛び切り元気なガキだよ。私も化粧をしなければ」

ネギを見送ったあしゅらも支度を始めた。

飛び出していたネギは集合場所の大宮駅に向かうために麻帆良学園の駅に向かっていた。

「うわ～、でも本当に楽しみだな！日本の古都の京都・奈良に五日間もいけるなんて、修学旅行ってなんてすばらしいんだ！」

まだまだ興奮気味のネギは今にもスキップしそうな勢いだった、そんなネギに当てられたのかいい加減にカモも起きてきて。

「でも、アニキ。教師の仕事や呪術協会に親書を渡す仕事もあるんだからはしゃぎ過ぎないようにな！」

「うん！それに父さんが住んでいたって家も探さないとね！」

がそんな忠告もむなしく、父親の手がかりのことも思い出したネギはさらにテンションをあげて

「こりゃ就任以来最高に忙しくなるぞ！おーーーー♪」

大宮行きの電車にステップをふみながら大はしゃぎで乗り込んだ。

（これは手遅れじゃないんだろうか……？）

そんなネギの様子に一抹の不安を感じてしまうカモなのであった。

やっぱりと言うか大宮についてもまだ誰もいなく、近くのコンビニで買った京都のパンフレットを呼んでいると。

「いやはや、早いですねネギ先生」

新田先生と弓がそろって到着した。

「彼は今回の修学旅行をかなり楽しみにしていた様子ですからね。私も朝早くに起こされましたよ」

「ははは、彼は準備の段階から目を輝かせてましたからね。ネギ君も教師の仕事をしつつ楽しみなさい。それとパスポートと教員免許は持ってるかな？」

「はい！教師の仕事もしっかりやります！！弓先生と一緒に準備しました」

「ええ、しっかりと確認してますよ」

「うむ、それならよかった。」

ネギ達がそんな話をしているとしずな先生がついで瀬流彦先生など他のクラスの担任、副担任も順次集まってきた。

そして、教員が全員集まったところで新田先生から修学旅行の最後の確認をとって暫くして生徒たちもポツリポツリと現れた。

「ネギ君おはよう！今日と楽しみだね～」

「はい！」

「何でそろって枕持ってるのあんた達は？」

「ま、枕が変わると寝られなくて……」

ネギも生徒の確認をしつつそろって会話を楽しんでいた。

そして集合時間の９時になり、各クラスで点呼を取り出欠の確認の後、新田先生からの修学旅行に向けての挨拶が終わり。各クラス班毎に新幹線へと乗り込んでいった。

ちなみに班はエヴァ組も来ているので予定どうりに６班編成となっている。

エヴァ・茶々丸・刹那・ザジ・マミと会話が成立するのか非常に怪しい班ができてしまっているが、気にしないでおこう。

この時点ではマミと刹那の接点も、夜間の警備員でわずかに知り合っているだけなので期待は薄い。

エヴァ組とならありだろうか？むしろザジとだろうか、魔神って触れ込み的に……

ちなみに原作とは違って修学旅行に来ることができたエヴァだが。

「フフフ……、やっと、やっと京都に行けるな！あいつのせいで何度涙を飲んだことか！」

「ああ、マスターがあんなに楽しそうに」

と大はしゃぎで危うく遅刻しそうになった事は秘密だ。

さらに。

「おお！これが新型の７００系か！確かに乗り心地・速度ともかつてとは違うな！」

封印される前に乗ってみた新幹線の新型車両にはしゃいだりとなんともほほえましい様子だった。

その後、各クラスでの個別の挨拶も済み京都まで各自節度を守りながら修学旅行を楽しんでいるときに事件は起こった。

「あはは、にぎやかで楽しいね」

「そうっすねぇ。でもアニキそろそろ気をつけた方がいいんじゃないですかい？」

「え？どういうこと？」

「いやいや！学園長にジジイが言ってた、呪術協会からの妨害！も

しかしたらもうあるかも知れないでしょ！」

クラスの様子を見ていたネギにカモが警告を出したが、親書の事は忘れていなかったが妨害のことを忘れていたネギにあらためて警戒を促した。

「もしかしたらスパイとか！」

「ええ！？スパイ！ボンドさんのような！？」

スパイの言葉にイギリスが誇る大スターを上げたネギだったが。

「いや、さすがにそれはないでしょ。てか、いたら完全にアウトでしょ！」

「でも、学園の生徒と一般乗客は完全に分けられているんだから、いくらなんでも紛れ込まないんじゃないかな？」

大勢での移動ということもあり学園側もいくつかの車両を貸しきっているので、部外者が紛れ込むなんて事はないだろうとネギは言ったが。

そういう発言はだいたいが問題が発生するフラグというものであって現に……

『きゃーーーー！』

『わぁーーーー！？』

「アニキ！」

「悲鳴！！」

さっそく発生した問題に、今出た車両に引き返したネギの目の前には。

「わーーーー！なんですかこの大量のカエルは！！」

カエルの団体さんが所狭しとゲコゲコ鳴いていた。

「なんかそこらへんから出てきたのよ！」

何とか１０８匹のカエルの回収を終わり、突然のカエルの出現に気絶した者の介抱の指示を出したところでネギはカエル達について考え出した。

ちなみに一方の弓は新田先生たちと今日と到着後の予定を話し合っていて、他の車両に行っていたのでこの騒ぎには気がついていない。

マミはすでにある程度の妨害があることを知っていたので傍観体制に、エヴァは我関せずと弱い結界を張りカエルを近寄らせずにいた。

同じく事情を知らされていない刹那は木乃香を油断無く見ていたが。

（カエルの大量発生……魔法の力も感じるし、やっぱりこれは妨害工作！……でも何でカエル？）

「アニキ間違いないぜ！呪術協会の仕業だ！」

「う、うん！でもどうしてカエルなんかを？」

「う～ん、ただの嫌がらせか、これ以上近づくなって警告か。それともこの騒ぎに乗じて何かしようとか……」

「ハッ！」

カモの言葉に何か気がついたのか、ネギは慌ててポケットを漁りだした。

「あ、あれ……ない！学園町から預かった親書が！！」

「何！？」

大慌てでくまなく探していると暫くして。

「ほ、何だ。したのポケットにあったよ」

「び、びっくりさせんなよアニキ～」

どうやら親書は無事に見つかったようだ。

でもネギ君。スリが出るぞって言われているところで財布を出すって事は。

ヒュ！パシ！

スって下さいと行っている様なものだぞ？

案の定、ネギの手にあった親書は何か小さなモノに強奪されてしまった。

「あーーー！と、鳥？電車の中で！！」

「アニキ追おう！」

「うん！」

逃走する鳥らしき物体を追うネギに正体がわかったカモが日本の魔法だと知らせ、呪術協会からの妨害だと確信させたりもしたが、一向に追いつくことができないでいた。

幸い利用者が少なくて不振がられてはいないが、いい加減捕まえないとまずい事態になってきた。

そうしていくつかの車両を越えて、次の車両との連結部に入ったそこには

「ネギ先生？」

「さ、桜咲さん？」

自分のクラスの生徒の刹那が何かを持ってたたずんでいた。

「あの、これ落し物です。封に学園の校章があるのですが」

「え？あー！これ、僕のです！ありがとうございます！！」

彼女が差し出してきたものは先ほど奪われた親書だった事に、ネギは声をあげて喜んでそれを受け取った。

が、彼女が立ち会った後にカモから刹那こそスパイではと言ってきた。

その証拠に彼女がいた場所には先ほど親書を奪った式神の成れの果てが落ちており、ネギは再びクラスメイトが敵に、それも今度は正真正銘の敵になったのかと悩み始めた。

修学旅行開始！（後書き）

やっと本編をあげれた……。

次の木乃香がさらわれる部分も早めに上げたいなぁ……。

そしてあいも変わらずに出番が少ない主人公ｗ

ちなみにセッちゃんも上層部の思惑を知らなかったりします。末端の構成員が事情を知らないってよくあることでしょ？ｗ

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4745x/

真ネギま☆マギカＺ

2012年1月10日06時47分発行